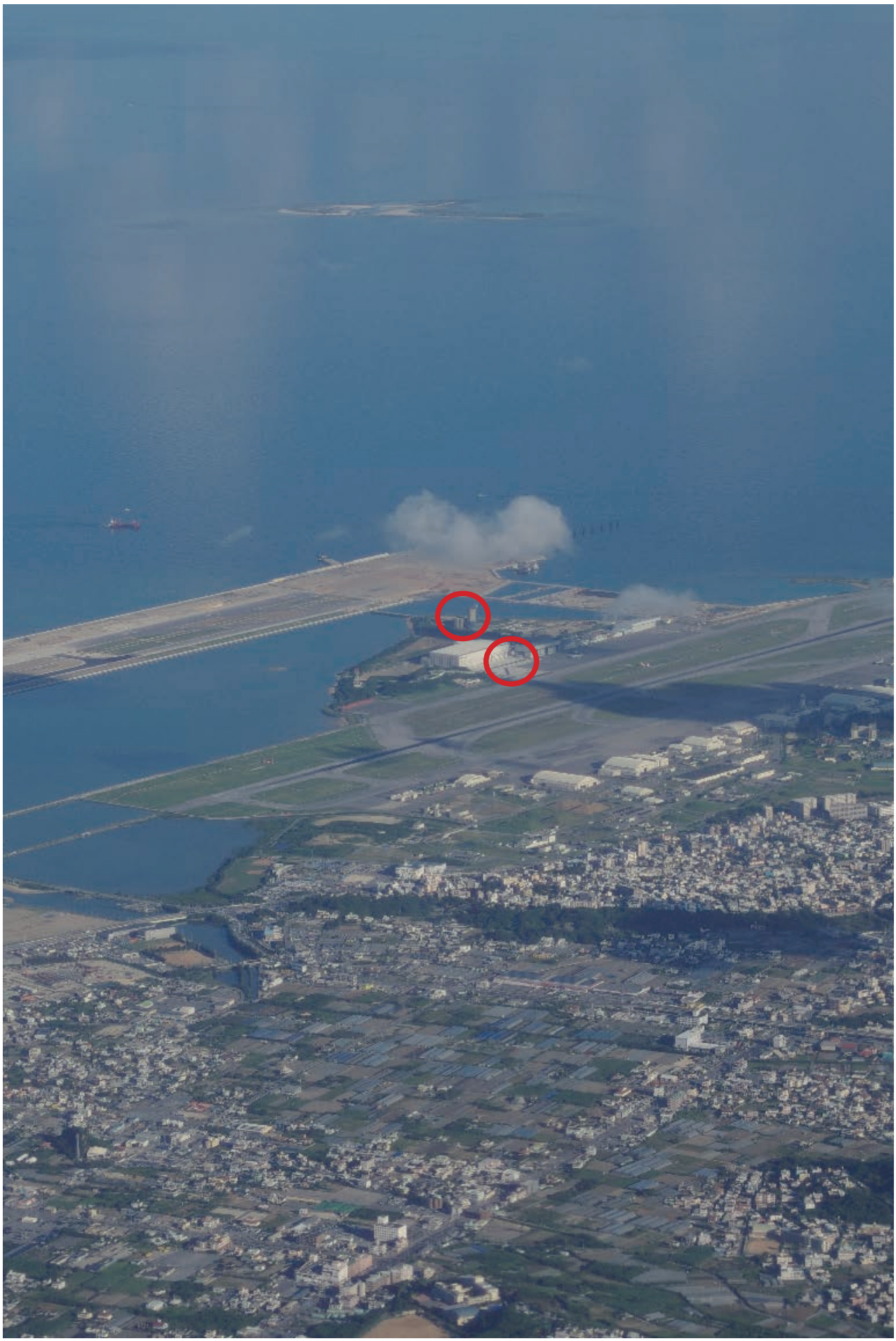
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第101集

大嶺村跡

那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成31（2019）年3月
沖縄県立埋蔵文化財センター



巻頭図版１　事業実施箇所遠景（2018 年９月時点。○が発掘調査実施箇所。）

管制塔Ⅰ地区全景（南西から）

管制塔Ⅰ地区調査区東西ベルト（北東から）

巻頭図版２　管制塔Ⅰ地区全景・ベルト断面

SK 1 ウマ埋葬跡（北から）

SK 2 ブタ幼獣埋葬跡（南東から）

巻頭図版３　管制塔Ⅰ地区の主な遺構

エプロン地区調査区全景（北西から）

エプロン地区中央部サブトレンチ南北断面（南西から）　※手前は SE2

巻頭図版４　エプロン地区調査区全景・壁面

SE1 断ち割り断面（西から）

SK1 半截断面（西から）

巻頭図版５　エプロン地区の主な遺構

中国産青磁

先史時代の土器

井戸内から出土した木製品

「歩兵第四十五聯隊酒保」銘歯ブラシ

エプロン地区 SK1 出土の主な陶磁器

泥面子・おはじき・土製品

巻頭図版６　主な出土遺物

序　文

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 27 ～ 28 年度に実施した、埋蔵文化財「大嶺村跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。

大嶺村跡は沖縄県那覇市字大嶺に所在し、那覇空港西側の大嶺崎一帯に広がる遺跡です。周辺には南島爪形文土器やその時代の様々な遺物が出土した鏡水箕隅原Ｃ遺跡や、沖縄の農耕開始期の遺構が検出された那崎原遺跡など、学術的にも貴重な遺跡が所在しています。

大嶺村は、集落の西側に良好な漁場を擁し、北側から南東側にかけては肥沃な農地が広がる半農半漁の集落でした。1721 年に冊封副使･徐葆光によって書かれた『中山伝信録』には、風光明媚な場所として紹介されています。しかし、昭和６(1931) 年から始まる旧日本軍による大規模な飛行場建設に始まり、戦中から戦後の米軍那覇飛行場、さらに本土復帰後は那覇空港として利用されることに伴い､大きく土地の改変が進められてきました。

今回の発掘調査は、那覇空港拡張事業の一環として国土交通省大阪航空局が実施する、管制塔庁舎新築工事及びケーブルダクト建設工事等に伴う記録保存調査となります。調査の結果、往時の大嶺村に伴う溝跡、ブタ幼獣埋葬跡、井戸、炉跡、遺物廃棄土坑などの様々な遺構や、当時利用されていた生活用品や装身具、遊具など多種多様な遺物が発見されました。さらに、外来馬の埋葬跡や日本具の部隊名が記載された遺物などの旧日本軍に関連する遺構・遺物も見つかっています。その一方で、12 世紀初め頃から 15 世紀中頃までのグスク時代の陶磁器や、縄文時代・弥生～平安並行時代の土器・石器なども出土していることから、大嶺村跡は先史時代まで遡る遺跡であることも分かりました。

今回の発掘調査で得られた成果は、大嶺一帯の変遷を理解する上で、大きく寄与するものと考えております。本報告書が、文化財の保護普及をはじめ、地域の文化・歴史学習や学術研究等の一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査および資料整理にあたりご指導・ご助言を賜りました諸先生方、並びに事業の実施にあたりご協力を賜りました国土交通省大阪航空局及び那覇空港事務局、日本トランスオーシャン空港株式会社、那覇市市民文化部文化財課、字大嶺自治会、字大嶺向上会、旧那覇飛行場用地問題解決地主会、ほか関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 31（2019）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　　登川　安政

例　　言

1　本報告書は、平成 27 年度から 28 年度に沖縄県那覇市那覇空港内に所在する大嶺村跡において実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2　本調査は、国土交通省大阪航空局那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う記録保存調査である。

3　発掘調査から報告書作成までの費用は、事業者である国土交通省大阪航空局が負担した。

4　発掘調査及び資料整理、報告書作成は、国土交通省大阪航空局との契約に基づき沖縄県が実施した。

5　発掘調査から資料整理までの業務は沖縄県立埋蔵文化財センターの長嶺　均と大堀皓平、報告書作成・編集は大堀があたった。また作業実施にあたり、国土交通省大阪航空局に再委託契約について承認を得た上で、発掘調査及び整理作業について、有限会社ティガネーの業務支援を受けた。

6　本報告書に掲載した現場写真は大堀皓平・有限会社ティガネー吉岡宏が撮影した。また出土遺物写真の撮影は、大堀のほか、有限会社ティガネー栗山初美・仲本智恵子が行った。

7　本報告書に記載された資料は、それぞれ下記の者が同定を行った。
　石材：大堀皓平　動物骨：喜屋武朋子　貝類：譜久里昌代

8　「琉球国間切図（町方・島尻西）」は沖縄県立博物館・美術館、「大嶺村跡民俗図地図」は大嶺向上会より提供頂いた。また 1945 年米軍撮影航空写真は、国土地理院地図・空中写真閲覧サービス（http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1）USA-Okinawa-5M3A-7 をもとに該当箇所を切り抜き・拡大したものである。

9　土層観察表に記載された記号・土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』に準拠している。

10　掲載された遺物番号は図・写真で統一したものを記載している。なお、図版のみに掲載されている遺物については、掲載図版ごとに○番号を付けて区別している。

11　観察表では一部について、名称等を省略して記載した。詳細は下記のとおりである。
　龍泉：龍泉窯
　徳化：徳化窯
　福建：福建系
　福・広：福建広東系
　景徳鎮：景徳鎮窯
　瀬・美：瀬戸美濃

12　本書の執筆分担は以下のとおりである。なお、資料整理の指導・協力を頂いた諸氏からはその所見等を記載した玉稿も賜った。ここに記して感謝申し上げる。

　第１章　　長嶺　均
　第２章
　　第１節　　大堀皓平
　　第２節　　長嶺　均・大堀皓平
　第３～５章　大堀皓平

第６章
　第１節　　矢作健二・松元美由紀・上田圭一（株式会社パリノ・サーヴェイ）
　第２節　　黒住耐二（千葉県立中央博物館）
　第３節　　丸山真史（東海大学海洋学部）
　第４節　　小畑弘己（熊本大学大学院人文社会科学研究部）・大堀皓平
第７章　　大堀皓平
　※遺物観察表
　　土器：具志堅清大・南勇輔
　　外国産陶磁器（欧州産除く）：玉城綾
　　沖縄産施釉陶器：大堀皓平・廣岡凌
　　上記以外：大堀皓平

13　本報告書で使用している遺構記号は次のとおりである。
　ＳＤ：溝状遺構
　ＳＥ：井戸
　ＳＦ：道跡
　ＳＧ：池跡
　ＳＫ：土坑
　ＳＬ：かまど跡
　ＳＰ：ピット
　ＳＸ：不明遺構

14　調査で得られた遺物、実測図、写真等の資料は、沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　次

序　　文

例　　言

第１章　調査の経緯と体制
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……4
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……8
第３章　基本層序及び調査方法・経過
　第１節　基本層序……12
　第２節　調査方法と経過……12
第４章　管制塔Ⅰ・Ⅱ地区の調査成果
　第１節　位置と層序……16
　第２節　Ⅴ層の遺構と遺物……21
　第３節　Ⅲ層の遺物……37
　第４節　Ⅰ・Ⅱ層の遺物……53
　第５節　管制塔Ⅱ地区の調査成果……60
第５章　エプロン地区の調査成果
　第１節　エプロン地区の層序……64
　第２節　下層（Ⅳ－２層）の遺構と遺物……81
　第３節　上層（Ⅳ－１層）の遺構と遺物……86
　第４節　Ⅰ・Ⅱ層の遺物……134
第６章　自然科学分析
　第１節　放射性炭素年代測定・土壌分析……139
　第２節　大嶺村跡の海浜部堆積物中の貝類群……158
　第３節　大嶺村跡から出土した動物遺存体　―埋葬馬を中心に―……187
　第４節　大嶺村跡出土資料の土器等圧痕について……195
第７章　総括
　第１節　地層の年代観と古環境……199
　第２節　大嶺村跡で検出された遺構……199
　第３節　大嶺村跡出土の遺物……201
　第４節　まとめ　―発掘調査成果による大嶺村跡の環境と土地利用の変遷―……203

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　那覇空港西側管理区域内の埋蔵文化財分布状況…… 2
第２図　発掘調査箇所位置図…… 3
第３図　大嶺村跡周辺の地質…… 6
第４図　沖縄県及び那覇市位置…… 7
第５図　大嶺村跡とその周辺の遺跡…… 9
第６図　「間切図」にみられる大嶺村 ……11
第７図　「正保国絵図」の大嶺村跡周辺 ……11
第８図　昭和 20（1945）年１月米軍航空写真の大嶺村
　　と小禄海軍飛行場……11
第９図　管制塔Ⅰ地区地層柱状図……12
第 10 図　エプロン地区地層柱状図 ……12
第 11 図　管制塔Ⅰ地区位置 ……16
第 12 図　管制塔Ⅰ地区地層断面図 ……17
第 13 図　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構配置図 ……21
第 14 図　管制塔Ⅰ地区 SD1・2・3・4 平面図……22
第 15 図　管制塔Ⅰ地区 SD1 断面図 ……23
第 16 図　管制塔Ⅰ地区 SD1 出土遺物 ……23
第 17 図　管制塔Ⅰ地区 SD2 断面図 ……24
第 18 図　管制塔Ⅰ地区 SD2 出土遺物 ……24
第 19 図　管制塔Ⅰ地区 SD3 断面図 ……25
第 20 図　管制塔Ⅰ地区 SD3 出土遺物 ……25
第 21 図　管制塔Ⅰ地区 SD4 断面図 ……25
第 22 図　管制塔Ⅰ地区 SD4 出土遺物 ……26
第 23 図　管制塔Ⅰ地区 SK1 埋葬馬検出状況平面図……27
第 24 図　管制塔Ⅰ地区 SK2 ブタ幼獣埋葬検出状況平面図…27
第 25 図　管制塔Ⅰ地区 SK3・4・5 平面図 ……28
第 26 図　管制塔Ⅰ地区 SK3 断面図……28
第 27 図　管制塔Ⅰ地区 SK3 出土遺物……29
第 28 図　管制塔Ⅰ地区 SK4 断面図……29
第 29 図　管制塔Ⅰ地区 SK5 断面図……29
第 30 図　管制塔Ⅰ地区 SK6 断面図……30
第 31 図　管制塔Ⅰ地区 SK7・8 平面図 ……30
第 32 図　管制塔Ⅰ地区 SK7 断面図……31
第 33 図　管制塔Ⅰ地区 SK8 断面図……31
第 35 図　管制塔Ⅰ地区 SP1 断面図……32
第 36 図　管制塔Ⅰ地区 SP2 断面図……32
第 34 図　管制塔Ⅰ地区 SP1・2 平面図 ……32
第 37 図　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層遺構外出土遺物１
　　（陶磁器以外）……33
第 38 図　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層遺構外出土遺物２（陶磁器）…34
第 39 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物１ ……38
第 40 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物２ ……39
第 41 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物３ ……40
第 42 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物４ ……41
第 43 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物５ ……42
第 44 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物６ ……43
第 45 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物７ ……44
第 46 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物８ ……45
第 47 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物１ ……54
第 48 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物２ ……55
第 49 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物３ ……56
第 50 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物４ ……57
第 51 図　管制塔Ⅱ地区位置 ……60
第 52 図　管制塔Ⅱ地区東壁断面図 ……61
第 53 図　管制塔Ⅱ地区南壁断面図 ……61
第 54 図　エプロン地区位置 ……64
第 55 図　エプロン地区壁面図１（西側南壁、西壁）……65
第 56 図　エプロン地区壁面図２（北壁）……69
第 57 図　エプロン地区壁面図３（中央南壁・西壁）……73
第 58 図　エプロン地区壁面図４（東壁）……77
第 59 図　エプロン地区Ⅳ -2 層遺構分布図 ……81
第 60 図　エプロン地区 SP16・59 平面図……82
第 61 図　エプロン地区 SP16 断面図 ……82
第 62 図　エプロン地区 SP59 断面図 ……83
第 63 図　エプロン地区 SP59 出土遺物 ……83
第 64 図　エプロン地区 SP118 ～ 125 平面図 ……84
第 65 図　エプロン地区 SP118 断面図 ……85
第 66 図　エプロン地区 SP119 断面図 ……85
第 67 図　エプロン地区Ⅳ -1 層遺構分布図 ……87
第 68 図　エプロン地区 SE1 平面図・立体断面図……91
第 69 図　エプロン地区 SE1 出土遺物１……93
第 70 図　エプロン地区 SE1 出土遺物２……94
第 71 図　エプロン地区 SE2 平面図・立体断面図……97
第 72 図　エプロン地区 SE2 出土遺物１……99
第 73 図　エプロン地区 SE2 出土遺物２…… 100
第 74 図　エプロン地区 SE3 平面図…… 103
第 75 図　エプロン地区 SE3 北壁断面図…… 103
第 76 図　エプロン地区 SE3 出土遺物１…… 105
第 77 図　エプロン地区 SE3 出土遺物２…… 106
第 78 図　エプロン地区 SL1 平面図・断面図…… 108
第 79 図　エプロン地区 SL2 平面図・断面図…… 109
第 80 図　エプロン地区 SL2 出土遺物…… 110
第 81 図　エプロン地区 SK1 平面図・断面図…… 111
第 82 図　エプロン地区 SK1 出土遺物１…… 112
第 83 図　エプロン地区 SK1 出土遺物２…… 113
第 84 図　エプロン地区 SK1 出土遺物３…… 114
第 85 図　エプロン地区 SK1 出土遺物４…… 115
第 86 図　エプロン地区 SK 遺構分布図 …… 117
第 87 図　エプロン地区上層 SP 検出状況（西側）…… 118
第 88 図　エプロン地区上層 SP 検出状況（東側）…… 119
第 89 図　エプロン地区 SP 覆土内出土遺物 …… 123
第 90 図　エプロン地区 SF1 平面図…… 125
第 91 図　エプロン地区 SG1 平面図…… 126
第 92 図　エプロン地区 SG1 断面図…… 127
第 93 図　エプロン地区 SG1 出土遺物１…… 128
第 94 図　エプロン地区 SG1 出土遺物２…… 129
第 95 図　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物 …… 132
第 96 図　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物１ …… 135

第 97 図　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物２ …… 136
第 98 図　大嶺村跡の海浜部の堆積物採取断面 …… 159
第 99 図　9.52mm メッシュ残渣 …… 162
第 100 図　4.0mm メッシュ残渣 …… 162
第 101 図　4.0mm メッシュ上のフトコロガイ（上）とカニモリガイ類（下）の磨滅・破損状況…… 163
第 102 図　大嶺村跡の海浜部の復元イメージ . 沖縄市泡瀬干潟（2004 年）…… 165
第 103 図　大嶺村跡土器圧痕・レプリカ SEM 画像…… 196
第 104 図　大嶺村跡主要遺構分布図１ …… 200
第 105 図　大嶺村跡主要遺構分布図２ …… 200
第 106 図　大嶺村跡出土有銘ガラス瓶 …… 202
第 107 図　大嶺村跡出土有銘歯ブラシ …… 202

図　版　目　次

巻頭図版１　事業実施箇所遠景
巻頭図版２　管制塔Ⅰ地区全景・ベルト断面
巻頭図版３　管制塔Ⅰ地区の主な遺構
巻頭図版４　エプロン地区調査区全景・壁面
巻頭図版５　エプロン地区の主な遺構
巻頭図版６　主な出土遺物

図版１　職場体験・現地説明会……15
図版２　管制塔Ⅰ地区地層断面（オルソ）……19
図版３　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構配置図（オルソ）……21
図版４　管制塔Ⅰ地区 SD1・2・3・4 完掘状況（北東から）……22
図版５　管制塔Ⅰ地区 SD1 ベルト（南西から）……23
図版６　管制塔Ⅰ地区 SD2 ベルト（北西から）……24
図版７　管制塔Ⅰ地区 SD3 ベルト（南西から）……25
図版８　管制塔Ⅰ地区 SD4 ベルト（北西から）……25
図版９　管制塔Ⅰ地区 SK1 出土木製品 ……26
図版 10　管制塔Ⅰ地区 SK1 埋葬馬検出状況（北から）……27
図版 11　管制塔Ⅰ地区 SK1 完掘状況（北から）……27
図版 12　管制塔Ⅰ地区 SK2 ブタ幼獣埋葬検出状況（南東から）……27
図版 13　管制塔Ⅰ地区 SK3 半截状況（南西から）……28
図版 14　管制塔Ⅰ地区 SK4 半截状況（南西から）……29
図版 15　管制塔Ⅰ地区 SK5 完掘状況（北東から）……29
図版 16　管制塔Ⅰ地区 SK6 完掘状況（南西から）……30
図版 17　管制塔Ⅰ地区 SK7 半截断面（北西から）……31
図版 18　管制塔Ⅰ地区 SK8 半截断面（南西から）……31
図版 19　管制塔Ⅰ地区 SP1 半截断面（北西から）……32
図版 20　管制塔Ⅰ地区 SP2 半截断面（南西から）……32
図版 21　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層出土遺物１（陶磁器以外）……33
図版 22　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層排水溝掘削時出土沖縄産無釉陶器甕 ……35
図版 23　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層出土ガラス瓶・蓋 ……35
図版 24　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物１ ……45
図版 25　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物２ ……46
図版 26　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物３ ……47
図版 27　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物１ ……53
図版 28　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物２ ……57
図版 29　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物３ ……58
図版 30　管制塔Ⅱ地区完掘状況（北から）……61
図版 31　管制塔Ⅱ地区東壁（オルソ）……61
図版 32　管制塔Ⅱ地区南壁（オルソ）……61
図版 33　管制塔Ⅱ地区出土遺物 ……63
図版 34　エプロン地区壁面オルソ図（西側南壁、西壁）……67
図版 35　エプロン地区壁面オルソ図（北壁）……71
図版 36　エプロン地区壁面オルソ図（中央南壁・西壁）……75
図版 37　エプロン地区壁面オルソ図（東壁）……79
図版 38　エプロン地区Ⅳ－２層遺構配置図（オルソ） ……81
図版 39　エプロン地区 SP16・59 完掘状況（南から） ……82
図版 40　エプロン地区 SP16 半截状況（南から）……82
図版 41　エプロン地区 SP59 半截状況（東から）……83
図版 42　エプロン地区 SP118 ～ 125 完掘状況（南から）…84
図版 43　エプロン地区 SP118 半截状況（北から）……85
図版 44　エプロン地区 SP119 半截状況（東から）……85
図版 45　エプロン地区Ⅳ－１層遺構配置図（オルソ）……89
図版 46　エプロン地区 SE1 検出・半截・完掘・断ち割り状況 ……92
図版 47　エプロン地区 SE1 井筒石材 ……92
図版 48　エプロン地区 SE1 出土遺物１ ……96
図版 49　エプロン地区 SE1 出土遺物２ ……97
図版 50　SE2 検出・半截・完掘・断ち割り状況 ……98
図版 51　エプロン地区 SE2 井筒石材 ……98
図版 52　エプロン地区 SE2 出土遺物 …… 101
図版 53　エプロン地区 SE3 完掘状況（北から） …… 103
図版 54　エプロン地区 SE3 半截状況（南から） …… 103
図版 55　エプロン地区 SE3 井筒石材 …… 104
図版 56　エプロン地区 SE3 出土遺物 …… 106
図版 57　エプロン地区 SL1 検出状況（南から） …… 109
図版 58　エプロン地区 SL1 半截状況（西から） …… 109
図版 59　エプロン地区 SL2 ２層（炭層）検出状況（東から）…… 110
図版 60　エプロン地区 SL2 南西側ベルト断面（南西から）…… 110
図版 61　エプロン地区 SK1 遺物検出・半截状況 …… 111
図版 62　エプロン地区 SK1 出土資料 …… 115
図版 63　エプロン地区上層 SP 半截断面 …… 119
図版 64　エプロン地区 SP 覆土内出土遺物 …… 124

図版 65　エプロン地区 SF1 検出・断面状況 …… 125
図版 66　エプロン地区 SG1 断面（南西から） …… 127
図版 67　エプロン地区 SG1 出土遺物 …… 131
図版 68　エプロン地区 SG1(○部分、南東から) …… 131
図版 69　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 …… 138
図版 70　年代測定作業風景 …… 141
図版 71　花粉化石・微粒炭・寄生虫卵・植物珪酸体 …… 149
図版 72　年代測定試料 1 …… 153
図版 73　年代測定試料 2 …… 154
図版 74　年代測定試料 3 …… 155
図版 75　年代測定試料 4 …… 156
図版 76　年代測定試料 5 …… 157
図版 77　貝類遺体（巻貝）1 …… 168
図版 78　貝類遺体（巻貝）2 …… 169
図版 79　貝類遺体（巻貝）3 …… 170
図版 80　貝類遺体（巻貝）4 …… 171
図版 81　貝類遺体（二枚貝）1 …… 172
図版 82　貝類遺体（二枚貝）2 …… 173
図版 83　貝類遺体（二枚貝）3 …… 174
図版 84　右上顎歯列 …… 192
図版 85　左右下顎歯列 …… 192
図版 86　右上下顎骨 …… 192

表　目　次

表 1　大嶺村跡周辺の遺跡一覧表……10
表 2　管制塔Ⅰ地区 SD1 ベルト　土層観察表 ……23
表 3　管制塔Ⅰ地区 SD1 出土遺物観察表 ……24
表 4　管制塔Ⅰ地区 SD2 土層観察表 ……24
表 5　管制塔Ⅰ地区 SD2 出土遺物観察表 ……24
表 6　管制塔Ⅰ地区 SD3 土層観察表 ……25
表 7　管制塔Ⅰ地区 SD3 出土遺物観察表 ……25
表 8　管制塔Ⅰ地区 SD4 土層観察表 ……25
表 9　管制塔Ⅰ地区 SD4 出土遺物観察表 ……26
表 10　管制塔Ⅰ地区 SD1 ～ 4 出土遺物集計表……26
表 11　管制塔Ⅰ地区 SK1 出土遺物集計表 ……26
表 12　管制塔Ⅰ地区 SK2 出土遺物集計表 ……28
表 13　管制塔Ⅰ地区 SK3 土層観察表 ……28
表 14　管制塔Ⅰ地区 SK3 出土遺物集計表 ……28
表 15　管制塔Ⅰ地区 SK3 出土遺物観察表 ……29
表 16　管制塔Ⅰ地区 SK4 土層観察表 ……29
表 17　管制塔Ⅰ地区 SK4 出土遺物集計表 ……29
表 18　管制塔Ⅰ地区 SK5 土層観察表 ……30
表 19　管制塔Ⅰ地区 SK5 出土遺物集計表 ……30
表 20　管制塔Ⅰ地区 SK6 土層観察表 ……30
表 21　管制塔Ⅰ地区 SK6 出土遺物集計表 ……30
表 22　管制塔Ⅰ地区 SK7 土層観察表 ……31
表 23　管制塔Ⅰ地区 SK7 出土遺物集計表 ……31
表 24　管制塔Ⅰ地区 SK8 土層観察表 ……31
表 25　管制塔Ⅰ地区 SK8 出土遺物集計表 ……31
表 26　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構外出土遺物集計表 ……33
表 27　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構外出土遺物観察表
（陶磁器）……36
表 28　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構外出土遺物観察表
（陶磁器以外）……36
表 29　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物集計表 ……37
表 30　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表 1（陶磁器）……48
表 31　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表 2（陶磁器）……49
表 32　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表 3（陶磁器）……50
表 33　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表 4（陶磁器以外）…51
表 34　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表 5（陶磁器以外）…52
表 35　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物集計表 ……53
表 36　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表 1（陶磁器）…58
表 37　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表 2
（陶磁器以外）……59
表 38　管制塔Ⅱ地区土層観察表 ……62
表 39　管制塔Ⅱ地区出土遺物集計表 ……62
表 40　エプロン地区 SP16 土層観察表 ……83
表 41　エプロン地区 SP59 土層観察表 ……83
表 42　エプロン地区 SP59 出土遺物集計表 ……83
表 43　エプロン地区 SP59 出土遺物観察表 ……83
表 44　エプロン地区 SP118 土層観察表……85
表 45　エプロン地区 SP119 土層観察表……85
表 46　エプロン地区 SE1 出土遺物集計表 ……92
表 47　エプロン地区 SE1 出土遺物観察表 1（陶磁器）……95
表 48　エプロン地区 SE1 出土遺物観察表 2
（陶磁器以外）……96
表 49　エプロン地区 SE2 出土遺物集計表 ……98
表 50　エプロン地区 SE2 出土遺物観察表 1（陶磁器）… 101
表 51　エプロン地区 SE2 出土遺物観察表 2（陶磁器）… 102
表 52　エプロン地区 SE2 出土遺物観察表 3
（陶磁器以外）…… 102
表 53　エプロン地区 SE3 出土遺物集計表 …… 104
表 54　エプロン地区 SE3 土層観察表 …… 104
表 55　エプロン地区 SE3 出土遺物観察表 1（陶磁器）… 107
表 56　エプロン地区 SE3 出土遺物観察表 2
(陶磁器以外）…… 107
表 57　エプロン地区 SL1 土層観察表 …… 109
表 58　エプロン地区 SL1 出土遺物集計表 …… 109
表 59　エプロン地区 SL2 土層観察表 …… 110
表 60　エプロン地区 SL2 出土遺物集計表 …… 110
表 61　エプロン地区 SL2 出土遺物観察表 …… 110
表 62　エプロン地区 SK1 出土遺物集計表 …… 111
表 63　エプロン地区 SK1 出土遺物観察表 1（陶磁器）… 115
表 64　エプロン地区 SK1 出土遺物観察表 2（陶磁器）… 116
表 65　エプロン地区 SK1 出土遺物観察表 3
（陶磁器以外）…… 117

表 66　エプロン地区 SK2 ～ 5 出土遺物集計表 …… 118
表 67　エプロン地区上層 SP 出土遺物集計表 …… 120
表 68　エプロン地区上層 SP 土層観察表 1 …… 120
表 69　エプロン地区上層 SP 土層観察表 2 …… 121
表 70　エプロン地区上層 SP 土層観察表 3 …… 122
表 71　エプロン地区上層 SP 土層観察表 4 …… 123
表 72　エプロン地区上層 SP 出土遺物観察表 1
（陶磁器）…… 124
表 73　エプロン地区上層 SP 出土遺物観察表 2
（陶磁器以外）…… 124
表 74　エプロン地区 SG1 出土遺物集計表 …… 127
表 75　エプロン地区 SG1 出土遺物観察表 1（陶磁器）… 130
表 76　エプロン地区 SG1 出土遺物観察表 2
（陶磁器以外）…… 130
表 77　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物集計表 …… 133
表 78　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 1（土器）… 133
表 79　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 2（陶磁器）133
表 80　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物集計表 …… 134
表 81　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表 1（土器）… 137
表 82　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表 2
（陶磁器）…… 137
表 83　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表 3
（陶磁器以外）…… 138
表 84　試料表 …… 140
表 85　放射性年代測定結果 …… 144
表 86　暦年較正結果 1 …… 145
表 87　暦年較正結果 2 …… 146
表 88　花粉分析結果 …… 147
表 89　微細物分析結果 …… 148
表 90　土壌理化学分析結果 …… 148
表 91　大嶺村跡の海浜部で採取された分析サンプル
の詳細 …… 160
表 92　大嶺村跡の堆積物から抽出された貝類等 …… 161
表 93　管制塔Ⅰ・Ⅱ地区出土貝類集計表（巻貝）…… 175
表 94　管制塔Ⅰ・Ⅱ地区出土貝類集計表（二枚貝）…… 177
表 95　エプロン地区出土貝類集計表（巻貝）1 …… 179
表 96　エプロン地区出土貝類集計表（巻貝）2 …… 181
表 97　エプロン地区出土貝類集計表（二枚貝）1 …… 183
表 98　エプロン地区出土貝類集計表（二枚貝）2 …… 185
表 99　動物遺存体出土集計表（管制塔Ⅰ・Ⅱ地区）…… 188
表 100　出土ブタ遺存体部位別集計表
（管制塔Ⅰ・Ⅱ地区）…… 189
表 101　動物遺存体出土集計表（エプロン地区）…… 190
表 102　出土ブタ遺存体部位別集計表（エプロン地区）… 191
表 103　埋葬馬の出土部位 …… 193
表 104　上顎歯の計測値（mm） …… 193
表 105　下顎歯の計測値（mm） …… 193
表 106　大嶺村跡出土ウマ計測値（mm） …… 194
表 107　大嶺村跡出土土器等圧痕属性表 …… 196
表 108　大嶺村跡出土イネ籾圧痕確認資料一覧 …… 197
表 109　大嶺村跡出土巻貝圧痕確認資料一覧 …… 198
表 110　石材別石器・石製品・石造物・石材集計表 …… 203

第1章　調査の経緯と体制

第1節　調査に至る経緯

那覇空港は沖縄県民の生活を支えるとともに、多くの観光客が利用する重要な社会基盤であり、航空旅客数は年々増加していることから、空港能力の向上が重要な課題となっている。

このため、平成14年度に国土交通省で行われた交通政策審議会の答申において、既存施設の有効活用を図りつつ滑走路増設を含めた抜本的な空港能力の向上方策について、幅広い合意形成を図りながら、国と地域が連携して総合的な調査を進める必要があることが示された。これを受けて、国と沖縄県では平成15年度より滑走路増設に向け、総合的な調査や構想段階、施設計画段階における検討を行った。そして、環境影響評価や公有水面埋め立ての手続きを経て、平成26年1月より那覇空港滑走路増設事業が開始された。

大嶺村跡が所在する字大嶺一帯は、那覇空港西側地区管理区域（那覇空港内大嶺地区）に位置し、航空自衛隊那覇駐屯地や海上保安庁の施設にも近接することから、近年まで遺跡の所在およびその詳細については不明であった。本遺跡は那覇市教育委員会（以下、市教委）が平成19年度から22年度まで実施した那覇空港大嶺地区埋蔵文化財分布調査に伴う試掘調査で所在が確認されている（第1図）。

国土交通省大阪航空局（以下、大阪航空局）は、那覇空港西側管理区域において、那覇空港整備事業等に伴う管制塔及びケーブルダクトの建設工事を計画し、平成26年5月1日付けで、大阪航空局から市教委へ「管制塔及びケーブルダクト」に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。これに対して、平成26年5月28日、市教委から大阪航空局へ「埋蔵文化財事前審査報告書」を送付し、当該箇所には埋蔵文化財「大嶺村跡」が所在することから、建設工事への立ち会いと未調査部分の試掘調査の必要性が明記された。

平成26年6月9日付けで、大阪航空局から市教委あて「管制塔庁舎新築及びケーブルダクト」に係る審査願が提出され、平成26年8月6日付けで、市教委から国土交通省大阪航空局長及び防衛省航空自衛隊那覇基地司令あてに、「埋蔵文化財事前審査報告書」が送付された。その中で、申請に対する市教委の意見として、①申請地内には埋蔵文化財が包蔵されていることから保存のための調整が必要であること。②現況では埋蔵文化財の有無を確認することができないこと、③今後申請地で建築工事等の開発行為を行う際には埋蔵文化財の有無を確認する必要があるので事前に市教委と調整すること、とした。

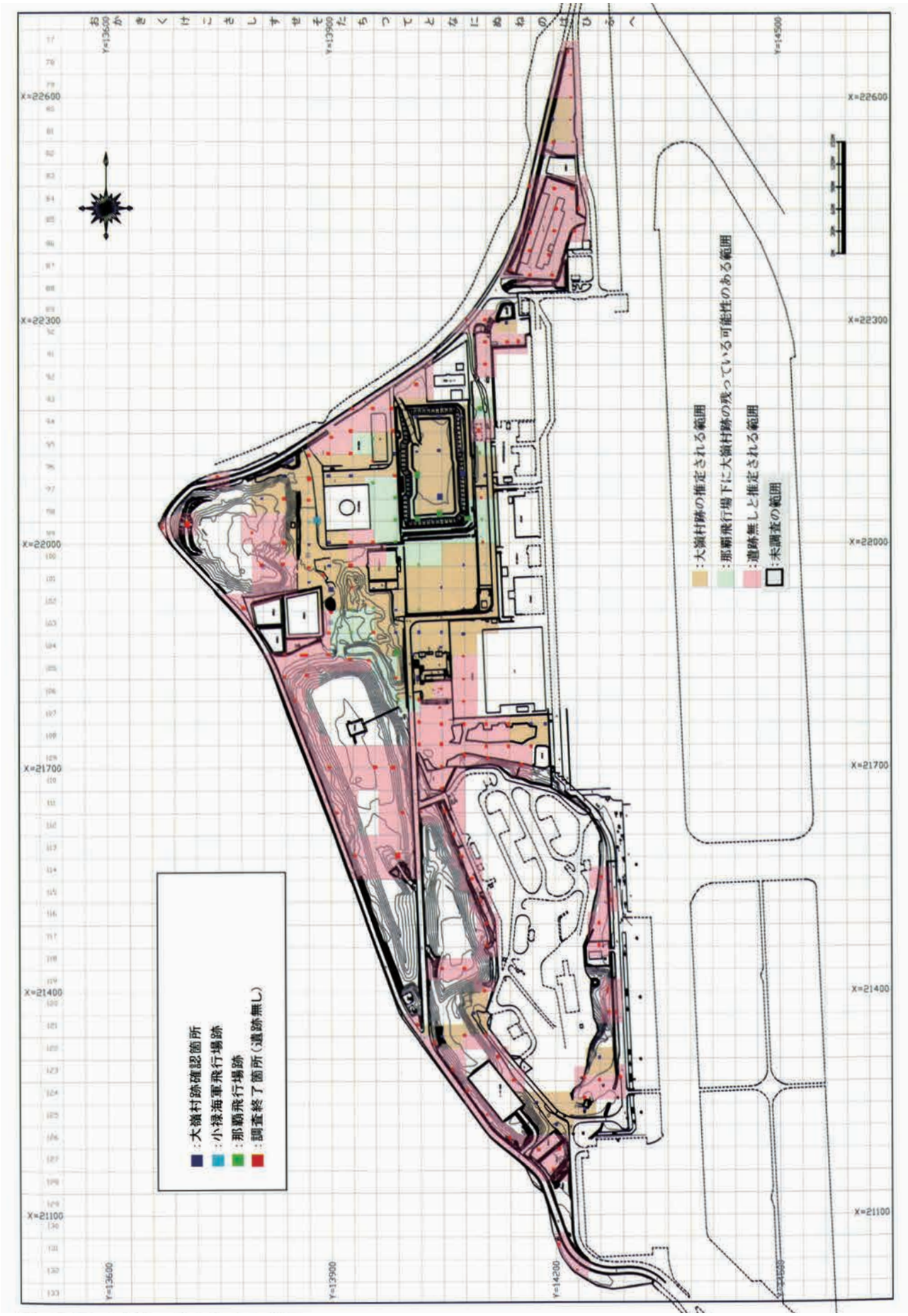
平成27年1月12日から1月14日まで、那覇市市民文化部文化財課（以下、市文化財課）が「管制塔及びケーブルダクト」部分の試掘調査を実施した。平成27年2月4日、市教委から大阪航空局への埋蔵文化財事前審査報告書中で、申請地内には埋蔵文化財が包蔵されていることから、保存のための調整が必要であることが明記された。

大阪航空局は、那覇空港管制塔等の建設工事の着手を平成28年9月に予定していることから、計画の変更には応じられないと主張し、市教委に対して平成27年度中に建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施するよう依頼した。一方、市文化財課は平成27年度当初で策定した年間の発掘調査計画には当該建設予定地は含まれておらず、計画策定後に持ち込まれた案件には文化財調査専門員の配置などの対応が困難な状況にあった。対応に窮した市文化財課は、沖縄県教育委員会（以下、県）に発掘調査を行うよう協力を依頼した。それを受けて、県で検討した項目は次のとおりである。①大規模であること。②緊急性が認められること。③那覇市の体制に余裕がないと認められること。以上の状況を考慮し、県が市文化財課に代わり発掘調査を行う方向で調整を進めることになった。

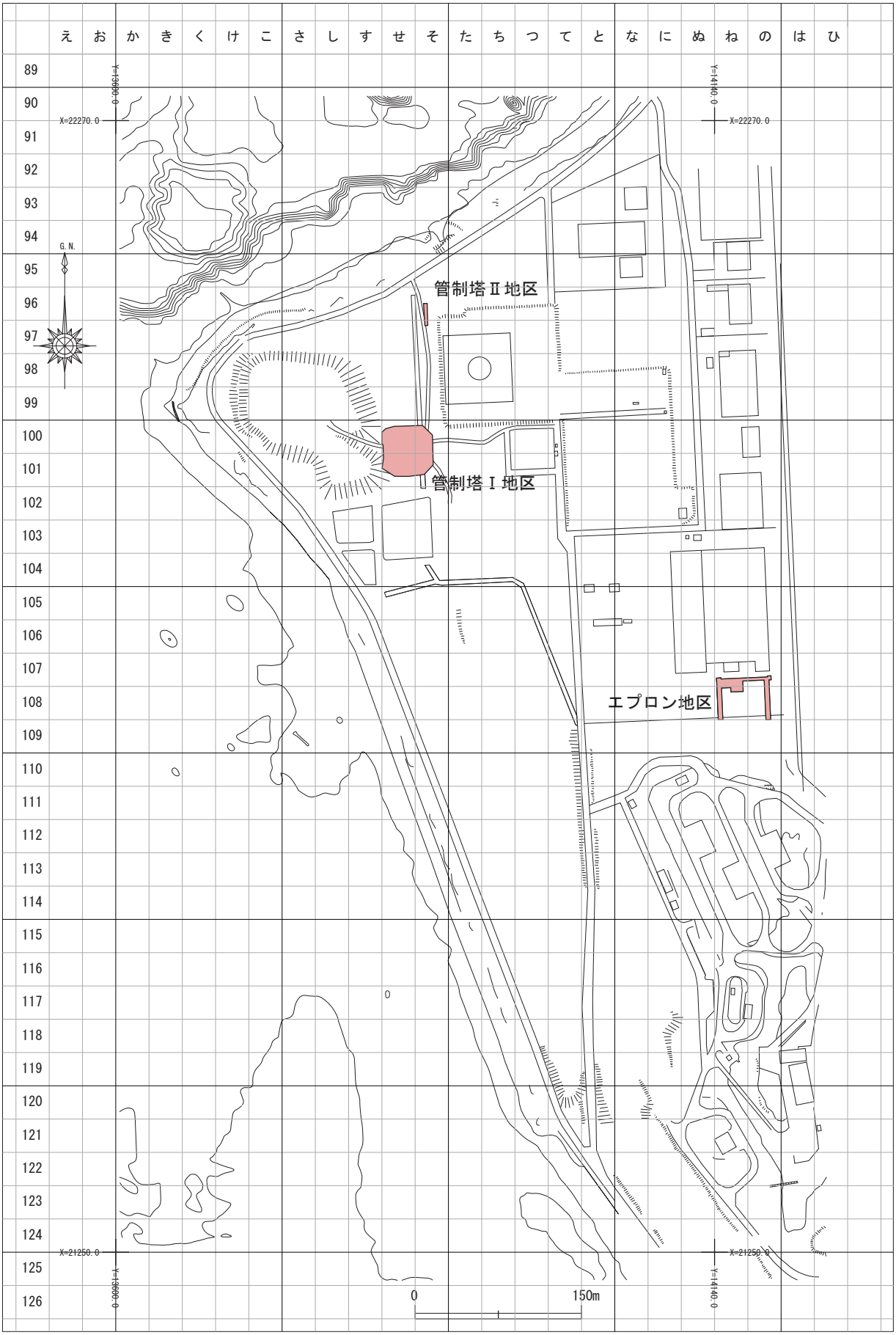
平成27年9月2日、県文化財課において、県（県文化財課、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、県埋文）を含む）、市文化財課で事務調整を行った結果、「管制塔及びケーブルダクトほか」については、平成27年度から平成28年度にかけて県が埋蔵文化財発掘調査を実施することで決定した。平成27年9月10日、大阪航空局、県、市文化財課で埋蔵文化財発掘調査について事務調整が行われた。平成27年9月30日、県文化財課は「管制塔及びケーブルダクト」ほか部分の埋蔵文化財発掘調査に係る必要経費の積算を県埋文に依頼した。平成27年11月2日付け那市文財第278号で、市教委より、県へ「那覇空港内に所在する大嶺村跡発掘調査について」の依頼文書が送付された。

平成27年12月2日、大阪航空局、国土交通省大阪航空局那覇空港事務所（以下、那覇空港事務所）、県、市文化財課で、大嶺村跡発掘調査に係る調整会議を行い、今後のスケジュール等について確認した。

平成28年1月12日、大阪航空局と沖縄県間で、「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化



第１図　那覇空港西側管理区域内の埋蔵文化財分布状況（那覇市教育委員会編 2012）



第２図　発掘調査箇所位置図

財発掘調査に関する協定書」及び「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託（発掘調査）」が締結され、諸準備を経て平成 28 年３月１日から埋蔵文化財発掘調査が実施されるに至った。

第２節　調査体制

本報告の大嶺村跡の発掘調査については、平成 28 年３月（平成 27 年度）～７月（平成 28 年度）までの２ヶ年度に跨がって実施され、資料整理は平成 28 ～ 29 年度、報告書の刊行は平成 30 年度に行った。実施体制は以下のとおりである。

事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　諸見里明（平成 27 年度）、平敷昭人（平成 28 ～ 30 年度）
事業主管　沖縄県教育庁文化財課
課長　萩尾俊章（平成 27 ～ 29 年度）、濱口寿夫（平成 30 年度）
記念物班長　金城亀信（平成 27 年度）、上地博（平成 28 ～ 29 年度）、仲座久宜（平成 30 年度）
調整担当　長嶺均（主任専門員：平成 27 年度）、神村智子（指導主事：平成 28 ～ 29 年度）、羽方誠（主任専門員：平成 30 年度）
事業所管　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　下地英輝（平成 27 年度）、金城亀信（平成 28 ～ 29 年度）、登川安政（平成 30 年度）
総務班長　新垣勝弘（平成 27 年度）、比嘉智博（平成 28 ～ 30 年度）
〃　担当　當山彬（主事：平成 27・30 年度）、新里靖（主査：平成 28 年度）、上間優多（主事：平成 29 年度）
調査班長　上地博（平成 27 年度）、仲座久宜（平成 28 ～ 29 年度）、中山晋（平成 30 年度）
〃　担当　発掘調査　長嶺均（主任専門員：平成 28 年度）、大堀皓平（主任：平成 27 ～ 28 年度）、新垣有一郎（専門員 (臨任)：平成 27 年度）玉城綾（専門員：平成 28 年度）
整理・報告　長嶺均（主任専門員：平成 28 ～ 29 年度）、大堀皓平（主任：平成 28 ～ 30 年度）
業務委託　発掘調査支援業務　有限会社ティガネー（平成 27 ～ 28 年度）
資料整理支援業務（遺物整理）　有限会社ティガネー（平成 28 年度）
資料整理支援業務（遺物実測・製図・写真撮影等）　有限会社ティガネー（平成 29 年度）
理化学分析（管制塔Ｉ地区土壌分析等）　株式会社パリノ・サーヴェイ（平成 28 年度）
理化学分析（14C 年代測定）　株式会社パリノ・サーヴェイ（平成 28・29 年度）
調査指導(所属等は当時のもの)
宮城弘樹 (沖縄国際大学総合文化学部　専任講師)(現地指導・助言)(平成 28 年度)
小畑弘己 (熊本大学文学部　教授)(土器・陶器類指導・助言)(平成 29 年度)
黒住耐二 (千葉県立中央博物館　主任上席研究員)(出土貝類の分析指導)(平成 29 年度)
協力者（所属等は当時のもの）
業務実施　国土交通省大阪航空局、同那覇空港事務所、日本トランスオーシャン航空株式会社、沖縄県商工労働部企業立地推進課、財団法人 沖縄県建設技術センター、当山善吉（字大嶺自治会長）、赤嶺政勝（字大嶺向上会長）、上原弘（一般社団法人沖縄県那覇空港用地等地主会）、金城栄一（旧那覇飛行場用地問題解決地主会長）
発掘調査協力　金城貴子・宮城淳一・田村薫・南勇輔（沖縄県立埋蔵文化財センター）
文化財担当者向け現地説明会参加者及び発掘調査現地指導（所属ごとに 50 音順、苗字・所属等は当時）
安斎真知子・大田成子・神谷あけみ・島弘・高嶺朝美・玉城安明・當銘由嗣・仲宗根啓・根路銘敦子・野原巴・牧山美緒（那覇市市民文化部文化財課）、新垣裕美・伊波晴美・伊禮さおり・奥間陽子・兼城成子（宜野湾市教育委員会）、安斎英介・佐伯信之・菅原広史・瑞慶覧長順・仲宗根久里子・仁王浩司・又吉幸嗣（浦添市教育委員会）、大城達宏・幸地千明・宮城良真・与那嶺豊（豊見城市教育委員会）、津波陽子・西平剛・山里昌次・横山幸平（南城市）、大村由美子・呉屋孝治・崎原美智子・長堂綾・山崎真由美・山里奈美・山田浩久・渡辺幸夫（西原町教育委員会）、仲程勝哉・宮城明恵（与那原町教育委員会）、保久盛陽（南風原町教育委員会）、太田菜摘美・崎原恒寿・仲村善洋・福原りお（恩納村教育委員会）、宮平盛晃（中城村教育委員会）、知念隆博・中山晋・羽方誠・宮城仁（沖縄県教育庁文化財課）、瀬戸哲也・山本正昭（沖縄県立埋蔵文化財センター）

資料整理協力（所属は当時）

丸山真史（東海大学）、新垣力・具志堅清大・廣岡凌・南勇輔・具志みどり・多々良亜矢子・富平砂綾子・嶺井幸恵・宮平笑里子・宮城初枝（沖縄県立埋蔵文化財センター）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

大嶺村跡は、沖縄県那覇市南部の那覇空港内に位置し、那覇市内の最西端である大嶺崎一帯に所在する。

那覇市は沖縄本島南西部に位置する。沖縄県の県庁所在地であり、天久新都心をはじめとした沖縄経済の中心地であり、かつ那覇空港を抱える沖縄県の玄関口でもある。人口は平成 22 年 10 月 1 日時点で 315,954 人、推計面積は首里市及び小禄村が編入された昭和 29（1954）年時点で 22.63km^2 だったが、度重なる水域の埋め立て等により、現在では推計面積 39.57km^2 を数えるに至っている。気候は年間平均 23℃、年間降水量 2000㎜前後で、亜熱帯モンスーン気候に属する。地質は第三紀中新世の島尻層、第三紀新世から第四紀洪積世の琉球層群琉球石灰岩及び沖積層で形成される。地形は北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地及び小禄台地が囲むような地形をなす。これらの台地上から西海岸へ安謝川、久茂地川、国場川等が流れ、河川周辺に沖積地を形成している。特に国場川と饒波川の合流地点には汽水干潟の漫湖が形成され、昭和 57（1982）年に国指定漫湖鳥獣保護区、平成 11（1999）年にはラムサール条約にも登録されている。さらに国場川河口は大きく開いた天然の良港であり、グスク時代以来、那覇港として琉球・沖縄第一の港となっている。

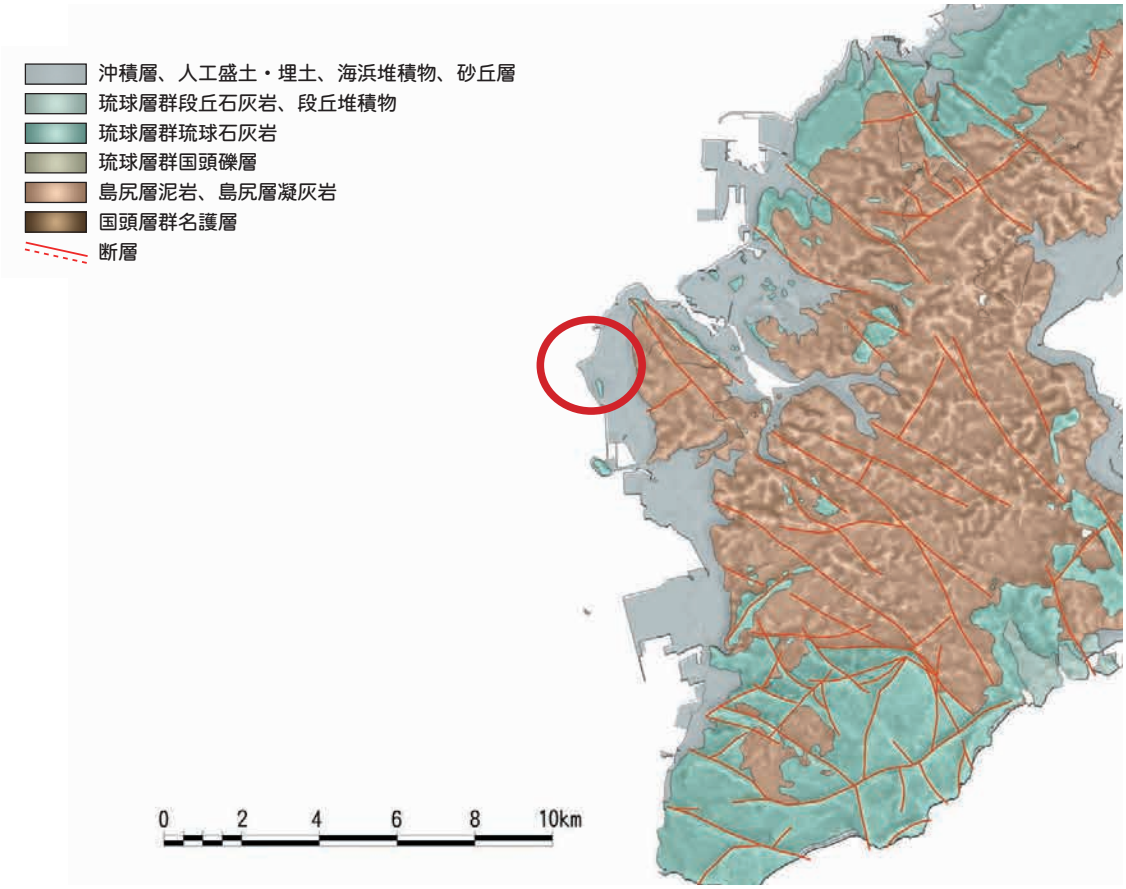
大嶺村跡周辺は、那覇空港西側管理区域となっており、地質上では沖積層及び砂丘・海浜堆積物で形成されている。集落南側には琉球層群琉球石灰岩の隆起した丘陵があり、ウフグシク・タマグシクと呼ばれている。

参考文献

那覇市市勢要覧 2017

那覇市 HP「市のプロフィール」（http://www.city.naha.okinawa.jp/general/profile/）

沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2006『県土のすがた』沖縄県教育委員会



第３図　大嶺村跡周辺の地質　○が大嶺村跡（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2006）

第４図　沖縄県及び那覇市位置

第２節　歴史的環境

大嶺村跡の周辺には、縄文時代早期～中期の鏡水箕隅原 C 遺跡、縄文時代後期の鏡水箕隅原 A 遺跡や鏡水名座原 A 遺跡などがあり、続く弥生～平安並行時代の遺跡には鏡水箕隅原 C 遺跡、グスク時代は同初頭で農耕の痕跡が確認された那崎原遺跡、崎原グスク、尻川原遺跡、瀬長グスクなどが所在する。これらの遺跡からは、この地域一帯が縄文時代早期頃より連綿と人が居住していたことを示している（第５図）。

さて、大嶺村跡の記録上の初出は『おもろそうし』二十巻 1369 首目の歌に、大嶺の領主が西の世の主を招いたというもので、グスク時代には大嶺に領主が居たことを窺わせる。その後、『球陽』の尚敬 31 ～ 33（1743 ～ 1745）年の記述には、小禄間切が寛文 12（尚貞王５）（1673）年に 15 ヵ村を包含する間切として始まったとされている。以後、正徳３（1713）年の『琉球国由来記』に大嶺の土帝君や行事などの記述、康熙 60（1721）年『中山傳信録』には冊封副使の徐葆光が大嶺村の景観についての記録が残っている。なお、18 世紀半ばに作製された「間切集成図」には、集落の範囲が大嶺崎には達していないことや、大嶺村東側に馬場があったことが確認できる（第６図）。

近代になると、明治 29（1896）年「沖縄県ノ郡編制ニ関スル件」の公布により、島尻郡小禄間切大嶺村、さらに明治 41（1908）年「沖縄県及島嶼町村制」の施行により、小禄村字大嶺となる。なお明治 14（1881）年『明治 13 年 沖縄県統計概表』によると、大嶺村の戸数は 233、人口 1357 人、馬場の規模は長さ 2.5 町（約 270m）、幅員 10 間（約 18m）、明治 36（1903）年には戸数 306、人口 1498 人へと増加している。主な生業は肥沃な農地を生かした稲、雑穀、野菜等の栽培と、集落前面の海で食用の魚介類や農作物の肥料となる海草やウニ類等を採る漁業であった。また明治末期から太平洋戦争開始までにかけて、換金産業として婦女子による織物と帽子編み業も盛んに行われたとされる。

昭和６（1931）年より旧日本軍による飛行場建設の測量が始まり、昭和８（1934）年には、「小禄海軍飛行場」として建設された。昭和 10（1935）年６月１日からは、逓信省航空部管理の「那覇飛行場」となり、内臺航空路として本土と台湾を結ぶ中継基地として整備拡張された。この時期は軍民共同で使用されていたが、昭和 17 年には戦局に合わせて飛行場の拡張工事が行われ、海軍輸送部管理の「海軍小禄飛行場」となった。昭和 18（1943）年には国家総動員法により字大嶺一帯が接収されて「小禄海軍飛行場」として拡張された。

小禄海軍飛行場及び大嶺村は昭和 20（1945）年６月に鏡水から上陸した米軍によって占領され、同年 12 月には米空軍が「那覇飛行場」として整備・拡張を経て運用を開始している。その後昭和 47（1972）年５月 15 日の沖縄本土復帰に伴い、運輸省所管の第二種空港に指定（運輸省告示 236 号）され、「那覇空港」と改められると同時に整備拡充が行われ、沖縄県の空の玄関口として今日に至っている。

参考文献

那覇市教育委員会編 2012『大嶺村跡－那覇空港消防車庫新築工事に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第 89 集

字大嶺向上会編 2008『大嶺の今昔』

外間守善校中 2000『おもろそうし』（下）岩波書店

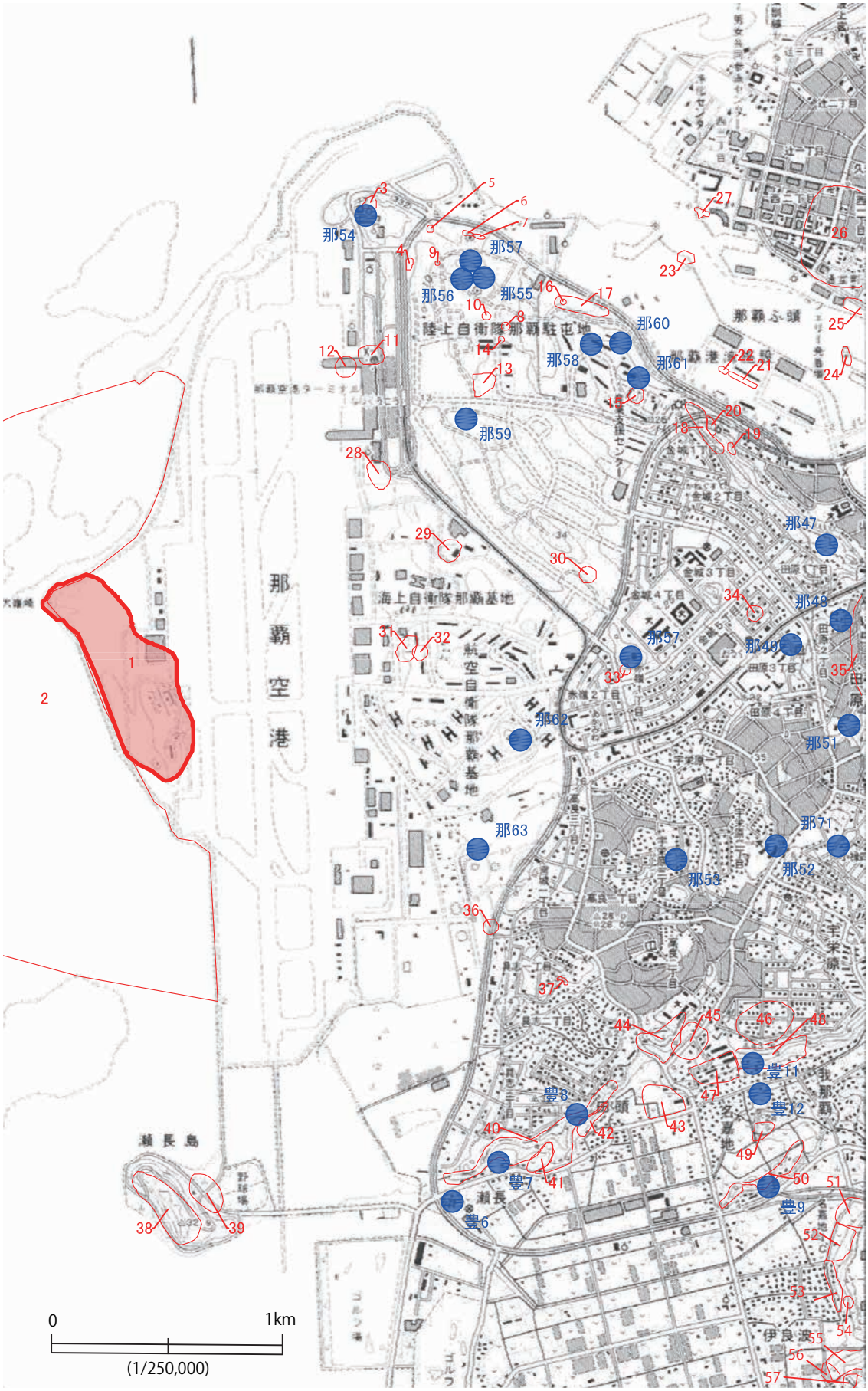
遺跡地図作成参考資料等

沖縄県立埋蔵文化財センター編 2015『沖縄県の戦争遺跡－平成 22 ～ 26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集）

那覇市市民文化部文化財課編 2018『那覇市大嶺海岸の石切場等跡』（那覇市文化財調査報告書第 107 集）那覇市

那覇市 HP「なは MAP（文化財）」 (https://www.sonicweb-asp.jp/naha/)

※豊見城市の遺跡分布図については、同市教育委員会よりデータの提供を受けた。



第５図　大嶺村跡とその周辺の遺跡

表１　大嶺村跡周辺の遺跡一覧表

<周辺遺跡凡例>

1	大嶺村跡	21	垣花村跡	41	瀬長古島遺跡
2	大嶺海岸の石切場跡	22	住吉遺跡	42	田頭古島遺跡
3	崎原グスク	23	屋良座森グスク	43	瀬長舟無小原遺物散布地
4	鏡水箕隈原A遺跡	24	御物グスク	44	名嘉地後原古墓群
5	鏡水箕隈原B遺跡	25	渡地村跡	45	名嘉地古島遺跡
6	鏡水箕隈原C遺跡	26	西村跡	46	我那覇古島遺跡
7	鏡水箕隈原D遺跡	27	三重グスク	47	名嘉地原遺物散布地
8	鏡水箕隈原E遺跡	28	那崎原遺跡	48	我那覇後原遺物散布地
9	鏡水箕隈原古墓群	29	嶽野尾原遺跡・古墓群	49	我那覇佐真下原古墓群
10	水溜屋原遺跡	30	安次嶺部落跡	50	名嘉地屋無垣原古墓群
11	鏡水古墓群	31	当間安座間原遺跡	51	伊良波先祖原遺物散布地(A地点)
12	鏡水部落跡	32	当間原壕	52	伊良波先祖原遺物散布地(B地点)
13	鏡水土砂場原A遺跡	33	赤嶺部落跡	53	伊良波先祖原遺物散布地(C地点)
14	鏡水土砂場原B遺跡	34	トゥムイ古墓遺跡	54	伊良波西遺跡
15	鏡水名座原A遺跡	35	田頭東原遺物散布地	55	座安若知花原古墓群
16	鏡水名座原B遺跡	36	宮城部落跡	56	座安若知花原遺物散布地(A地点)
17	鏡水名座原古墓群	37	尻川原遺跡	57	座安若知花原遺物散布地(B地点)
18	ガジャンビラ丘陵遺跡	38	瀬長グスク		
19	住吉遺物散布地	39	瀬長古島遺跡		
20	ガジャンビラ古墓群	40	田頭・瀬長北側古墓群		

<周辺遺跡の凡例(戦争遺跡)>

那47	山下町大通りの壕	那57	鏡水海軍砲台跡	豊6	アカサチ森軍構築壕
那48	田原2丁目の壕	那58	掩体壕	豊7	瀬長の軍構築壕
那49	ことぶき山の陣地壕跡	那59	鏡水海軍司令部壕	豊8	田頭の軍構築壕
那50	小禄の共同防空壕群	那60	正木隊の壕	豊9	名嘉地の住民避難壕
那52	宇栄原2丁目の壕	那61	高射砲部隊の壕	豊11	我那覇の軍構築壕
那53	宇栄原3丁目の壕	那62	当間海軍砲台跡	豊12	メーヌモー壕
那54	崎原灯台跡の壕	那63	高良の掩体壕跡		
那55	らくだ山海軍陣地壕①	那71	字宇栄原の壕		
那56	らくだ山海軍陣地壕②				

※戦争遺跡の番号は『沖縄県の戦争遺跡』（沖縄県立埋蔵文化財センター編2015）戦争遺跡分布図と統一している。

第６図　「間切図」にみられる大嶺村

第７図　「正保国絵図」の大嶺村跡周辺

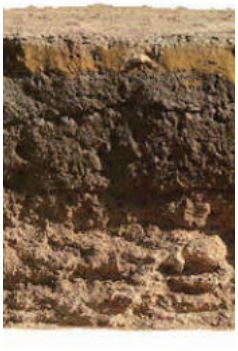
第８図　昭和 20（1945）年１月米軍航空写真の大嶺村と小禄海軍飛行場

第３章　基本層序及び調査方法・経過

第１節　基本層序

発掘調査の結果、管制塔Ⅰ・Ⅱ地区とエプロン地区間で層序の異同が認められたが、出土遺物等から検討した結果、下記を基本層序として設定した。

【人為的堆積層】
Ⅰ層：現表土
Ⅱ層：米軍那覇飛行場及び沖縄空港に伴う造成土層
Ⅲ層：戦中～戦後直後の造成土層
Ⅳ層：大嶺村跡期の旧表土
【自然堆積層】
Ⅴ層：浅黄色砂層
Ⅵ層：灰黄色砂層
Ⅶ層：島尻泥岩層
※色調は『新版標準土色帖』に準拠

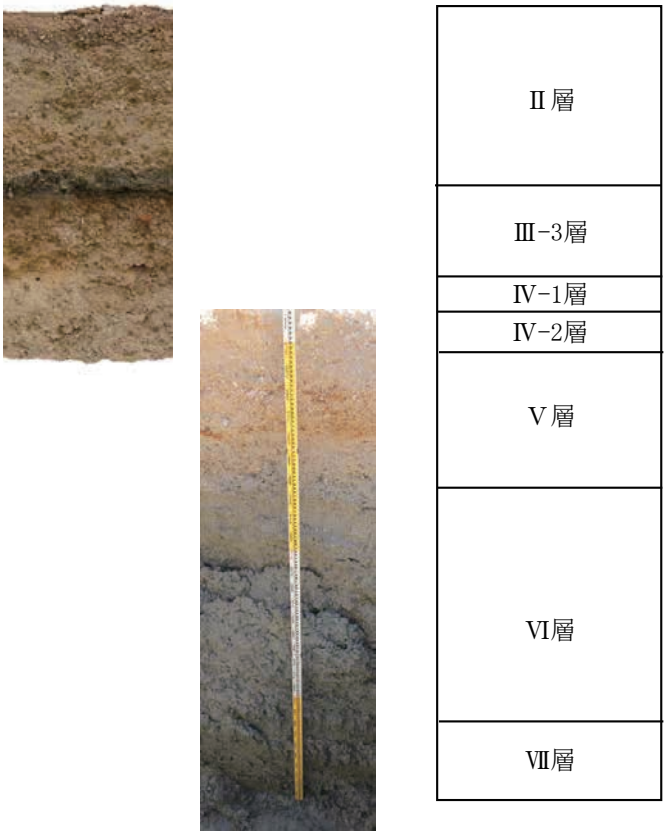


第９図　管制塔Ⅰ地区地層柱状図

上記のうち、Ⅰ・Ⅱ層は全調査区で共通して認められる。Ⅲ－１・２層は管制塔Ⅰ地区のみに認められる層である。これまでの報告で遺物包含層とされている層であるが、遺物中に戦中戦後とみられる弾丸やガラス瓶などが認められることから、焼失した大嶺村を整地した際の地層と想定される。Ⅲ－３層は管制塔Ⅰ・エプロン両地区の近世・近代遺構の覆土に認められるため、これも大嶺村期直後の堆積と判断される。Ⅳ層はエプロン地区にのみ認められる、近世・近代の旧表土である。ただしⅤ層に比べて硬化が認められることから、人工的な整地層と判断した。

Ⅴ層以降は自然堆積と考えられる。概ね白色でしまりの弱い細粒砂層が上層、貝やサンゴを多量に含む粗砂層が下層という組み合わせで構成されるが、細粒砂層はエプロン地区のトレンチ２以東でのみ確認された。下層の堆積の確認ができたエプロン地区においては、Ⅴ層下にⅤ層粗砂層が灰色化した層が厚く堆積し、その下に島尻泥岩層が確認された。

なお、各地区における詳細な地層観察所見は各章に詳述する。



第 10 図　エプロン地区地層柱状図

第２節　調査方法と経過

１　調査の方法

調査区設定　まず大阪航空局那覇空港事務所より提供された基準座標より、各調査区に基準となる座標及

び標高を移動させた。それを基に、大阪航空局より提供を受けた調査対象箇所の図面を基に１ｍごとに調査杭を落とし、これを基準にグリット設定及び調査区の設定を行った。

調査順位　全調査区のうち、大阪航空局よりエプロン地区を優先して調査するよう指示を受けたため、同地区より調査を開始した。ただし、後に大阪航空局と沖縄県教育委員会間で調整・協議し、平成 28 年４月以降は全地区を並行して調査を進めた。

磁気探査及び表土掘削　調査区の設定が完了した調査区より、表層の磁気探査を実施し、異常点の安全確認が完了したのち、重機により表土掘削を行った。磁気探査は深度 0.5 ｍごとに行い、管制塔Ⅰ地区はⅢ層、エプロン地区はⅣ－１層が検出されるまで慎重に重機掘削と磁気探査を繰り返した。ただし管制塔Ⅰ地区では、ほぼ調査区全域が異常点と言っても遜色のないほどの結果となった。そのため、Ⅲ層に達するまでは異常点の確認掘削と同様の慎重さをもって重機掘削を行った。また管制塔Ⅰ地区西側及び管制塔Ⅱ地区は、壁面が２ｍ以上に達したため、壁面を法面化して対応した。

遺構の調査　遺構検出及び掘削は人力で行った。遺構検出は沖縄県立埋蔵文化財センター（以後「埋文」）の調査員で実施し、支援業者により検出状況写真の撮影、オルソによる図化を行い、埋文の調査員による確認・承諾を得て半裁を行った。半裁後は埋文の調査員が断面の分層を行い、検出時と同様の方法による記録及び確認を行い、さらに埋文の調査員による土層観察記録を行ったのち、完掘した。

遺物の取り上げ　遺物は原則として遺構ごとに取り上げを行った。遺構外遺物の場合は、地区、トレンチ（エプロン地区のみ）、グリッド、層位という単位で取り上げた。

遺物の水洗及び保管　取り上げた遺物は、雨天時等において水洗作業を行った。水洗された遺物のうち重要と判断される遺物は別に管理し、その他の遺物はコンテナに収め、現地の倉庫内に収納した。

調査区全景写真　調査区全景写真は、管制塔Ⅰ地区は調査区西側の丘陵と同北側の残土置き場を利用して撮影した。エプロン地区はスカイマスターによる撮影に加え、JTA のご厚意により、調査区北西側の JTA 施設屋上より撮影した。

２　事業経過

上記の経緯により、現地における発掘調査は、平成 27・28 年度をまたいで実施した。その後、同年より平成 29 年度まで資料整理作業を行い、平成 30 年度に成果をとりまとめた上で編集を行い、発掘調査報告書を刊行した。

また、当発掘調査は地元の那覇市小禄地区の住民の高い関心を集め、現地説明会をはじめ、地元からの依頼による調査成果の報告の実施をはじめ、多くの普及公開活用の機会を得た。

以下、主な内容を記載する。

【発掘調査】

平成 27 年度

平成 28 年 ２月 10 日　(有) ティガネーと発掘調査支援業務委託について契約締結。
２月 24 日　那覇空港事務所保安防災課へ那覇空港西側管理区域工事立入申請書を提出。
２月 26 日　沖縄県赤土等流出防止条例に基づき、事業行為通知書を沖縄県南部保健所に提出。
２月 29 日　那覇空港西側管理区域工事への立入申請許可。
３月　１日　沖縄県赤土等流出防止条例に基づく事業行為通知書について、確認済み通知書を受領。現地作業を開始。伐採、測量・調査区設定、磁気探査を開始。
３月　２日　仮設物設置申請書を那覇空港事務所へ提出。
３月　４日　仮設物使用承認書を受領。
３月　７日　重機掘削作業を開始。
３月 10 日　埋文第 718 号にて、沖縄県教育委員会教育長に対し、発掘調査着手について報告。
３月 14 日　現場仮設事務所を設置。
３月 15 日　発掘作業員を導入した掘削等作業を開始。
３月 22 日　エプロン地区Ⅳ－１層及びⅤ層の遺構検出を開始。大嶺村に伴うとみられる遺構が検出され始める。
３月 24 日　那覇空港事務所基盤整備担当職員による現地視察。
３月 31 日　大阪航空局に対し、平成 27 年度分の完了報告書を提出。

平成 28 年度

4月 9日 同日から翌 10 日にかけて降水量 191㎜に及ぶ豪雨により、全調査区が冠水。11 日より排水作業を開始。
4月 18 日 エプロン地区排水完了。
4月 19 日 大阪航空局建設室と現地調整。
4月 20 日 管制塔Ⅰ地区も一部排水を継続しつつ、発掘作業を再開。
5月 10 日 管制塔Ⅱ地区の排水完了、発掘調査を再開。
5月 16 日 管制塔Ⅱ地区の調査を優先的に完了させるため、管制塔Ⅰ地区の発掘調査を一時停止する。
5月 25 日 完掘状況等の記録を行い、管制塔Ⅱ地区の発掘調査を完了。同日より管制塔Ⅰ地区の発掘調査を再開。
5月 27 日 管制塔Ⅱ地区に濁水処理機を設置し、以後沈殿池として利用を開始。
6月 8日 管制塔Ⅰ地区Ⅴ層の遺構検出作業を開始、同日より遺構が確認され始める。
6月 10 日 那覇空港事務所並びに沖縄県企業立地推進課及び沖縄県教育庁文化財課向けに現地説明会を実施。
6月 16 日 県内市町村文化財関係者対象の現地説明会を実施。
6月 21 日 エプロン地区Ⅳ－ 1 層の完掘状況写真を撮影。
6月 25 日 エプロン地区Ⅳ－ 1 層を重機掘削し、Ⅳ－ 2 層を検出。
6月 29 日 管制塔Ⅱ地区の埋め戻し開始。
同 日 西原中学校・西原東中学校生徒が、職場体験として発掘作業に参加。
6月 30 日 管制塔Ⅱ地区の埋め戻し完了。
7月 1日 沖縄国際大学専任講師の宮城弘樹氏を招聘し、現場指導。
7月 2日 管制塔Ⅰ地区の完掘写真を撮影。
7月 5日 那覇空港事務所基盤整備担当職員による現場視察。
同 日 エプロン地区Ⅳ -2 層の遺構検出作業を行い、遺構を検出。
7月 11 日 管制塔Ⅰ地区の埋め戻しを開始。
7月 13 日 エプロン地区の発掘調査を完了し、埋め戻しを開始。
7月 19 日 管制塔Ⅰ地区の埋め戻しを完了。
7月 20 日 エプロン地区の埋め戻し及び種子吹付けを完了。
7月 28 日 現場仮設事務所、仮設トイレ等を撤去。現地作業完了。
8月 30 日 大阪航航空局へ完了報告書を提出。

【資料整理】

平成 28 年度

9月 21 日 大阪航空局と沖縄県間において、「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託 (資料整理)」契約を締結。
9月 29 日 (有) ティガネーとの間に資料整理支援業務委託について契約締結。
10 月 17 日 同一袋内での遺物の種別分類・仕分け及び接合作業を開始。
11 月 9日 分類・仕分けが完了した遺物より、注記作業を開始。
12 月 16 日 注記まで完了した管制塔Ⅱ地区の遺物より、接合作業を開始。
12 月 20 日 管制塔Ⅰ地区出土遺物の接合作業を開始。
平成 29 年 1月 6日 エプロン地区の接合作業を開始。
2月 15 日 実測等対象資料の抜き出し及び遺物集計作業を開始。
2月 27 日 抜き出し及び遺物集計作業を完了。
3月 10 日 大阪航空局に対し、完了報告書を提出。

平成 29 年度

平成 29 年 4月 26 日 大阪航空局と沖縄県間において、「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託 (報告書作成)」契約を締結
6月 24 日 (有) ティガネーとの間に資料整理支援業務委託について契約締結
6月 29 日 対象資料を (有) ティガネー資料整理場へ移送

7月　5日　実測作業を開始
7月13日　千葉県立中央博物館の黒住耐二氏を招聘し、資料整理指導を受ける。
10月20日　受託契約について変更契約を締結し、報告書刊行を次年度に移行。
11月16日　熊本大学小畑弘己氏を招聘し、資料整理指導
平成30年　2月27日　遺物実測・写真撮影・貝類整理集計作業を完了し、成果品を沖縄県立埋蔵文化財センターへ納品。
3月16日　大阪航空局に対し、完了報告書を提出。
平成30年度
6月26日　大阪航空局と沖縄県教育委員会間において、報告書刊行について協定締結。
6月29日　大阪航空局と沖縄県間において、「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託(報告書刊行)」契約を締結。
8月　1日　必要機器のリースを行い、作業を開始。
平成31年　2月12日　「大嶺村跡発掘調査報告書印刷製本業務」について、(有)金城印刷と競争見積もりの結果、随意契約。
3月　15日　発掘調査報告書刊行。

【普及公開活用】
平成28年度
平成28年　6月19日　一般向け現地説明会を午前・午後の2回に渡り、参加者40名限定で実施。
平成29年度
平成29年　6月22日　「うるくの歴史と文化を語る会」の依頼により、同会総会記念講演（会場：JAおきなわ小禄支店3階ホール）において、発掘調査成果を報告。
8月1日～9月3日　沖縄県立埋蔵文化財センター主催「発掘調査速報展2017」（会場：同センター企画展示室）において、出土資料を展示。
8月5日　沖縄県立埋蔵文化財センター主催第69回文化講座において発掘調査成果を報告。
1月16日～2月4日　沖縄県立埋蔵文化財センター主催「発掘調査速報展2017巡回速報展」（会場：恩納村博物館）において、出土資料を展示。
2月16日～2月25日　沖縄県立埋蔵文化財センター主催「発掘調査速報展2017巡回速報展」（会場：宮古島市総合博物館）において、出土資料を展示。

職場体験

一般者向け現地説明会

図版1　職場体験・現地説明会

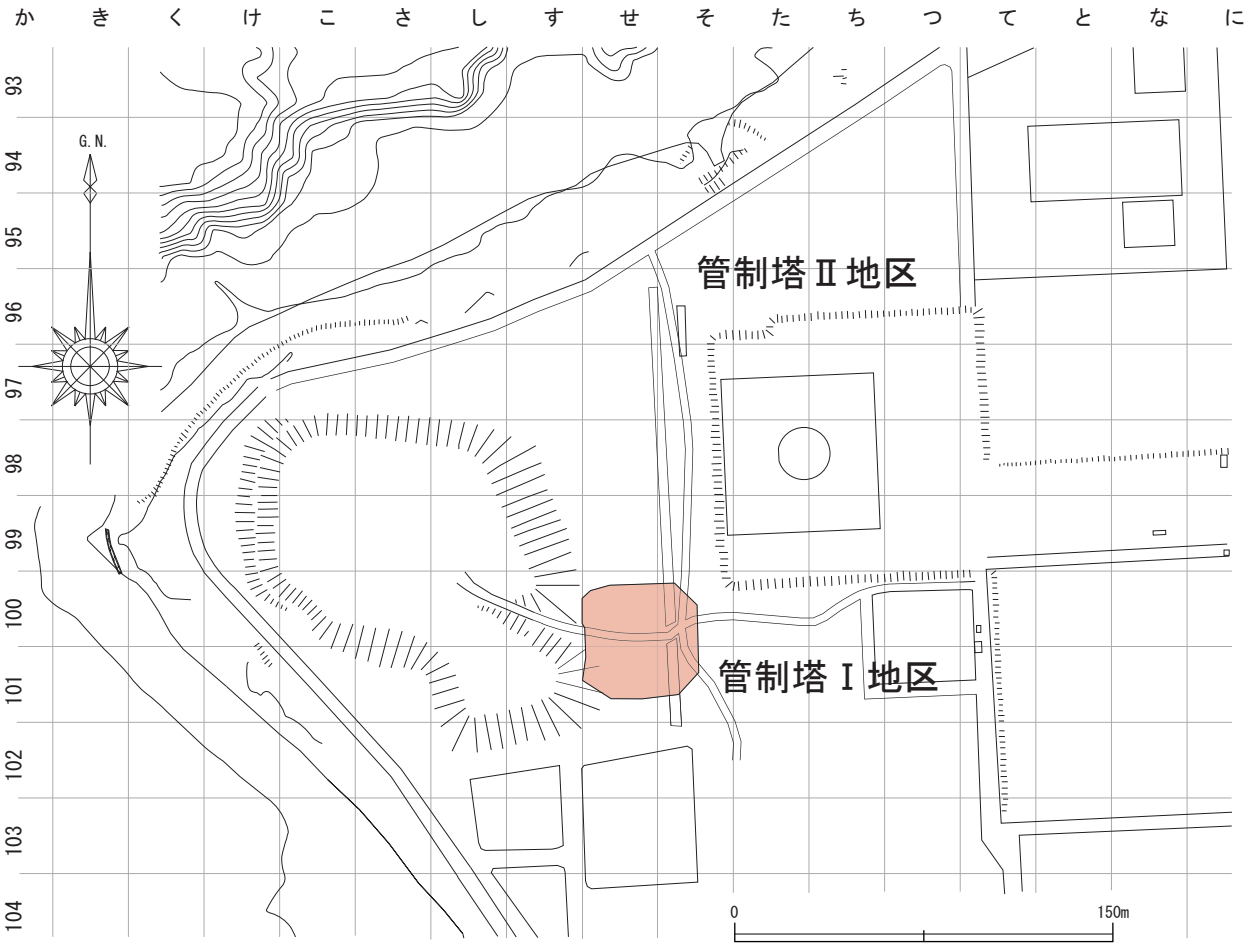
第４章　管制塔Ⅰ・Ⅱ地区の調査成果

第１節　位置と層序

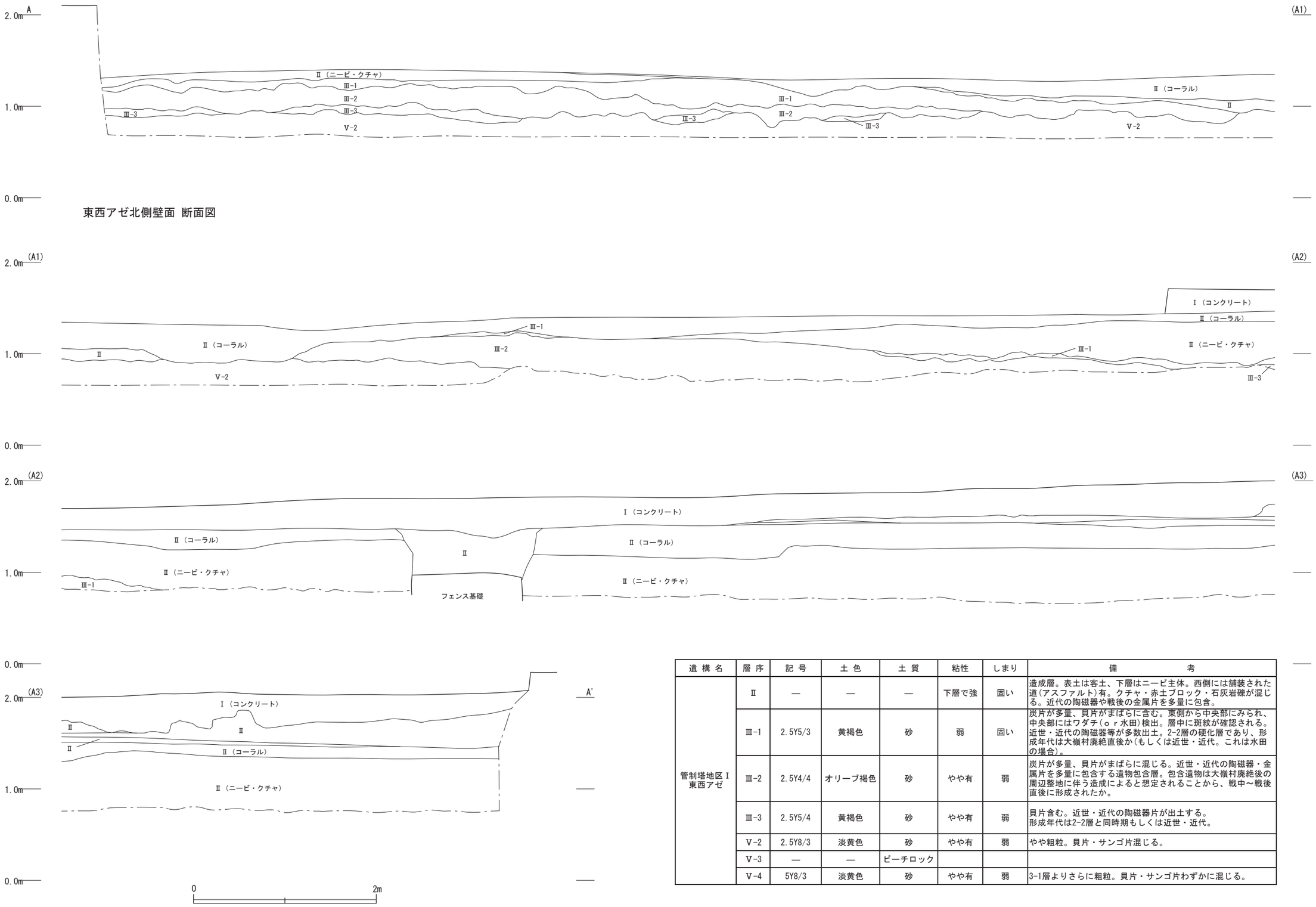
管制塔Ⅰ地区では、大嶺崎のおよそ中央部に位置する。標高は約２m前後である。調査区西側には丘陵がみられるが、1945 年当時の写真には記録されておらず、戦後の造成等によって形成された人工的なものであり、本来はほぼ平坦な地形であったとみられる。

堆積状況は、基本層序Ⅰ～Ⅲ層及びⅤ層が検出された。特にⅢ層は硬化したⅢ－１層と、Ⅴ層との混砂層となっているⅢ－３を含む３枚に細別される。また自然堆積のⅤ層は、貝やサンゴ片等の海浜堆積物層及びビーチロックとなっており、エプロン地区でみられるような細粒の白砂層は検出されなかった。

【人為的堆積層】
　Ⅰ層：現表土。近世・近代の沖縄産陶器や瓦などが稀に確認できる。
　Ⅱ層：米軍那覇飛行場及び那覇空港に伴う造成土層。
　Ⅲ層：戦中～戦後直後の造成土層。
【自然堆積層】
　Ⅴ層：海浜堆積物層

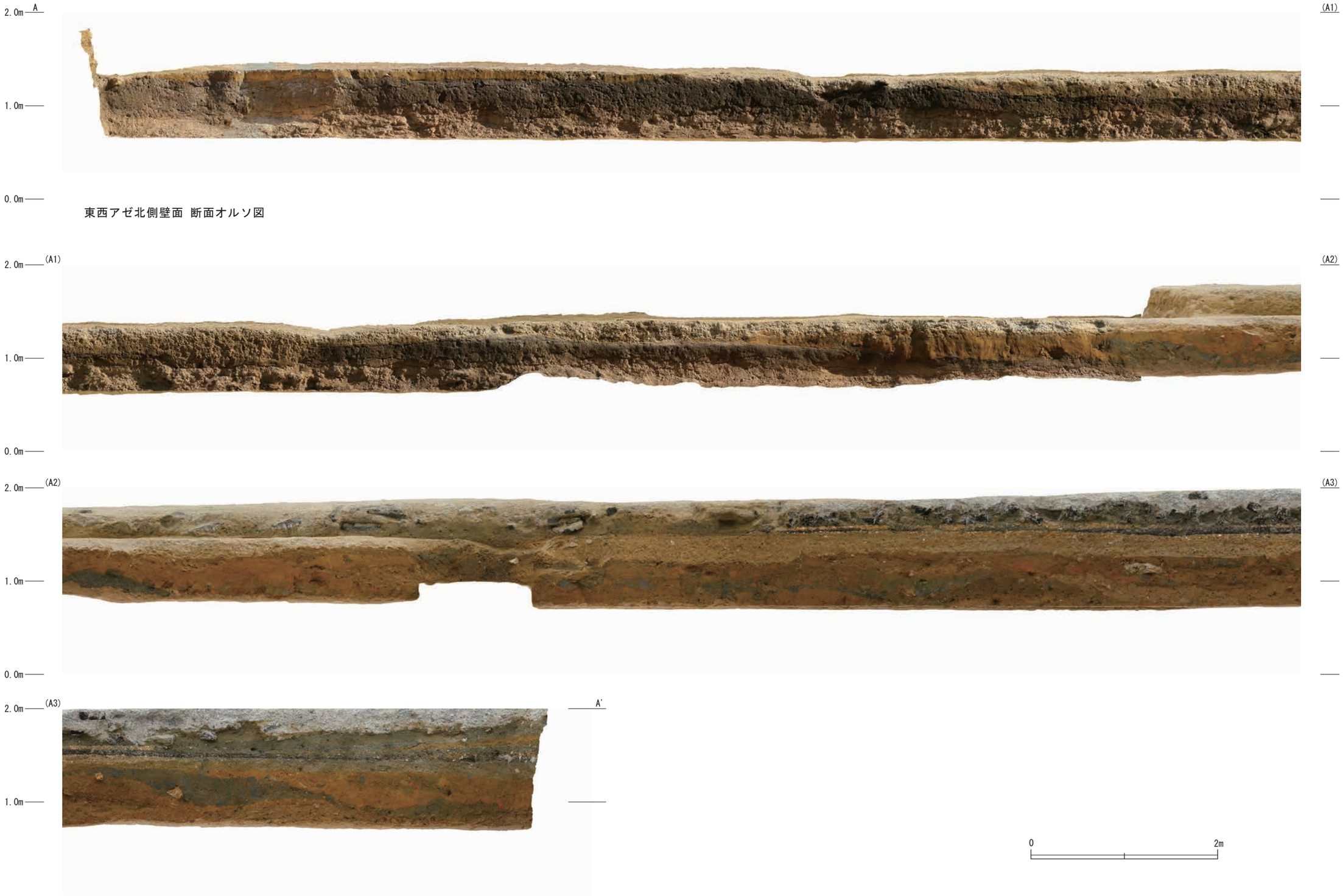


第 11 図　管制塔Ⅰ地区位置（S=1/3000）



遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ東西アゼ	Ⅱ	—	—	—	下層で強	固い	造成層。表土は客土、下層はニービ主体。西側には舗装された道(アスファルト)有。クチャ・赤土ブロック・石灰岩礫が混じる。近代の陶磁器や戦後の金属片を多量に包含。
	Ⅲ-1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	固い	炭片が多量、貝片がまばらに含む。東側から中央部にみられ、中央部にはワダチ(ｏｒ水田)検出。層中に斑紋が確認される。近世・近代の陶磁器等が多数出土。2-2層の硬化層であり、形成年代は大嶺村廃絶直後か(もしくは近世・近代。これは水田の場合)。
	Ⅲ-2	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	炭片が多量、貝片がまばらに混じる。近世・近代の陶磁器・金属片を多量に包含する遺物包含層。包含遺物は大嶺村廃絶後の周辺整地に伴う造成によると想定されることから、戦中～戦後直後に形成されたか。
	Ⅲ-3	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	貝片含む。近世・近代の陶磁器片が出土する。 形成年代は2-2層と同時期もしくは近世・近代。
	Ⅴ-2	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	やや粗粒。貝片・サンゴ片混じる。
	Ⅴ-3	—	—	ビーチロック			
	Ⅴ-4	5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	3-1層よりさらに粗粒。貝片・サンゴ片わずかに混じる。

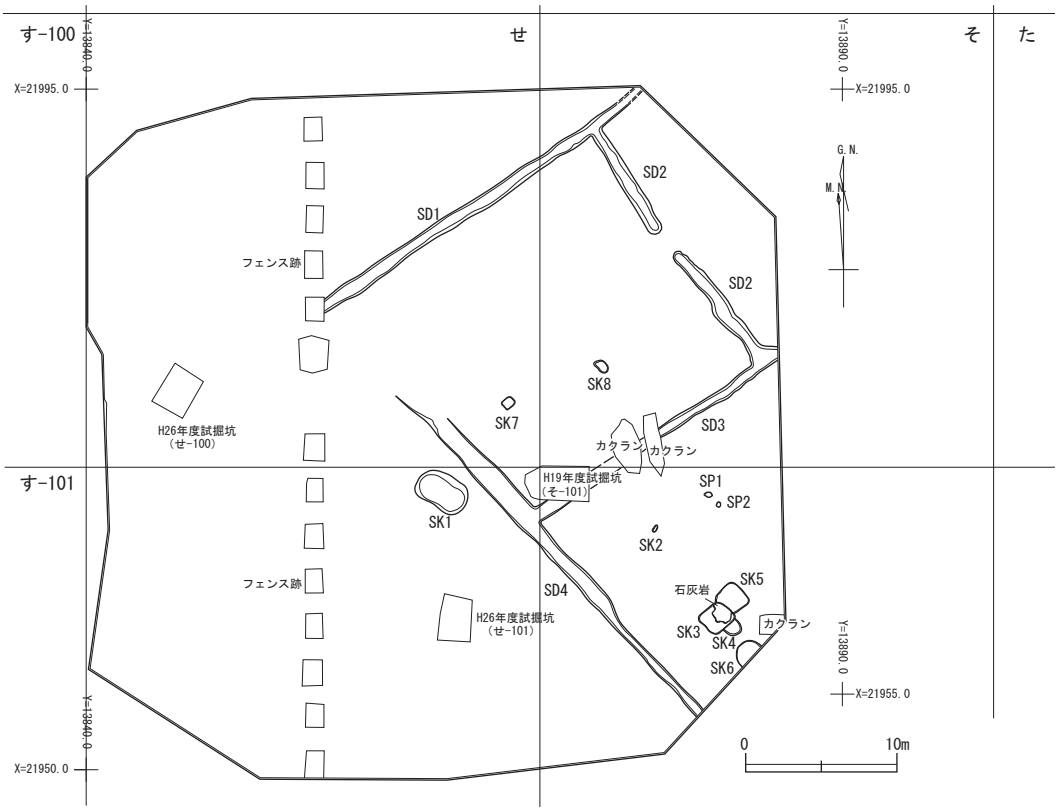
第 12 図　管制塔Ⅰ地区地層断面図（S=1/40）



図版２　管制塔Ⅰ地区地層断面（オルソ）（S=1/40）

第２節　Ⅴ層の遺構と遺物

概要　検出した遺構は、土坑（SK）８基、溝状遺構（SD）４基、ピット２基である。覆土内から出土した遺物より、いずれも近世・近代の遺構とみられるが、SK １は後述のように戦前から戦中の可能性が挙げられる。出土遺物も同様に近世・近代がほとんどを占めるが、現代遺物は認められない点はこれより上層と大きく異なる。



第 13 図　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構配置図（S=1/500）

図版３　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構配置図（オルソ）

1　Ⅴ層の遺構と遺構内出土遺物

【ＳＤ１・２・３・４】

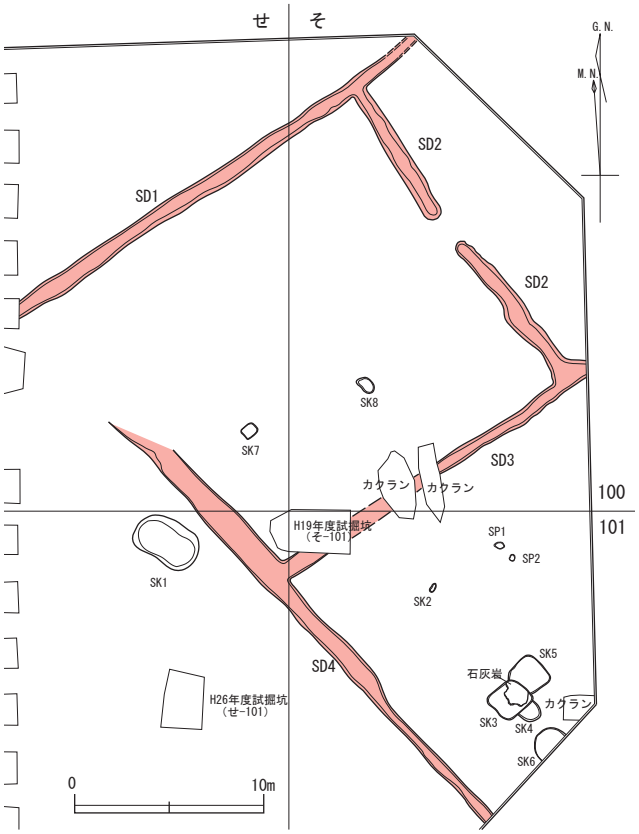
構　　造　平面形からは４つの溝により方形の区画を形成。

SD1：長さ 2,413cm、幅 95㎝、深さ 15㎝。
SD2：長さ 1,838cm、短軸 100㎝、深さ 11㎝。
SD3：長軸 1,937cm、短軸 74㎝、深さ 12㎝。
SD4：長軸 2,891cm、短軸 165㎝、深さ 8㎝。

覆　　土　いずれも上層はⅢ－２層、下層はⅢ－３層及びこれとⅤ層の混砂層。

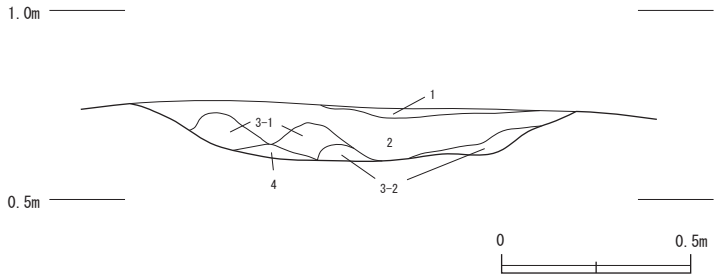
出土遺物

SD1：中国産磁器（第 16 図１）や沖縄産陶器（同図２）、陶質土器（同図３）。また掲載外だが先史時代の土器１点も出土。
SD2：日本産磁器（第 18 図４）や沖縄産施釉陶器が出土（同図５・６）。
SD3：円盤状製品（第 20 図７）が出土。
SD4：ボタン状の金属製品（第 22 図８）が出土。



第 14 図　管制塔Ⅰ地区 SD1・2・3・4 平面図
（S=1/400）

図版４　管制塔Ⅰ地区 SD1・2・3・4 完掘状況（北東から）

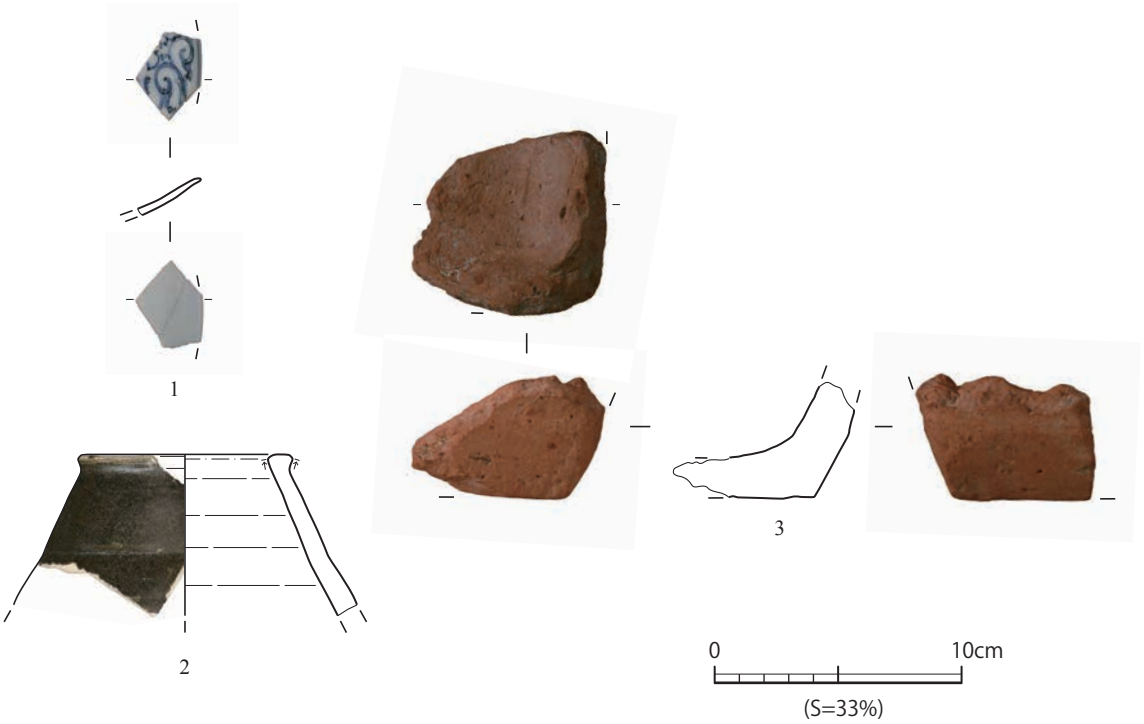


第 15 図　管制塔Ⅰ地区 SD1 断面図（S=1/20）

図版 5　管制塔Ⅰ地区 SD1 ベルト（南西から）

表 2　管制塔Ⅰ地区 SD1 ベルト　土層観察表

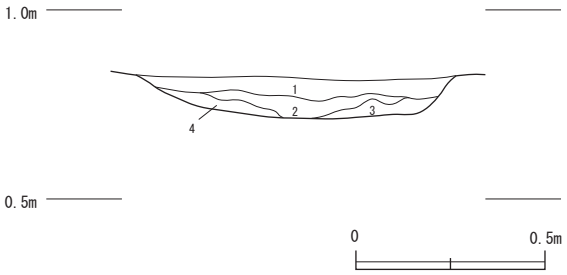
遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SD1ベルト	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	有	Ⅱ層とⅢ-2層下部の層境付近か。
	2	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-3層と同じ。
	3-1	—	—	砂			2層と4層の混層で2層の方が多。
	3-2	—	—	砂			2層と4層の混層で4層の方が多。
	4	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。



第 16 図　管制塔Ⅰ地区 SD1 出土遺物

表３　管制塔Ⅰ地区 SD1 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第16図1	そ100 SD1	中国産陶磁器	皿	青花磁器	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	3.89	－	白色 緻密	外:透明 内:透明	内:花唐草文	ペンシルドローイングによる施文	なし	徳化 18～19c	－
第16図2	そ100 SD1	沖縄産陶器	壺	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	43.77	口唇部は露胎	卵黄白色/軟質	内:黒釉 外:黒釉	なし	－	－	－	－
第16図3	そ100 SD1	陶質土器	火炉	陶質土器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	166.95	なし	赤褐色	なし	なし	－	－	沖縄	馬蹄形火炉・巻貝圧痕

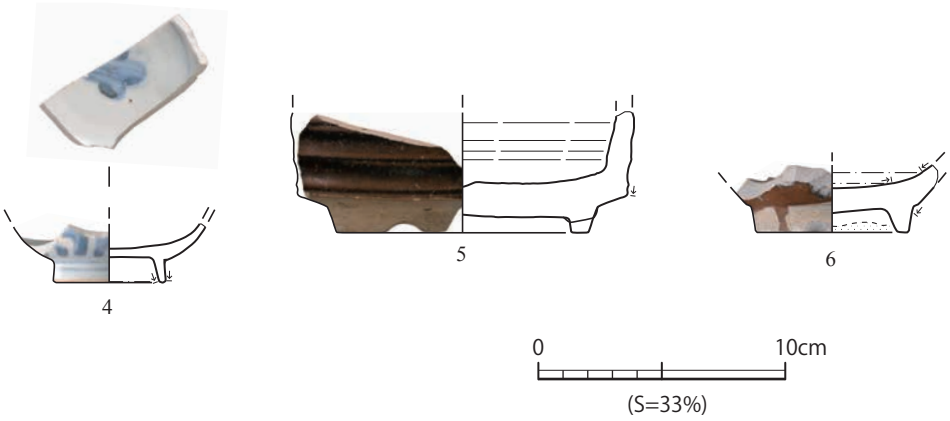


第 17 図　管制塔Ⅰ地区 SD2 断面図（S=1/20）

図版６　管制塔Ⅰ地区 SD2 ベルト（北西から）

表４　管制塔Ⅰ地区 SD2 土層観察表

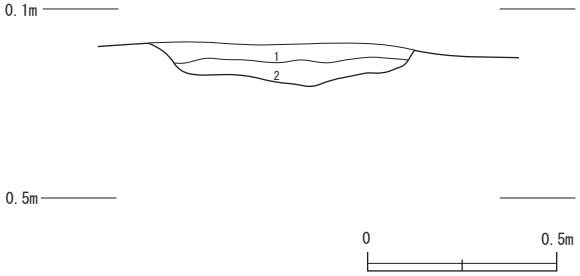
遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SD2ベルト	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-3層。
	2	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	
	3	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。
	4	—	—	ビーチロック			Ⅴ-2層。



第 18 図　管制塔Ⅰ地区 SD2 出土遺物

表５　管制塔Ⅰ地区 SD2 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第18図4	そ100 SD2	日本産陶磁器	碗	染付磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:4.5	22.06	－	白色 やや緻密	外:透明 内:透明	外:蓮弁文 内底:草鼻文？	－	－	肥前 不明	－
第18図5	そ100 SD2	沖縄産陶器	火取	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:10.0	109.54	なし	卵黄白色/軟質	外:鉄釉 内:無釉	なし	－	－	－	－
第18図6	そ100 SD2	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:6.1	73.50	見込蛇の目状釉剥ぎ・浸し掛け・兜巾有・畳付泥漿付着	灰白色/緻密	外:鉄釉 内:鉄釉	－	－	－	－	－

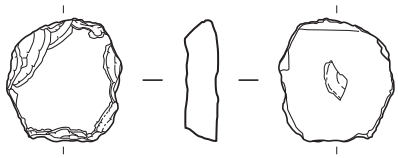


第 19 図　管制塔Ⅰ地区 SD3 断面図（S=1/200）

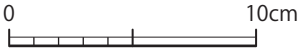
図版７　管制塔Ⅰ地区 SD3 ベルト（南西から）

表６　管制塔Ⅰ地区 SD3 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SD3ベルト	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	有	やや有	貝片等まばらに混じる。下層に向かうにしたがって粒径大。
	2	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。



7

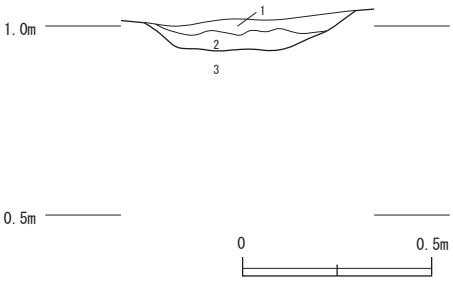


(S=33%)

第 20 図　管制塔Ⅰ地区 SD3 出土遺物

表７　管制塔Ⅰ地区 SD3 出土遺物観察表

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第20図 7	そ100 SD3	円盤状製品	略円形	完形	外径:47.5 最大厚:14.0	35.1	瓦	－	打剥/両	－	－	－	－	－

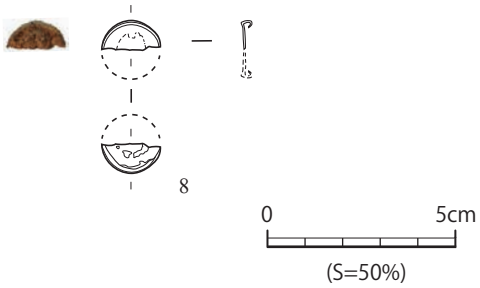


第 21 図　管制塔Ⅰ地区 SD4 断面図(S=1/200)

図版８　管制塔Ⅰ地区 SD4 ベルト（北西から）

表８　管制塔Ⅰ地区 SD4 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SD4ベルト	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	有	やや有	細粒(＞φ1.0㎜)炭片・貝片・クチャ小ブロック混じる。
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。
	3	—	—	ビーチロック			Ⅴ-2層。



第 22 図　管制塔Ⅰ地区 SD4 出土遺物

表９　管制塔Ⅰ地区 SD4 出土遺物観察表

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第22図 8	せ100 SD4	金属製品	ボタン？	半割	最大長:15.5 最大幅:7.5 最大厚:2.8	0.2	銅	－	なし	確認できず	なし	なし	－	－

表 10　管制塔Ⅰ地区 SD1 ～ 4 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石材	金属製品	円盤状製品	ガラス製品	瓦	煉瓦
管制塔Ⅰ	SD1	せ100		2	2	1	2	5		1	1		9	
		そ100	1	2	1	5	4	8			1	1	11	
	SD2	そ100		1	1	5	7				1		16	
	SD3	そ100									3		1	
	SD4	せ100		1	3		3		1	1		2		1
		そ101			3		1			1		1	3	
合計			1	6	10	11	17	13	1	3	6	4	40	1

地区	遺構	グリッド	貝類	計	遺構計
管制塔Ⅰ	SD1	せ100	1	24	58
		そ100		34	
	SD2	そ100	1	32	32
	SD3	そ100	1	5	5
	SD4	せ100	25	37	50
		そ101	4	13	
合計			32	145	145

【ＳＫ１】

構　　造　略楕円形で断面形状は浅いすり鉢状。長軸 354cm、短軸 220㎝、深さ 14㎝。

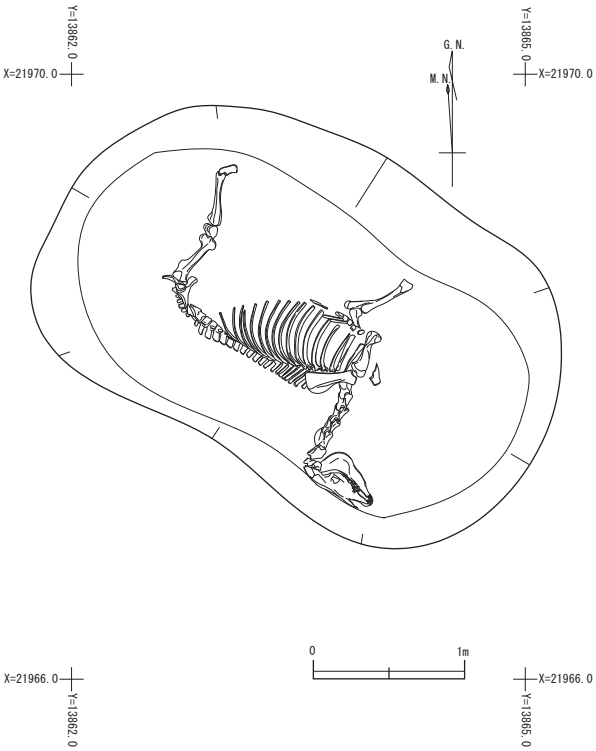
覆　　土　Ⅱ層の単層だが、かなり腐食した状態。

出土遺物　ウマ１頭がほぼ完形で出土しており、出土状況から埋葬されたとみられる。このウマは、体高から在来馬ではない（第６章第３節参照）。ほかに沖縄産陶器、木製品（図版９）など。

表 11　管制塔Ⅰ地区 SK1 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	石製品	石材	木製品	木材	煉瓦	貝類	動物遺存体	合計
管制塔Ⅰ	SK1	せ101	1	1	3	1	5	2	11	1	8	1	34

図版９　管制塔Ⅰ地区 SK1 出土木製品



第 23 図　管制塔Ⅰ地区 SK1 埋葬馬検出状況平面図（S=1/50）

図版 10　管制塔Ⅰ地区 SK1 埋葬馬検出状況（北から）

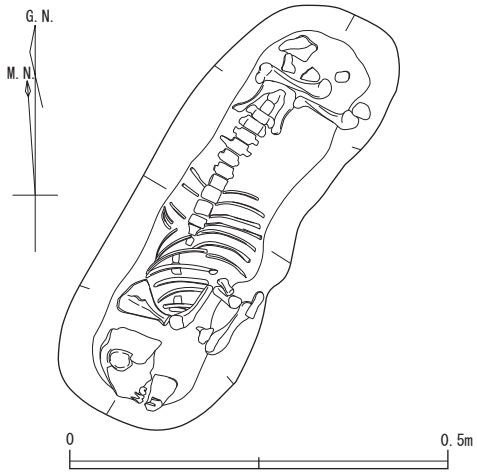
図版 11　管制塔Ⅰ地区 SK1 完掘状況（北から）

【ＳＫ２】

構　　造　略楕円形で断面形状は浅いすり鉢状。長軸 51cm、短軸 24㎝、深さ 17㎝。

覆　　土　Ⅲ -2 層の単層。

出土遺物　ブタの幼獣骨 1 頭がほぼ完形で出土しており、出土状況から埋葬されたとみられる。その他石材などを含め全 13 点。



第 24 図　管制塔Ⅰ地区 SK2 ブタ幼獣埋葬検出状況平面図（S=1/10）

図版 12　管制塔Ⅰ地区 SK2 ブタ幼獣埋葬検出状況（南東から）

表 12　管制塔Ⅰ地区 SK2 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	石材	木材	ガラス製品	瓦	動物遺存体	合計
管制塔Ⅰ	SK2	そ101	5	1	1	2	4	13

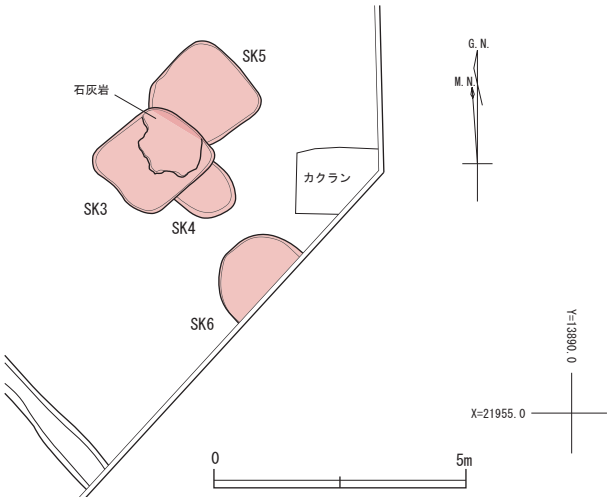
【ＳＫ３・４・５・６】

構　　造　SK3・5 は略方形だが、SK4・6 は略円形。

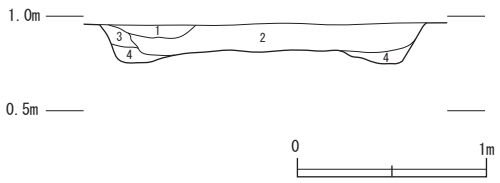
SK3：長軸 191cm、短軸 173㎝、深さ 21㎝。
SK4：長軸 108cm、短軸 88㎝、深さ 7㎝。
SK5：長軸 180cm、短軸 152㎝、深さ 11㎝。
SK6：長軸 181cm、短軸 111㎝、深さ 11㎝。

覆　　土　SK3 はⅢ -2 層、それ以外はⅢ -3 層の単層。SK4・5 が SK3 に切られる。

出土遺物　SK3・４・５から近世近代の陶磁器が出土しており、ほぼ同一の年代と目される。陶質土器（第 27 図９）は、外面に赤色が施釉される。また未掲載資料中に、先史時代の土器１点が確認される。



第 25 図　管制塔Ⅰ地区 SK3・4・5 平面図（S=1/150）



第 26 図　管制塔Ⅰ地区 SK3 断面図（S=1/40）

図版 13　管制塔Ⅰ地区 SK3 半截状況（南西から）

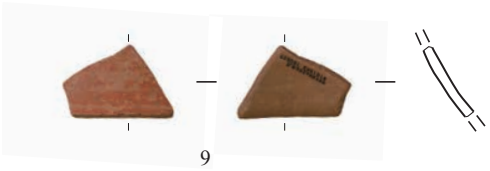
表 13　管制塔Ⅰ地区 SK3 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK3北壁	1	2.5Y6/2	灰黄色	砂	有	弱	貝片まばら。Ⅲ-3層に似る。
	2	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	有	やや有	炭片多く混じる。近代の陶磁器・金属片等多数。本遺構の覆土。
	3	10YR5/6	黄褐色	砂	弱	弱	貝片混じる。粗粒。遺物なし。地山か。
	4	2.5Y7/4	浅黄色	砂	弱	やや有	Ⅴ-3層に似る。遺物なし。地山か。

表 14　管制塔Ⅰ地区 SK3 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	先史土器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石製品	石材	金属製品	円盤状製品	ガラス製品	瓦
管制塔Ⅰ	SK3	そ101	1	12	5	5	4	1	1	63	1	5	16

地区	遺構	グリッド	塼	煉瓦	貝類	動物遺存体	合計
管制塔Ⅰ	SK3	そ101	1	2	9	7	133

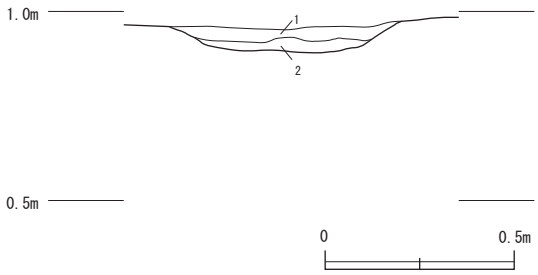


0　10cm
(S=33%)

第 27 図　管制塔Ⅰ地区 SK3 出土遺物

表 15　管制塔Ⅰ地区 SK3 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量（cm）	重量（g）	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第27図 9	そ101 SK3	陶質土器	蓋	陶質土器	甲部	口径:－ 器高:－ 底径:－	6.40	なし	黄褐色	朱色	なし	－	－	沖縄	－



第 28 図　管制塔Ⅰ地区 SK4 断面図（S=1/20）

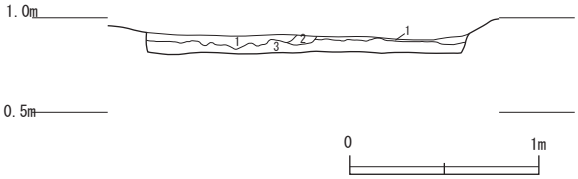
図版 14　管制塔Ⅰ地区 SK4 半截状況（南西から）

表 16　管制塔Ⅰ地区 SK4 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK4	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-3層。
	2	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。

表 17　管制塔Ⅰ地区 SK4 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	沖縄産無釉陶器	石材	金属製品	合計
管制塔Ⅰ	SK4	そ101	1	3	1	5



第 29 図　管制塔Ⅰ地区 SK5 断面図（S=1/40）

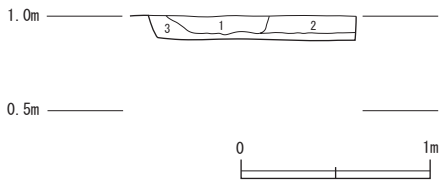
図版 15　管制塔Ⅰ地区 SK5 完掘状況（北東から）

表 18　管制塔Ⅰ地区 SK5 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK5	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-3層と同質。
	2	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	東西ベルトⅢ-3層と同質。ただし粒径やや大。
	3	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。

表 19　管制塔Ⅰ地区 SK5 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石造物	石材	金属製品	瓦	貝類	合計
管制塔Ⅰ	SK5	そ101	2	2	1	1	1	2	1	10



第 30 図　管制塔Ⅰ地区 SK6 断面図（S=1/40）

図版 16　管制塔Ⅰ地区 SK6 半截断面（南西から）

表 20　管制塔Ⅰ地区 SK6 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK6	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-2層。
	2	—	—	砂			Ⅲ-2層と同質。3層との混砂層。
	3	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。

表 21　管制塔Ⅰ地区 SK6 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	日本産陶磁器	金属製品	合計
管制塔Ⅰ	SK6	そ101	1	3	4

【ＳＫ７・８】

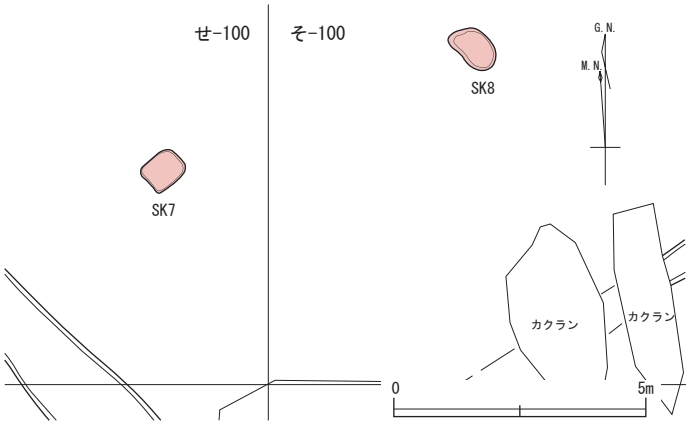
構　　造　SK7 が平面略方形に対し、SK8 は略円形。断面は両遺構ともに平坦。

SK7：長軸 79 cm、短軸 66㎝、深さ 6㎝

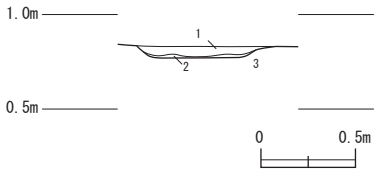
SK8：長軸 97 cm、短軸 64㎝、深さ 11㎝

覆　　土　SK7 はⅢ－２層の単層。SK ８はⅢ－２層とⅢ－３層が堆積。

出土遺物　沖縄産の陶磁器や瓦などが出土しているが僅か。



第 31 図　管制塔Ⅰ地区 SK7・8 平面図（S=1/150）



第 32 図　管制塔Ⅰ地区 SK7 断面図（S=1/40）

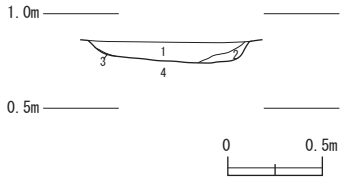
図版 17　管制塔Ⅰ地区 SK7 半截断面（北西から）

表 22　管制塔Ⅰ地区 SK7 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK7	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-2層と同層。下方に従って2層と混じる。
	2	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層。
	3	—	—	ビーチロック			Ⅴ-2層。

表 23　管制塔Ⅰ地区 SK7 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	瓦	貝類	合計
管制塔Ⅰ	SK7	せ100	1	1	2



第 33 図　管制塔Ⅰ地区 SK8 断面図（S=1/40）

図版 18　管制塔Ⅰ地区 SK8 半截断面（南西から）

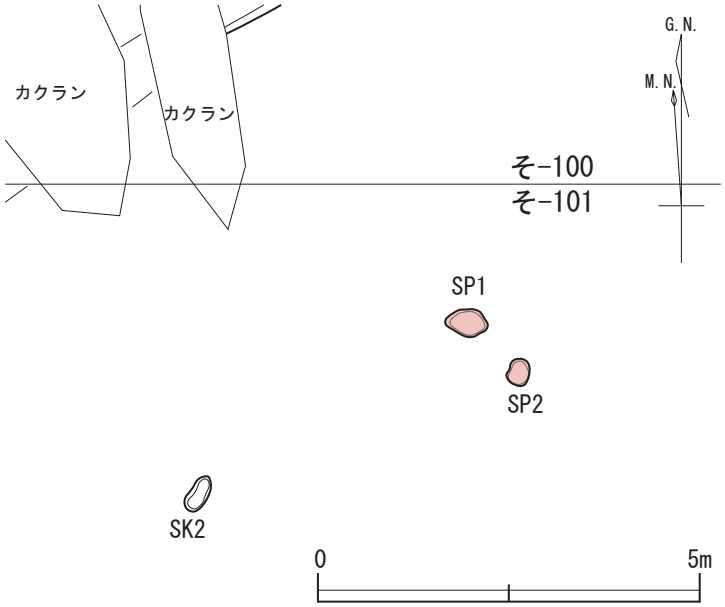
表 24　管制塔Ⅰ地区 SK8 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK8	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	やや有	弱	2層とⅢ-1層の混層。下層は両層がラミナ状をなす。
	2	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-2層に相当。
	3	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-3層に相当。
	4	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	Ⅴ-1層に相当。

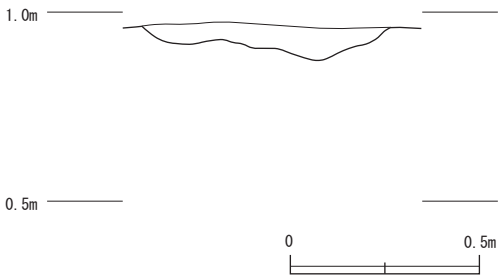
表 25　管制塔Ⅰ地区 SK8 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	沖縄産無釉陶器	陶質土器	金属製品	瓦	貝類	合計
管制塔Ⅰ	SK8	そ100	1	2	1	1	3	8

【ＳＰ１・２】
構造　いずれも平面形は円形だが、底面は不定形のため、植栽痕等と思われる。
覆土　いずれもⅢ－２層の単層。
出土遺物　無し。

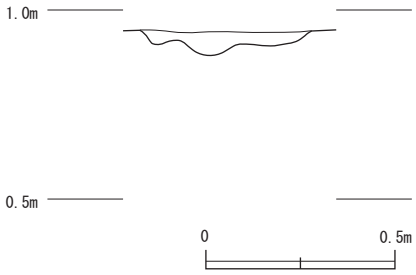


第 34 図　管制塔Ⅰ地区 SP1・2 平面図（S=1/100）



第 35 図　管制塔Ⅰ地区 SP1 断面図（S=1/20）

図版 19　管制塔Ⅰ地区 SP1 半截断面（北西から）



第 36 図　管制塔Ⅰ地区 SP2 断面図（S=1/20）

図版 20　管制塔Ⅰ地区 SP2 半截断面（南西から）

2　Ⅴ層遺構外出土遺物

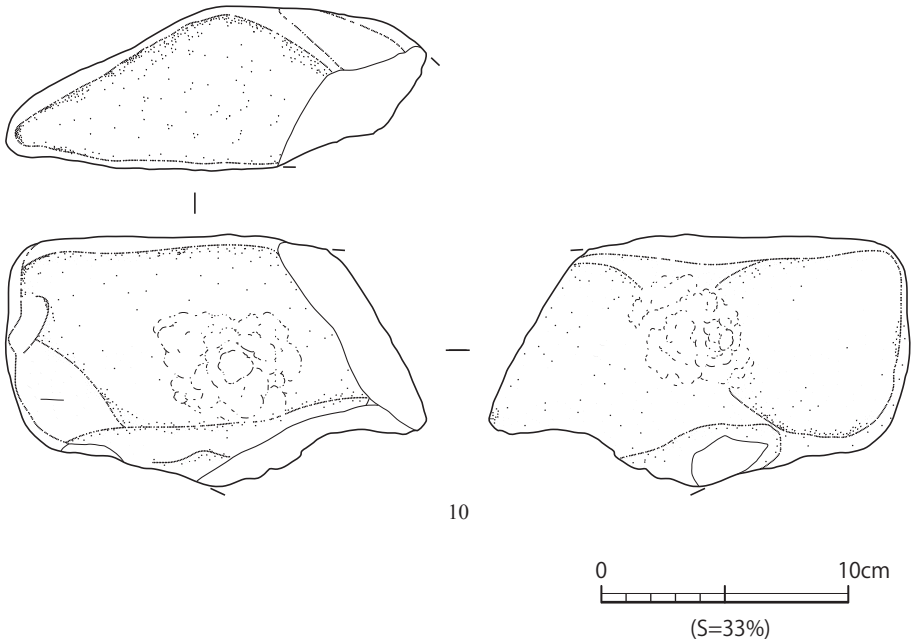
Ⅴ層からは、遺構外からも 241 点の遺物が出土している。出土位置では、せ 101 グリッドに集中する傾向が認められる。種類別の傾向では、石器（第 37 図 10）や中国産陶器（第 38 図 11）も含まれるが、主体は日本産陶磁器（同図 12 ～ 15）・沖縄産陶器（同図 16 ～ 19）・瓦・ガラス製品（図版 23）などの大嶺村が営まれていた近世・近代の遺物である。ただし、戦後の製品は確認されなかった。

なお、発掘調査中、湧水対策として北側にⅤ－ 1 層よりを掘削して排水溝を設置したが、その残土中より沖縄産無釉陶器片が出土した。発掘調査後の資料整理においてこれらがほぼ完形に接合したことから、本来は埋甕であった可能性が挙げられる（図版 22）。

表 26　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構外出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石造物	石材	円盤状製品	ガラス製品	瓦
管制塔Ⅰ	Ⅴ	せ100		5		17								3	1
		せ101	4	34	37	57	12	1	1	1	1	2	3	13	45
		そ100													1
合計			4	39	37	74	12	1	1	1	1	2	3	16	47

地区	層位	グリッド	煉瓦	貝類	合計
管制塔Ⅰ	Ⅴ	せ100			26
		せ101	1	1	213
		そ100		1	2
合計			1	2	241



第 37 図　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層遺構外出土遺物 1（陶磁器以外）

図版 21　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層遺構外出土遺物 1（陶磁器以外、S=33%）

第 38 図　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層遺構外出土遺物２（陶磁器）

図版 22　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層排水溝掘削時出土　沖縄産無釉陶器甕（S=20%）

図版 23　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層出土ガラス瓶・蓋（図未掲載資料）

表 27　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構外出土遺物観察表（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量（cm）	重量（g）	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第38図11	せ101 Ⅴ層	中国産陶磁器	壺	無釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	34.23	外面に細かい線刻、内面は叩き痕あり	灰色	－	なし	－	なし	不明	－
第38図12	せ101 Ⅴ層	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～底	口径:14.2 器高:5.7 底径:4.95	113.79	轆轤 畳付釉剥ぎ・泥漿付着 兜巾あり 内底目跡あり	白色やや軟	外:透明 内:透明	外:点描地、丸鶴文など 内:環状松竹梅文など	型紙摺り	なし	砥部近代	－
第38図13	せ101 Ⅴ層	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～底	口径:8.1 器高:4.8 底径:3.8	51.40	轆轤 畳付釉剥ぎ・砂付着	白色緻密、黒色粒含	外:クロム青磁 内:クロム青磁	外:格子文、剣先文	－	なし	肥前近代	－
第38図14	せ101 Ⅴ層	日本産陶磁器	皿	近代磁器大皿	底部	口径:－ 器高:－ 底径:10.0	227.51	轆轤 外底:蛇の目凹形釉剥ぎ	白色緻密、ガラス質	外:透明 内:透明	外:圏線 内:区画文、環状松竹梅文	なし	なし	瀬・美19c	－
第38図15	せ101 Ⅴ層	日本産陶磁器	不明	白磁	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:6.2	22.19	外底無釉 轆轤	白色緻密、ガラス質	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	－	－
第38図16	せ101 Ⅴ層	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:6.0	73.33	見込蛇の目・畳付アルミナ	淡橙-灰色/粗粒	外:透明 内:透明	花文	白化粧土	－	近代	－
第38図17	せ101 Ⅴ層	沖縄産陶器	鉢	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:10.6	319.73	見込蛇の目	灰白色/軟質	内:透明 外:黒釉	外底に螺旋状文は掻き取り	－	－	－	－
第38図18	せ101 Ⅴ層	沖縄産陶器	灯明具	沖縄産施釉陶器	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:4.15	61.46	糸切痕	赤褐色/粗粒	内外:鉄釉	なし	－	－		－
第38図19	せ101 Ⅴ層	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:15.0 器高:－ 底径:－	118.52	なし	赤褐色	－	なし	－	－	－	－

表 28　管制塔Ⅰ地区Ⅴ層　遺構外出土遺物観察表（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量（mm）	重量（g）	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第37図10	せ101 Ⅴ層	石器	台石	一部欠損	最大長:100 最大厚:64 最大幅:167	1,248	砂岩	－	なし	敲打	－	－	－	－

第３節　Ⅲ層の遺物

Ⅲ層からは、管制塔Ⅰ地区出土遺物の約７割に及ぶ 7,977 点の遺物が出土しており、日本産陶磁器や沖縄産陶器をはじめとして、多種多様な資料が確認された（表 29）。

主体は近世後半から近代の日本産陶磁器、沖縄産陶器、金属製品、瓦、貝類などだが、戦後のものとみられる金属片なども含まれているため、戦中・戦後直後の基地造成に伴うものと理解される。一方で僅かではあるが、弥生～平安並行時代の土器・石器やグスク時代の青磁・白磁などが含まれる。これら大嶺村が営まれる以前とみられる遺物の出土は、遺跡周辺にグスク時代や先史時代に遡る遺跡が存在している（あるいはしていた）可能性を示唆するものである。詳細は観察表に譲り、以下に特記事項を述べる。

陶磁器には中国産（第 39 図 20 ～ 35）・ヨーロッパ産（同図 36）・日本産（同図 37 ～第 41 図 66）・沖縄産（第 41 図 67 ～第 43 図 87）・近世近代の日本産土器（同図 88）・瓦質土器（同図 89 ～ 92）がみられる。主体は近世後半から近代の資料であるが、14 世紀後半から 15 世紀前半の青磁や 15 世紀から 16 世紀前半の白磁（第 39 図 20 ～ 22、24）・中世須恵器が 1 点（第 39 図 37）が含まれている。また類例の少ない資料として、「D. Bumstead & Co. Royal British Table Salt, 86, Lower Thames St. London c1880」銘のイギリス産陶器（第 39 図 36）や、「日本硬質陶器會社」のカップ用皿も含まれる（第 40 図 59）。一方で沖縄産陶器には厨子甕が含まれており（第 42 図 84 ～ 86）、大嶺村にかつて所在していた墓域から流れ込んだものと思われる。

先史時代とみられる石器２点が出土している。中でもチャート製石器は遺跡中この資料のみである（第 44 図 93）。

瓦は赤瓦と灰色瓦とがみられる。また 1 点には「儀」銘の資料が含まれる（第 44 図 97）。

磁器製品にはおろし器２点が認められた（第 45 図 104・105）。戦時中の金属製品の代用品である。

煙管はこの調査で得られた唯一の資料である（第 45 図 107）。

円盤状製品は数多く出土しているが、その中には上記と同時期の青磁盤を素材とする資料（第 45 図 109）が含まれる。

金属製品は多量に出土したが器種が特定できるものは僅かで、瓶の蓋（第 45 図 117 ～ 119）や鋏（同図 123）、鍵（同図 121）などが確認された。また寛永通宝 1 点が出土している（同図 125）。

石製品には砥石（第 45 図 127 ～ 129）や石盤（同図 130）、棒状石製品（同図 131）などが得られている。

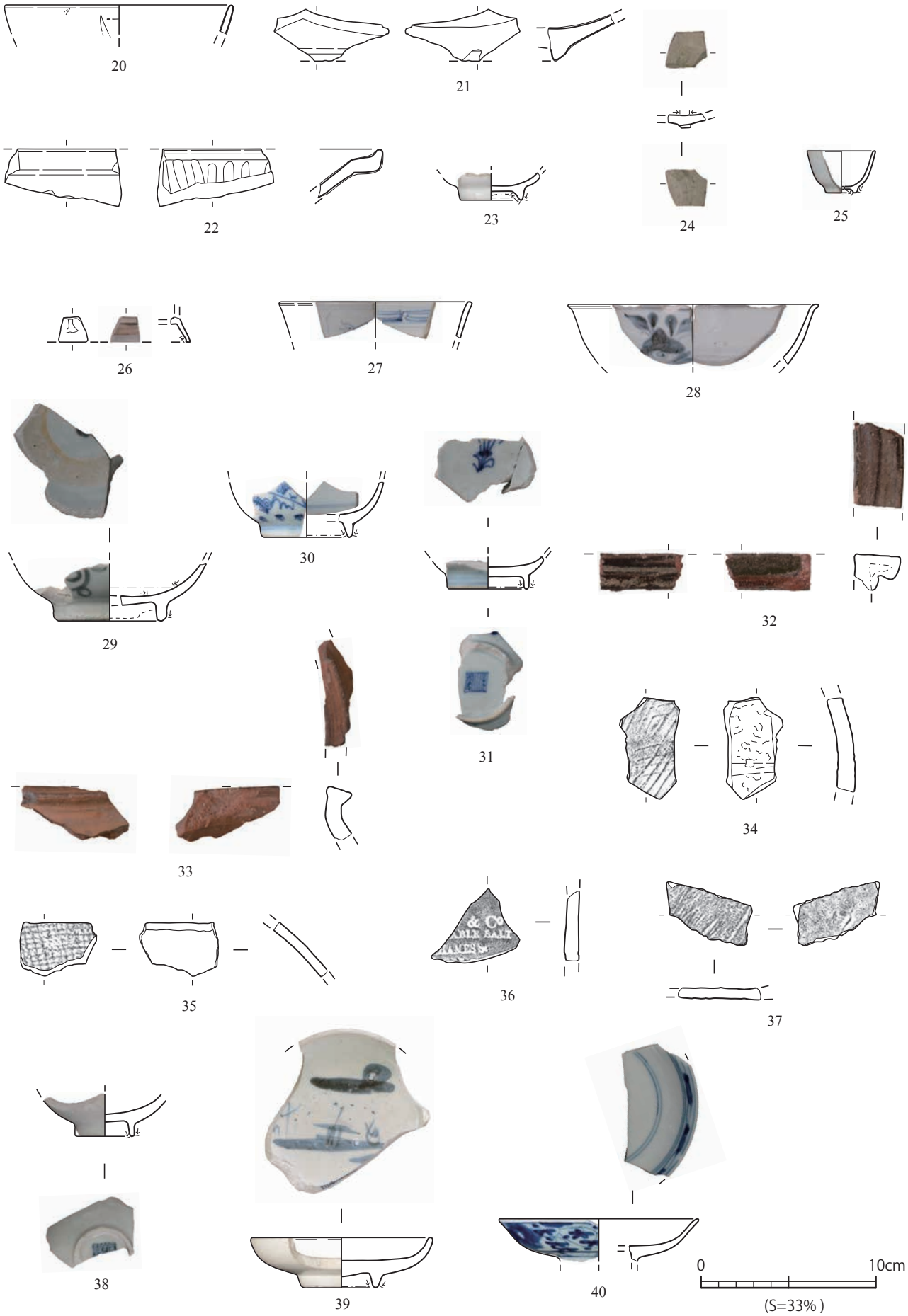
遊具には県内で類例の少ない泥面子とみられる資料（第 46 図 132 ～ 135）やおはじき（同図 136）がある。また、仏坐像とみられる土製品（同図 137）や、ミニチュアのおろし器（同図 138）なども得られている。

表 29　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物集計表

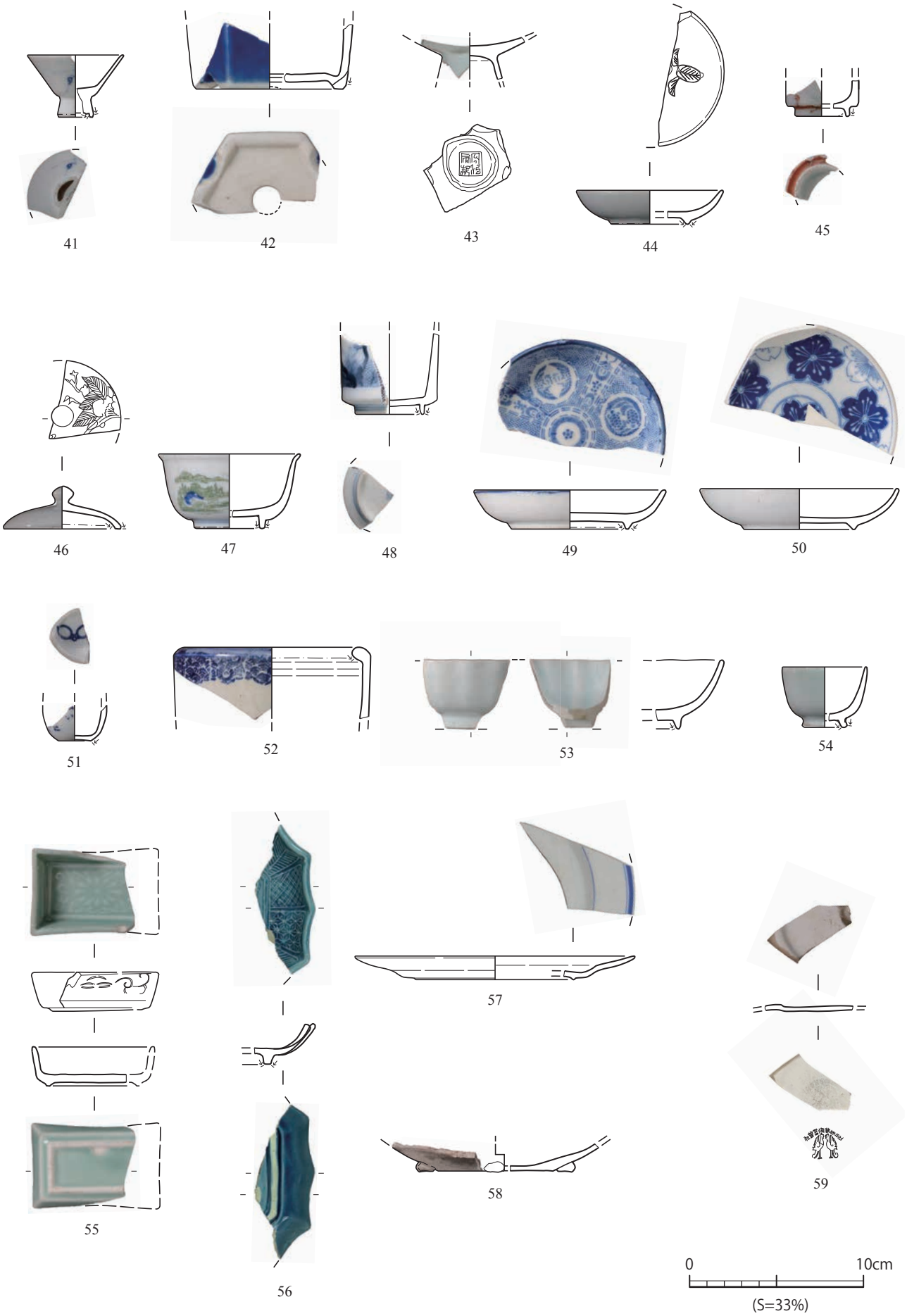
地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	須恵器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	近世近代土器	石器	石製品	石造物	石材	金属製品
管制塔Ⅰ	Ⅲ	せ100		8		87	100	75	48	1				1	8	133
		せ101	1	1		28	59	56	14	2			1		8	
		そ100	2	88		409	437	343	282	13	1	1	3	1	31	396
		そ101	1	46	1	565	241	308	116	8		1	8	6	62	591
		不明		1		2	1	2								
合計			4	144	1	1091	838	784	460	24	1	2	12	8	109	1120

地区	層位	グリッド	木製品	木材	煙管	円盤状製品	遊具	ミニチュア製品	ガラス製品	土製品	漆喰	瓦	塼	煉瓦	羽口	歯ブラシ
管制塔Ⅰ	Ⅲ	せ100	1	3		21			38			114		6		4
		せ101	2	3		3			3			30		1		
		そ100	2	6	1	80	5	1	152	1	4	622		27	2	8
		そ101			1	62	2	1	193	3	14	507	1	33		9
		不明										2				
合計			5	12	2	166	7	2	386	4	18	1275	1	67	2	21

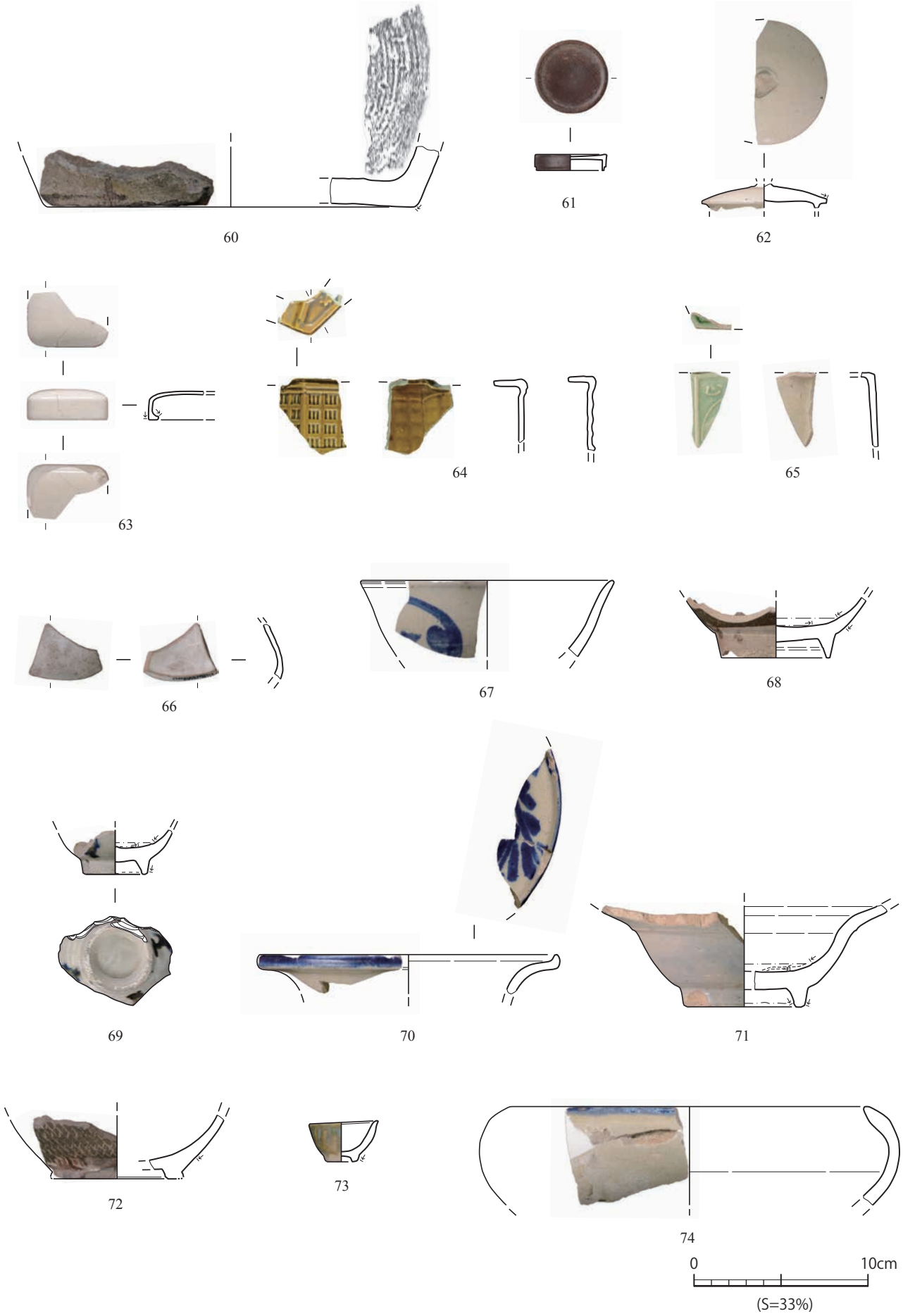
地区	層位	グリッド	セルロイド・プラスチック製品	ゴム製品	貝類	動物遺存体	不明	合計
管制塔Ⅰ	Ⅲ	せ100		1	69	28	2	748
		せ101			119	1		332
		そ100	6		510	134	1	3569
		そ101	12		410	115	3	3320
		不明						8
合計			18	1	1108	278	6	7977



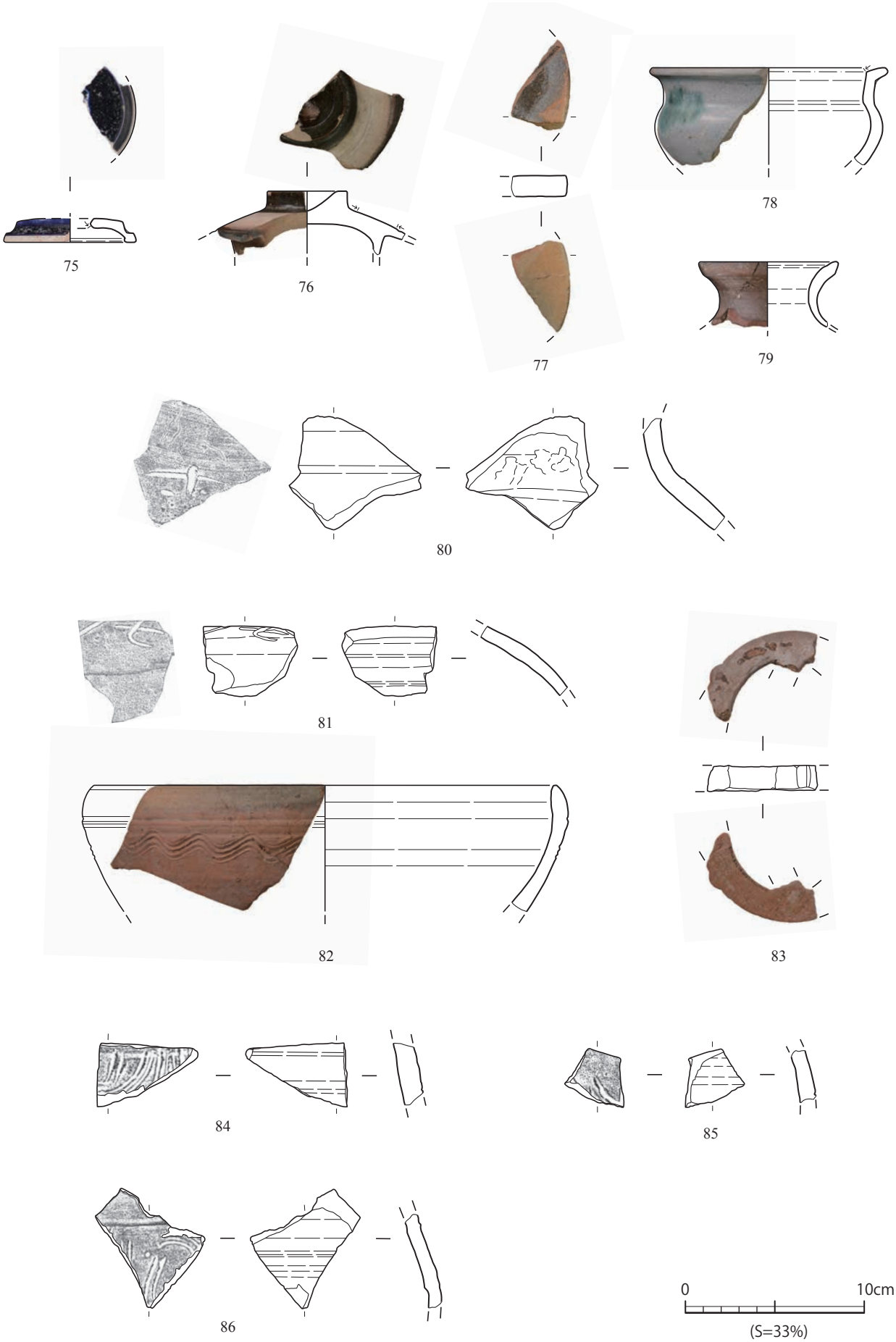
第 39 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物 1



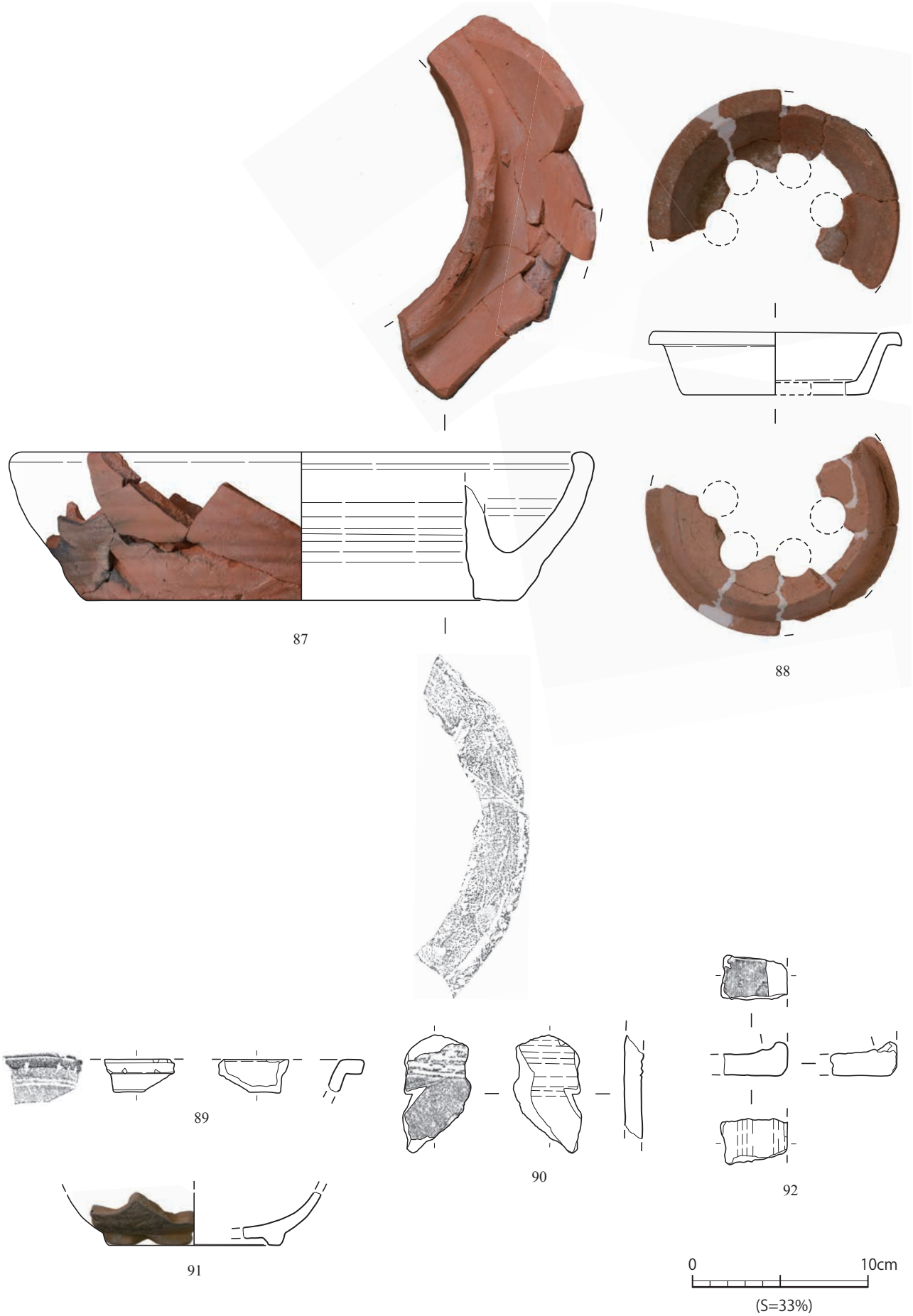
第 40 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物 2



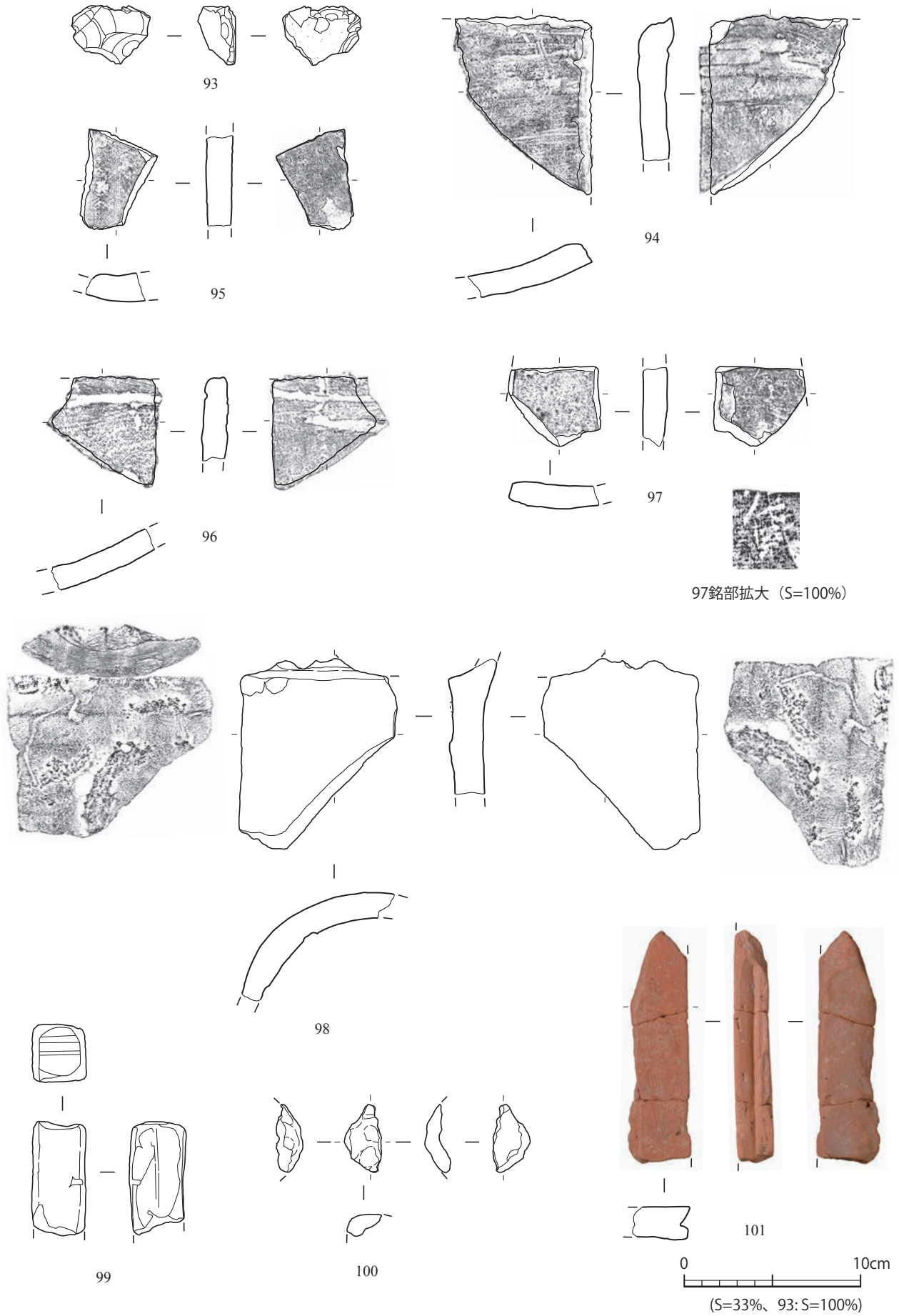
第 41 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物 3



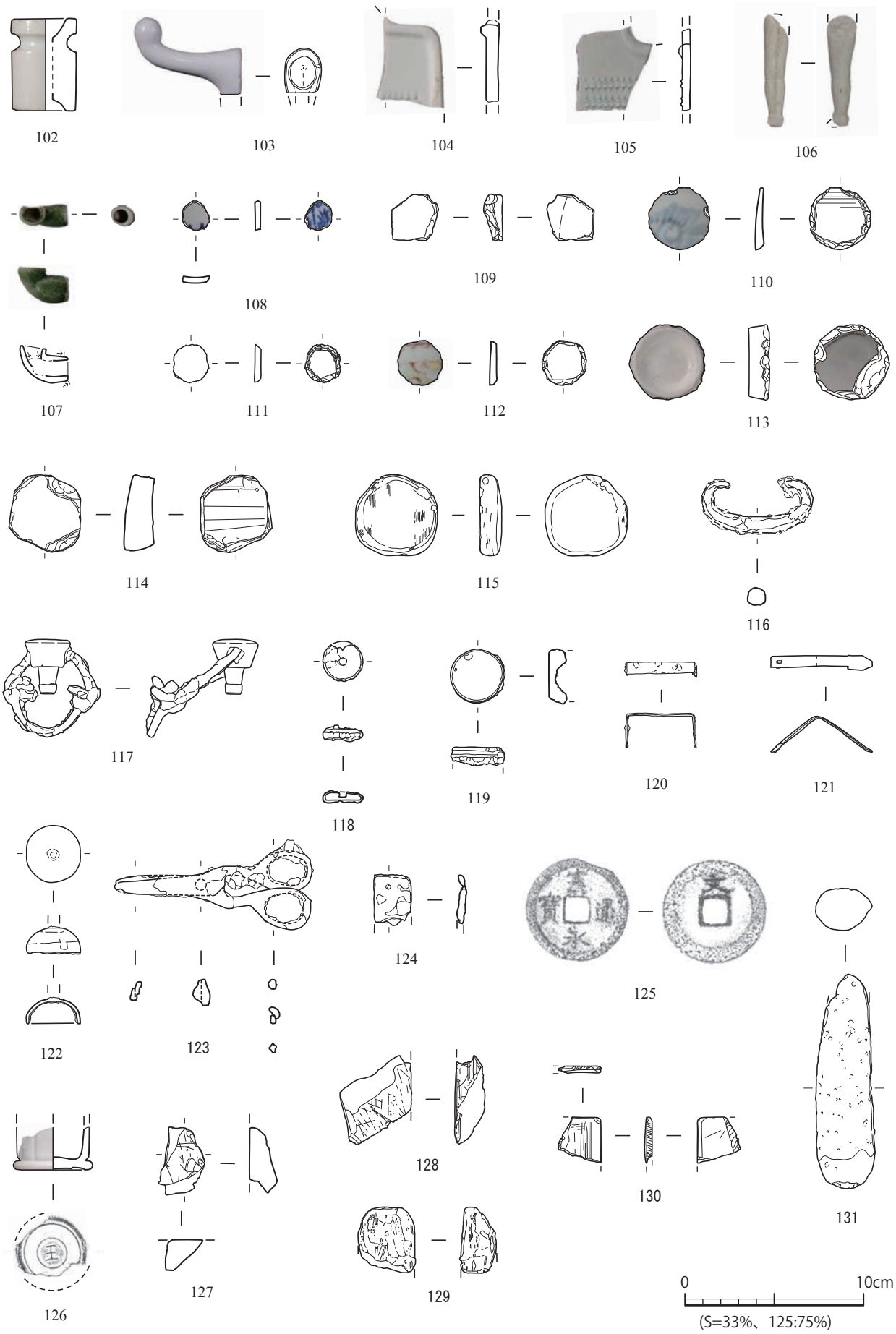
第 42 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物４



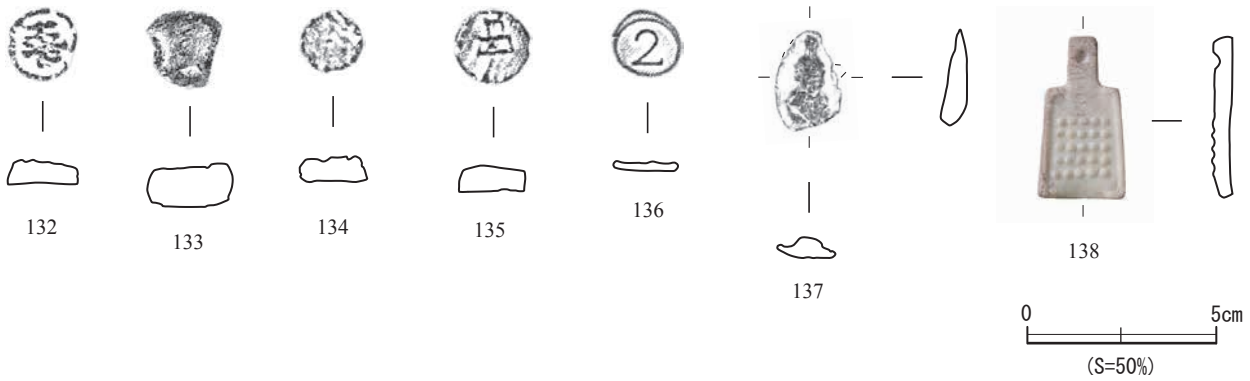
第 43 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物 5



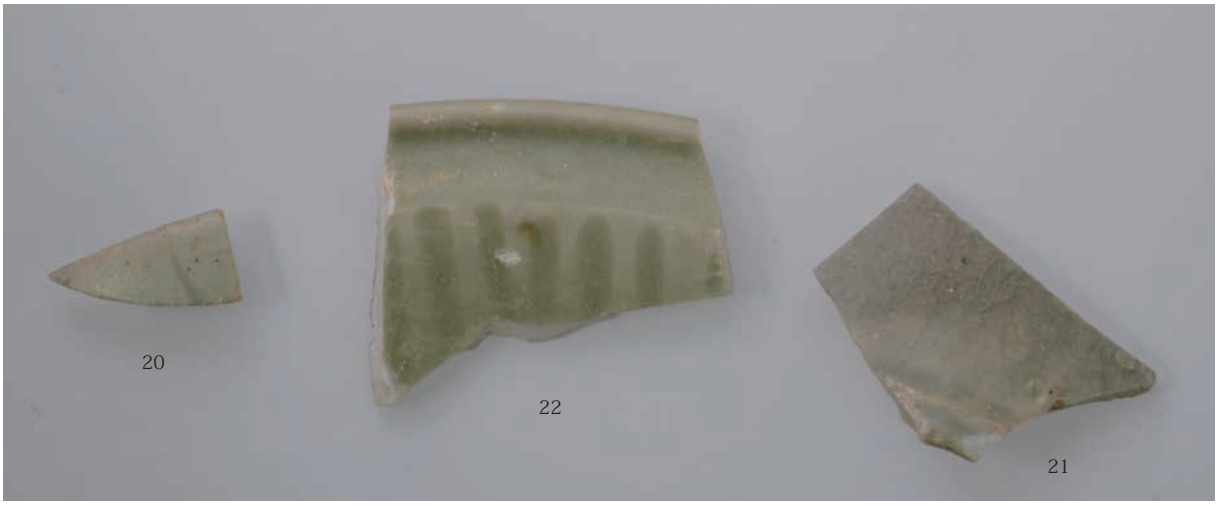
第 44 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物６



第 45 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物 7



第 46 図　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物８



(S=75%)

窯印のある沖縄産無釉陶器

図版 24　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物１（指定を除き S=33%）

(S=100%)

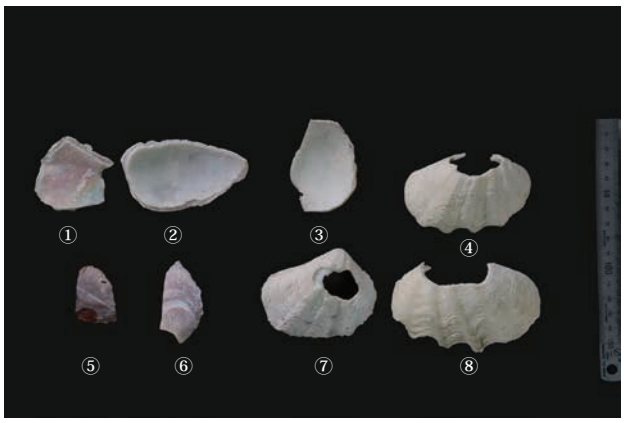
(S=50%)

(S=75%)

(S=50%)

S=100%

図版 25　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物２（指定を除き S=33%）



貝製品？

国民食器（「有 14」）

セルロイド製品（歯ブラシ、櫛）

ガラス製遊具（ビー玉）(S=50%)

ガラス製品（インクボトル、薬瓶など）

図版 26　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物 3（図未掲載資料）

表 30　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表１（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第39図20	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	碗	青磁直口口縁	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	2.86	－	灰白色	外:オリーブ灰色 内:オリーブ灰色	外:雷文帯	－	なし	龍泉14後～15c前	－
第39図21	そ101 Ⅲ層	中国産陶磁器	盤	青磁	底部	口径:－ 器高:－ 底径	27.16	－	灰白色	外:オリーブ灰色 内:オリーブ灰色	なし	片切彫で施文	なし	龍泉14後～15c前	－
第39図22	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	盤	青磁鍔縁口縁	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	47.13	－	灰白色	外:オリーブ灰色 内:オリーブ灰色	内:櫛目文	0.6～0.7㎜幅	なし	龍泉14後～15c前	－
第39図23	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	碗	白磁	底部	口径:－ 器高:－ 底径:3.5	8.05	畳付釉剥ぎ・砂付着	白色緻密	外:透明 内:透明	なし	外底一部露胎	なし	徳化19c	－
第39図24	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	皿	白磁抉高台	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	3.25	内底に重ね焼き目跡	灰白色やや軟質	外:透明 内:透明	なし	－	なし	福建15c～16c前？	－
第39図25	そ101 Ⅲ層	中国産陶磁器	杯	白磁	口～底	口径:3.9 器高:2.35 底径:1.8	2.91	畳付釉剥ぎ・砂付着	白色緻密	外:青白色 内:青白色	なし	－	なし	徳化18～19c？	－
第39図26	そ101 Ⅲ層	中国産陶磁器	蓋？	白磁	不明	口径:－ 器高:－ 底径:－	1.19	内面糸目あり	灰色緻密	外:透明 内:透明	なし	内面途中まで施釉、外面一部露胎	なし	不明	－
第39図27	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	碗	青花磁器	口縁部	口径:10.8 器高:－ 底径:－	3.52	－	灰白色緻密	外:透明 内:透明	外:花鳥文 内:雷文帯	－	なし	不明	－
第39図28	そ101 Ⅲ層	中国産陶磁器	碗	青花磁器	口縁部	口径:14.0 器高:－ 底径:－	12.44	－	灰白色緻密	外:透明 内:透明	外:草花文	－	なし	徳化18c	－
第39図29	そ101 Ⅲ層	中国産陶磁器	碗	青花磁器	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:6.3	33.83	畳付釉剥ぎ、内底蛇の目釉剥ぎ、畳付に砂付着	灰白色緻密	外:青白色 内:青白色	外:草花文 内底:有り	－	なし	徳化18c	－
第39図30	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	碗	青花磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:5.1	10.73	畳付釉剥ぎ	灰白色緻密	外:透明 内:透明	外:花唐草文	－	なし	景徳鎮もしくは徳化18c前～19c後	－
第39図31	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	皿	青花磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:4.6	19.23	畳付釉剥ぎ	白色緻密	外:青白色 内:青白色	外:有り 内底:草花文	－	銘有り	不明	－
第39図32	そ101 Ⅲ層	中国産陶磁器	壷	褐釉陶器	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	32.25	口唇部は釉剥ぎ	橙色白色粒含む	外:褐色 内:褐色	なし	－	なし	不明	－
第39図33	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	壷	褐釉陶器	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	20.19	－	鈍橙色白色粒含む	－	なし	－	なし	不明	－
第39図34	そ101 Ⅲ層	中国産陶磁器	壺	施釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	25.38	格子状の叩き	赤褐色白色粒含む	外:褐色 内:無釉	なし	－	なし	不明	－
第39図35	そ100 Ⅲ層	中国産陶磁器	壺	施釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	14.81	格子状の叩き	にぶい橙色白色粒含む	外:灰白色 内:無釉	なし	－	なし	不明	－
第39図36	そ100 Ⅲ層	欧州産陶器	筒物	筒物	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	－	なし	卵黄灰色軟質	内外透明釉	なし	なし	「・&CO/・TABLE SALT/「・HAMES St」	イギリス産近代	－
第39図37	そ101 Ⅲ層	須恵器	不明	中世須恵器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	11.38	外:タタキ	黒灰色堅緻、石英混じり	－	なし	なし	なし	日本	－
第39図38	そ100 Ⅲ層	日本産陶磁器	碗	染付磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:3.3	17.27	畳付釉剥ぎ、泥漿付着	白色やや粗	外:透明 内:透明	なし	なし	外底:「大明／年製」	肥前系Ⅳ期	－
第39図39	そ100 Ⅲ層	日本産陶磁器	皿	染付磁器	口～底	口径:10.2 器高:2.8 底径:4.35	88.41	轆轤 畳付釉剥ぎ 内底目跡あり	白色軟質	外:透明 内:透明	内:楼閣山水文	絵付け	なし	肥前系Ⅴ期	－
第39図40	そ101 Ⅲ層	日本産陶磁器	皿	染付磁器	口～底	口径:11.2 器高:－ 底径:－	23.71	型作りか	白色緻密	外:透明 内:透明	外:区画文・宝珠、草花文 内:七宝繋文、圏線	絵付け	なし	肥前系Ⅴ期	－
第40図41	そ100 Ⅲ層	日本産陶磁器	杯	染付酒盃	口～底	口径:5.4 器高:3.5 底径:2.0	8.79	型作り 畳付釉剥ぎ	白色ガラス質、黒色粒含む	外:透明 内:透明	外:不明文様	イッチン 外底鉄錆塗布	なし	瀬・美近代	－
第40図42	そ101 Ⅲ層	日本産陶磁器	鉢	染付磁器植木鉢	底部	口径:－ 器高:－ 底径:8.6	44.88	型作り	灰白色やや粗	外:瑠璃釉 内:無釉	なし	なし	なし	瀬・美19-20c	－
第40図43	そ101 Ⅲ層	日本産陶磁器	碗	色絵磁器酒杯	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	18.72	兜巾あり	白色粗粒、黒色粒含	外:透明 内:透明	なし	なし	有り、不明(朱色絵)	肥前系不明	円盤状製品未成品

表 31　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表２（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第40図 44	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	色絵 磁器	口～底	口径:8.3 器高:1.9 底径:4.4	19.12	畳付釉剥ぎ	白色緻密	外:透明 内:透明	内:草花文	色絵	なし	瀬・美 19～20c	–
第40図 45	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	杯	色絵 磁器 筒型杯	底部	口径:– 器高:– 底径:3.1	5.21	型作り 畳付砂付着	灰色粗粒	外:透明 内:透明	外:不明文様	呉須・赤色塗料	なし	瀬・美 19～21c	–
第40図 46	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	蓋	色絵 磁器	撮～端	撮み径:1.2 袴端部径:6.6 器高:2.4 撮径:–	12.52	型作り 口受部釉剥ぎ	白色やや粗、ガラス質	外:透明 内:無釉	外:草花文	色絵	なし	瀬・美 不明	–
第40図 47	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器	口～底	口径:8.0 器高:4.2 底径:4.0	25.68	轆轤	白色やや粗、ガラス質	外:透明 内:透明	外:楼閣山水文、圏線	銅版摺り（多色）	なし	瀬・美 近代	–
第40図 48	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器 筒型碗	胴～底	口径:– 器高:– 底径:3.9	15.28	型作り	白色やや粗	外:透明 内:透明	外:山水、圏線	型紙摺り	有、不明	肥前系 近代	–
第40図 49	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	近代 磁器	口～底	口径:10.8 器高:2.2 底径:6.6	52.91	畳付釉剥ぎ	灰白色、ガラス質	外:透明 内:透明	内:点描地、丸鶴文・丸亀文、五弁花文等	型紙摺り	なし	瀬・美 近代	–
第40図 50	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	近代 磁器	口～底	口径:11.2 器高:2.3 底径:6.2	38.48	畳付釉剥ぎ	白色緻密、ガラス質	外:透明 内:透明	外:輪花、二重圏線	銅版摺り	なし	瀬・美 近代	–
第40図 51	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	杯	近代 磁器 小杯	底部	口径:– 器高:– 底径:1.8	3.23	型作り 外胴下～底部無釉	白色緻密、ガラス質	外:透明 内:透明	外:文字 内:不明	ゴム版	なし	瀬・美 近代	–
第40図 52	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	火炉・火取	近代 磁器	口縁部	口径:10.0 器高:– 底径:–	30.71	轆轤	灰色やや粗	外:瑠璃・透明 内:無釉	外:青海波文	ゴム版	なし	砥部 近代	–
第40図 53	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	碗	白磁	口～底	口径:– 器高:3.9 底径:–	16.20	型作り 外底無釉	灰白色粗粒	外:薄青色 内:薄青色	内:稜花 外:稜花	型押し	なし	肥前系 不明	–
第40図 54	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	杯	白磁	口～底	口径:4.8 器高:3.4 底径:2.55	18.55	畳付釉剥ぎ	白色やや粗	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	肥前系 不明	–
第40図 55	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	青磁 角皿	口～底	口径:7.25 器高:2.2 底径:5.2	37.16	型作り 畳付釉剥ぎ	白色緻密、ガラス質	外:青磁 内:青磁	内:菊花文、唐草文	象嵌	なし	瀬・美 19～20c	–
第40図 56	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	施釉 陶器	口～底	口径:– 器高:2.3 底径:–	19.60	型作り	白色軟質	内外:瑠璃釉	内:区画文	なし	なし	不明	–
第40図 57	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	施釉 陶器 西洋皿	口縁部	口径:15.8 器高:1.3 底径:8.8	10.1	型作り	白色軟質	外:透明 内:透明	内:圏線	なし	なし	不明 近代	–
第40図 58	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	施釉 陶器 有脚皿	底部	口径:– 器高:– 底径:6.4	32.84	脚部貼付	灰白色	内面:緑色釉	内:貫入	なし	なし	不明	外面焦げ
第40図 59	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	皿	陶器 洋食器	底部	口径:– 器高:– 底径:–	4.74	なし	白色軟質	内外:透明釉	なし	なし	銘「日本硬質陶器會社」	金沢 1908-1945	カップ用皿か
第41図 60	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	壺	施釉 陶器	底部	口径:– 器高:– 底径:20.6	151.43	轆轤	外面:赤褐色砂混 内面:暗灰色砂混	外:褐釉	なし	なし	なし	薩摩苗代川系 19c	–
第41図 61	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	蓋	無釉 陶器	略完形	屁端部径:– 袴端部径:4.05 器高:0.9 撮径:–	8.80	型作り	外:赤褐色 内:黒褐色	なし	なし	なし	なし	不明	–
第41図 62	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	蓋	施釉 陶器	甲～端	屁端部径:7.0 袴端部径:– 器高:– 撮径:–	25.18	轆轤	卵黄灰色	内外:透明釉	なし	なし	なし	不明	–
第41図 63	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	蓋	施釉 陶器	甲～袴	屁端部径:– 袴端部径:4.5 器高:– 撮径:–	7.56	型作り	卵黄灰色 軟質	外:透明釉	なし	なし	なし	関西系か	–
第41図 64	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	不明	施釉 陶器	口縁部	口径:– 器高:– 底径:–	10.44	型作り	卵黄灰色、軟質	外:透明 内:透明	外:格子状文	なし	なし	不明	–
第41図 65	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	不明	施釉 陶器	胴部	口径:– 器高:– 底径:–	3.3	型作り	卵黄灰色、軟質	外:緑釉 内:透明	外:文字文様、不明文様	なし	なし	不明	–
第41図 66	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	不明	施釉 陶器	胴部	口径:– 器高:– 底径:–	7.11	型作り	茶褐色光沢あり	なし	なし	なし	なし	不明	–
第41図 67	そ100 Ⅲ層	沖縄産 陶器	碗	沖縄産 施釉 陶器	口縁部	口径:14.3 器高:– 底径:–	17.09	なし	灰-黄灰色/軟質	内外:白化粧→透明	コバルト色で円文？	–	–	近代	–

表 32　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表３（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第41図68	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:6.15	96.24(復元込み)	見込・蛇の目・内面砂付着	灰－淡橙色/硬質	内:灰釉 外:黒釉	なし	－	－	－	－
第41図69	そ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:3.7	41.73	見込砂付着・蛇の目剥ぎ・畳付アルミナ	灰色/硬質	内外:透明	コバルト色で不明文様	－	－	－	－
第41図70	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	皿	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:17.0 器高:－ 底径:－	19.63	なし	灰白－黄灰色	内外:白化粧→透明	内:コバルト色で草花文	－	－	－	外面口唇部、コバルト色の施釉
第41図71	そ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	皿	沖縄産施釉陶器	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:6.8	94.09	見込蛇の目釉剥ぎ・重焼痕・畳付アルミナ	灰白－淡橙色/軟質	内外:透明	内:コバルト色で草花文	－	－	－	－
第41図72	そ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	皿	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:7.5	29.69	浸し掛け	灰色/緻密	内外:灰釉	三島手.斜文子文	－	－	－	トビカンナに白土で象嵌
第41図73	そ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	杯	沖縄産施釉陶器	完形	口径:3.9 器高:2.3 底径:1.8	16.95	手づくね・指ナデ	卵黄灰色/緻密	内外:銅緑色	なし	－	－	－	－
第41図74	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	鉢	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:19.6 器高:－ 底径:－	52.74	なし	灰－黄褐色/粗粒	口唇:コバルト色 内外胴:化粧透明	なし	－	－	－	－
第42図75	そ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	甲部	屁端部径:－ 袴端部径:7.2 器高:－ 撮径:－	8.28	なし	卵黄白色/緻密	内:露胎 外:コバルト色	なし	－	－	－	外面口唇部、露胎
第42図76	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	撮～袴	屁端部径:－ 袴端部径:－ 器高:－ 撮径:4.4	43.81	外面蛇の目状釉剥ぎ	褐色/粗粒	内:露胎 外:黒色	なし	－	－	－	－
第42図77	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	端部	口径:－ 器高:－ 底径:－	20.47	側底にバリ	赤褐色/砂混	上面自然釉	なし	－	－	－	七厘(サナ)
第42図78	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	香炉	沖縄産施釉陶器	口～胴	口径:13.0 器高:－ 底径:－	42.21	内面ろくろ痕	灰色/硬質	外:なまこ釉	緑釉塗付	－	－	－	－
第42図79	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:7.7 器高:－ 底径:－	56.83	外頸斜方向磨き	赤褐色	なし	なし	－	－	－	－
第42図80	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	顎部	口径:－ 器高:－ 底径:－	65.24	なし	赤褐色/暗褐色	－	なし	－	－	－	窯印あり
第42図81	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	35.89	なし	赤褐色	なし	外面圏線	－	－	－	窯印あり
第42図82	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	水甕	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:25.4 器高:－ 底径:－	85.05	なし	明赤褐色/軟質	なし	外面圏線・波形圏線	－	－	－	－
第42図83	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	五徳もしくは鍋敷きか	沖縄産無釉陶器	－	口径:－ 器高:－ 底径:－	22.70	なし	明赤褐色/軟質	なし	なし	－	－	－	外面泥漿付着
第42図84	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	蔵骨器	沖縄産無釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	29.49	なし	赤褐色	なし	外面:草花文	－	－	－	－
第42図85	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	蔵骨器	沖縄産無釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	9.46	なし	赤褐色/軟質	なし	外面:草花文	－	－	－	－
第42図86	そ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	蔵骨器	沖縄産無釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	27.88	なし	赤褐色/軟質	なし	唐草文	－	－	－	巻貝痕圧あり
第43図87	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	不明	沖縄産無釉陶器	口～底	口径:31.4 器高:8.3 底径:24.0	571.85	なし	赤褐・暗灰色/軟質	なし	なし	－	－	－	－
第43図88	そ100 Ⅲ層	近世近代土器	蓋(手焙蓋)	日本産土器	端～底	口径:15.0 器高:3.55 底径:10.4	137.32	なし	明赤褐色/砂金雲母多	なし	なし	－	－	－	－
第43図89	そ101 Ⅲ層	瓦質土器	壺か	－	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	9.94	内外面:ミガキ	赤褐色砂・金雲母混じり	－	なし	なし	なし	日本	－
第43図90	そ100 Ⅲ層	瓦質土器	鉢	－	胴上部	口径:－ 器高:－ 底径:－	26.33	外面:ミガキ 内面:轆轤痕	赤褐色砂・金雲母混じり	－	外:横位条線	なし	なし	日本	－
第43図91	そ101 Ⅲ層	瓦質土器	火炉・火取	－	底部	口径:－ 器高:－ 底径:(推定)9.8	32.11	内外面:ミガキ	灰色軟質雲母混	－	なし	なし	なし	沖縄か	－
第43図92	そ100 Ⅲ層	瓦質土器	竈	－	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	17.36	内外面:ミガキ	赤褐色砂・金雲母混じり	－	なし	なし	なし	日本	－

表 33　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表４（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第44図 93	そ100 Ⅲ層	石器	砕片	完形	最大長:16.1 最大厚:10.3 最大幅:21.7	3.1	チャート (県内)	－	打剥	なし	－	－	－	－
第44図 94	せ101 Ⅲ層	瓦	明朝系 平瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:14.0	123.76	胎土:褐色 粗粒	広端部	背面布目痕	なし	なし	なし	なし	－
第44図 95	不明 Ⅲ層	瓦	明朝系 平瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:14.0	40.76	外面部:灰 褐色 内面部:暗 褐色砂混	胴部	背面布目痕	なし	なし	なし	焼き締め か	－
第44図 96	そ100 Ⅲ層	瓦	明朝系 平瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:12.0	54.90	胎土:灰褐 色	広端部	背面布目痕	なし	なし	なし	なし	－
第44図 97	そ101 Ⅲ層	瓦	明朝系 平瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:13.0	31.92	胎土:赤褐 色軟質	胴部	背面布目痕	なし	なし	銘有り 「儀」線刻	なし	－
第44図 98	そ101 Ⅲ層	瓦	明朝系 丸瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:15.0	207.67	胎土:赤褐 色軟質	筒部	背面布目痕	なし	なし	なし	外面:漆喰 付着	－
第44図 99	そ100 Ⅲ層	土製品	不明	破片か	最大長:61.6 最大幅:29.1 最大厚:30.6	66.0	陶製	－	なし	なし	なし	なし	なし	－
第44図 100	そ100 Ⅲ層	羽口	－	破片	最大長:20.5 最大幅:37.8 最大厚:9.0	7.5	陶製	－	なし	なし	なし	なし	漆喰？付 着	－
第44図 101	せ101 Ⅲ層	瓦質 土器	瓦質製品 不明	破片か	最大長:30.0 最大幅:129.4 最大厚:19.3	95.21	胎土:褐色 砂・雲母混	－	背面線条痕	なし	なし	なし	なし	沖縄産
第45図 102	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	磁器製品 碍子	完形	最大長:5.05 最大幅:3.5 最大厚:－	89.98	－	－	なし	なし	なし	なし	外面に透 明釉	－
第45図 103	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	磁器製品 フック	完形	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:－	24.79	型作り	－	なし	なし	なし	なし	全面に透 明釉	瀬戸産か
第45図 104	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	磁器製品 おろし器	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:－	23.34	胎土:白色 光沢有り	－	なし	なし	なし	なし	全面に透 明釉	瀬戸産か
第45図 105	そ101 Ⅲ層	日本産 陶磁器	磁器製品 おろし器	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:－	14.60	胎土:白色 光沢有り	－	なし	なし	なし	なし	全面に薄 緑色釉	瀬戸産か
第45図 106	そ100 Ⅲ層	日本産 陶磁器	磁器製品 西洋人形	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:－	13.0	胎土:灰白 色堅緻	脚部	型合わせ時 のバリ残 胴部接合面 に凹有り	－	西洋人の 意匠	なし	なし	産地不明 近代
第45図 107	そ100 Ⅲ層	煙管	－	一部欠損	最大長:18.4 最大幅:26.9 最大厚:3.6	4.1	沖縄産施 釉陶器 胎土:灰色 緻密	雁首	内部に 穿孔痕	確認できず	なし	なし	緑釉	なし
第45図 108	そ100 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:16.0 最大厚:3.0	1.1g	日本産 染付	胴上部	打剥/両	－	－	－	－	－
第45図 109	そ101 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:26.0 最大厚:6.0	5.8	中国産 青磁	胴上部	打剥/両	－	－	－	－	盤・14C後 ～15C
第45図 110	そ100 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:34.0 最大厚:4.5	6.1	中国産 青花	口縁部	打剥/外	－	－	－	－	－
第45図 111	そ100 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:20.0 最大厚:4.0	2.6	ガラス	胴部	打剥/外	－	－	－	－	－
第45図 112	そ101 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:24.5 最大厚:4.0	3.1	中国産 色絵	胴部	打剥/外	－	－	－	－	－
第45図 113	そ101 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:41.0 最大厚:11.5	17	中国産 白磁	底部 畳付有	打剥/外	－	－	－	－	－
第45図 114	そ101 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:41.0 最大厚:16.5	36.7	中国産 青磁	胴部	打剥/両	－	－	－	不明	－
第45図 115	そ101 Ⅲ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:44.5 最大厚:12.1	28.7	陶質土器	胴部	研磨	－	－	－	－	－
第45図 116	せ100 Ⅲ層	金属 製品	金具	完形	最大長:30.7 最大幅:60.3 最大厚:10.8	19.3	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	なし	把手
第45図 117	そ101 Ⅲ層	金属 製品	蓋	完形	最大長:53.1 最大幅:53.6 最大厚:4.0	32.5	鉄・ゴム	－	なし	確認できず	なし	なし	なし	機械栓
第45図 118	そ102 Ⅲ層	金属 製品	蓋	一部欠損	最大長:21.9 最大幅:20.0 最大厚:6.1	2.9	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	なし	－
第45図 119	そ101 Ⅲ層	金属 製品	蓋	完形	最大長:29.3 最大幅:30.7 最大厚:7.6	8.3	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	特になし	－

表 34　管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表 5（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第45図 120	そ103 Ⅲ層	金属 製品	鋏	完形	最大長:37.2 最大幅:19.1 最大厚:0.5	1.9	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	なし	－
第45図 121	そ101 Ⅲ層	金属 製品	鍵	完形 (変形)	最大長:7.9 最大幅:53.0 最大厚:1.7	3.3	銅	－	なし	確認できず	なし	なし	端部有孔	－
第45図 122	そ100 Ⅲ層	金属 製品	不明	完形	最大長:15.6 最大幅:30.2 最大厚:2.4	16.8	銅	－	なし	確認できず	なし	なし	底部有孔	軍関係品か
第45図 123	そ100 Ⅲ層	金属 製品	ハサミ	完形	最大長:108.0 最大幅:48.6 最大厚:5.4	23.2	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	特になし	－
第45図 124	そ100 Ⅲ層	金属 製品	不明	完形	最大長:26.3 最大幅:20.4 最大厚:4.7	4.6	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	穿孔	－
第45図 125	そ100 Ⅲ層	金属 製品	銭貨	完形	外径:25.5 最大厚:1.6	3,9	－	－	－	－	－	－	－	寛永通宝
第45図 126	そ101 Ⅲ層	ガラス 製品	碍子か	破片	最大長:－ 最大幅:43.0 最大厚:－	17.74	ガラス	底部	なし	なし	なし	「王」	なし	－
第45図 127	そ100 Ⅲ層	石製品	砥石	破片	最大長:37 最大厚:15 最大幅:25	13.8	頁岩	－	研磨	砥面	－	－	－	－
第45図 128	そ100 Ⅲ層	石製品	砥石	破片	最大長:50 最大厚:17 最大幅:39	23.9	輝緑 凝灰岩	－	なし	砥面	－	－	－	－
第45図 129	そ101 Ⅲ層	石製品	砥石	破片	最大長:37 最大厚:21 最大幅:31	7.1	軽石	－	なし	砥面	－	－	－	－
第45図 130	そ101 Ⅲ層	石製品	石盤	破片	最大長:25 最大厚:4 最大幅:23	3.4	粘板岩	－	研磨・擦切	線条痕・ 研磨	－	－	－	－
第45図 131	せ101 Ⅲ層	石製品	棒状製品	完形	最大長:118 最大厚:25 最大幅:33	112.9	細粒砂岩	－	研磨(弱)	敲打	－	－	－	－
第46図 132	そ100 Ⅲ層	遊具	泥面子	完形	最大長:18.7 最大幅:17.6 最大厚:6.1	2.3	土製 胎土:赤褐色砂混	－	ミガキ	なし	なし	不明印 有り	なし	－
第46図 133	そ100 Ⅲ層	遊具	泥面子	完形	最大長:20.9 最大幅:21.5 最大厚:10.6	6.3	土製 胎土:褐色	－	ミガキ	なし	なし	なし	なし	－
第46図 134	そ100 Ⅲ層	遊具	泥面子	完形	最大長:17.3 最大幅:16.9 最大厚:6.5	2.2	土製 胎土:赤褐色砂混	－	ミガキ	なし	なし	なし	なし	－
第46図 135	そ101 Ⅲ層	遊具	泥面子	完形	最大長:17.4 最大幅:16.8 最大厚:6.9	2.3	土製 胎土:赤褐色砂混	－	ミガキ	なし	なし	不明印 有り	なし	－
第46図 136	そ100 Ⅲ層	遊具	おはじき	完形	最大長:17.1 最大幅:16.8 最大厚:2.7	1.1	ガラス	－	なし、型作り	なし	オレンジ色 不規則模様	「2」	なし	－
第46図 137	そ101 Ⅲ層	土製品	－	完形	最大長:25.7 最大幅:17.0 最大厚:6.2	1.8	土製 胎土:赤褐色砂混	－	なし	なし	側縁鋸歯状 中央仏像か	なし	なし	懐中御守か
第46図 138	そ101 Ⅲ層	ミニチュア製品	おろし器	完形	最大長:41.5 最大幅:22.5 最大厚:6.1	7.4	磁器 胎土:灰白色堅緻	－	なし	なし	なし	なし	なし	瀬戸産か

第４節　Ⅰ・Ⅱ層の遺物

Ⅰ・Ⅱ層からは 2,270 点の遺物が出土している（表 34）。遺物構成はⅢ層と同様のため大嶺村期の遺物であると思われるが、Ⅲ層と同様に先史時代土器や石器（第 48 図 152）、グスク時代の青磁を僅かに含む。また注目される資料に「歩兵第四十五聯隊酒保」銘の歯ブラシが挙げられる（図版 27 ⑤）。旧日本軍小禄飛行場に関連する資料とみられる。

中国産青花

ガラス製遊具

レンガ

歯ブラシ

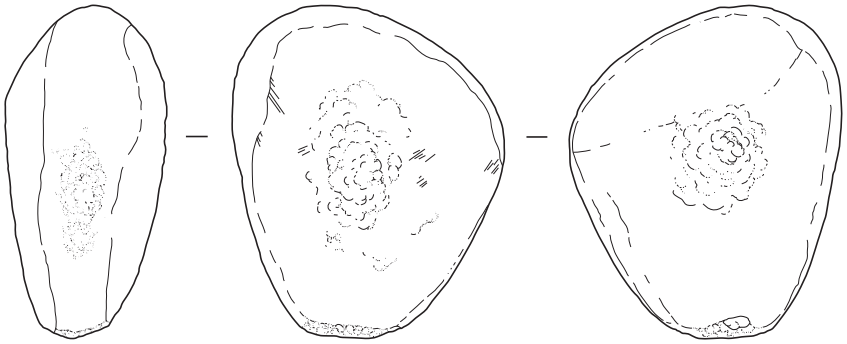
図版 27　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 1（縮尺不同）

表 35　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物集計表

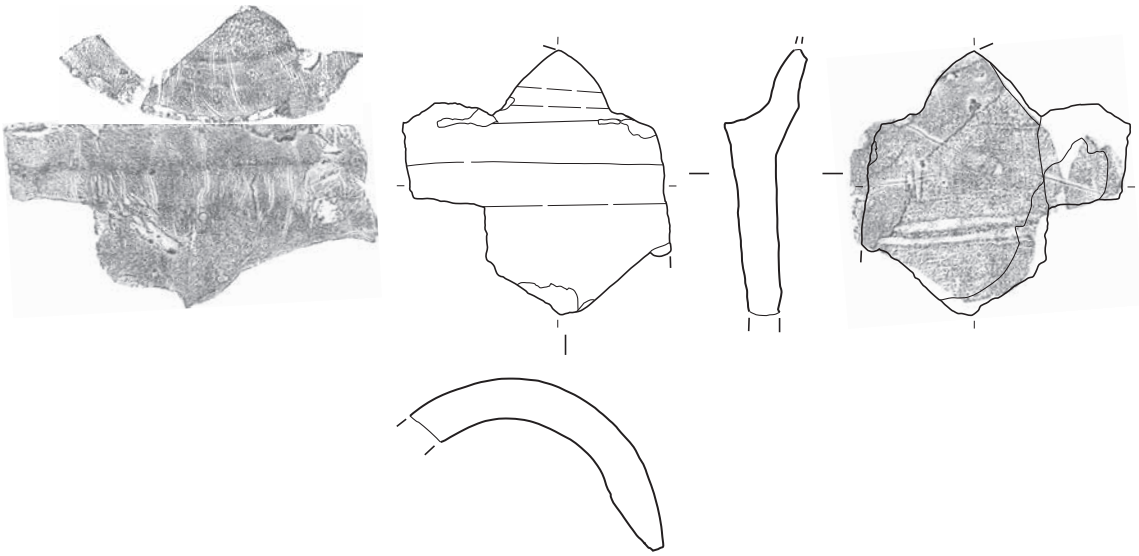
地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石造物	石材	金属製品	木製品	円盤状製品
管制塔Ⅰ	Ⅰ	せ100			6	3	6	1								
		せ101			4	3	1	1								
		そ100		11	93	50	49	34	3				10	27		7
		そ101			27	7	12	3	2				1			1
		不明		2	25	8	24	10		1			2	3		5
	Ⅱ	せ100		3	67	36	40	11	4		1		1			8
		せ101		1	22	26	62	8	10	1	1	1	3		2	1
		そ100		3	86	53	58	23	8				8	1		8
		そ101	1	12	115	84	86	28	3		1	1	7	4		11
合計			1	32	445	270	338	119	30	2	3	2	32	35	2	41

地区	層位	グリッド	遊具	ガラス製品	漆喰	瓦	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	歯ブラシ	ゴム製品	貝類	動物遺存体	不明	計	層位計
管制塔Ⅰ	Ⅰ	せ100		1		3						1		21	629
		せ101		1										10	
		そ100	1	30		72	6	1	1		3	11	1	410	
		そ101		4		11				1		1		70	
		不明		6	1	29	1				1			118	
	Ⅱ	せ100		9		63	5	2			7	1	2	260	1641
		せ101		7		52	2							199	
		そ100		31		188	17	2			3	3		492	
		そ101	1	39	2	253	24	7	2		1	5	3	690	
合計			2	128	3	671	55	12	3	1	15	22	6	2270	2270

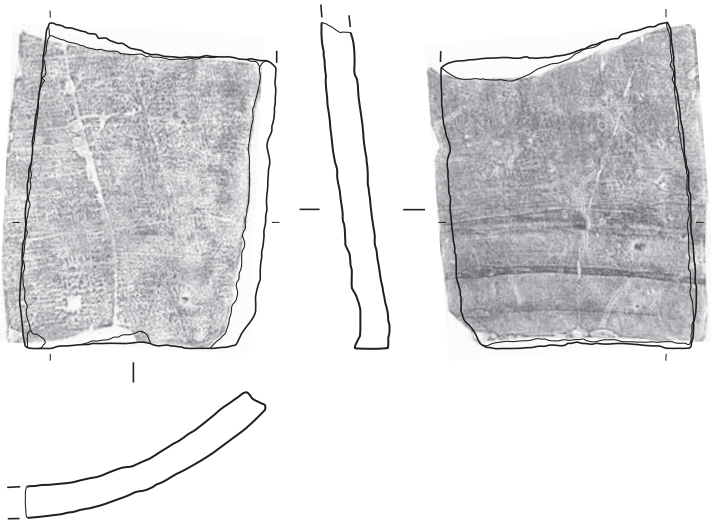
第 47 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 1



152



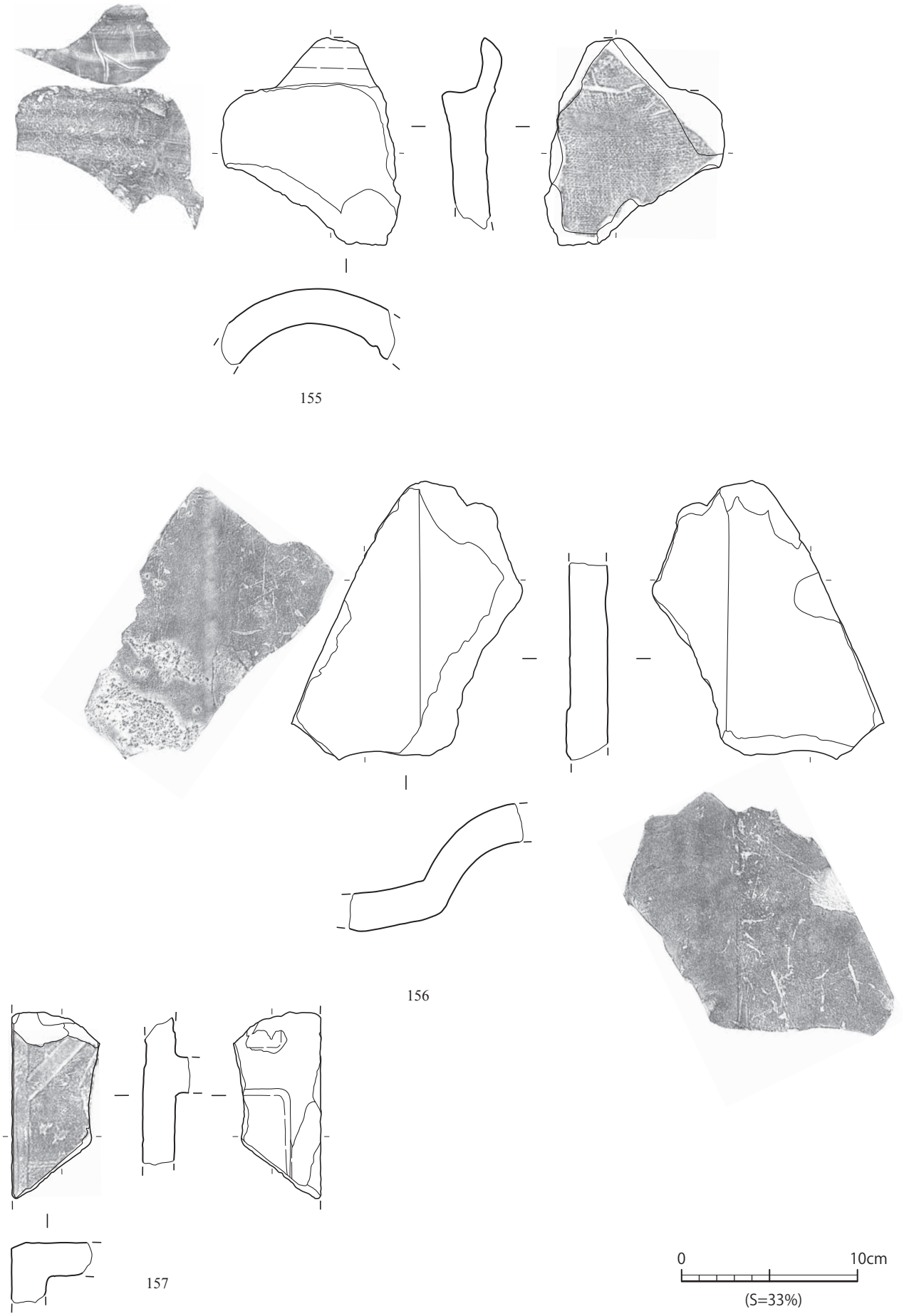
153



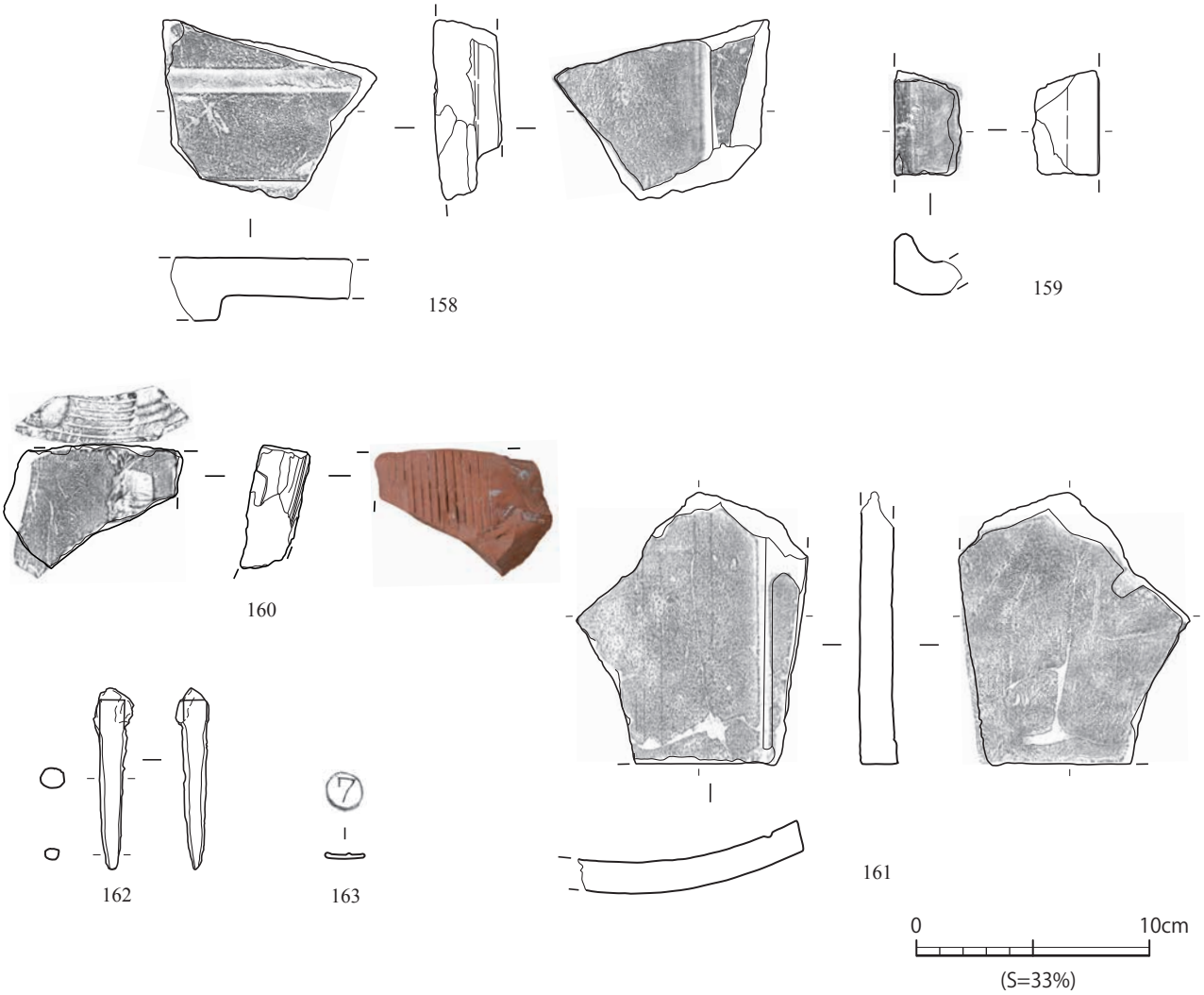
154

0　10cm
(S=33%)

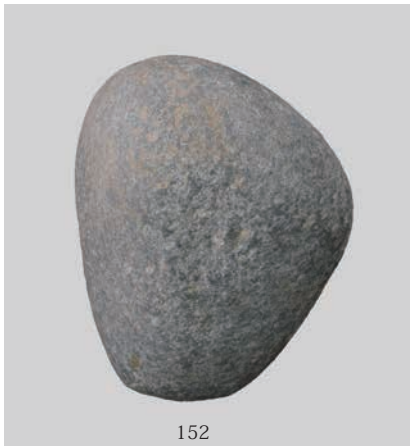
第 48 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 2

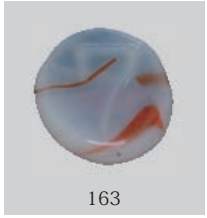


第 49 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 3



第 50 図　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 4





図版 28　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 2（163:S=100%、それ以外 S=33%）

図版 29　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 3（S=33%）

表 36　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表 1（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第47図139	せ100 Ⅱ層	日本産陶磁器	碗	統制陶器	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:4.0	53.34	轆轤 畳付釉剥ぎ・砂付着	白色緻密・ガラス質	外:透明 内:透明	なし	なし	「岐40」	瀬・濃 1941-46	－
第47図140	そ101 Ⅱ層	日本産陶磁器	皿	近代磁器角皿	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	10.48	型作り 畳付釉剥ぎ	白色やや粗	外:透明 内:透明	内:菊花文、波形文	ゴム版	なし	瀬・美 近代	－
第47図141	そ100 Ⅰ層	日本産陶磁器	杯	白磁酒盃	口～底	口径:5.4 器高:2.3 底径:2.3	4.08	型作り 畳付釉剥ぎ	白色緻密・ガラス質	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	瀬・美 19-20c	表面劣化
第47図142	そ100 Ⅰ層	日本産陶磁器	蓋物	染付磁器段重	口～底	口径:－ 器高:2.85 底径:－	26.77	型作り	灰白色やや粗、ガラス質	外:透明・瑠璃 内:透明	なし	なし	なし	瀬・美 19c～20c	－
第47図143	せ100 Ⅰ層	日本産陶磁器	蓋	染付磁器	甲～袴	庇端部径:5.8 袴端部径:7.0 器高:－	16.71	口受部泥漿付着	灰白色やや粗	外:透明 内:透明	外:樹木文、圏線	絵付け	なし	肥前 Ⅴ期	－
第47図144	そ100 Ⅱ層	日本産陶磁器	不明	白磁	底部	口径:－ 器高:－ 底径:9.2	46.01	型作り 畳付泥漿付着	白色緻密	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	瀬・美 近代	－
第47図145	そ100 Ⅱ層	日本産陶磁器	杯？	(磁器か)染付	底部	口径:－ 器高:－ 底径:3.5	7.07	型作り	白色、黒色粒混じり	外:透明 内:透明	内:菊花文、圏線	絵付け	なし	産地不明 近代	－
第47図146	せ1001層	日本産陶磁器	鉢	陶器？	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	42.95	なし	赤褐色堅緻	外～内口縁:白色釉	外:丸形文	なし	なし	不明	－
第47図147	不明1層	沖縄産陶器	急須	沖縄産施釉陶器	口～胴	口径:6.2 器高:－ 底径:－	17.53	なし	白色/軟質	外:透明 内:透明	なし	－	－	－	－
第47図148	せ100 Ⅱ層	沖縄産陶器	油壺	沖縄産施釉陶器	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:4.2	91.23	なし	卵黄灰色/軟質	外:黒釉	なし	－	－	－	－
第47図149	せ100 1層	沖縄産陶器	水滴	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:－ 器高:－ 底径:－	12.80	内底布目痕	白色/緻密	外:透明 内:透明	なし	－	－	－	－
第47図150	せ101 Ⅱ層	瓦質土器	火炉火取	－	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	178.61	外面:ミガキ 内面:刷毛ミガキ	赤褐色砂・金雲母混じり	－	なし	なし	なし	日本産	－
第47図151	せ101 Ⅱ層	瓦質土器	不明	－	不明	口径:－ 器高:－ 底径:－	93.92	内外ミガキ	灰褐色砂混	－	なし	なし	なし	沖縄	巻貝1個体混入

表 37　管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表２（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第48図 152	せ101 Ⅱ層	石器	台石	完形	最大長:132 最大厚:64 最大幅:108	1380	輝緑岩	－	なし	敲打による凹み	なし	なし	なし	－
第48図 153	せ101 Ⅱ層	瓦	明朝系 丸瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:15.0	269.66	胎土:赤褐色砂混	玉縁部	背面布目痕	なし	なし	なし	なし	－
第48図 154	せ101 Ⅱ層	瓦	明朝系 平瓦	一部欠損	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:11.0	229.50	胎土:赤褐色軟質	狭端部	背面布目痕	なし	なし	なし	煤付着	－
第49図 155	せ100 Ⅱ層	瓦	明朝系 丸瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:20.0	207.90	胎土:赤褐色軟質	玉縁部	背面布目痕	なし	なし	なし	なし	－
第49図 156	そ100 Ⅱ層	瓦	近代瓦	一部欠損	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:21.0	471.75	胎土:赤褐色緻密	胴部	なし	なし	なし	なし	なし	－
第49図 157	そ100 Ⅱ層	瓦	近代瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:17.0	142.18	胎土:赤褐色緻密	不明	なし	なし	なし	なし	なし	－
第50図 158	そ100 Ⅱ層	瓦	近代瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:15.0	124.15	胎土:赤褐色緻密	不明	なし	なし	なし	なし	なし	－
第50図 159	そ100 Ⅱ層	瓦	近代瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:－	31.25	胎土:赤褐色緻密	不明	なし	なし	なし	なし	なし	－
第50図 160	そ101 Ⅱ層	瓦	近代瓦 丸瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:19.0	69.31	胎土:赤褐色緻密	端部	外面刻目	なし	なし	なし	外面:漆喰付着	－
第50図 161	そ101 Ⅱ層	瓦	近代瓦 平瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:13.0	189.30	胎土:赤褐色緻密	端部	内面溝有り	なし	なし	なし	内面:漆喰付着	－
第50図 162	そ100 Ⅰ層	金属製品	釘	完形	最大長:75.5 最大幅:15.7 最大厚:11.7	15.7	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	方形	－
第50図 163	そ100 Ⅰ層	遊具	おはじき	完形	外径:16.7 最大厚:2.4	1.0	ガラス	－	なし	なし	なし	「7」	なし	－

第５節　管制塔Ⅱ地区の調査成果

１　概要

管制塔Ⅱ地区は、海抜約 0.1 mまで掘削したがいずれも戦後の造成層が堆積しており、近世・近代及びそれ以前の遺構は確認されなかった。遺物は造成土中より戦後の金属製の建材等に混じって近世・近代の遺物が出土している。

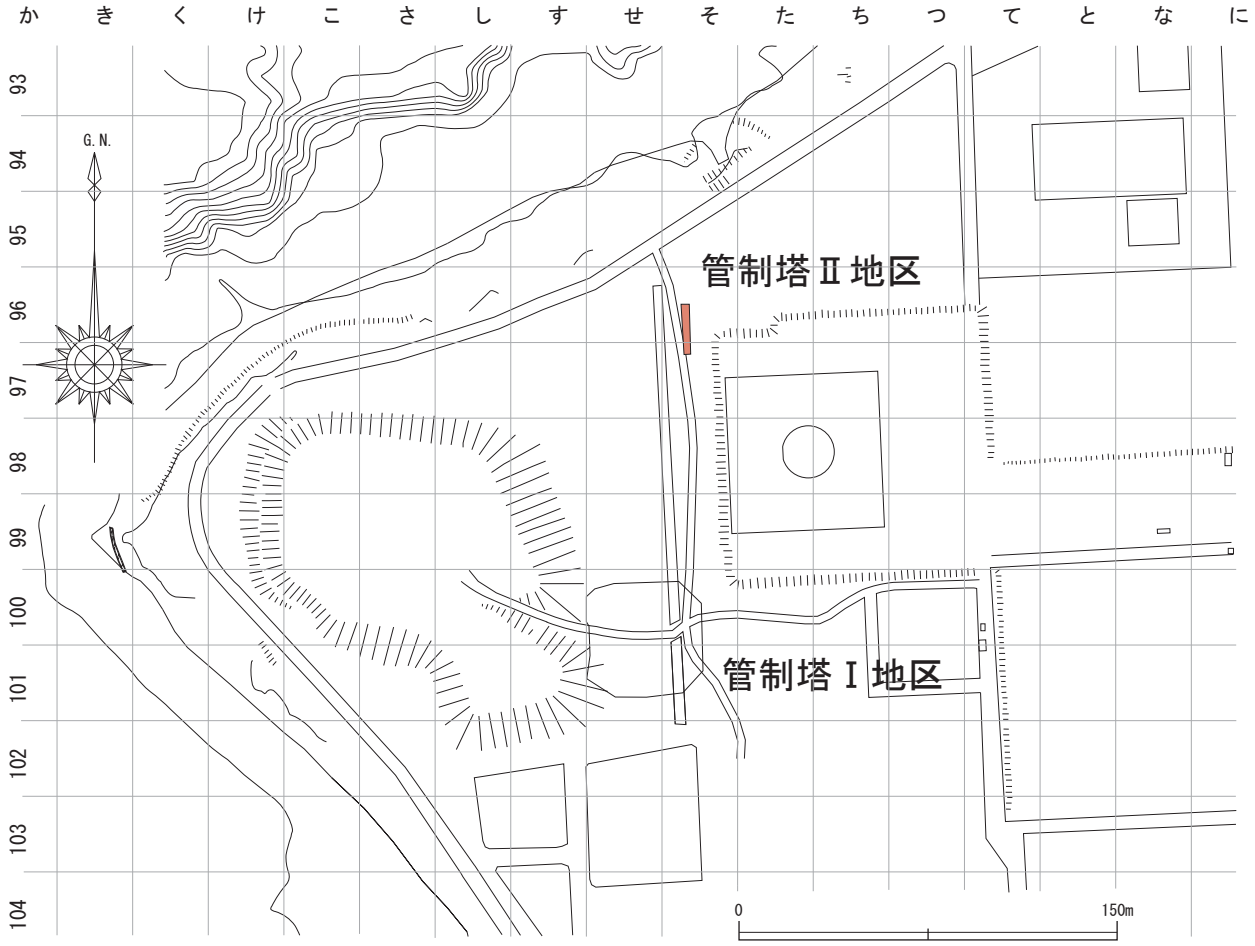
２　堆積状況

Ⅰ・Ⅱ層が深度約 2.7m に渡って厚く堆積する。Ⅱ層には様々な土砂がみられるが、水平堆積の最下層以外は北方向へ下傾した堆積が連続することが東壁より確認でき、内陸部から海へ向かって造成が行われた様子を示している。地表下 2.7 mからＶ－２層が堆積するが、トレンチ中央部のみ琉球石灰岩が確認された。

３　遺物

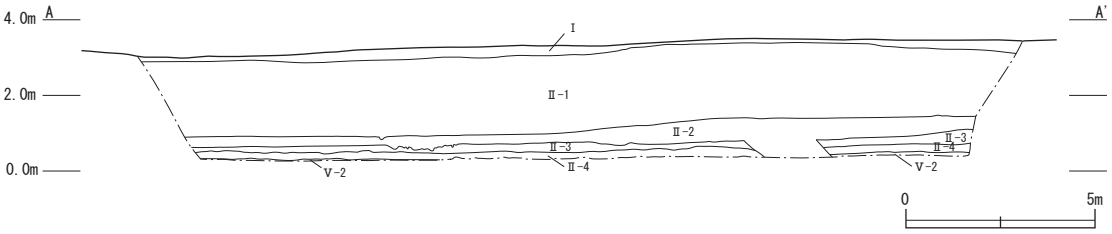
管制塔Ⅱ地区では、計 1,490 点の遺物が出土した（表 39）。いずれもⅠ・Ⅱ層からの出土のため、掲載は図版のみに留めた（図版 33）。遺物は近世・近代の本土産陶磁器と沖縄産無釉陶器、瓦、貝類が主体で、内容について管制塔Ⅰ地区・エプロン地区と大きな違いはみられない。また集計から外しているが、現代の金属片等も多数出土している。

ただし、遺物中に弥生～平安並行時代前半期の浜屋原式もしくは大堂原式とみられる土器片 1 点（図版 33 土器・石器①）と、瀬戸哲也氏らがＶ類とする 14 ～ 15 世紀ごろの青磁（図版 33 中国産陶磁器①）や中国産褐釉陶器（同③）が含まれている（瀬戸ほか 2007）。これらは空港造成時の地ならしによって土に混ざって運ばれてきたものであり、那覇空港内に当該時期の遺跡が存在する可能性を示す資料である。



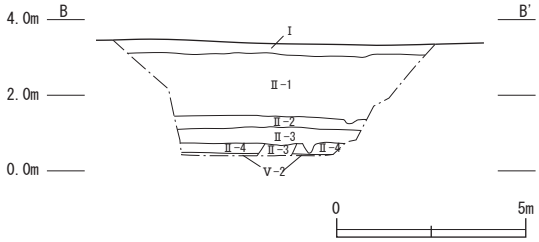
第 51 図　管制塔Ⅱ地区位置（S=1/3000）

図版 30　管制塔 II 地区完掘状況（北から）



第 52 図　管制塔 II 地区東壁断面図（S=1/200）

図版 31　管制塔 II 地区東壁（オルソ）



第 53 図　管制塔 II 地区南壁断面図
（S=1/200）

図版 32　管制塔 II 地区南壁（オルソ）

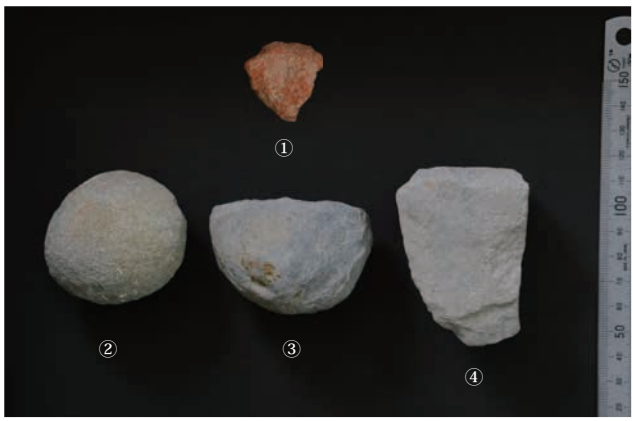
表 38　管制塔Ⅱ地区土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅱ	Ⅰ	10YR6/4	にぶい黄橙色	粗砂	なし	なし	灰黄褐色(10YR4/2)細砂(ニービ)、にぶい黄橙色(10YR6/3)砂が混じる。アスファルト層を含む。
	Ⅱ-1	10YR5/8	黄褐色	細砂	やや有	なし	ニービとクチャ(7.5Y5/1)が堆積する。コンクリート片・鉄片含む。
	Ⅱ-2	7.5Y4/1	灰色	クチャ	有	やや有	灰褐色(7.5YR4/2)粗砂含む。Φ5cm大の礫、コンクリート片・アスファルト混じる。
	Ⅱ-3	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト	有	やや有	明黄褐色(10YR6/8)シルト混じる。クチャ片・ガラス混じる。
	Ⅱ-4	2.5Y6/2	灰黄色	砂	有	やや有	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトとの互層である。針金混じる。
	Ⅴ-2	2.5Y7/1	灰白色	海砂	なし	有	枝サンゴ含む。

表 39　管制塔Ⅱ地区出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石造物	石材	金属製品	木製品	円盤状製品
管制塔Ⅱ	Ⅰ	—		3	14	13	22	3					2		1	
	Ⅱ	—	1	20	215	189	250	96	23	3	2	2	33	1	11	13
合計			1	23	229	202	272	99	23	3	2	2	35	1	12	13

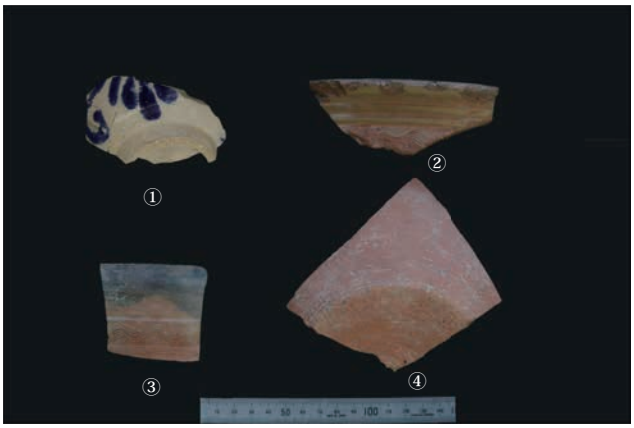
地区	層位	グリッド	ガラス製品	漆喰	瓦	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	歯ブラシ	貝類	動物遺存体	合計
管制塔Ⅱ	Ⅰ	—	5		115	18	1		1	1	199
	Ⅱ	—	66	1	213	6	8	2	127	9	1291
合計			71	1	328	24	9	2	128	10	1490



土器・石器

中国産陶磁器

日本産陶磁器



沖縄産施釉・無釉陶器

瓦

円盤状製品

石製品

櫛

図版 33　管制塔Ⅱ地区出土遺物

第５章　エプロン地区の調査成果

第１節　エプロン地区の層序

エプロン地区では、基本層序Ⅰ～Ⅶ層が検出された。Ⅰ・Ⅱ層は管制塔Ⅰ・Ⅱ地区と同じもので、ともに戦後の米軍による造成による土層である。Ⅲ層はエプロン地区では地層中では確認できず、Ⅲ－３層が遺構覆土にのみ認められる。Ⅳ層はエプロン地区にのみ確認される砂層で、填圧の影響でしまりがあることが特徴である。大きくⅣ－１層とⅣ－２層の２つに分けられ、共に遺構が検出される。形成要因は判然としないが、自然堆積層の可能性が高い。

Ⅴ層は遺物の包含しない自然堆積層であるが､北西側には細粒で貝･サンゴ等の混入がまばらな細砂層（Ⅴ－１層)が検出される。しかしそれ以外の場所では貝やサンゴ片等の海浜堆積物層(Ⅴ－２層)が検出される。Ⅴ層より下には、Ⅴ－２層が灰色化したⅥ層がトレンチ中央部から東側に堆積し、その下には一部に琉球石灰岩の岩盤が確認されるが、概ねは島尻層の泥岩層が堆積する。

【人為的堆積層】

Ⅰ層：現表土。近世・近代の沖縄産陶器や瓦などが稀に確認できる。

Ⅱ層：米軍那覇飛行場及び那覇空港に伴う造成土層。

Ⅲ層：戦中～戦後直後の造成土層。当地区ではⅢ－３層が遺構覆土に確認される。

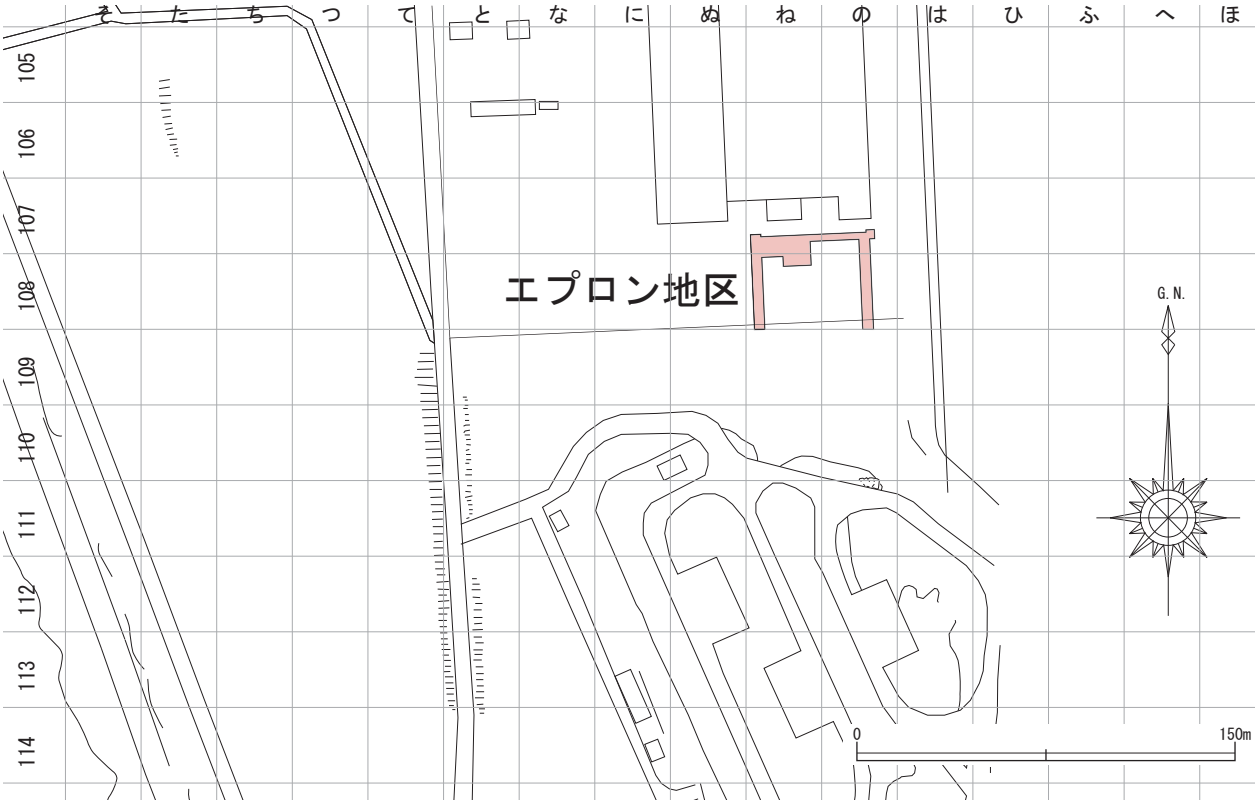
【自然堆積層】

Ⅳ層：大きくⅣ－１層とⅣ－２層に大別。Ⅳ－１層は近世・近代の多数の遺構・遺物が確認される。Ⅳ-2 層はトレンチ中央部に確認され、覆土中炭化物から 1,210 ± 30BP 年の年代値が得られたピットを含む遺構が検出されている。

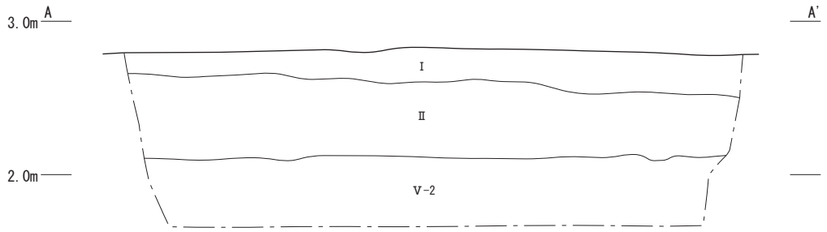
Ⅴ層：細砂層（Ⅴ－１層）と海浜堆積物層（Ⅴ－２層）の２つに大別される。Ⅴ－１層は一部にⅣ－２層と同様に上面で遺構が検出されるが、総じて層厚が薄い。

Ⅵ層：灰色海浜堆積物層

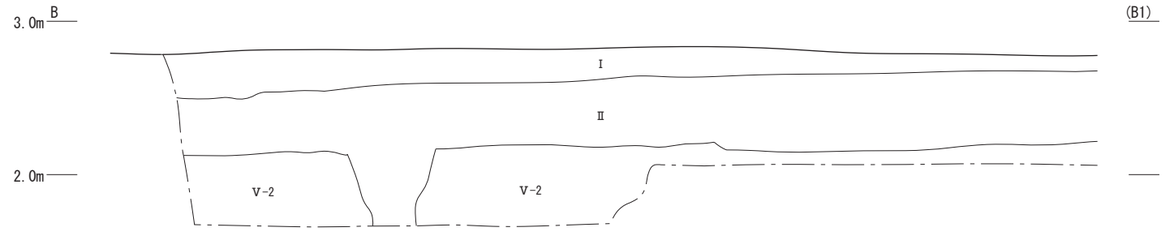
Ⅶ層：島尻層泥岩層。基盤層。



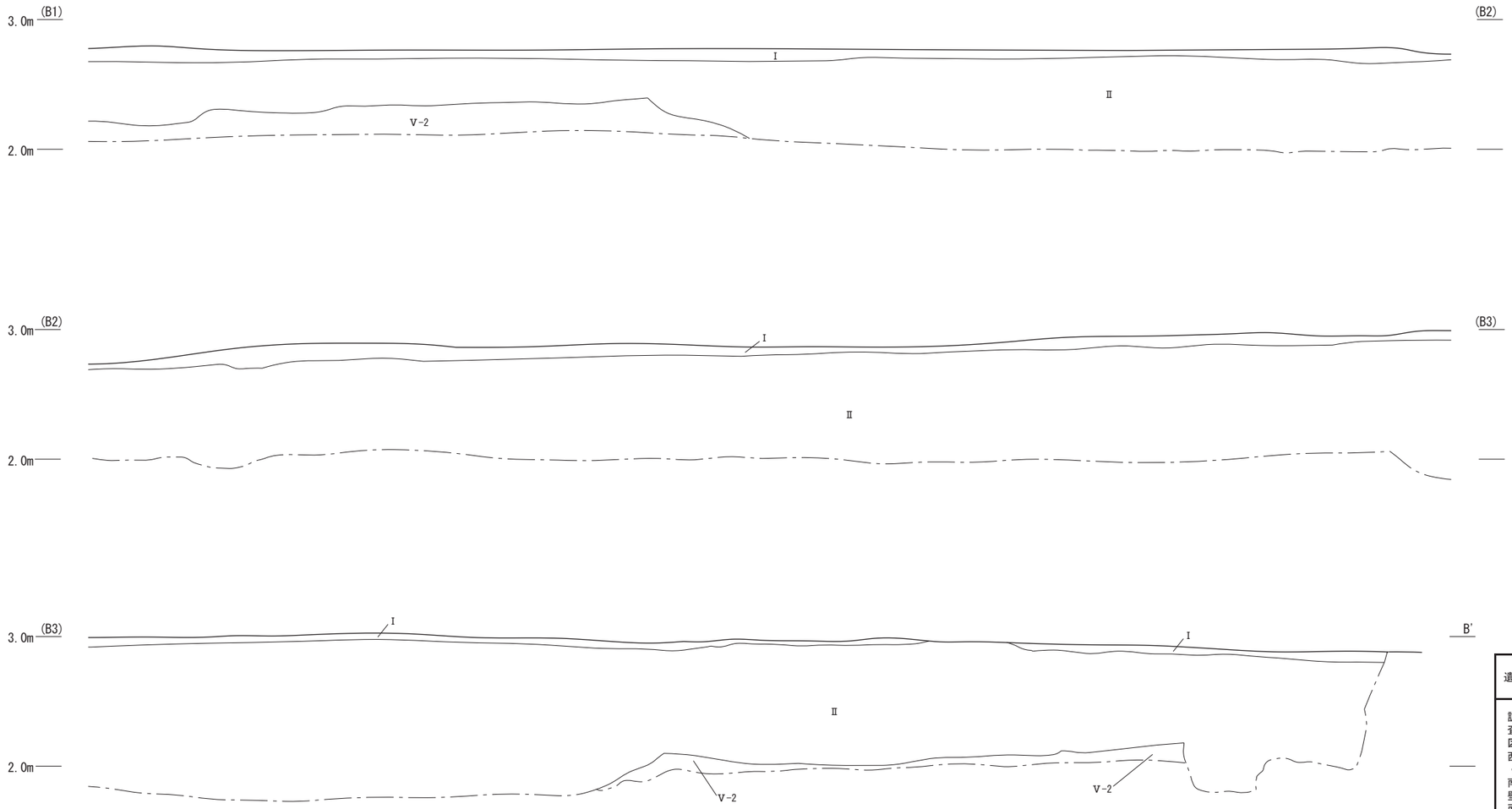
第 54 図　エプロン地区位置（S=1/3000)



南側壁面 断面図



西側壁面 断面図



遺構名	層 序	記 号	土 色	土 質	粘性	しまり	備　　考
調査区西・南壁面 エプロン地区	Ⅰ	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	弱	なし	サンゴを含む。遺物なし。
	Ⅱ	10YR5/3	にぶい黄褐色	粗砂	強	なし	Φ10cm未満の小礫を微量に含む
	V-2	2.5Y7/2	灰黄色	粗粒砂	中	なし	石化した枝サンゴや貝の細片を少量含む。ニービのブロックも散見される。

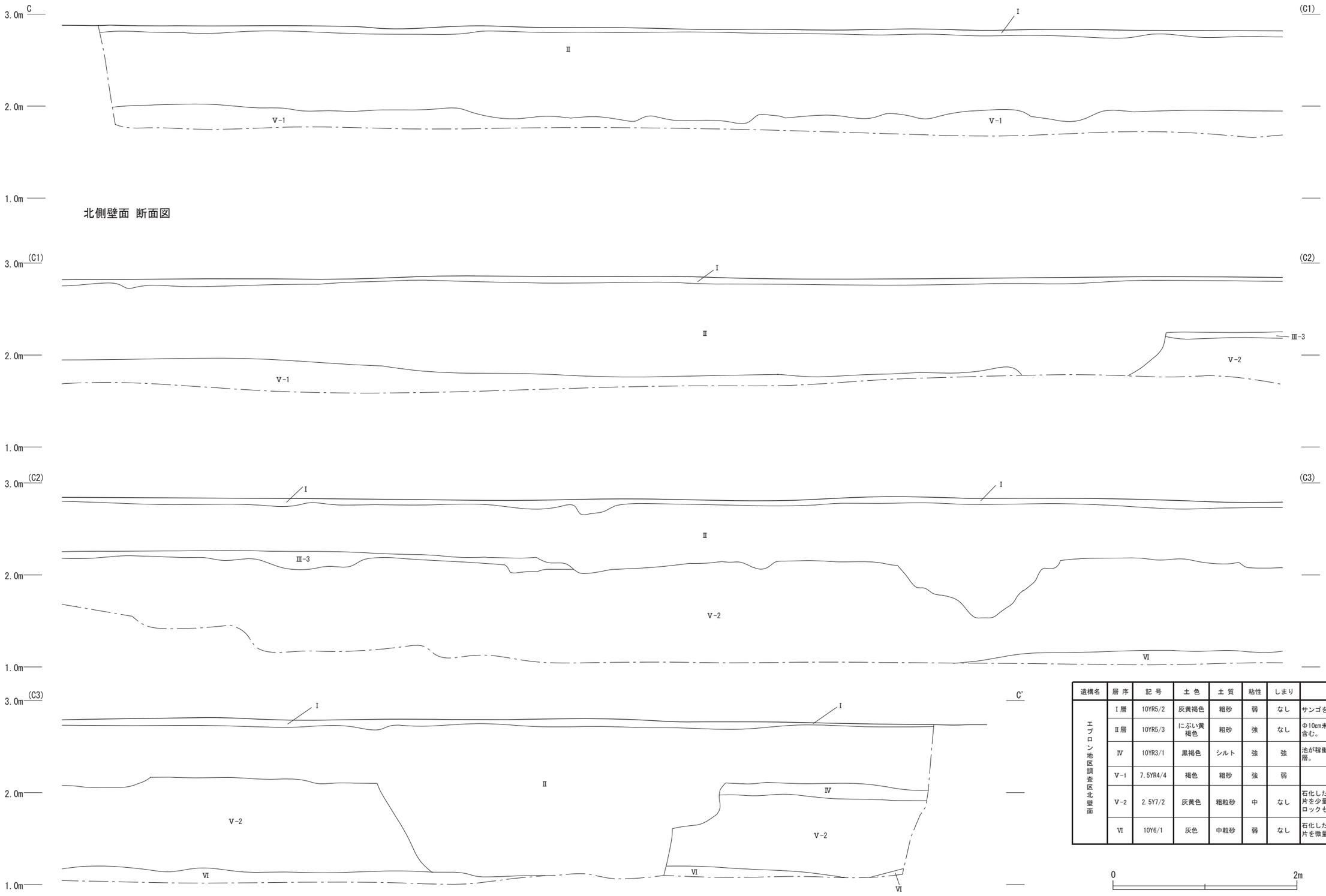
0　2m

第 55 図　エプロン地区壁面図１（西側南壁、西壁）（S=1/40）

南側壁面 断面オルソ図

西側壁面 断面オルソ図

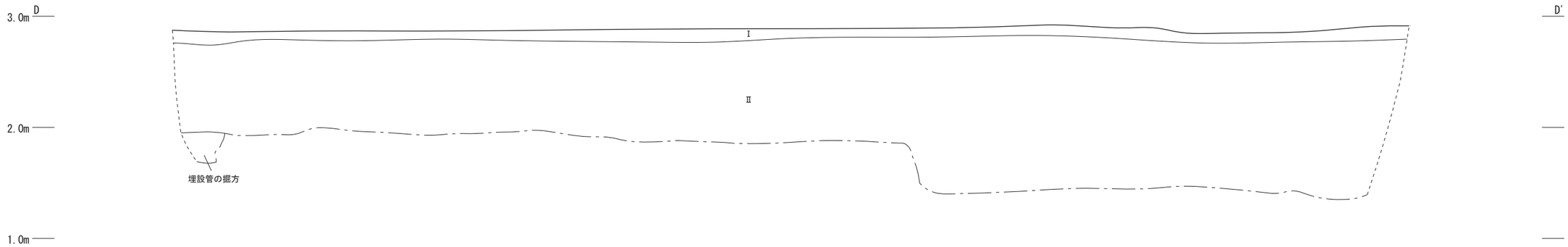
図版 34　エプロン地区壁面オルソ図（西側南壁、西壁）（S=1/40）



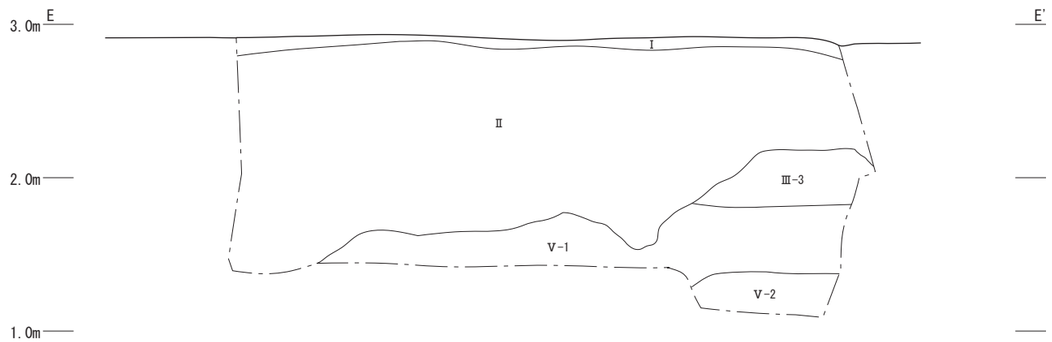
遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区調査区北壁面	Ⅰ層	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	弱	なし	サンゴを含む。遺物なし。
	Ⅱ層	10YR5/3	にぶい黄褐色	粗砂	強	なし	Φ10cm未満の小礫を微量に含む。
	Ⅳ	10YR3/1	黒褐色	シルト	強	強	池が稼働中に自然堆積した層。
	Ⅴ-1	7.5YR4/4	褐色	粗砂	強	弱	
	Ⅴ-2	2.5Y7/2	灰黄色	粗粒砂	中	なし	石化した枝サンゴや貝の細片を少量含む。ニービのブロックも散見される。
	Ⅵ	10Y6/1	灰色	中粒砂	弱	なし	石化した枝サンゴや貝の細片を微量に含む。

第 56 図　エプロン地区壁面図２（北壁）（S=1/40）

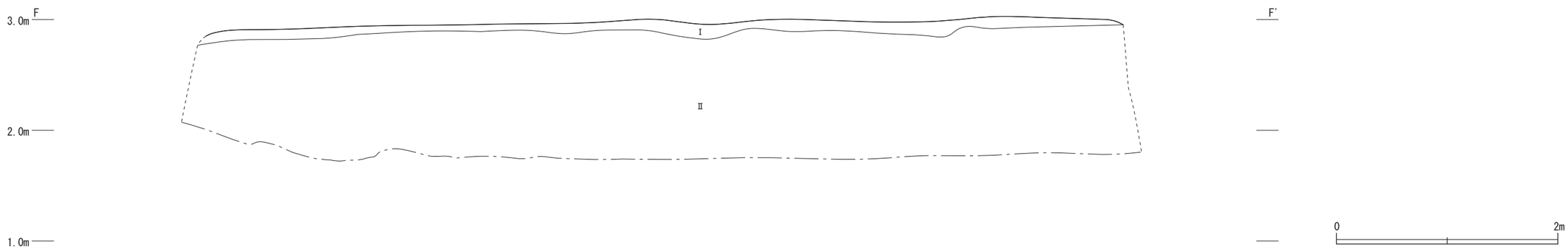
図版 35　エプロン地区壁面オルソ図（北壁）（S=1/40）



南側壁面 断面図1



中央西壁 断面図



南側壁面 断面図2

遺構名	層 序	記 号	土 色	土 質	粘性	しまり	備　　考
エプロン地区 調査区南壁面	Ⅰ層	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	弱	なし	サンゴを含む。遺物なし。
	Ⅱ層	10YR5/3	にぶい黄褐色	粗砂	強	なし	Φ10cm未満の小礫を微量に含む
	Ⅲ-3層	2.5Y5/2	暗灰黄色	粗砂	強	なし	Φ5mm未満の小石粒を多く含み、貝殻の細片を少量含む。
	Ⅴ-1層	2.5Y7/4	浅黄色	細粒砂	弱	なし	ビーチロックにブロック状態に見られる砂
	Ⅴ-2層	2.5Y7/2	灰黄色	粗粒砂	中	なし	石化した枝サンゴや貝の細片を少量含む。ニービのブロックも散見される。

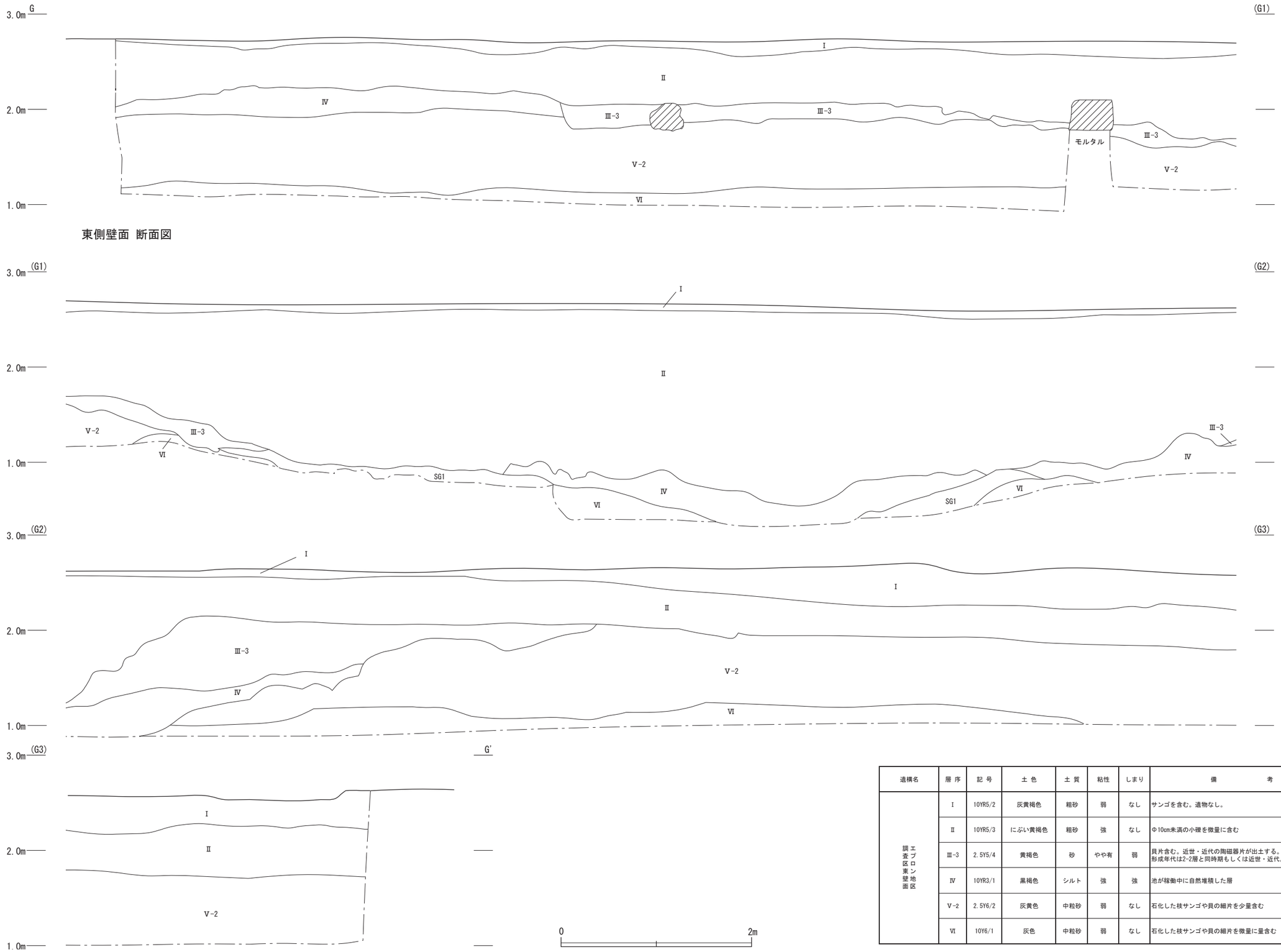
第 57 図　エプロン地区壁面図３（中央南壁・西壁）（S=1/40）

南側壁面 断面オルソ図1

中央西壁 断面オルソ図

南側壁面 断面オルソ図2

図版 36　エプロン地区壁面オルソ図（中央南壁・西壁）（S=1/40）



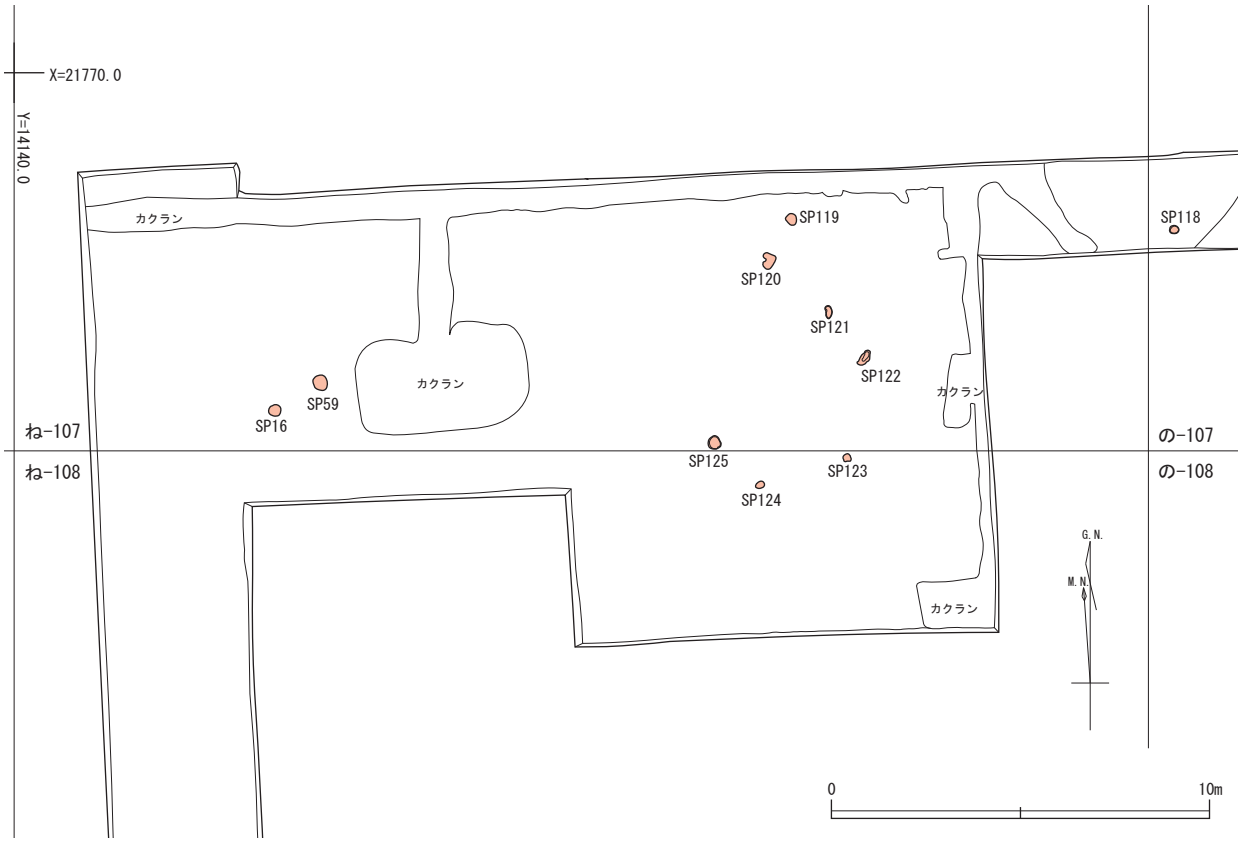
遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
調査区東壁面 エプロン地区	Ⅰ	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	弱	なし	サンゴを含む。遺物なし。
	Ⅱ	10YR5/3	にぶい黄褐色	粗砂	強	なし	Φ10cm未満の小礫を微量に含む
	Ⅲ-3	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	貝片含む。近世・近代の陶磁器片が出土する。 形成年代は2-2層と同時期もしくは近世・近代。
	Ⅳ	10YR3/1	黒褐色	シルト	強	強	池が稼働中に自然堆積した層
	Ⅴ-2	2.5Y6/2	灰黄色	中粒砂	弱	なし	石化した枝サンゴや貝の細片を少量含む
	Ⅵ	10Y6/1	灰色	中粒砂	弱	なし	石化した枝サンゴや貝の細片を微量に量含む

第58図　エプロン地区壁面図４（東壁）（S=1/40）

図版 37　エプロン地区壁面オルソ図（東壁）（S=1/40）

第２節　下層（Ⅳ－２層）の遺構と遺物

概要　ピット 10 基が検出されたがプラン等は明確でない。覆土中からの出土遺物はみられないが、SP119 覆土内炭化物より 1,210 ± 30BP の年代値が得られている。遺物は貝類がほとんどである。

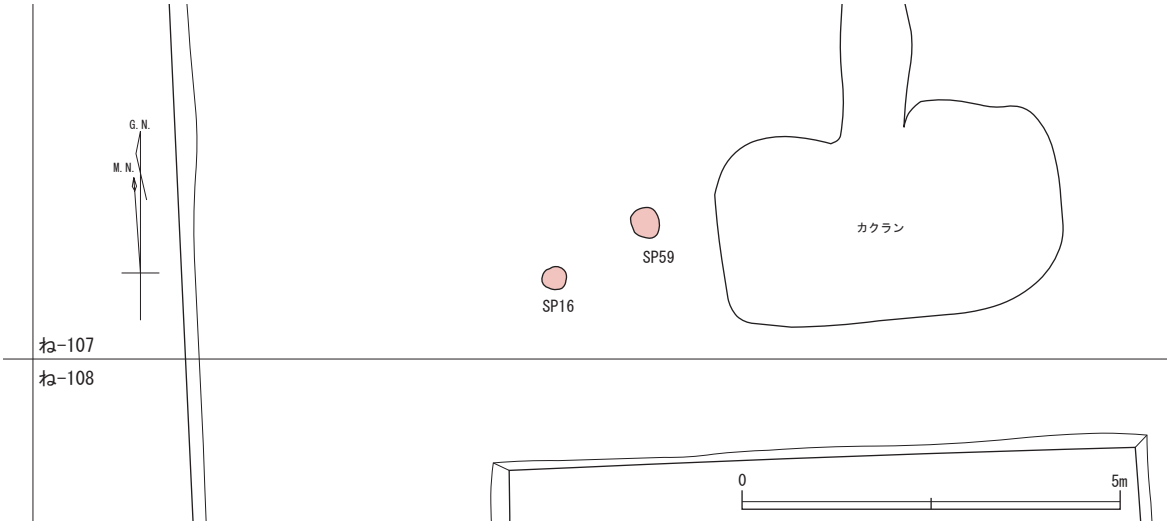


第 59 図　エプロン地区Ⅳ－２層遺構分布図（S=1/200）

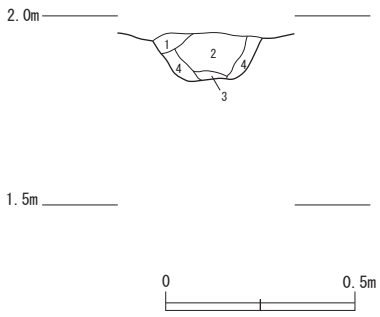
図版 38　エプロン地区Ⅳ－２層遺構配置図（オルソ）

【ＳＰ１６・５９】
構　　造　略楕円形で断面形状は浅いすり鉢状。
　SP16：長軸 31cm、短軸 27㎝、深さ 12㎝
　SP59：長軸 27cm、短軸 25㎝、深さ 12㎝
覆　　土　基本層序Ⅲ－３層だが、下部及び側縁部は色調や包含物が異なる。
出土遺物　無し。

図版 39　エプロン地区 SP16・59 完掘状況（南から）



第 60 図　エプロン地区 SP16・59 平面図（S=1/100）

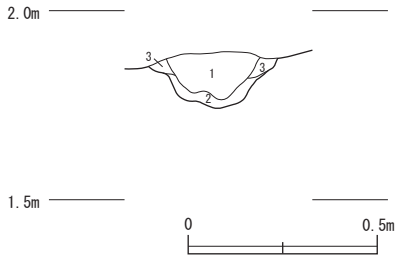


第 61 図　エプロン地区 SP16 断面図（S=1/20）

図版 40　エプロン地区 SP16 半截状況（南から）

表 40　エプロン地区 SP16 土層観察表

遺 構 名	層 序	記 号	土 色	土 質	粘性	しまり	備　　考
エプロン地区 SP16	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	弱	やや有	
	2	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	有	
	3	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	やや有	サンゴ礫が約5%混ざる。
	4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	弱	有	サンゴや小石が約3%混ざる。



第 62 図　エプロン地区 SP59 断面図
（S=1/20）

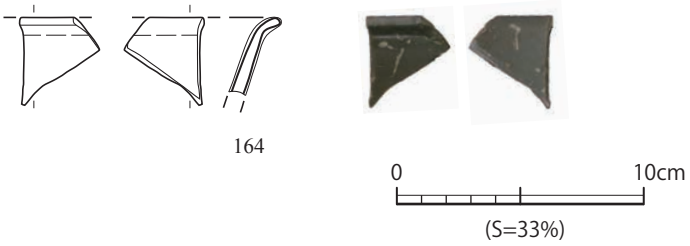
図版 41　エプロン地区 SP59 半截状況（東から）

表 41　エプロン地区 SP59 土層観察表

遺 構 名	層 序	記 号	土 色	土 質	粘性	しまり	備　　考
エプロン地区 SP59	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	有	小礫・サンゴ片まばらに混じる。SX1の1-1層に近い。
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	やや有	1層に比してやや粗粒。
	3	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	有	
	4	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	固着砂密に混じる。地山か。

表 42　エプロン地区 SP59 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	外国産陶磁器	日本産陶磁器	瓦	合計
エプロン	SP59	ね107	1	1	1	3



第 63 図　エプロン地区 SP59 出土遺物

表 43　エプロン地区 SP59 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾 釉薬	装飾 文様	装飾 その他	印・銘	産地年代	備考
第63図 164	ね107 SP59	中国産陶磁器	碗	青磁	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	8.83	－	灰色	暗オリーブ灰色、両面	なし	釉薬が厚い	－	龍泉 15c前	－

【ＳＰ１１８～１２５】

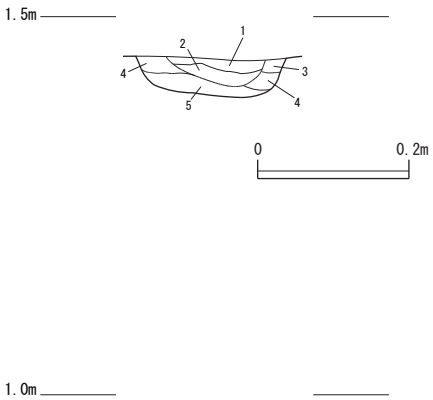
構　造　隅丸方形のもの (SP118,125) と略円形で浅いすり鉢状 (SP119 ～ 124) の２種。明確なプランは確認できない。

覆　土　灰黄色から暗灰黄色砂層が多い。単層もしくは水平に複数層が堆積。なお SP119 覆土内炭化物より 1,210 ± 30BP の年代値が得られている。

出土遺物　なし。

第 64 図　エプロン地区 SP118 ～ 125 平面図（S=1/100）

図版 42　エプロン地区 SP118 ～ 125 完掘状況（南から）

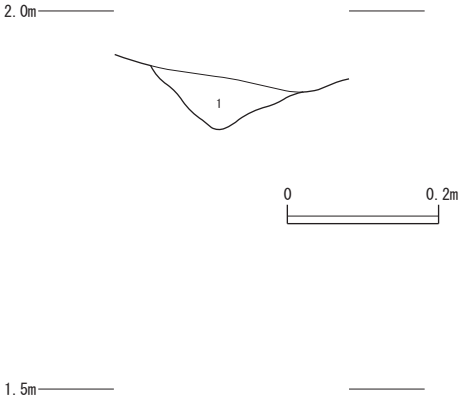


第 65 図　エプロン地区 SP118 断面図（S=1/10）

図版 43　エプロン地区 SP118 半截状況（北から）

表 44　エプロン地区 SP118 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SP118	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	やや有	やや有	細粒。
	2	2.5Y6/2	灰黄色	砂	やや有	有	細粒。
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	やや有	弱	やや細粒(≒ φ 0.5㎜)。
	4	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	弱	細粒。
	5	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	やや有	弱	粗粒(φ 0.5～φ 1.0㎜)。



第 66 図　エプロン地区 SP119 断面図（S=1/10）

図版 44　エプロン地区 SP119 半截状況（東から）

表 45　エプロン地区 SP119 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SP119	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	強	貝片・サンゴ片まばらに混じる。
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	有	地山か。

第３節　上層（Ⅳ－１層）の遺構と遺物

概要　検出した遺構は、SE ３基、SL ２基、SK ５基、SP115 基、SF ２基、SG １基が確認された。これらの遺構は、遺構の切り合い関係や出土遺物の年代観から、概ね以下の３つの時期に分かれる。

近世（遺構の廃絶時期が近代に達しないとみられる遺構）：
　SE3
近世～近代（遺構の廃絶時期が近代に達するとみられる遺構）：
　SE1・2、SL1・2、SK1・2・3・4・5、SP1 ～ 15・17 ～ 58・60 ～ 117、SG1
近代～戦中・戦後直後（上記近世～近代の遺構より新しい遺構）：
　SF1

この中で主体となるのは近世～近代の遺構で、大嶺村跡が営まれてた頃から戦火によって廃絶するまでの時期のものである。遺構には様々な機能のものが確認され、当時の村の様相を把握できる内容のものとなっている。

遺物の方も多種多様で、陶磁器には中国産・日本産・沖縄産、陶磁器以外にも瓦や土製品・磁器製品、円盤状製品、金属製品、木製品、骨製品、プラスチック製品、石製品・石造物などが確認された。特に井戸内からは木製品が多く出土しており、その関連性を窺わせる。また、僅かではあるが縄文時代後期・弥生～平安並行時代の土器や石器、グスク時代の陶磁器も出土しており、大嶺村以前の人の営みの痕跡も確認することができた。中でもグスク時代については、当地区の南側の丘陵がウフグシク・ヤマグシクと呼ばれることから、その関連性が考えられる。

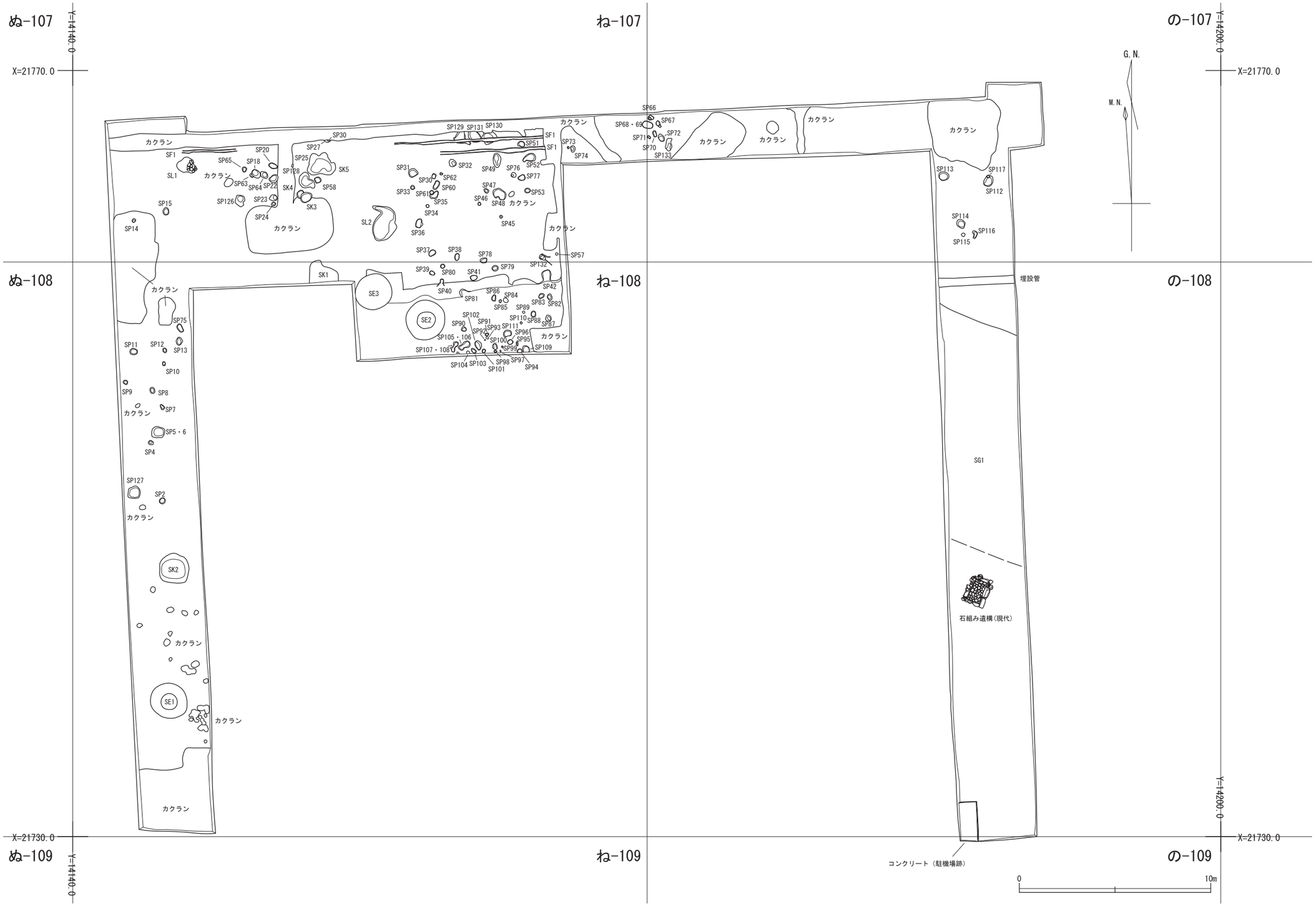
【ＳＥ１】

構　造　円形。周囲に井筒と同心円状の掘方が確認され、ほぼ垂直に井戸が構築されたことが分かる。井筒の掘削は島尻泥岩層（Ⅶ層）に達してもさらに下にまで及ぶ。このⅦ層とⅤ層の境から井筒側に面をもつ石と栗石を約１ｍ積んで井戸を構築している。利用石材は琉球石灰岩を主に、ほかにサンゴ石、海浜凝固物（砕屑性石灰岩）などが用いられる（図版 47）。直径 188㎝、深さ 303㎝。

覆　土　最上面は拳大の礫が被覆するように堆積。その下はⅢ－３層の砂層が約３ｍ近く堆積し、近世・近代の様々な遺物を包含する。常に水気を含んでおり、井筒石材の内面側や遺物の一部は褐色に変色していた（図版 47 ①）。

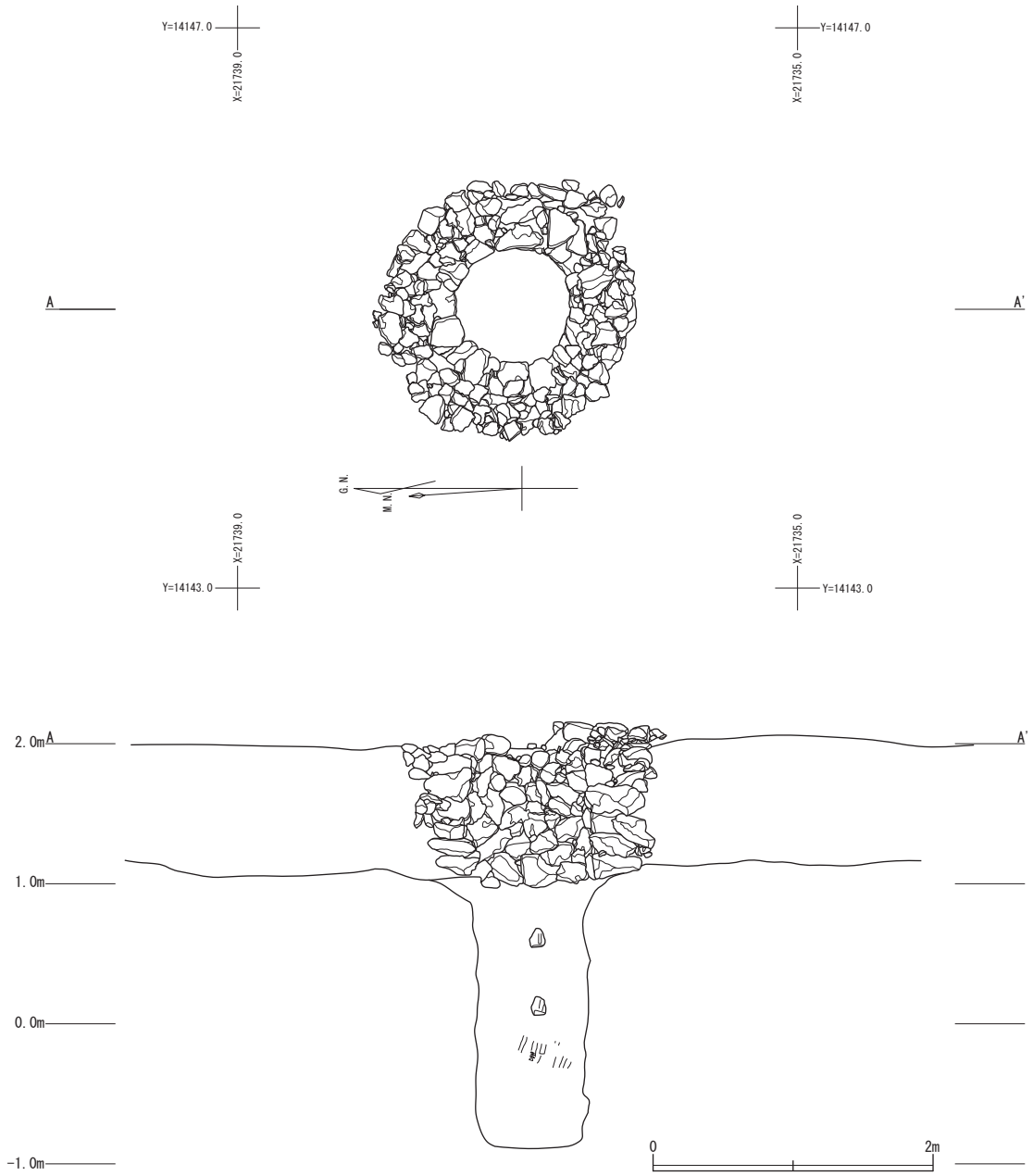
出土遺物　陶磁器には中国産（第 69 図 165）・日本産（同図 166 ～ 172）・沖縄産（同図 173 ～ 181）、ほかに瓦質土器（第 70 図 182）などが出土した。中でも近代の日本産陶磁器が井筒裏込内から出土していることから、SE1 の構築が近代であることが理解される。

陶磁器以外にも多様な遺物が出土している。瓦（第 70 図 183）は完形で出土した。金属製品は文様のみられる指輪（同図 185）、釘には船釘（同図 186）が含まれる。銭貨には寛永通宝が井筒裏込内から出土している（同図 187）。木製品は木桶のような製品（同図 188）がみられる。ほかにプラスチック製ボタン（図版 48 ①）やレンガ（図版 48 ②）、石製品には琉球石灰岩にセメントを塗った香炉（図版 48 ③）の完形品、漆喰が付着する礎石（図版 49 ③）などが出土している。



第 67 図　エプロン地区Ⅳ－ 1 層遺構分布図（S=1/200）

図版 45　エプロン地区Ⅳ－１層遺構配置図（オルソ）（S=1/200）



第 68 図　エプロン地区 SE1 平面図・立体断面図（S=1/50）

検出状況（東から）

半截状況（西から）

完掘状況（西から）

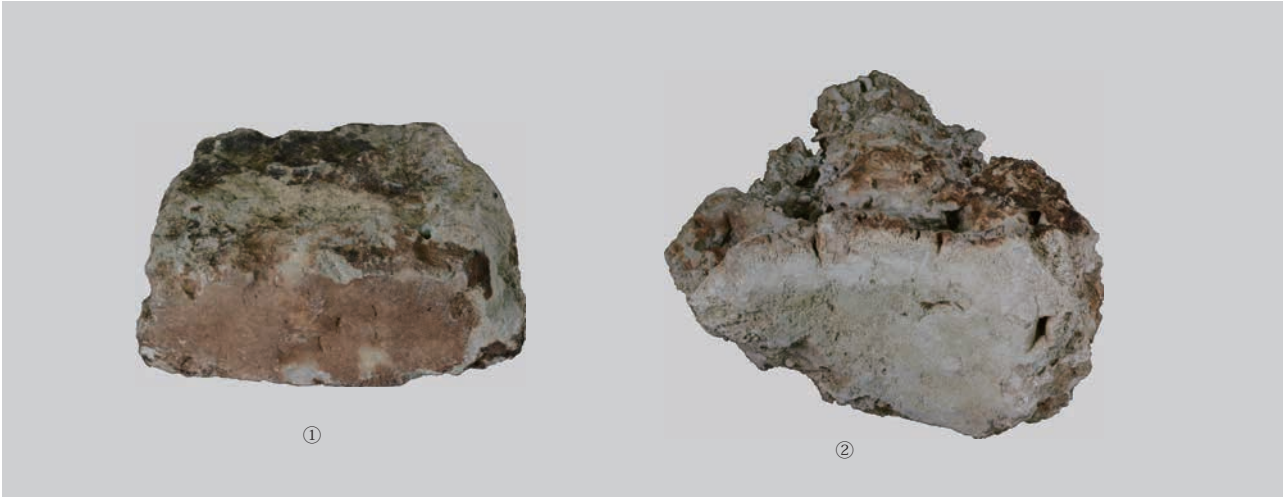
SE1 断ち割り（西から）

図版 46　エプロン地区 SE1 検出・半截・完掘・断ち割り状況

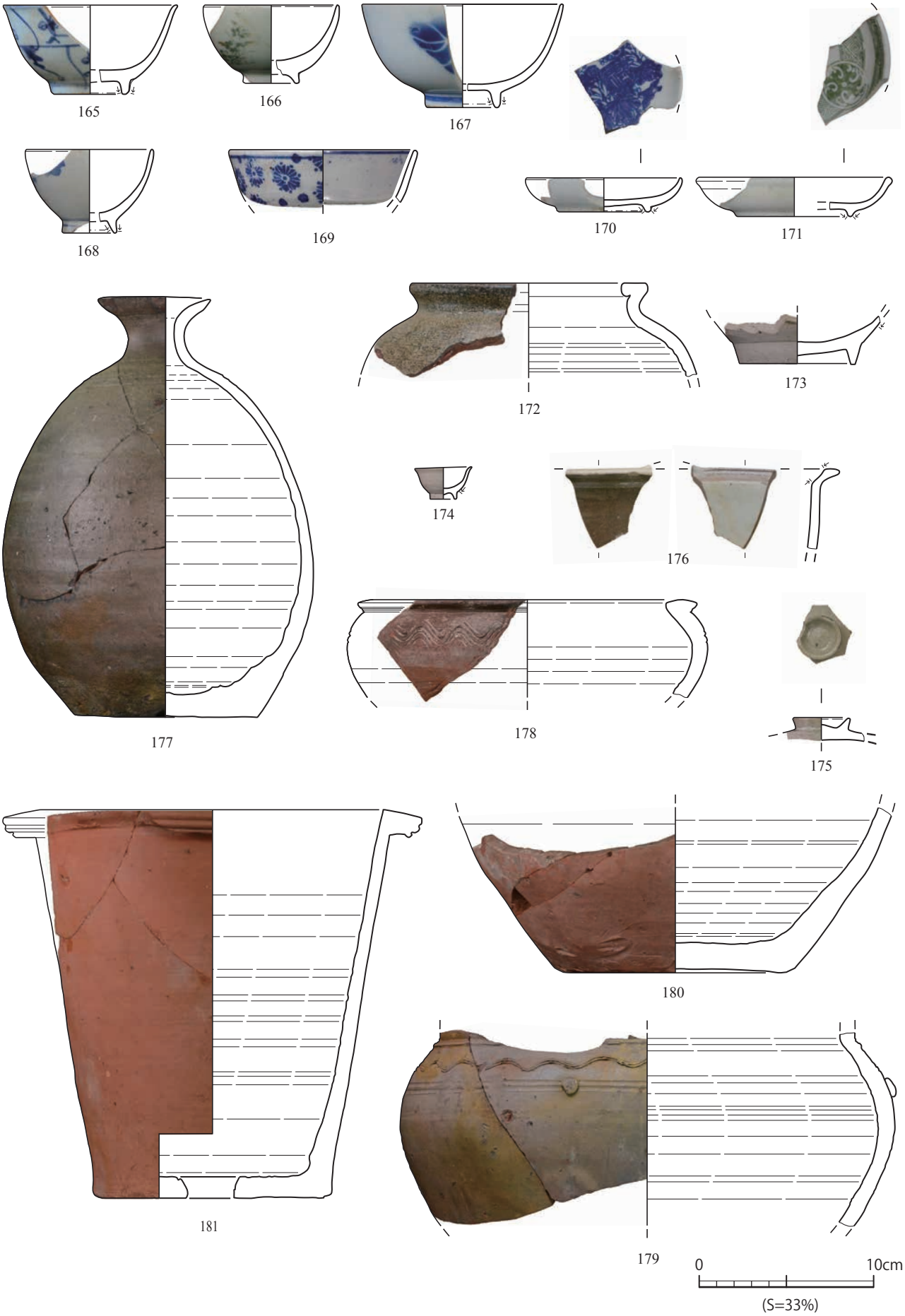
表 46　エプロン地区 SE1 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石製品	石造物	石材	金属製品	木製品	円盤状製品	ガラス製品	漆喰
エプロン	SE1	ね108	4	44	49	73	6	5	1	13	12	5	3	1	10	5

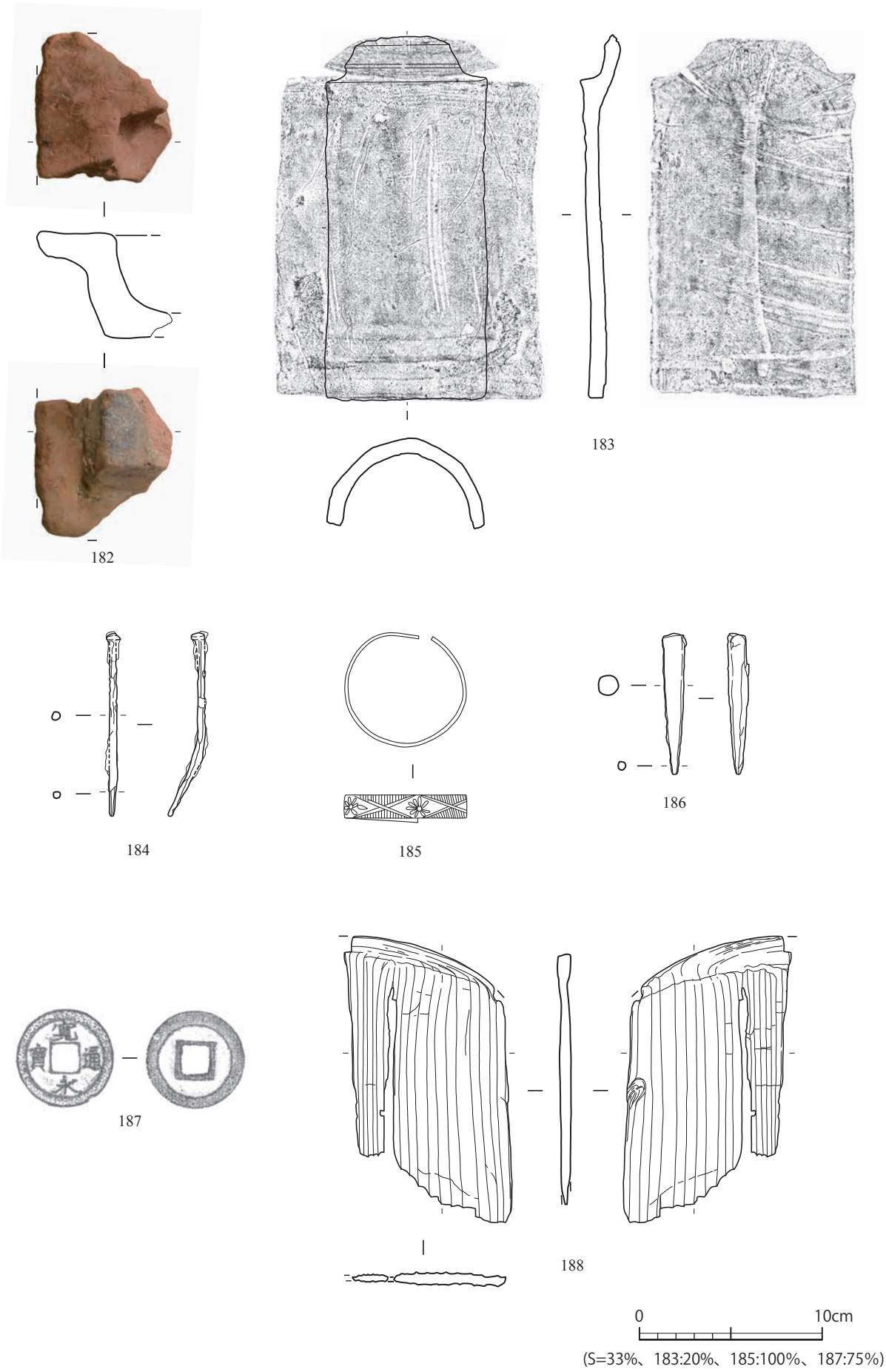
地区	遺構	グリッド	瓦	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	歯ブラシ	骨角牙製品	貝類	動物遺存体	合計
エプロン	SE1	ね108	889	27	1	2	1	227	8	1386



図版 47　エプロン地区 SE1 井筒石材 (S=10%)



第 69 図　エプロン地区 SE1 出土遺物 1



(S=33%、183:20%、185:100%、187:75%)

第 70 図　エプロン地区 SE1 出土遺物 2

表 47　エプロン地区 SE1 出土遺物観察表 1（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第69図 165	ね108 SE1	中国産陶磁器	碗	青花磁器	ロ～底	口径:9.8 器高:5.0 底径:4.4	35.87	畳付を釉剥ぎ	白色 緻密	外:青白色 内:青白色	内:圏線 内底:不明 外:仙芝祝寿文	−	あり	徳化系 18C後～19C	−
第69図 166	ね108 SE1	日本産陶磁器	碗	近代磁器	ロ～底	口径:7.6 器高:4.4 底径:3.2	24.99	型作り 畳付無釉	白色黒色粒含む	外:青磁 内:青磁	外:草花文	銅版摺り	なし	瀬・美 近代	−
第69図 167	ね108 SE1	日本産陶磁器	碗	近代磁器	ロ～底	口径:11.25 器高:5.8 底径:4.2	38.64	轆轤	白色緻密、ガラス質	外:透明 内:透明	外:草花文？、圏線	ゴム版	なし	瀬・美 近代	−
第69図 168	ね108 SE1	日本産陶磁器	碗	近代磁器	ロ～底	口径:7.2 器高:4.7 底径:3.0	24.53	轆轤 畳付釉剥ぎ	白色やや粗、黒色粒含	外:透明 内:透明	外:草花文、文字文	銅版摺り	なし	肥前か 近代	−
第69図 169	ね108 SE1	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口縁部	口径:10.6 器高:− 底径:−	15.59	轆轤	白色やや粗、黒色粒含	外:透明 内:透明	外:菊花文、圏線	ゴム版	なし	砥部 近代	−
第69図 170	ね108 SE1	日本産陶磁器	皿	近代磁器	ロ～底	口径:8.8 器高:1.9 底径:5.3	16.66	型作り 畳付泥漿付着	灰白色粗粒	外:透明 内:透明	内:草花文、福字文	銅版摺り	なし	瀬・美 近代	−
第69図 171	ね108 SE1	日本産陶磁器	皿	近代磁器	ロ～底	口径:11.0 器高:2.2 底径:6.4	17.05	畳付釉剥ぎ	灰白色粗粒	外:透明 内:透明	内:雷文、捻花文等	銅版摺り (緑色)	なし	瀬・美 近代	−
第69図 172	ね108 SE1	日本産陶磁器	壷	施釉陶器	口縁部	口径:13.35 器高:− 底径:−	72.70	轆轤 口唇部無釉	赤褐色砂混じり	外:褐釉 内:褐釉	なし	なし	なし	薩摩苗代川系 19c	−
第69図 173	ね108 SE1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:− 器高:− 底径:6.5	91.43	畳付・見込に砂付着	灰色/硬質	外:灰釉？	なし	−	−	−	−
第69図 174	ね108 SE1	沖縄産陶器	小杯	沖縄産施釉陶器	完形	口径:3.2 器高:1.8 底径:1.5	8.40	なし	白色/緻密	内外:透明	なし	−	−	近世 近代	−
第69図 175	ね108 SE1	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	撮部	屁端部径:− 袴端部径:− 器高:− 撮径:−	180.8	兜巾あり	灰色/緻密	外:灰釉	なし	−	−	−	−
第69図 176	ね108 SE1	沖縄産陶器	鍋	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:− 器高:− 底径:−	143.8	蓋受釉剥ぎ・砂付着	茶褐色	内:化粧土→透明 外:緑色	なし	−	−	−	−
第69図 177	ね108 SE1	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	略完形	口径:6.3 器高:23.6 底径:10.2	1508.63	なし	赤褐色	なし	肩部圏線3条	−	−	−	−
第69図 178	ね108 SE1	沖縄産陶器	水鉢	沖縄産無釉陶器	ロ～胴	口径:19.0 器高:− 底径:−	58.06	なし	赤褐色	なし	外面波形圏線	−	−	−	φ1.0cm台の石混入
第69図 179	ね108 SE1	沖縄産陶器	甕	沖縄産無釉陶器	胴部	口径:− 胴径:(推定・最大) 27.75 底径:−	483.33	轆轤	褐色緻密	なし	外:波形圏線、圏線など	施文線刻	なし	沖縄	巻貝痕圧あり
第69図 180	ね108 SE1	沖縄産陶器	壺もしくは甕	沖縄産無釉陶器	底部	口径:− 器高:− 底径:12.5	1147.88	なし	赤褐色	なし	なし	−	−	−	巻貝痕圧あり
第69図 181	ね108 SE1	沖縄産陶器	植木鉢	沖縄産無釉陶器	ロ～底	口径:23.5 器高:18.1 穴径:2.6 底径:13.4	749.98	轆轤	赤褐色	−	外:口縁に二重圏線	底部穿孔 外底糸切痕残	なし	沖縄	巻貝痕圧あり
第70図 182	ね108 SE1	瓦質土器	火炉 火取	陶質土器	−	口径:− 器高:− 底径:−	177.45	なし	外:赤褐色 内:黄褐色	なし	なし	−	−	沖縄	巻貝痕圧あり

表 48　エプロン地区 SE1 出土遺物観察表 2（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第70図 183	ね108 SE1 井筒	瓦	丸瓦	完形	最大長:320.15 最大幅:138.5 最大厚:13.0	1480.25	－	－	－	－	－	－	－	－
第70図 184	ね108 SE1 井筒	金属製品	釘	完形(変形)	最大長:94.2 最大幅:22.1 最大厚:7.8	6.0	鉄	－	なし	なし	なし	なし	なし	丸釘
第70図 185	ね108 SE1 井筒	金属製品	指輪	完形	最大長:4.1 最大幅:21.5 最大厚:0.7	1.4	銅	－	なし、鍛造	確認できず	花文、斜格子文、縦位条線	なし	なし	なし
第70図 186	ね108 SE1 井筒	金属製品	釘	完形	最大長:75.6 最大幅:11.9 最大厚:8.8	21.5	鉄	－	なし	確認できず	なし	なし	断面方形	舟釘
第70図 187	ね108 SE1 裏込井筒	金属製品	銭貨	完形	外径:24.3 最大厚:1.3	2,5	銅	－	なし	なし	なし	「寛永通宝」	なし	寛永通宝
第70図 188	ね108 SE1 井筒	木製品	木桶？	破片	最大長:15.4 最大厚:7 最大幅:90	19.4	－	－	切断	なし	なし	なし	－	－

図版 48　エプロン地区 SE1 出土遺物 1

（S= ① :50%、183 ～ 186・188:33%、187:75%、② ・ ③ :20%）

図版 49　エプロン地区 SE1 出土遺物 2 (S=10%)

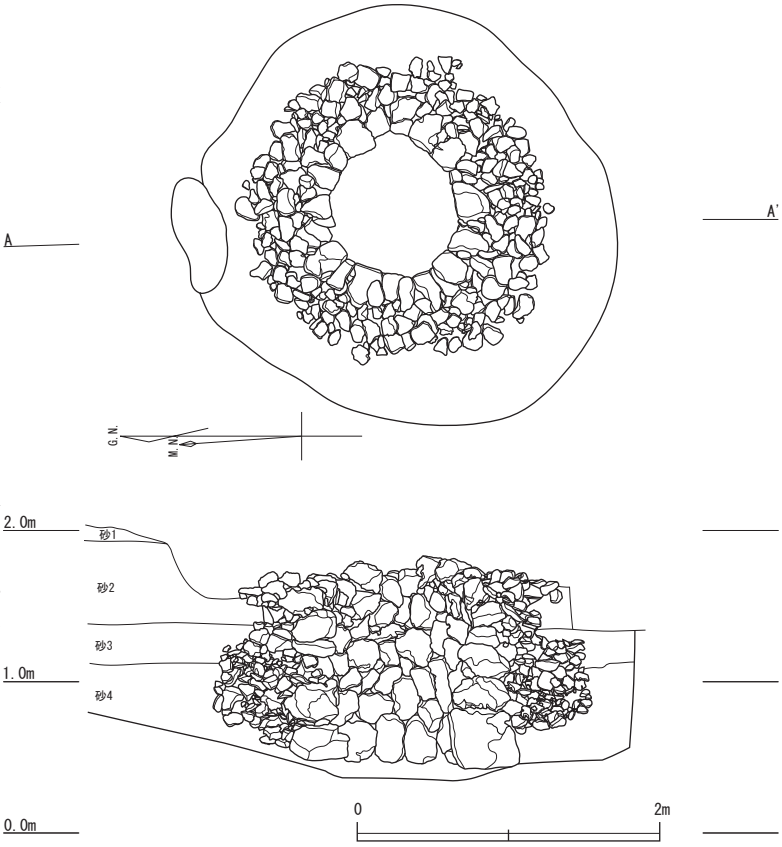
【ＳＥ２】

構　造　円形。周囲に井筒と同心円状の掘方があり、ほぼ垂直に掘削されている。掘削は SE1 と異なり島尻泥岩層（Ⅶ層）にまでは達していない。井筒側に面をもつ石と栗石を約 1 m積んで構築されているが、井筒の最上面は後世に削平を受けて失われている。井筒の石材には琉球石灰岩を主に、ほかにサンゴ石や海浜凝固物などが利用されている（図版 51）。直径 205㎝、深さ 146㎝。

覆　土　Ⅲ－３層が約 1 m以上堆積し、その中には近世・近代の様々な遺物を包含されていた。水気を常に含んだ状況にあり、井筒石材や一部の遺物はその影響により褐色に変色している（図版 50・51 ①・③、第 72 図 197・199）。最上面は SE1 と同様に拳大の礫で被覆される。

出土遺物　陶磁器には中国産（第 72 図 189 ～ 191）、日本産（同図 192 ～ 196）、沖縄産（同図 197 ～ 204）、ほかに瓦質土器（同図 205）や陶質土器がみられる。概ね近世・近代の資料だが、中国産には 15 世紀中頃の青磁（189）や 16 世紀の青花磁器（191）といったグスク時代に比定されるものが含まれる。

陶磁器以外には瓦（第 73 図 206・207）、引手金具（同図 211）などの金属製品、円盤状製品には略円形（208・210）、と方形（209）のものとが確認された。木製品には釘の残る木製の道具（第 73 図 212）や建築部材の一部（同図 213・214）が出土している。ガラス製品には、面取りされた大形のガラス瓶（同図 215）などがみられる。



第 71 図　エプロン地区 SE2 平面図・立体断面図（S=1/50）

検出状況（北西から）

半截状況（西から）

完掘状況（西から）

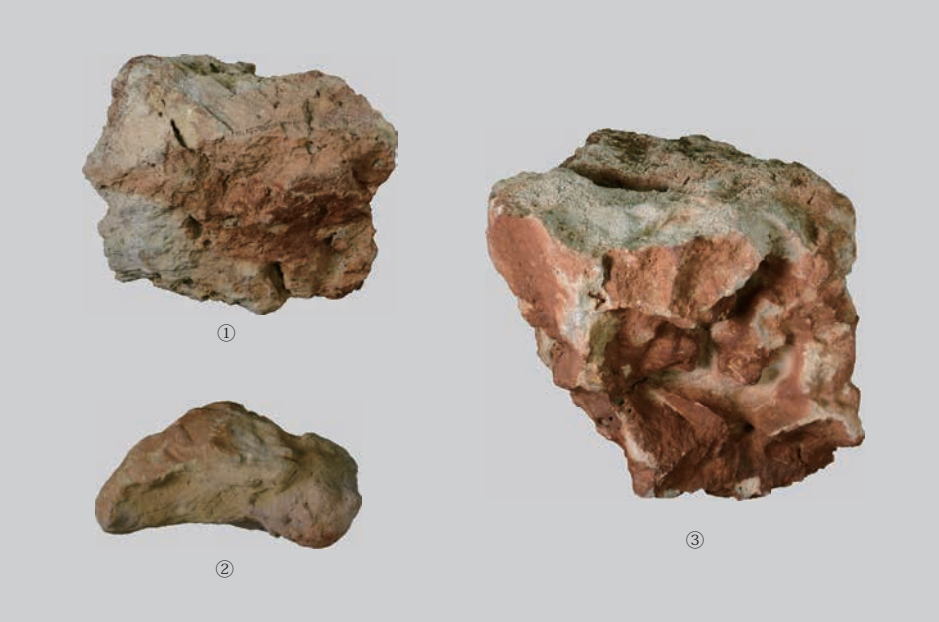
断ち割り状況（西から）

図版 50　エプロン地区 SE2 検出・半截・完掘・断ち割り状況

表 49　エプロン地区 SE2 出土遺物集計表

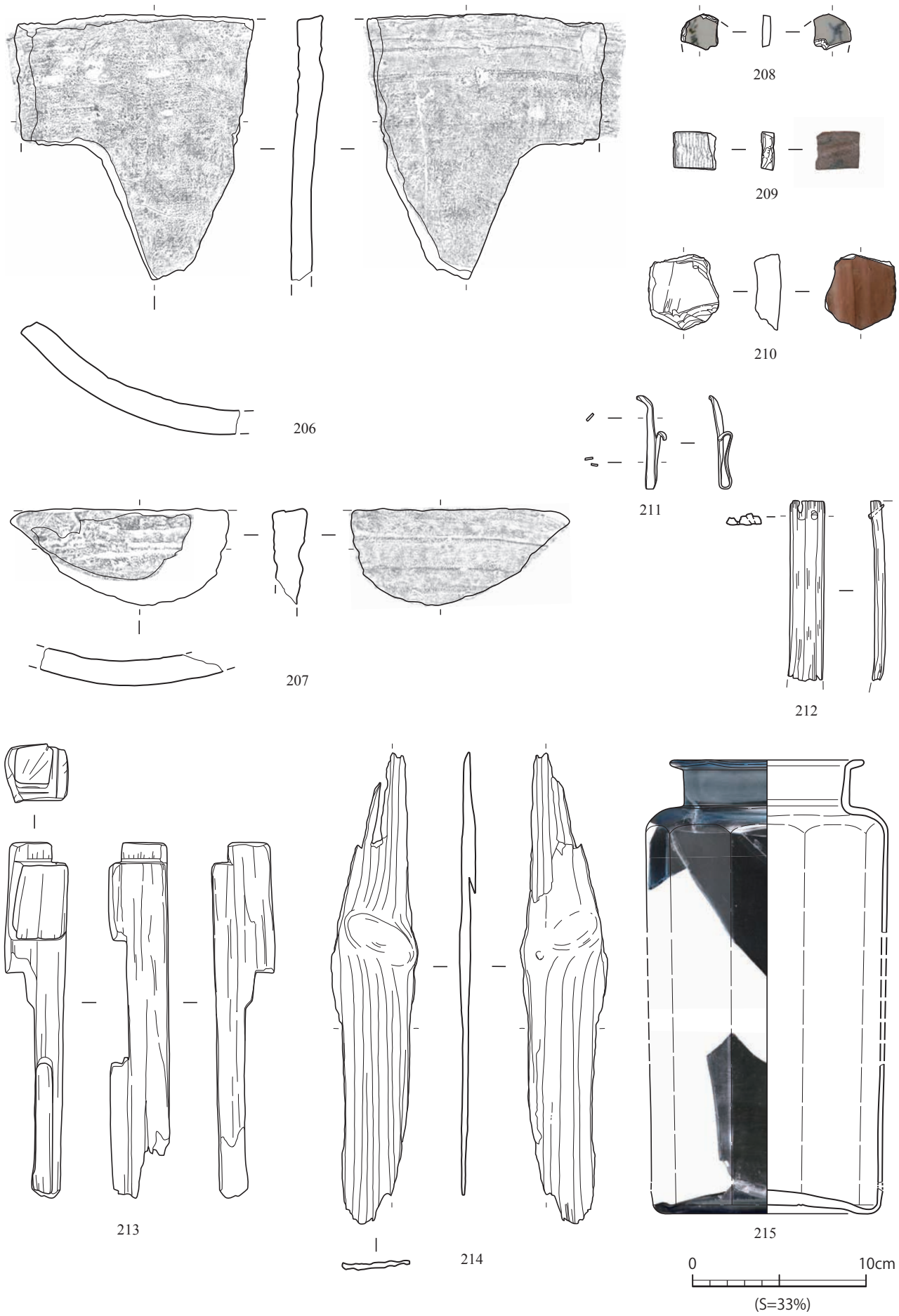
地区	遺構	グリッド	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石造物	石材	金属製品	木製品	木材	円盤状製品	ガラス製品	瓦
エプロン	SE2	ね108	7	48	104	72	78	9	19	25	11	11	4	8	56	475

地区	遺構	グリッド	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	貝類	動物遺存体	不明	合計
エプロン	SE2	ね108	1	1	589	32	2	1552

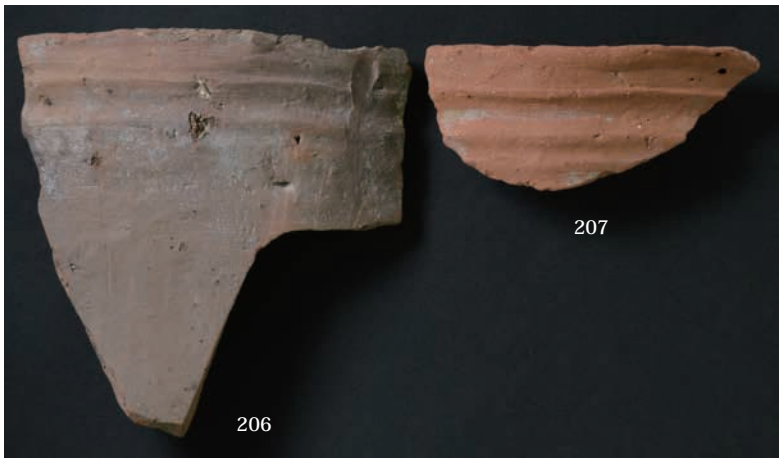


図版 51　エプロン地区 SE2 井筒石材 (S=10%)

第 72 図　エプロン地区 SE2 出土遺物 1



第 73 図　エプロン地区 SE2 出土遺物 2



図版 52　エプロン地区 SE2 出土遺物

表 50　エプロン地区 SE2 出土遺物観察表 1（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第72図 189	ね108 SE2	中国産陶磁器	碗	青磁	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	7.26	口唇部を釉剥ぎ	灰白色	両面オリーブ灰色	なし	－	なし	龍泉 15c中	－
第72図 190	ね108 SE2	中国産陶磁器	碗	青花磁器	口縁部	口径:14.0 器高:－ 底径:－	6.95	－	灰白色緻密	外:透明 内:透明	外:草花文	－	なし	徳化 18c	－
第72図 191	ね108 SE2	中国産陶磁器	皿	青花磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:2.2	9.38	碁笥底、畳付は釉剥ぎ	灰白色緻密	外:青白色 内:青白色	内:有り	－	なし	景徳鎮 16c	－
第72図 192	ね108 SE2	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～底	口径:11.4 器高:4.55 底径:4.2	67.97	畳付釉剥ぎ 内底目跡有り 兜巾あり	白色粗粒	外:透明 内:透明	外:草花文、獅子	銅版摺り	なし	砥部？近代	－
第72図 193	ね108 SE2	日本産陶磁器	皿	近代磁器	一部欠損	口径:13.35 器高:2.9 底径:8.15	192.93	外底:蛇の目状釉剥ぎ、碁笥底	灰色、黒色粒含	外:透明 内:透明	外:草花文、圏線 内:鹿子地、笹、環状松竹梅等	型紙摺り	なし	砥部 近代	－
第72図 194	ね108 SE2	日本産陶磁器	碗	青磁	口～底	口径:8.6 器高:4.0 底径:3.0	26.29	外底無釉	灰白色やや粗	外:クロム青磁 内:クロム青磁	外:飛鉋	なし	なし	瀬・美 近代	－
第72図 195	ね108 SE2	日本産陶磁器	杯	白磁	底部	口径:－ 器高:－ 底径:2.6	9.54	畳付釉剥ぎ 内底目跡あり	白色緻密、黒色粒含	外:薄青色 内:透明	なし	なし	なし	肥前 不明	－
第72図 196	ね108 SE2	日本産陶磁器	皿	施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:7.1	11.08	なし	白色	外:瑠璃釉 内:瑠璃釉	なし	なし	外底:「5・」	不明	－
第72図 197	ね108 SE2	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:13.6 器高:6.8 底径:6.0	47.08	見込蛇の目	褐色/粗粒	内外:灰釉	濃緑、黄帯	－	－	－	外面赤色に変色

表 51　エプロン地区 SE2 出土遺物観察表 2（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第72図198	ね108 SE2	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:12.0 器高:6.0 底径:6.0	91.41	見込蛇の目・畳付アルミナ塗付、兜巾あり	灰色/硬質	内:透明 外:透明釉の上にコバルト色	なし	－	－	－	－
第72図199	ね108 SE2	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:6.4	118.33	見込に鉄釉で丸文	赤褐色/粗粒	内:灰釉 外:鉄釉	なし	－	－	－	赤色に変色、土中で鉄分が付着?
第72図200	ね108 SE2	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	甲～袴	屁端部径:6.5 袴端部径:5.0 器高:－ 撮径:－	9.68	なし	卵黄灰色/軟質	外:瑠璃釉	草花文	－	－	－	－
第72図201	ね108 SE2	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	撮～袴	屁端部径:12.2 袴端部径:7.0 器高:4.2 撮径:3.8	117.32	外面蛇の目状釉剥ぎ	卵黄灰色/粗粒	外:鉄釉	なし	－	－	－	－
第72図202	ね108 SE2	沖縄産陶器	壺	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:7.4 器高:－ 底径:－	15.55	なし	灰色/硬質	内外:褐釉	なし	－	－	－	口唇部、釉剥ぎ
第72図203	ね108 SE2	沖縄産陶器	急須	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:8.0 器高:－ 底径:－	25.55	耳付・注口部の痕あり	淡橙色/軟質	内外:鉄釉	耳に沈線	－	－	－	－
第72図204	ね108 SE2	沖縄産陶器	水注	沖縄産施釉陶器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	46.20	なし	灰白色/硬質	外:灰釉	トビカンナの後、象嵌	圏線	－	－	－
第72図205	ね108 SE2	瓦質土器	火炉？	－	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	145.48	轆轤、突起部貼付	赤褐色	なし	なし	なし	なし	沖縄不明	貝圧痕あり

表 52　エプロン地区 SE2 出土遺物観察表 3（陶磁器以外）

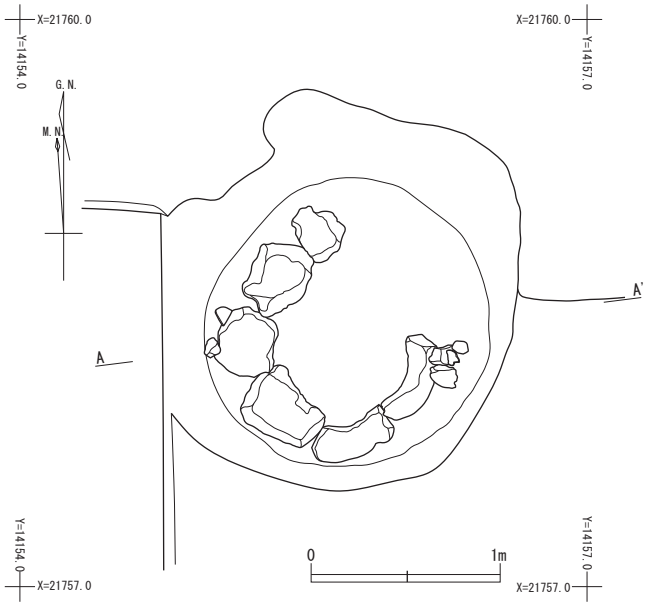
掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第73図206	ね108 SE2 井筒裏込	瓦	平瓦	一部欠損	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:12	294.47	胎土:赤褐色	広端部	布目痕	なし	なし	なし	－	貝混入
第73図207	ね108 SE2 井筒	瓦	平瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:	100.14	胎土:赤褐色砂混じり	広端部	布目痕	なし	なし	なし	－	貝混入
第73図208	ね108 SE2 井筒	円盤状製品	略円形	欠損	外径:20.5 最大厚:4.5	2.5	中国産青花	底部	打剥/両	－	－	外面:文字	－	－
第73図209	ね108 SE2 井筒	円盤状製品	方形	完形	最大長:24.0 最大短:21.5 最大厚:0.7	5.9	沖縄産無釉陶器	胴部	打剥/外・研磨	－	－	－	擂鉢	方形
第73図210	ね108 SE2 井筒	円盤状製品	略円形	完形	外径:41.0 最大厚:15.0	28.9	瓦	－	打剥/両	－	－	－	平瓦	－
第73図211	ね108 SE2 井筒	金属製品	引手金具	完形(変形)	最大長:53.4 最大幅:18.2 最大厚:1.4	3.7	青銅	－	なし、鍛造	なし	なし	なし	なし	なし
第73図212	ね108 SE2 井筒	木製品	不明	一部欠損	最大長:101.5 最大厚:6 最大幅:20	3.4	－	－	穿孔	－	なし	なし	釘残	－
第73図213	ね108 SE2 井筒	木製品	不明	破片	最大長:200 最大厚:34 最大幅:37	51.9	－	－	鋸痕	なし	なし	なし	－	－
第73図214	ね108 SE2 井筒	木製品	木桶？	破片	最大長:265 最大厚:8 最大幅:49	14.6	－	－	切断	なし	なし	なし	－	－
第73図215	ね108 SE2 井筒	ガラス製品	瓶	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:－	300	青色ガラス	胴～底	なし	なし	なし	なし	なし	面取瓶

【ＳＥ３】

構　　造　円形。周囲に井筒と同心円状の掘方があるが、掘削は SE2 と同様に島尻泥岩層（Ⅶ層）にまでは及ばない。また井筒はほとんど失われており、底部の 1 段のみ残存する。残された石材は細粒砂岩（図版 55 ①）とサンゴ石（同②）で、特に①は SE1・2 と異なり筒状に加工されている。直径 194㎝、深さ 146㎝。

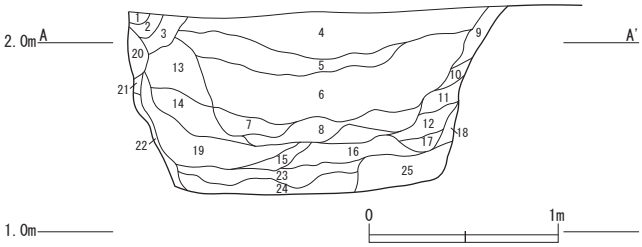
覆　　土　Ⅳ層に類似する砂層が井筒を埋め、その中には近世・近代の様々な遺物を包含している。井筒は約 1 mほど下に堆積。また、最上面は一部 SK1 に切られるため、少なくとも SK1 形成以前には廃絶されたとみられる。

出土遺物　陶磁器には中国産（第 76 図 216 ～ 219）・沖縄産（同図 220 ～第 77 図 231）、ほかに沖縄産の陶質土器（第 77 図 232 ～ 234）や器種不明の瓦質土器（同図 235）が出土している。年代は近世で、近代の日本産陶磁器は最上面を除いて認められない。陶磁器以外には簪（第 77 図 236）や寛永銭（同図 237）といった金属製品が出土している。



第 74 図　エプロン地区 SE3 平面図（S=1/40）

図版 53　エプロン地区 SE3 完掘状況（北から）



第 75 図　エプロン地区 SE3 北壁断面図（S=1/40）

図版 54　エプロン地区 SE3 半截状況（南から）

表 53　エプロン地区 SE3 出土遺物集計表

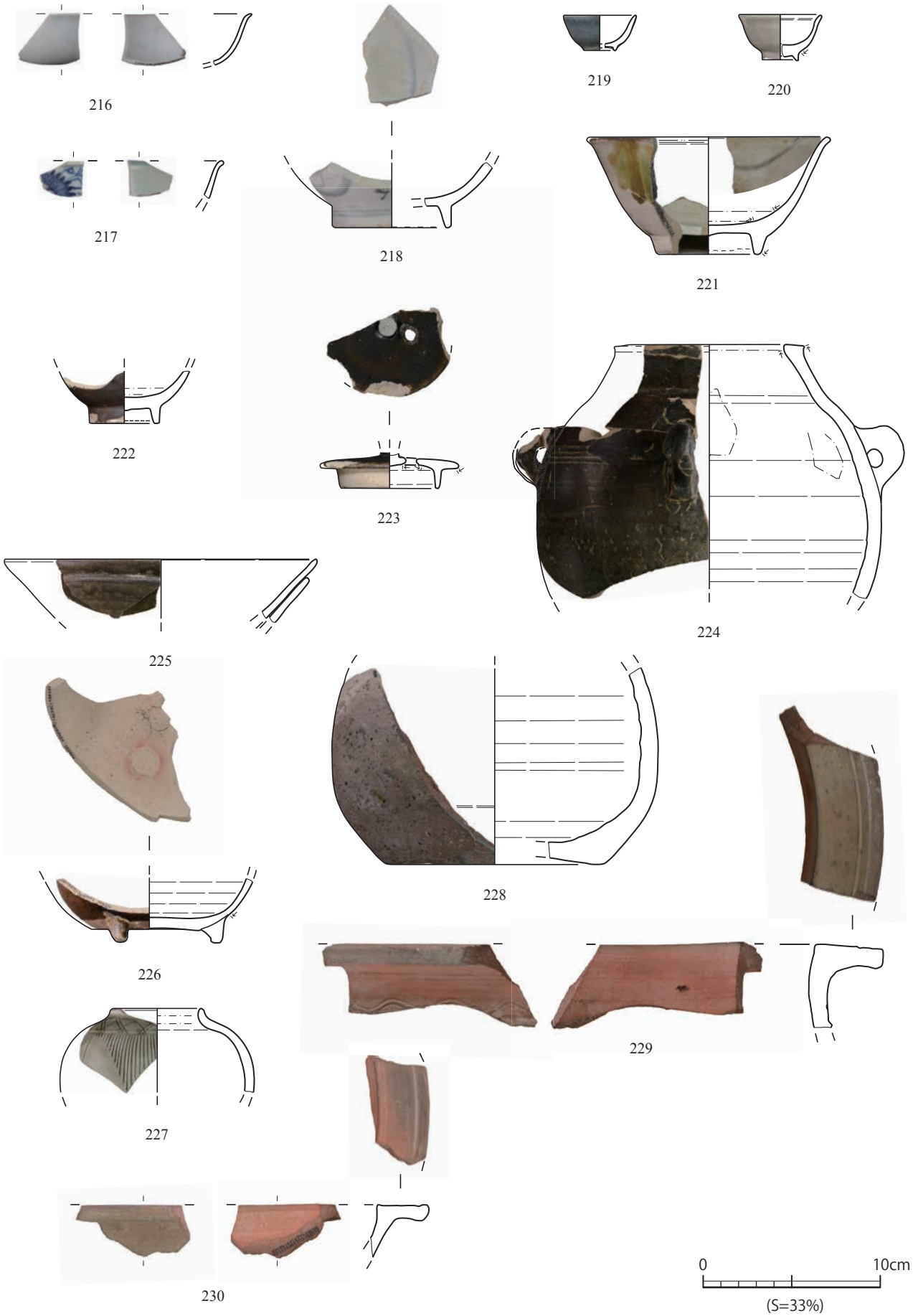
地区	遺構	グリッド	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石造物	石材	金属製品	木材	円盤状製品	ガラス製品	瓦	貝類
エプロン	SE3	ね108	20	2	189	73	160	2	6	29	3	8	3	1	11	318

地区	遺構	グリッド	動物遺存体	不明	合計
エプロン	SE3	ね108	45	3	873

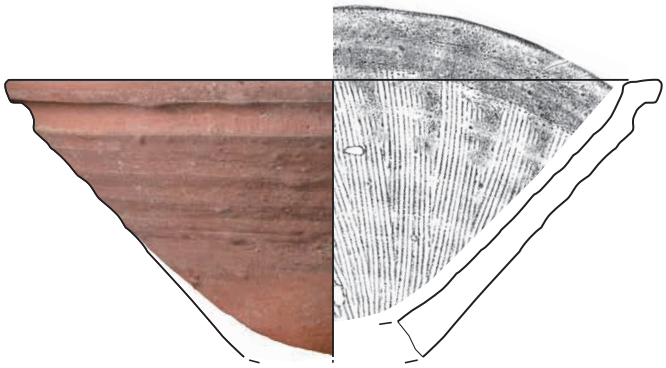
表 54　エプロン地区 SE3 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SE3	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	SK1埋土。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	土質は1層と同じ。ただしサンゴ礫が密に混じる。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	1層と同質。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	赤色小ブロック・貝片多く混じる。沖無等を多く含む。
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや弱	土質は4層同様だが、4層に比してしまりはやや弱く、赤色小ブロックも少ない。
	6	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	有	有	貝片まばらに混ざる。遺物量は少。
	7	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	強	弱	炭・赤土ブロック混じる。
	8	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	強	弱	7層とほぼ同質だが、炭は含まず赤土ブロックは多。
	9	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	貝片・サンゴ片まばらに含む。
	10	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	有	弱	
	11	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	富	弱	10層とほぼ同質だが、粘性に富み、赤色ブロックが多く混じる。
	12	2.5Y4/6	オリーブ褐色	砂	富	弱	やや粗砂層。赤土ブロック密。沖無等を含む。
	13	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	有	貝片まばら。近代磁器等まばら。
	14	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	赤土小ブロックまばらに含む。
	15	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	富	弱	赤色小ブロック含む。
	16	2.5Y5/3	黄褐色	砂	有	弱	赤色小ブロック・小貝片含む。
	17	2.5Y5/3	黄褐色	砂	富	やや有	赤土ブロック・小貝片・礫・沖無等含む。
	18	2.5Y4/1	黄灰色	砂			11と17層の混層。
	19	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	弱	やや有	赤土小ブロックを多く含む。沖施等含む。
	20	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	有	貝片・サンゴ片多量に混じる。陶質土器含む。
	21	2.5Y5/4	黄褐色	砂	弱	弱	
	22	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	弱	弱	貝片・サンゴ片混じる。
	23	2.5Y4/1	黄灰色	砂	有	弱	貝片・礫片・赤土ブロック多く混じる。沖施・ガラス片等多く含む。
	24	2.5Y4/1	黄灰色	砂	有	弱	23層とほぼ同質だが、混入物を含まない。沖施等まばらに含む。
	25	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	弱	貝小片(タニシ等も含)混じる。

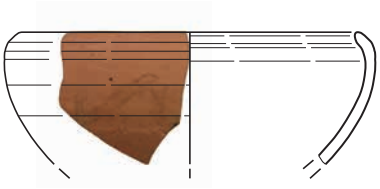
図版 55　エプロン地区 SE3 井筒石材（S=10%）



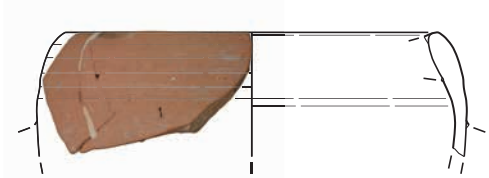
第 76 図　エプロン地区 SE3 出土遺物 1



231

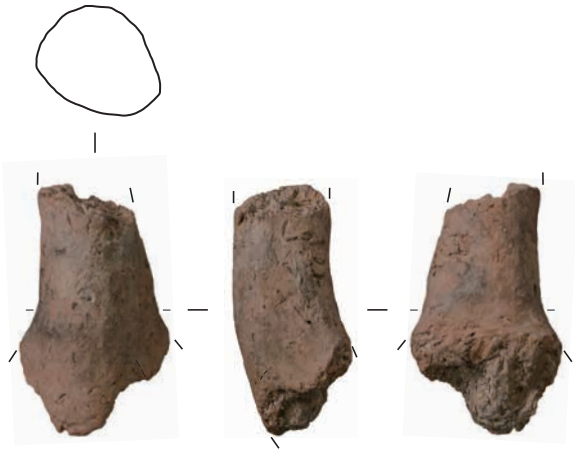


232

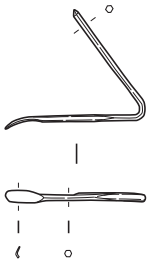


233

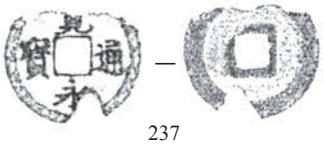
234



235



236



237

0　10cm

(S=33%、237のみ75%)

第 77 図　エプロン地区 SE3 出土遺物 2

236

237

図版 56　エプロン地区 SE3 出土遺物（左：S＝50%、右：S＝75%）

表 55　エプロン地区 SE3 出土遺物観察表 1（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第76図 216	ね108 SE3	中国産陶磁器	皿	白磁	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	5.06	口縁部を釉剥ぎ	白色　緻密	外:透明 内:透明	なし	-	-	徳化 19c	-
第76図 217	ね108 SE3	中国産陶磁器	碗	青花磁器	口縁部	口径: 器高: 底径:	2.39		灰白色緻密	外:透明 内:透明	外:花唐草文	-	-	景徳鎮 18c後～19c	-
第76図 218	ね108 SE3	中国産陶磁器	碗	青花磁器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.6	23.79	畳付は釉剥ぎ	白色　緻密	外:灰白色 内:灰白色	外:丸文＋折枝文	-	-	徳化 18c	-
第76図 219	ね108 SE3	中国産陶磁器	杯	磁器	口～底	口径:4.0 器高:1.95 底径:1.8	6.95	口唇部を釉剥ぎ	灰白色緻密	外:瑠璃釉 内:瑠璃釉	なし	-	-	徳化 18c～19c	-
第76図 220	ね108 SE3	沖縄産陶器	杯	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:4.6 器高:2.5 底径:2.0	9.63	なし	灰白色/緻密	内外:透明	なし	-	-	-	-
第76図 221	ね108 SE3	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:13.4 器高:6.5 底径:5.8	113.29（復元込み）	見込蛇の目・見込畳付アルミナ	灰白色/粗粒	内外:透明	口縁緑褐釉	-	-	-	-
第76図 222	ね108 SE3	沖縄産陶器	小碗	沖縄産施釉陶器	胴～底	口径:- 器高:- 底径:3.9	26.31	見込蛇の目・畳付アルミナ・兜巾あり	灰-黄灰色/軟質	内:透明 外:鉄釉	なし	-	-	-	-
第76図 223	ね108 SE3	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	屁～袴	屁端部径:7.6 袴端部径:5.5 器高:- 撮径:-	24.11	なし	灰-黄灰色/粗粒	黒釉	なし	-	-	-	-
第76図 224	ね108 SE3	沖縄産陶器	油壺	沖縄産施釉陶器	口～胴	口径:10.5 器高:- 底径:-	218.04	なし	淡橙色/軟質	内外:褐色	なし	-	-	-	-
第76図 225	ね108 SE3	沖縄産陶器	鉢	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:17.3 器高:- 底径:-	24.91	なし	灰色/粗粒	内外:灰釉	なし	-	-	-	外面に別個体が溶着
第76図 226	ね108 SE3	沖縄産陶器	急須	沖縄産施釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.0	41.18	内底重焼痕・底部ナデ	黄灰色/粗粒	外:褐釉	なし	-	-	-	有脚？
第76図 227	ね108 SE3	沖縄産陶器	急須	沖縄産施釉陶器	口～胴	口径:5.2 器高:- 底径:-	21.86	なし	灰色/緻密	内:白化粧 外:白化粧→透明	外:斜格子文・縦位条線文	-	-	-	-
第76図 228	ね108 SE3	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	胴～底	口径:- 胴径:18.0 底径:12.0	177.98	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-	巻貝痕圧あり
第76図 229	ね108 SE3	沖縄産陶器	甕	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	142.91	なし	赤褐色	なし	外頸波形圏線・口唇二重圏線	-	-	-	-
第76図 230	ね108 SE3	沖縄産陶器	鉢	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	32.96	なし	赤褐色	なし	口唇圏線	-	-	-	-
第77図 231	ね108 SE3	沖縄産陶器	擂鉢	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:26.0 器高:- 底径:-	388.50	なし	暗赤褐色	なし	なし	なし	なし	沖縄	巻貝痕圧あり
第77図 232	ね108 SE3	陶質土器	鉢	沖縄産陶質土器	口縁部	口径:13.4 器高:- 底径:-	20.30	なし	明赤褐色/銀雲母混	なし	外面:圏線	-	-	沖縄	-
第77図 233	ね108 SE3	陶質土器	火炉火取	沖縄産陶質土器	口縁部	口径:14.8 器高:- 底径:-	37.88	なし	赤褐色雲母混	なし	外面:圏線	施文線刻	なし	沖縄	不明圧痕あり
第77図 234	ね108 SE3	陶質土器	鍋	沖縄産陶質土器	把手	口径:21.4（推定） 器高:- 底径:-	28.10	なし	明赤褐色	なし	なし	-	-	沖縄	-
第77図 235	ね108 SE3	瓦質土器	不明			口径:- 器高:- 底径:-	171.73	ミガキ、多面体	褐色	なし	なし	なし	なし	湧田？近世？	イネ籾圧痕あり

表 56　エプロン地区 SE3 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)

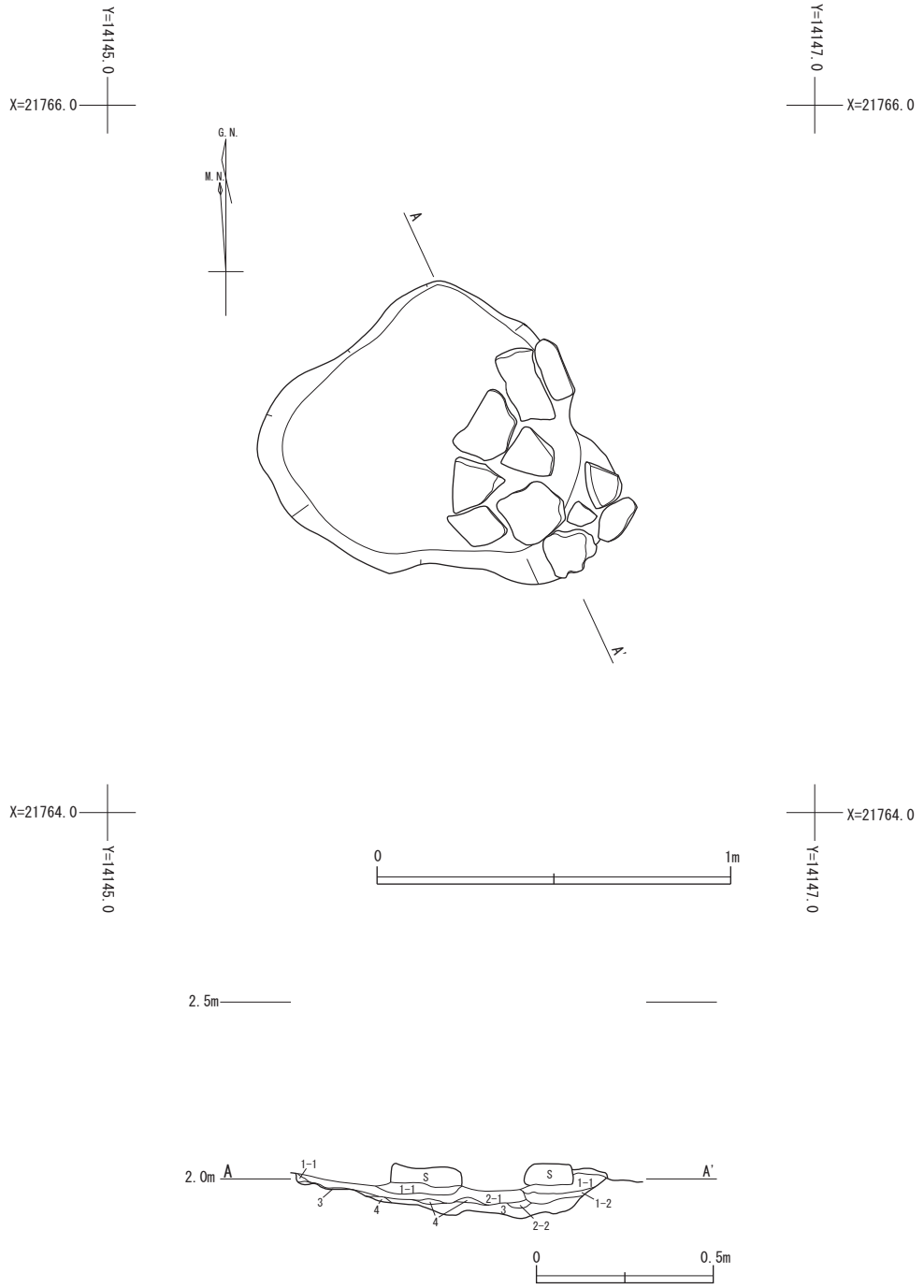
掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第77図 236	ね108 SE3	金属製品	簪	完形(変形)	最大長:55.0 最大幅:54.0 最大厚:5.0	3.6	銅	-	なし、鍛造	なし	なし	なし	茎部断面六角形	男性用副簪(押差)
第77図 237	ね108 SE3	金属製品	銭貨	一部欠損	外径:23.5 最大厚:1.0	2.3	銅	-	なし	なし	なし	「寛永通宝」	なし	寛永通宝

【ＳＬ１】

構　造　略円形。上部は平板状の細粒砂岩が敷かれ集石をなす。これら石と石の間や石の下には、平面形が方形となる黒色の砂層が堆積する。

覆　土　集石の下には黒色の砂層が、断面すり鉢状に堆積。集石付着炭化物及び黒色砂層中の炭化物から理化学年代が約 200 年前の前後という測定値が得られたことにより、近世・近代の遺構であることが分かった。

出土遺物　なし。



第 78 図　エプロン地区 SL1 平面図・断面図（S=1/20）

図版 57　エプロン地区 SL1 検出状況（南から）

図版 58　SL1 半截状況（西から）

表 57　エプロン地区 SL1 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SL1	1-1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘質土	強	強	琉球石灰岩小礫(φ1.0㎜)。赤土ブロック混じる。2層も混じる。
	1-2	2.5Y5/2	暗灰黄色	土			1-1層と2層の混土層。白磁・土器片・陶質土器？あり。
	2-1	2.5Y3/2	黒褐色	土	やや強	有	炭・焼土・被熱小骨片・貝片混じる。
	2-2	—	—	土/砂			2-1層と3層の混土層。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	やや有	やや有	細粒。炭化物ブロック(1㎜大)混じる。
	4	2.5Y7/1	灰白色	硬化砂	なし		表面硬質。上面は2-1層の土色がうつる。
	5	2.5Y7/3	浅黄色	砂	やや有	やや有	細粒。ニービ砂混じる。地山か。

表 58　エプロン地区 SL1 出土遺物集計表

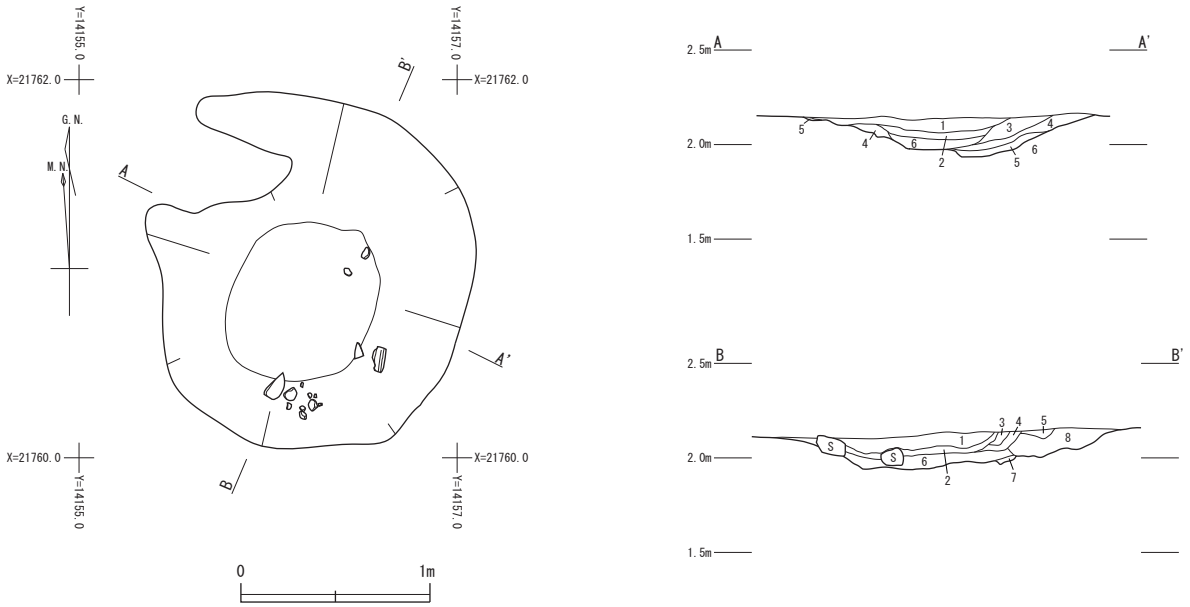
地区	層位	グリッド	外国産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石材	瓦	貝類	合計
エプロン	SL1	ね107	1	1	1	1	3	2	3	12

【ＳＬ２】

構　　造　略円形。ただし炭層は鍵穴状で中央部に向かって断面すり鉢状。

覆　　土　検出面はⅡ層が堆積、その下は炭と砂層が互層をなして堆積する。最下面はⅤ層の白砂層が検出されたが、中央部は被熱等の影響から硬く締まる。

出土遺物　陶磁器には日本産や瓶（第 80 図 238）をはじめとする沖縄産、ほかに陶質土器がみられる。年代は概ね近代頃が主体。陶磁器以外では石製品やガラス製品、木材などがあるが、金属製品が多くみられた。



第 79 図　エプロン地区 SL2 平面図・断面図 (S=1/40)

図版 59　エプロン地区 SL2 2層（炭層）
検出状況（東から）

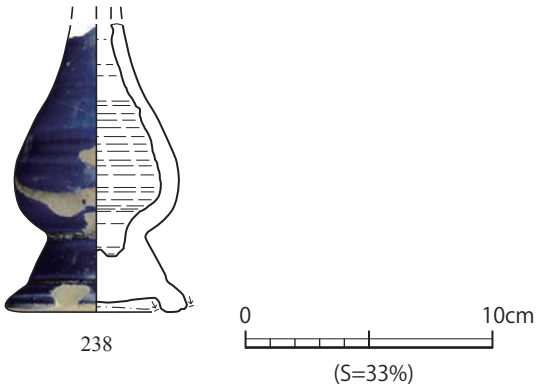
図版 60　エプロン地区 SL2 南西側ベルト断面
（南西から）

表 59　エプロン地区 SL2 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SL2	1	10YR5/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	金属片(鉄)が混ざる。
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	弱	やや有	すじ状の炭が約50%混ざる。
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	やや有	2層より粘性があり、しまりもない。炭もすじ状に部分的に入るが、約5%。一部、黄褐色砂30%にぶい黄褐色砂と互層状の範囲あり(3-2層)。
	4	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	有	
	5	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	中	やや有	約1cmのクチャ粒が混ざる。
	6	2.5Y5/4	黄褐色	砂	中	強	
	7	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	強	部分的に明黄褐色砂質土がブロック状に混じる。
	8	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	上層の土がしみ出して有色化した層。
	9	10YR5/4	にぶい黄褐色	土	弱	有	SL1に関連するPitと考えられる。
	10	—	—	白砂			
	11	—	—	白砂			硬化した面。

表 60　エプロン地区 SL2 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	本土産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石製品	石造物	石材	金属製品	木材	ガラス製品	瓦	貝類	合計
エプロン	SL2	ね107	2	6	11	3	1	1	9	14	1	7	10	36	101



第 80 図　エプロン地区 SL2 出土遺物

表 61　エプロン地区 SL2 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾 釉薬	装飾 文様	装飾 その他	印・銘	産地年代	備考
第80図 238	ね107 SL2	沖縄産陶器	瓶	沖縄産施釉陶器	胴～底	口径:- 器高:- 底径:7.2	202.00	底部にアルミナ付着	灰-黄灰色/硬質	内:露胎 外:コバルト色	なし	-	-	-	-

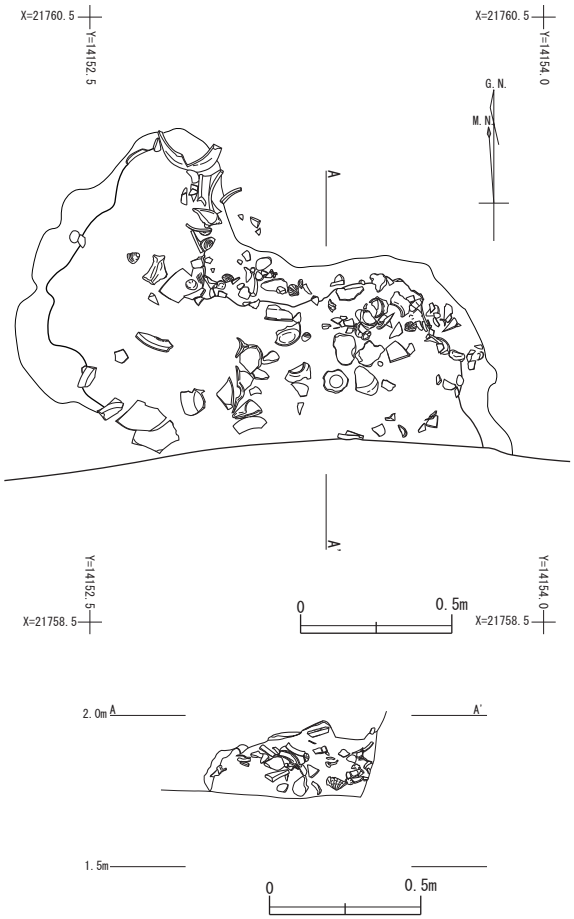
【ＳＫ１】

構　　造　平面は不定形だが、断面は略方形。

覆　　土　覆土はⅡ層が堆積、その下は遺物が集中し、その隙間をⅣ－１層の砂層が埋める。以上の状況からは、当時遺物が露出した状態だったとみられる。

出土遺物　陶磁器には中国産（第 82 図 239 ～ 241）、日本産（同図 242）、沖縄産（同図 243 ～第 83 図 258）がみられ、ほかに陶質土器（第 84 図 259 ～ 266）がみられる。年代は近代が主体である。これらの陶磁器は破片の状態で多量に出土したが、接合によって完形もしくは一部欠損の状態まで復元できた資料も多い。陶磁器以外には土製品（第 84 図 267）、近代瓦（第 85 図 268）、中国産青花磁器を素材とする円盤状製品（同図 269）、銭貨には寛永通宝（同図 270）、石製品に軽石製砥石（同図 271）、貝製品の可能性のある資料（図版 62）などがみられる。ほかに貝・骨などの食糧残滓やそれに寄生した陸棲貝も多数確認される。

備　　考　出土遺物とその接合状況から、廃棄土坑と理解される。



第 81 図　エプロン地区 SK1 平面図・断面図 (S=1/25)

検出状況（北から）

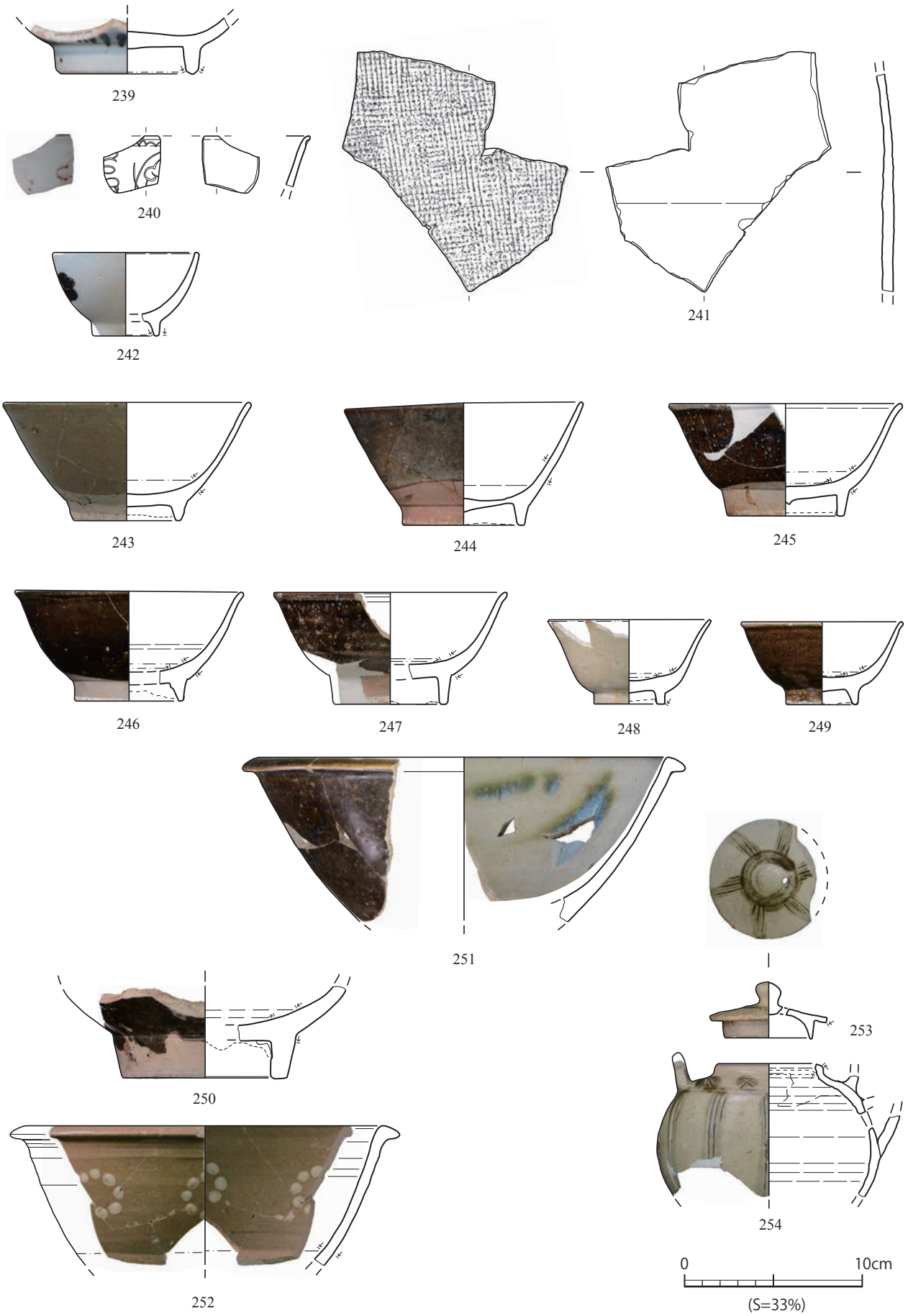
半截状況（西から）

図版 61　エプロン地区 SK1 遺物検出・半截状況

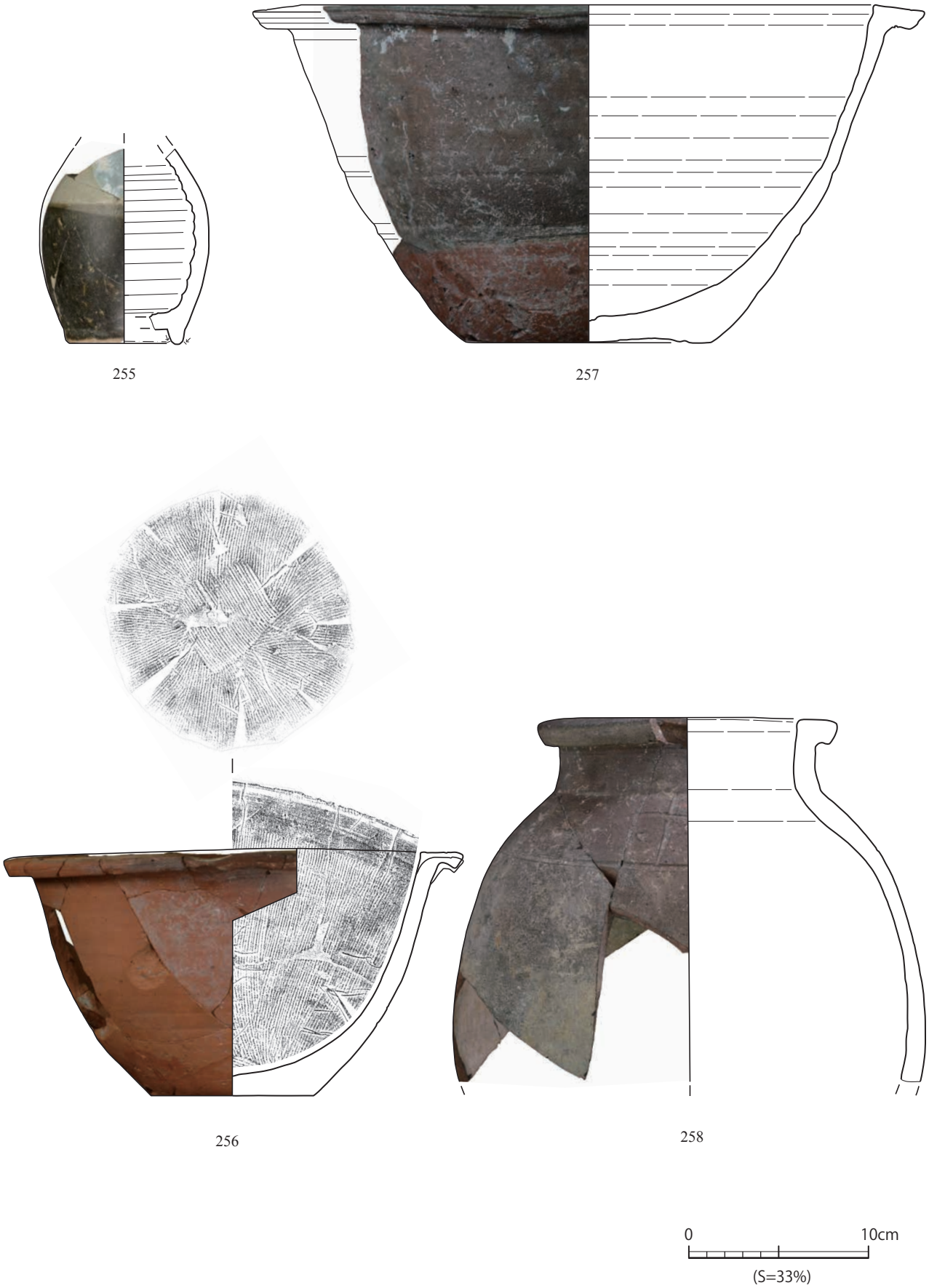
表 62　エプロン地区 SK1 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	グスク土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石製品	石材	金属製品	木材	円盤状製品	ガラス製品	土製品
エプロン	SK1	ね107		3	6	52	45	145	7		1				1	
		ね108	1	15	2	194	80	731	10	1	16	5	1	2	3	1
合計			1	18	8	246	125	876	17	1	17	5	1	2	4	1

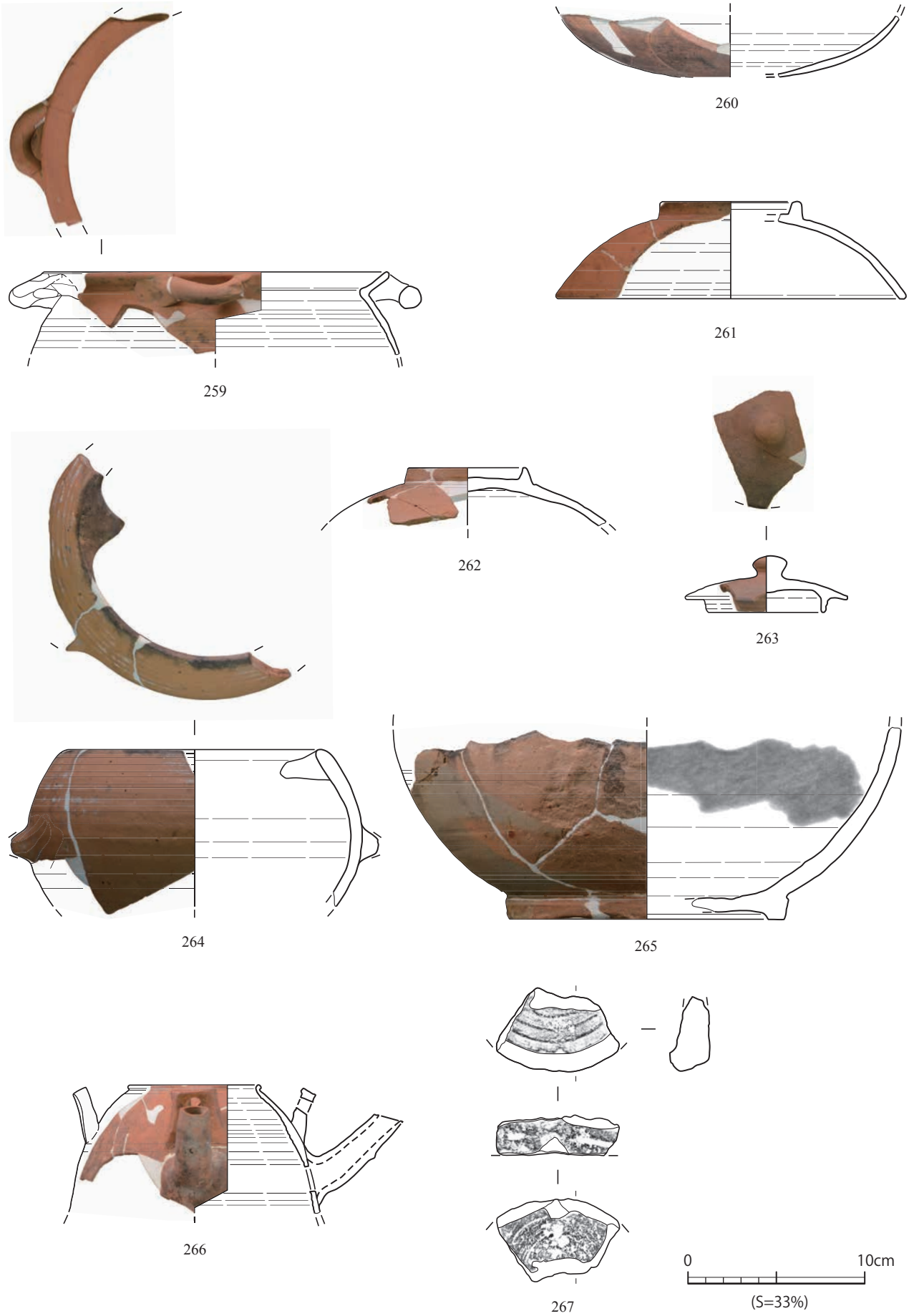
地区	遺構	グリッド	漆喰	瓦	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	貝類	動物遺存体	不明	合計
エプロン	SK1	ね107	2	17	8		28	28	1	344
		ね108		10		1	698	78		1849
合計			2	27	8	1	726	106	1	2193



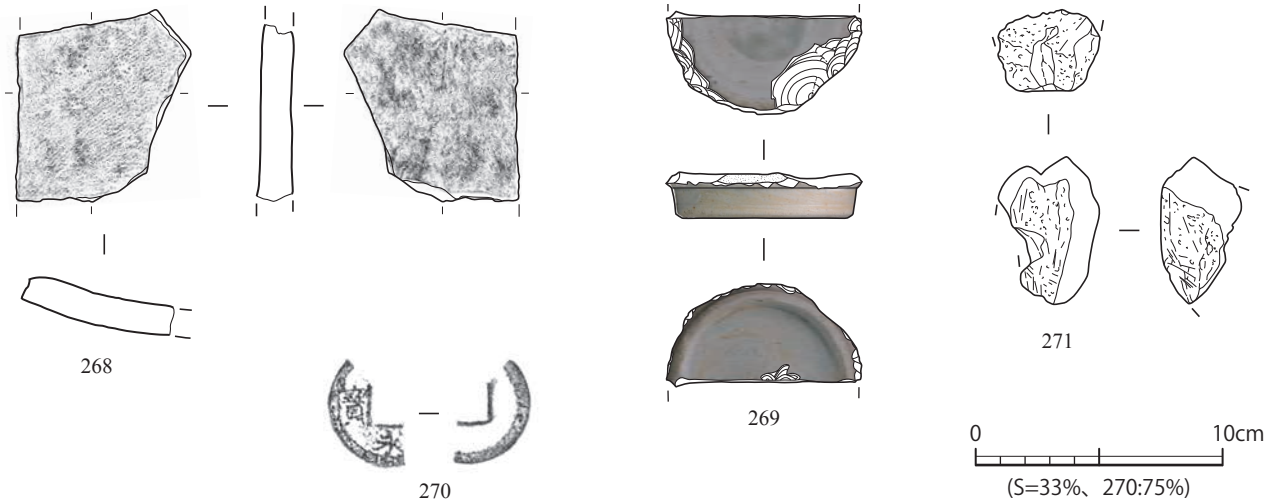
第 82 図　エプロン地区 SK1 出土遺物 1



第 83 図　エプロン地区 SK1 出土遺物 2



第 84 図　エプロン地区 SK1 出土遺物 3



第 85 図　エプロン地区 SK1 出土遺物 4

図版 62　エプロン地区 SK1 出土遺物（S=30%。銭貨：S=75%）

表 63　エプロン地区 SK1 出土遺物観察表 1 （陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第82図 239	ね108 SK1	中国産陶磁器	碗	青花磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:7.8	142.98	畳付を釉剥ぎ	白色　緻密	外:青白色 内:青白色	外:蓮弁文 内底:点文	－	－	徳化 18c	－
第82図 240	ね108 SK1	中国産陶磁器	碗	色絵磁器	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	5.82	－	白色 緻密	透明、両面	外:赤で草花文	－	－	徳化 18c～19c	－
第82図 241	ね108 SK1	中国産陶磁器	壺	施釉陶器 (叩き目)	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	99.62	格子状の叩き	にぶい赤褐色 白色粒含む	褐色、外面のみ	なし	－	－	不明	－
第82図 242	ね107 SK1	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～底	口径:8.1 器高:4.6 底径:3.6	21.22	畳付釉剥ぎ	白色緻密、光沢有り	内外:透明釉	外:草花文	－	－	瀬・美 近代	－
第82図 243	ね108 SK1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:13.7 器高:6.5 底径:6.0	173.51	見込露胎・浸し掛け・畳付アルミナ	灰色/硬質	内外:灰釉	なし	－	－	－	－

表 64　エプロン地区 SK1 出土遺物観察表 2（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第82図244	ね108 SK1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:13.2 器高:6.8 底径:6.8	121.32	畳付にアルミナ	灰-赤褐色	内外:鉄釉(底部露胎)	なし	-	-	-	-
第82図245	ね108 SK1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:12.85 器高:6.2 底径:6.5	185.26	見込蛇の目状釉剥ぎ・畳付アルミナ・浸し掛け	灰色/緻密	内:透明 外:鉄釉	なし	-	-	-	-
第82図246	ね108 SK1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:12.6 器高:6.0 底径:6.0	199.49	畳付アルミナ・見込蛇の目釉剥ぎ・重焼痕	灰白色	内外:褐釉	なし	-	-	-	-
第82図247	ね108 SK1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:12.9 器高:6.2 底径:6.4	60.69(復元込み)	見込蛇の目・畳付アルミナ	灰-卵黄灰色/粗粒	内外:褐釉	なし	-	-	-	高台内面に粘土塊付着
第82図248	ね107 SK1	沖縄産陶器	小碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:9.0 器高:4.65 底径:3.9	43.30	見込蛇の目釉状剥ぎ・畳付泥漿	灰白色/硬質	内外:透明釉 口唇:鉄釉	なし	-	-	-	-
第82図249	ね108 SK1	沖縄産陶器	小碗	沖縄産施釉陶器	口～底	口径:8.9 器高:4.6 底径:4.0	86.16	畳付に熔着有・見込蛇の目状、重焼痕	黄灰色	内:透明釉 外:褐釉	なし	-	-	-	-
第82図250	ね107 SK1	沖縄産陶器	鉢	沖縄産施釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:9.1	267.76	見込蛇の目状釉剥ぎ・浸し掛け	卵黄白色/軟質	内:化粧→透明 外:黒色	なし	-	-	-	-
第82図251	ね108 SK1	沖縄産陶器	鉢	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:24.4 器高:- 底径:-	161.46	内面の一部に緑釉を施釉	卵黄灰色/軟質	内:白化粧、透明釉 外:黒釉	なし	-	-	-	-
第82図252	ね108 SK1	沖縄産陶器	鉢	沖縄産施釉陶器	口縁部	推定口径:21.4 器高:- 底径:-	63.90	なし	灰色	内外:灰釉	内外に花文(白土)	-	-	-	-
第82図253	ね108 SK1	沖縄産陶器	急須蓋	沖縄産施釉陶器	略完形	屁端部径:6.5 袴端部径:4.8 器高:3.1 撮径:1.4	38.81	なし	灰白色/粗粒	外:透明	条線(緑釉施釉)	-	-	-	254とセット
第82図254	ね107 SK1	沖縄産陶器	急須	沖縄産施釉陶器	口～胴	口径:- 器高:- 底径:-	116.63	なし	黄灰色/軟質	文様部に緑釉 外:白化釉・透明釉	×文字、縦位条線文	-	-	-	253とセット
第83図255	ね107 SK1	沖縄産陶器	瓶	沖縄産施釉陶器	胴～底	口径:- 器高:- 底径:6.4	137.15	轆轤	灰-黄灰色/軟質	外:緑釉、黒釉、透明釉 外底:黒色	-	-	-	-	-
第83図256	ね107 SK1	沖縄産陶器	擂鉢	沖縄産無釉陶器	略完形	口径:24.9 器高:13.2 底径:8.8	1502.04	轆轤	明赤褐色	-	外:口唇・口縁に圏線	片口有り	-	-	-
第83図257	ね108 SK1	沖縄産陶器	鉢	沖縄産無釉陶器	口～底	口径:36.6 器高:18.4 底径:13.4	1142.95	外胴:繋ぎ目残	赤褐/暗灰色	なし	口唇圏線	-	-	-	-
第83図258	ね108 SK1	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	口～胴	口径:16.4 器高:- 底径:-	1203.44	轆轤	赤褐色	-	外:圏線	-	窯印？あり	沖縄	-
第84図259	ね108 SK1	陶質土器	鍋	沖縄産陶質土器	口縁部・把手	口径:19.0 器高:- 底径:-	43.23	なし	明赤褐色	なし	内外:多条圏線	-	-	沖縄	-
第84図260	ね108 SK1	陶質土器	鍋	沖縄産陶質土器	甲～端	口径:- 器高:- 底径:-	73.33	なし	明赤褐色	なし	なし	-	-	沖縄	外面スス付着
第84図261	ね107 SK1	陶質土器	蓋	沖縄産陶質土器	撮～端	端径:19.4 器高:5.4 撮径:7.8	55.00	なし	明赤褐色/銀雲母含	なし	なし	-	-	沖縄	撮部スス付着
第84図262	ね108 SK1	陶質土器	蓋	沖縄産陶質土器	撮～甲	端径:- 器高:- 撮径:6.6	96.12	なし	褐色	なし	なし	-	-	沖縄	鍋の蓋か
第84図263	ね108 SK1	陶質土器	蓋	沖縄産陶質土器	撮～袴	端径:9.0 袴径:6.4 器高:3.15 撮径:1.9	23.72	兜巾あり	褐色～暗灰色	なし	なし	-	-	沖縄	端部スス付着
第84図264	ね108 SK1	陶質土器	火取	沖縄産陶質土器	口～胴	口径:- 器高:- 底径:-	144.34	なし	明赤褐色	なし	外面:白化粧土の圏線	-	-	沖縄	口唇部スス付着
第84図265	ね108 SK1	陶質土器	火炉・火取	沖縄産陶質土器	底部	口径:- 器高:- 底径:15.2	386.84	轆轤	灰褐色	なし	なし	なし	なし	沖縄	胴部スス付着、貝圧痕
第84図266	ね108 SK1	陶質土器	急須	沖縄産陶質土器	胴～注口	口径:- 器高:- 底径:-	62.33	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	沖縄	-
第84図267	ね108 SK1	土製品	不明	土製品	端部	口径:- 器高:- 底径:-	53.95	刷毛目	赤褐色	なし	上:突帯	なし	なし	不明	植物圧痕あり

表 65　エプロン地区 SK1 出土遺物観察表３（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第85図 268	ね108 SK1	瓦	近代瓦 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:12.0	109.25	胎土: 灰褐色	胴部	背面 布目痕	なし	なし	なし	なし	-
第85図 269	ね108 SK1	円盤状 製品	略円形	欠損	外径:- 最大厚:18.0	58.2	中国産 青花	底部 畳付有	打剥/外	-	-	-	-	-
第85図 270	ね108 SK1	金属 製品	銭貨	破片	外径:18.8 最大厚:1.1	0.7	青銅	-	なし	なし	なし	「・永・寶」	なし	寛永通宝
第85図 271	ね108 SK1	石製品	砥石	破片	最大長:58 最大厚:32 最大幅:40	19.3	軽石	-	なし	砥面	-	-	-	-

【ＳＫ２～５】

構　　造　平面が隅丸方形で断面は平坦。性格不明。

覆　　土　Ⅲ－３層が堆積。

出土遺物

SK2：近代の日本産陶磁器が主体。先史時代の土器も出土。ほかに貝類多数。

SK3：沖縄産施釉陶器と貝類が出土。

SK4：出土遺物なし

SK5：近代の日本産陶磁器主体。

第 86 図　エプロン地区 SK 遺構分布図（S=1/200）

表 66　エプロン地区 SK2 ～ 5 出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石材	金属製品	瓦	貝類	動物遺存体	不明	合計
エプロン	SK2	ね108	1	2	2	4	5		12		1	311	3	1	342
	SK3	ね107				1						17			18
	SK5	ね107		4	23	2	5	5		3			9		51
合計			1	6	25	7	10	5	12	3	1	328	12	1	411

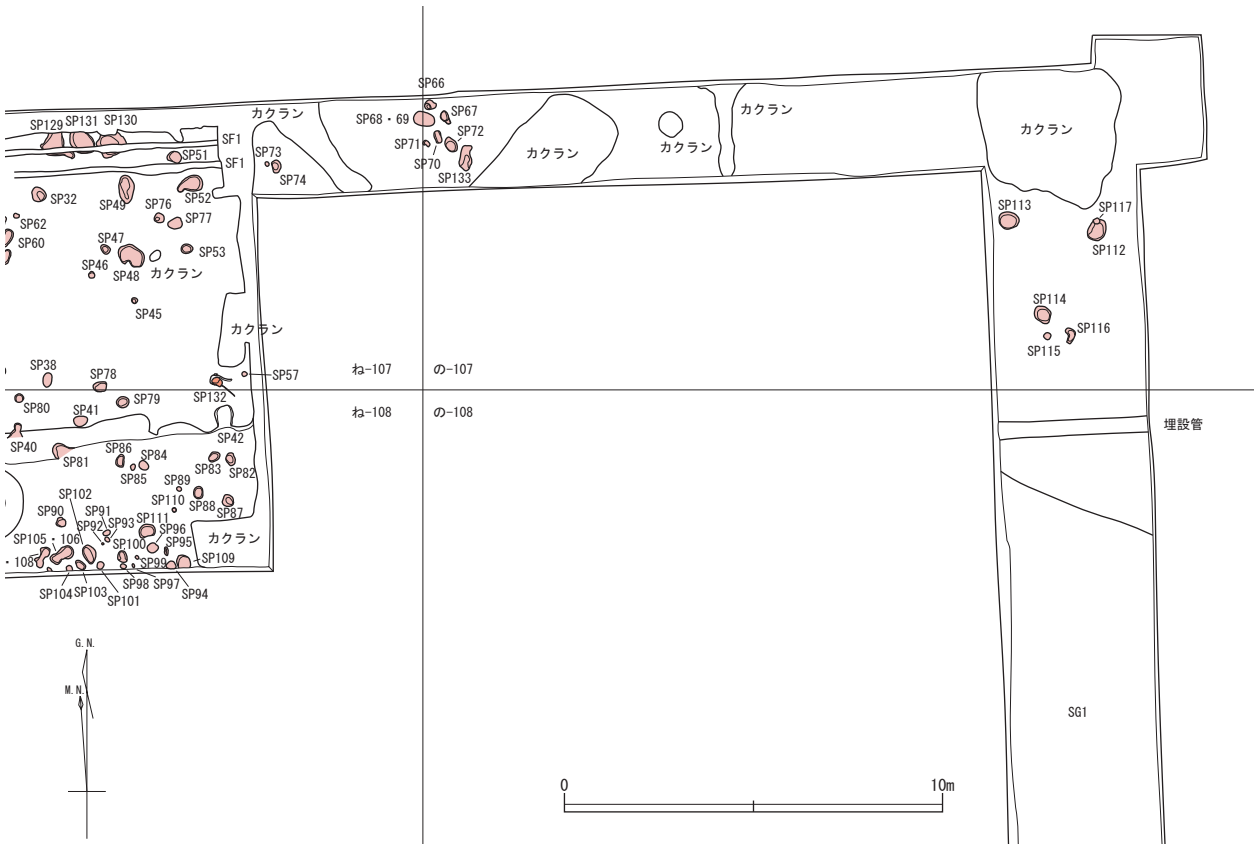
【ＳＰ１～15、17～58、60～117、126～133】

構　　造　平面・断面形ともに隅丸方形のもの（SP52・63 など）と、平面形が略円形で断面がすり鉢状のもの（SP58 など）の２種に分けられる。形状からは、前者を礎石抜け穴、後者を柱穴と想定するが、明確なプランは確認できない。

覆　　土　どちらも基本的にはⅢ -3 層が中央部に堆積し、側縁部はⅣ・Ⅴ層との混層となっている。ただし SP94、104 は覆土が暗褐色砂層で基本層序にない土壌のため、Ⅲ－３層を覆土にもつピットとは年代が異なる可能性がある（SP104）。

出土遺物　SP23 から沖縄産施釉陶器（第 89 図 273）、SP81 から中国産青花杯（同図 272）、SP127 からは台石（同図 274）がそれぞれ出土している。ただしいずれも覆土はⅢ層のため、戦後の基地造成時に遺構内に埋没した遺物だと理解される。

第 87 図　エプロン地区上層 SP 検出状況（西側）（S=1/200）



第 88 図　エプロン地区上層 SP 検出状況（東側）（S=1/200）

SP52（東から）

SP58（北東から）

SP63（北東から）

SP103・104 半截断面（北から）

図版 63　エプロン地区上層 SP 半截断面

表 67　エプロン地区上層 SP 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石器	石製品	石造物	石材	金属製品	円盤状製品	ガラス製品	瓦
エプロン	SP1	の107				1	1									
	SP2	ね108														
	SP5･6	ね108			1											
	SP18	ね107				2							2			
	SP23	ね107		1		2										
	SP24	ね107	1					1								
	SP27	ね107					1									
	SP58	ね107					1								6	
	SP60	ね107					1									
	SP64	ね107			2			1								
	SP81	ね108		1												
	SP112	の107				4										
	SP114	の107						1								
	SP117	の107				1						1		1		
	SP126	ね107	2			1				1	4					
	SP127	ね108	1						1							
	SP128	ね107				1							2			
	SP132	ね107			1	4										
	SP134	ね107				1	2			1						4
合計			4	2	4	17	6	3	1	2	4	1	4	1	6	4

地区	遺構	グリッド	貝類	動物遺存体	合計
エプロン	SP1	の107	14		16
	SP2	ね108	27		27
	SP5･6	ね108	32		33
	SP18	ね107	3	4	11
	SP23	ね107			3
	SP24	ね107			2
	SP27	ね107			1
	SP58	ね107	1	1	9
	SP60	ね107	1		2
	SP64	ね107	5		8
	SP81	ね108			1
	SP112	の107			4
	SP114	の107			1
	SP117	の107			3
	SP126	ね107	4	3	15
	SP127	ね108	32		34
	SP128	ね107	10	3	16
	SP132	ね107	7		12
	SP134	ね107	1		9
合計			137	11	207

表 68　エプロン地区上層 SP 土層観察表 1

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SP2	1	2.5Y7/3	浅黄色	砂	なし	弱	サンゴを含む。遺物なし。
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	弱	1層より砂を多く含む。サンゴを含む。遺物なし。
	3	2.5Y7/2	灰黄色	海砂	なし	なし	貝やサンゴを多く含む。1･2層の貝やサンゴはこの層のものと思われる。
エプロン地区 SP18･SF1	1	2.5Y7/4	浅黄色	粗砂	弱	弱	
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	弱	
	3	10YR3/4	暗褐色	砂	やや有	有	SP126-1層と同じ。
	4	10YR4/4	褐色	砂	やや有	やや有	6層の砂が小ブロック状に含む。
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	有	やや有	貝片や粗砂混じる。
	6	2.5Y8/4	淡黄色	粗砂	弱	やや有	SP126-12層と同じ。地山か？
	7	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	有	やや有	5層と同質だが混入物少。
	8	2.5Y7/3	浅黄色	砂	やや有	弱	SP126-13層と同じ。
エプロン地区 SP20	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	有	粘性のある土が小さなブロック状に入る。礎石抜穴か？
エプロン地区 SP22	1	10YR3/1	黒褐色	土	中	有	にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)が混ざる層。
	2	10YR3/1	黒褐色	砂	弱	有	
エプロン地区 SP23	1	10YR6/4	にぶい黄橙色	粗砂	弱	有	小貝片･サンゴ片多く含む。
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	強	炭化物片1点有。
	3	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂			1層と同色だが混入物なし。
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	5	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	6	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	有	
	7	10YR4/4	褐色	砂	弱	やや有	
	8	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	5層と同じ。
	9	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	有	6層と同じ。
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	11	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	有	貝片や粗砂が混じる。

表 69　エプロン地区上層 SP 土層観察表 2

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SP27	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	礎石抜穴の埋土か？
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR5/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	1層よりも若干粘性があり、しまりがない。2・3層は現在の検出面(大嶺村の面)より下の層のPitか？
エプロン地区 SP31	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	中	有	褐色土(10YR4/4)が混ざる。約20㎝の炭のしみが広がる(地面の割れにしみこんでいっている様子)。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	
エプロン地区 SP32	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	黒く焼けた小石が40％程度。その他にはサンゴ・小石が混ざる。
	2	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	やや有	焼けた木片がある。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
エプロン地区 SP35	1	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	なし	やや有	サンゴが混ざる。他の層に比べ砂粒が大きい。
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	弱	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	焼土粒が1％未満含まれる。
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	炭粒が1％未満含まれる。
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	このSP35より5㎝大の焼土片が出土。
エプロン地区 SP36	1	10YR4/4	褐色	砂	弱	弱	2㎝大の炭塊を含む。
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	約1％の炭片を含む。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	4	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	有	
エプロン地区 SP38	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	植栽痕か？
エプロン地区 SP39	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
エプロン地区 SP41	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	有	二枚貝が約1％混ざる。
エプロン地区 SP42	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	1層より砂粒が細かい。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	砂粒が1層よりも粗い。
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	3層と似ているが、この層の方が少し砂粒が細かい。
	5	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	6	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	なし	
エプロン地区 SP48	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	土	弱	有	
	2	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	枝サンゴが50％程度含まれる。
	3	—	—	砂			サンゴが圧を受け固くなった層。このSPの床面と考えられる。
エプロン地区 SP49	1	2.5Y3/2	黒褐色	砂	弱	有	貝片や赤色化した小石が混ざる。
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	二枚貝が混ざる。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	小石やサンゴが約3％混ざる。
エプロン地区 SP51	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	二枚貝が混ざる。
	2	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	
	3	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	
	4	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	弱	なし	サンゴ混ざる。
	5	10YR7/3	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	砂粒が細い。
エプロン地区 SP52	1	10YR3/3	暗褐色	砂	中	やや有	砂層であるが土感がある。2～4層から成るSPを切る。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	3	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	2層より砂粒が粗い。
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	なし	やや有	3層より砂粒が粗い。
エプロン地区 SP54・SF1	1	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	SF1の埋土。
	2	10YR4/6	褐色	砂	弱	有	SP54の埋土。1層よりも粘性があり、しまりもある。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	なし	SP54の埋土。SP54をSF1が切る。
エプロン地区 SP57	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	有	貝片等混じる。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	弱	有	粒径大(≦φ1.0㎜)地山か。
エプロン地区 SP58	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	やや有	
エプロン地区 SP60	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	良	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	良	このSPの土は他のところに比べるとしまりは良い。
エプロン地区 SP61	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	なし	有	貝片。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂			
	3	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	なし	やや有	SP35-1
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	SP35-5
エプロン地区 SP62	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
エプロン地区 SP63	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	中	有	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	

表 70　エプロン地区上層 SP 土層観察表 3

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SP65	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	
エプロン地区 SP66	1	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	
エプロン地区 SP67	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	1層よりも砂粒が粗い。
	3	2.5YR6/3	にぶい橙色	砂	弱	やや有	
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	5	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	有	
エプロン地区 SP68・69	1	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	SP68の埋土。
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	SP69の埋土。
エプロン地区 SP70	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	サンゴ礫が混ざる。
	2	10YR7/2	にぶい黄橙色	砂	なし	やや有	
	3	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	中	やや有	
エプロン地区 SP71	1	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	植栽痕。
エプロン地区 SP72	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	植栽痕もしくはしみ。
エプロン地区 SP73	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	なし	
	2	2.5Y6/2	灰黄色	砂	弱	やや有	
エプロン地区 SP73・74・SP128(東西軸)	1	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	1%未満の炭粒含む。SP73の埋土。
	2	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	2～4層はSP74の埋土。
	5	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	6	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	
エプロン地区 SP74	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	弱	弱	微小貝片が混じる。
	2	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	弱	1層よりさらに弱。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	1・2層よりは強。1・2層に比してやや粒子が粗い。
エプロン地区 SP79	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	
エプロン地区 SP80	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	なし	二枚貝が混ざる。
	2	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	
エプロン地区 SP85	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	有	弱	周縁のみ暗オリーブ褐色。根痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エプロン地区 SP86	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	やや粗粒。3と5の混層。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	1と4の混層。
	4	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	地山か。
	5	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	有	貝・サンゴ片密に混じる。地山か。
エプロン地区 SP94	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	弱	2つの植栽痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エプロン地区 SP95	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	弱	植栽痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エプロン地区 SP103	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	有	弱	貝小片まばらに含む。根痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	有	SP86の5層と同じ。
エプロン地区 SP104	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	やや強	やや有	ピット。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エプロン地区 SP109	1	10YR5/2	灰黄褐色	砂	有	弱	にぶい黄褐色やオリーブ褐色砂が混じる。植栽痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エプロン地区 SP115	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂			
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂			
エプロン地区 SP126	1	10YR3/4	暗褐色	砂	やや有	有	赤土小ブロックまばらに含む。粗砂多量に混ざる。
	2	10YR3/4	暗褐色	砂	やや有	有	1層とほぼ同じだが、赤土小ブロックが混ざらない。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	やや有	弱	赤土小ブロック混じる。
	4	—	—	砂			3と5の混層。
	5	2.5Y7/3	浅黄色	砂	弱	弱	
	6	2.5Y7/4	浅黄色	砂	弱	弱	
	7	10YR4/4	褐色	砂	有	弱	
	8	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂	有	弱	粘土小ブロック混じる。1～8層ピット覆土。
	9	2.5Y8/3	淡黄色	砂	弱	弱	貝片多量に混じる。地山か。
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	強	礎石抜穴覆土。
	12	2.5Y8/4	淡黄色	粗砂	弱	やや有	地山か。
	13	2.5Y7/3	浅黄色	砂	やや有	弱	細砂。地山か。
エプロン地区 SP127	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	やや有	黄褐色砂(2.5Y5/4)が混ざる層。
	2	10YR7/2	にぶい黄橙色	砂			黄褐色砂(2.5Y5/4)が混ざる層。二枚貝や枝サンゴが50%以上混ざる。黄褐色砂は1層よりも少なく混ざる。
	3	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	貝やサンゴがほとんど混ざらない。この層からグスク(？)土器片が出土した。

表 71　エプロン地区上層 SP 土層観察表 4

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エプロン地区 SP128	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR5/2	灰黄褐色	砂	弱	有	
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	5	10YR4/1	褐灰色	砂	中	やや有	
	6	10YR5/1	褐灰色	砂	中	有	炭片が混ざる。北へ行くにつれ白っぽくなる。
	7	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	8	—	—	白砂			地山、Ⅴ層.
エプロン地区 SP129	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	礎石抜け穴か？
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	1層よりサンゴ礫が混ざらない。
エプロン地区 SP130	1	10YR4/4	褐色	砂	弱	やや有	二枚貝が5%程度混ざる。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	2層よりもしまりは少しなく、貝片や小石が多く混ざる。
エプロン地区 SP131	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	やや有	1層より粘性はある。
	3	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	弱	有	
	4	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	
エプロン地区 SP132	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	礎石抜け穴に堆積した土と考えられる。
エプロン地区 SP133	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	貝片が混ざる。
	2	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂	弱	やや有	黄褐色土がブロック状に1%未満混ざる。
	3	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	植物の根がある。
	4	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	有	3層よりしまりが有り、砂粒が粗い。

第 89 図　エプロン地区 SP 覆土内出土遺物

図版 64　エプロン地区 SP 覆土内出土遺物（S=33%）

表 72　エプロン地区上層 SP 出土遺物観察表 1（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第89図 272	ね108 SP81	中国産陶磁器	杯	青花磁器	口縁部	口径:4.6 器高:－ 底径:－	3.34	－	白色 緻密	透明、両面	外:梵字文	－	－	徳化 18c～19c	－
第89図 273	ね107 SP23	沖縄産陶器	急須蓋	沖縄産施釉陶器	屁～袴	屁端部径:－ 袴端部径:－ 器高:　－ 撮径:　－	26.21	なし	灰色/緻密	外:緑釉	外縦位状線文	－	－	－	撮破損

表 73　エプロン地区上層 SP 出土遺物観察表 2（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第89図 274	ね108 SP127	石器	台石	破片	最大長:197 最大厚:80 最大幅:115.5	2490.5	細粒砂岩	－	なし	敲打・研磨	－	－	－	－

【ＳＦ１】

構　　造　東西方向に轍 1 対が直行する。間隔は約 0.8m。断面はすり鉢状。またその南側には筋状に細い堆積も残る。

覆　　土　Ⅲ層が堆積するが、SP131 覆土を切っており、上層の SK・SP より新しい遺構であることが分かる。

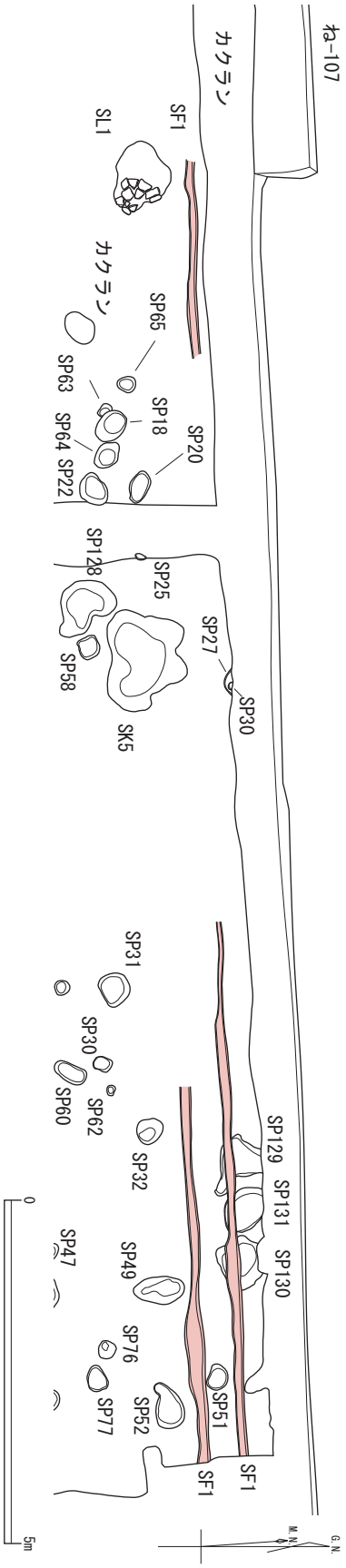
出土遺物　特に無し

検出状況（東から）

SF1 断面（東から）

SP131・SF1 切り合い関係（西から）

図版 65　エプロン地区 SF1 検出・断面状況



第 90 図　エプロン地区 SF1 平面図（S=1/100）

【ＳＧ１】

構　造　平面形は不明。断面はすり鉢状。

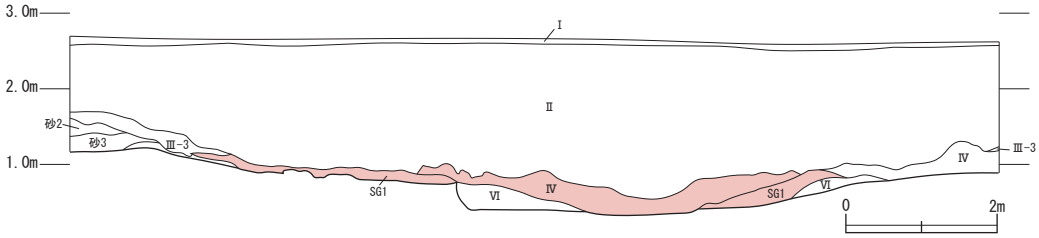
覆　土　ほぼⅠ・Ⅱ層が堆積するが、下層はⅣ層と灰色に変色したとみられるⅣ層がラミナ状に堆積し、互層をなす。

出土遺物　約 200 点を超える遺物が出土しており、特に下層から出土した資料は残存状態の良好な資料が多い。陶磁器には中国産・日本産（第 93 図 275・276）・沖縄産（同図 277 ～ 288）及び陶

第 91 図　エプロン地区 SG1 平面図（S=1/200）

質土器（同図 289）・瓦質土器（第 94 図 290 ～ 292）が出土している。

陶磁器以外の資料には、円盤状製品には略円形（同図 293・295）と略方形のもの（同図 294）とが認められたほか、塗金された簪（第 94 図 296）がほぼ欠損することなく残されていた。ほかに靴底や凹部のある海砂性凝固物性の石製建材が確認されている（図版 67）。



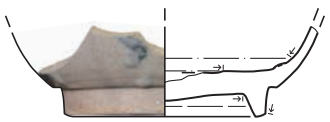
第 92 図　エプロン地区 SG1 断面図（S=1/100）

図版 66　エプロン地区 SG1 断面（南西から）

表 74　エプロン地区 SG1 出土遺物集計表

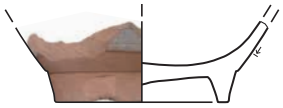
地区	遺構	グリッド	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石造物	石材	金属製品	木製品	木材	円盤状製品	ガラス製品
エプロン	SG1	の108	6	6	44	96	9	3	1	1	2	3	5	2	10	3

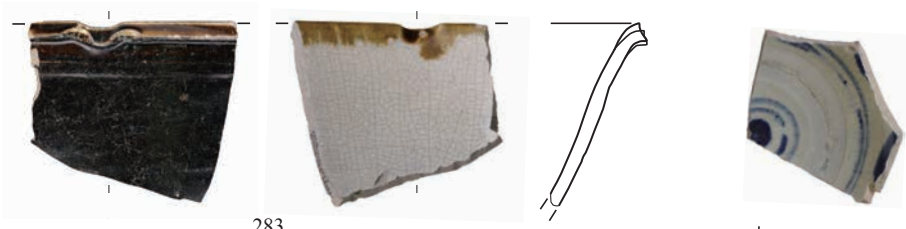
地区	遺構	グリッド	瓦	煉瓦	ゴム製品	貝類	動物遺存体	不明	合計
エプロン	SG1	の108	57	2	1	8	1	1	261

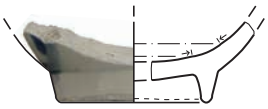

275

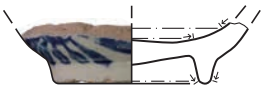
276

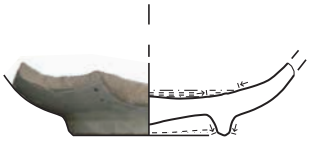
277

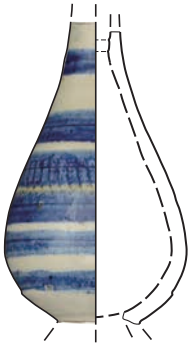

278

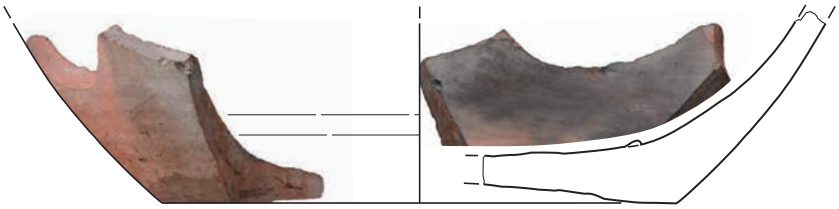

283


279

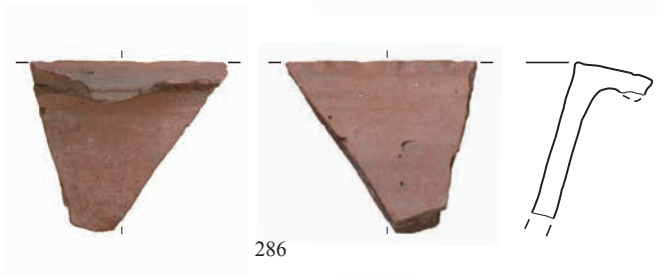

280

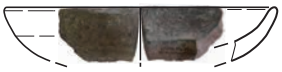

281

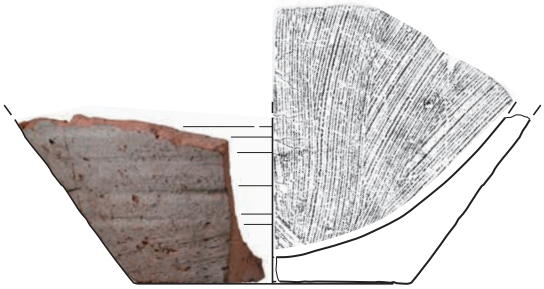

282


284

285


286

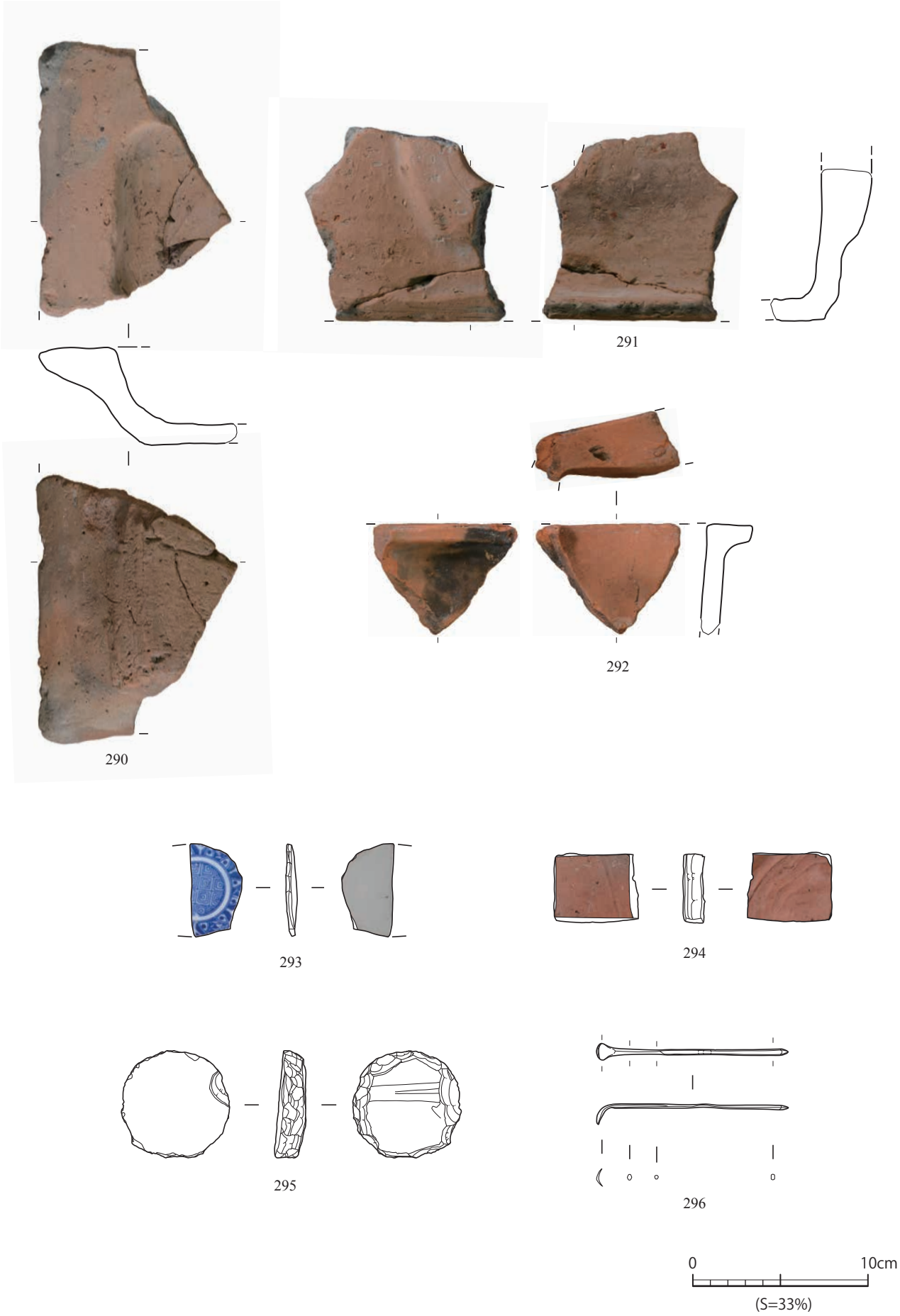

288


287

289

0　10cm
(S=33%)

第 93 図　エプロン地区 SG1 出土遺物 1



第 94 図　エプロン地区 SG1 出土遺物 2

表 75　エプロン地区 SG1 出土遺物観察表 1（陶磁器）

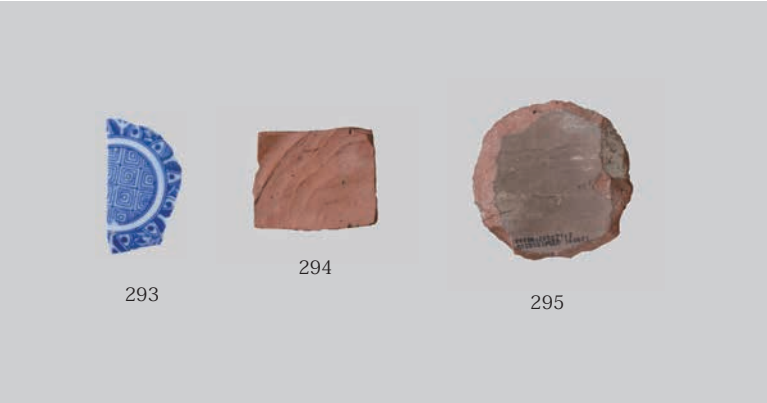
掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第93図 275	の108 SG1	中国産陶磁器	碗	青花磁器	底部	口径:- 器高:- 底径:8.0	103.87	胴部途中まで施釉し、内底は蛇の目釉剥ぎ	灰白色やや軟質	外:青白色 内:青白色	外:有り			福・広17c後～18c前	
第93図 276	の108 SG1	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～底	口径:8.0 器高:4.7 底径:3.6	27.34	畳付釉剥ぎ・砂付着	白色緻密、ガラス質	外:透明 内:透明	外:椿文	銅版摺り(多色)	なし	瀬・美近代	
第93図 277	の108 SG1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	20.41	見込蛇の目状釉剥ぎ	灰-黄灰色/粗粒	内:透明 外:鉄釉	なし	-	-	-	-
第93図 278	の108 SG1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.9	92.81	兜巾あり・見込砂付着	淡橙色/粗粒	内:灰釉 外:灰釉?	なし	-	-	-	-
第93図 279	の108 SG1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.2	37.33	見込蛇の目状釉剥ぎ・重焼痕・畳付アルミナ	灰白色/軟質	内外:白化粧→透明	呉須で丸文	-	-	-	-
第93図 280	の108 SG1	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.3	80.81	見込蛇の目釉剥ぎ重焼痕	黄褐色/粗粒	白化粧→透明	コバルト色で草花文	-	-	近代	-
第93図 281	の108 SG1	沖縄産陶器	皿	沖縄産施釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.4	52.72	見込蛇の目状釉剥ぎ・畳付アルミナ	褐色	内外:白化粧→透明	内:コバルト色圏線	-	-	-	-
第93図 282	の108 SG1	沖縄産陶器	瓶	沖縄産施釉陶器	胴部	口径:- 器高:- 底径:-	230.28	なし	卵黄白色/軟質	外:透明	外:コバルト色.横.位連続帯状文.斜格子文	-	-	近代	-
第93図 283	の108 SG1	沖縄産陶器	鉢	沖縄産施釉陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	60.45	なし	灰-黄灰色/緻密	内:化粧土 外:黒色	なし	-	-	-	-
第93図 284	の108 SG1	沖縄産陶器	壺	沖縄産無釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:20.4	404.26	重ね焼き痕あり	赤褐色	-	なし	なし	なし	沖縄	貝圧痕
第93図 285	の108 SG1	沖縄産陶器	水甕	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	272.47	なし	赤褐色	なし	外頸二重圏線	-	-	-	-
第93図 286	の108 SG1	沖縄産陶器	鉢	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	78.30	なし	赤褐色	なし	口唇圏線	-	-	-	-
第93図 287	の108 SG1	沖縄産陶器	擂鉢	沖縄産無釉陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:11.0	256.35	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-	外底黒色
第93図 288	の108 SG1	沖縄産陶器	灯明皿	沖縄産無釉陶器	口縁部	口径:10.8 器高:- 底径:-	8.46	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-	-
第93図 289	の108 SG1	陶質土器	鉢	沖縄産陶質土器	口縁部	口径:14.2 器高:- 底径:-	30.81	なし	赤褐～灰色	なし	なし	-	-	沖縄	-
第94図 290	の108 SG1	瓦質土器	火炉・火取	馬蹄形	口～底	口径:- 器高:- 底径:-	376.52	なし	外:褐色 内:灰色	なし	なし	なし	なし	沖縄	イネ籾圧痕多数
第94図 291	の108 SG1	瓦質土器	火炉・火取	-	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	248.03	外面ナデミガキ	外:褐色 内:灰色	-	なし	なし	なし	沖縄	イネ籾圧痕多数
第94図 292	の108 SG1	瓦質土器	火炉・火取	-	口～胴	口径:- 器高:- 底径:-	86.99	内外:ミガキ	赤褐色	-	なし	なし	なし	沖縄	外面煤付着

表 76　エプロン地区 SG1 出土遺物観察表 2（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第94図 293	の108 SG1	円盤状製品	略円形	欠損	外径:- 最大厚:5.0	10.2	日本産染付	底部畳付無	打剥/内	-	-	-	-	-
第94図 294	の108 SG1	円盤状製品	方形	完形	最大長:47 最大短:38.5 最大厚:1.1	35.4	沖縄産無釉陶器	底部畳付無	研磨	-	-	-	-	四角成形
第94図 295	の108 SG1	円盤状製品	略円形	完形	外径:60.0 最大厚:17.5	64.8	沖縄産無釉陶器	胴部	打剥/両	-	-	-	-	-
第94図 296	の108 SG1	金属製品	簪	完形	最大長:106.8 最大幅:3.3 最大厚:1.6	4.5	銅	-	なし、鍛造	確認できず	なし	なし	鍍金 茎部端面四角	なし

296

①


293
294
295

②

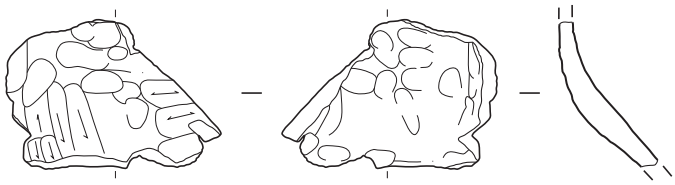
図版 67　エプロン地区 SG1 出土遺物 (石造物を除き S=33%)

図版 68　エプロン地区 SG1(○部分、南東から)

【Ⅳ・Ⅴ層遺構外遺物】

Ⅳ層中からは沖縄産無釉陶器（第 95 図 298）のように大嶺村の頃とみられる近世・近代の遺物が多数出土しており、出土遺物とその傾向ともに遺構内出土遺物と大きな違いはみられない（表 77）。しかしその中でも弥生～平安並行時代前半期（貝塚時代前 1 期）の土器（第 95 図 297）なども確認することができる。ただし保存状態は遺構内出土遺物に比して良好ではなく、破片が多い。

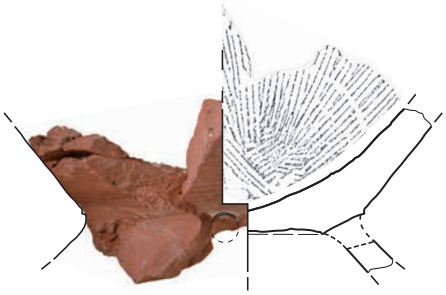
一方、明確にⅤ層からの出土と確認できる資料は僅か 2 点しか得られなかった。しかしこの 2 点とも先史時代のものと目される土器であることから、大嶺村以前の遺跡の存在とその包含する地層について示唆する資料と言える。



297

0　10cm

(S=33%)



298

0　10cm

(S=33%)

第 95 図　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物

表 77　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石造物	石材	木製品	木材	ガラス製品	漆喰	瓦	煉瓦
エプロン	Ⅳ	ね107		1	4	5	4	1					1		15	1
		ね108				8				6					4	3
		の107			1		1									
	Ⅳ-1	ね107		9	11	15	7		1	2			1		40	
		ね108		1		1										
		の107	1	5	7	4									3	
		の108	2	3	3	8	5			3		1	1		26	
	Ⅳ-2	の108			1	2					2		1	1	11	
	Ⅴ	の108	2													
合計			5	19	27	43	17	1	1	11	2	1	4	1	99	4

地区	層位	グリッド	セルロイド・プラスチック製品	貝類	動物遺存体	不明	合計
エプロン	Ⅳ	ね107		177	4	1	214
		ね108		374	59		454
		の107		2			4
	Ⅳ-1	ね107	1	19	3		109
		ね108					2
		の107		3	1		24
		の108		27			79
	Ⅳ-2	の108		84			102
	Ⅴ	の108					2
合計			1	686	67	1	990

表 78　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表１（土器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量（cm）	重量（g）	成形・調整	胎土	装飾			備考
										釉薬	文様	その他	
第95図297	の107 Ⅳ-1層	先史土器	壺	浜屋原or大当原式	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	58.85	内外面:指ナデ(内面は指頭痕明瞭)	泥質で白色粒を含む	－	なし	なし	－

表 79　エプロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表２（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量（cm）	重量（g）	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第95図298	ね108 Ⅳ層	沖縄産陶器	擂鉢	無釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	167.75	なし	赤褐色	なし	なし	－	－	－	－

第４節　Ⅰ・Ⅱ層の遺物

概要　地層自体は戦後の基地・空港造成に伴う撹乱等であるが、先史時代の土器や石器から近代の陶磁器等まで様々な時代の多種多様な遺物 3,150 点が出土した。

陶磁器には中国産・日本産（第 96 図 302 ～ 308）・沖縄産（同図 309 ～ 312）及び陶質土器（同図 313）をはじめ、今次調査では出土数の少ないタイ産褐釉陶器（同図 301）も確認された。

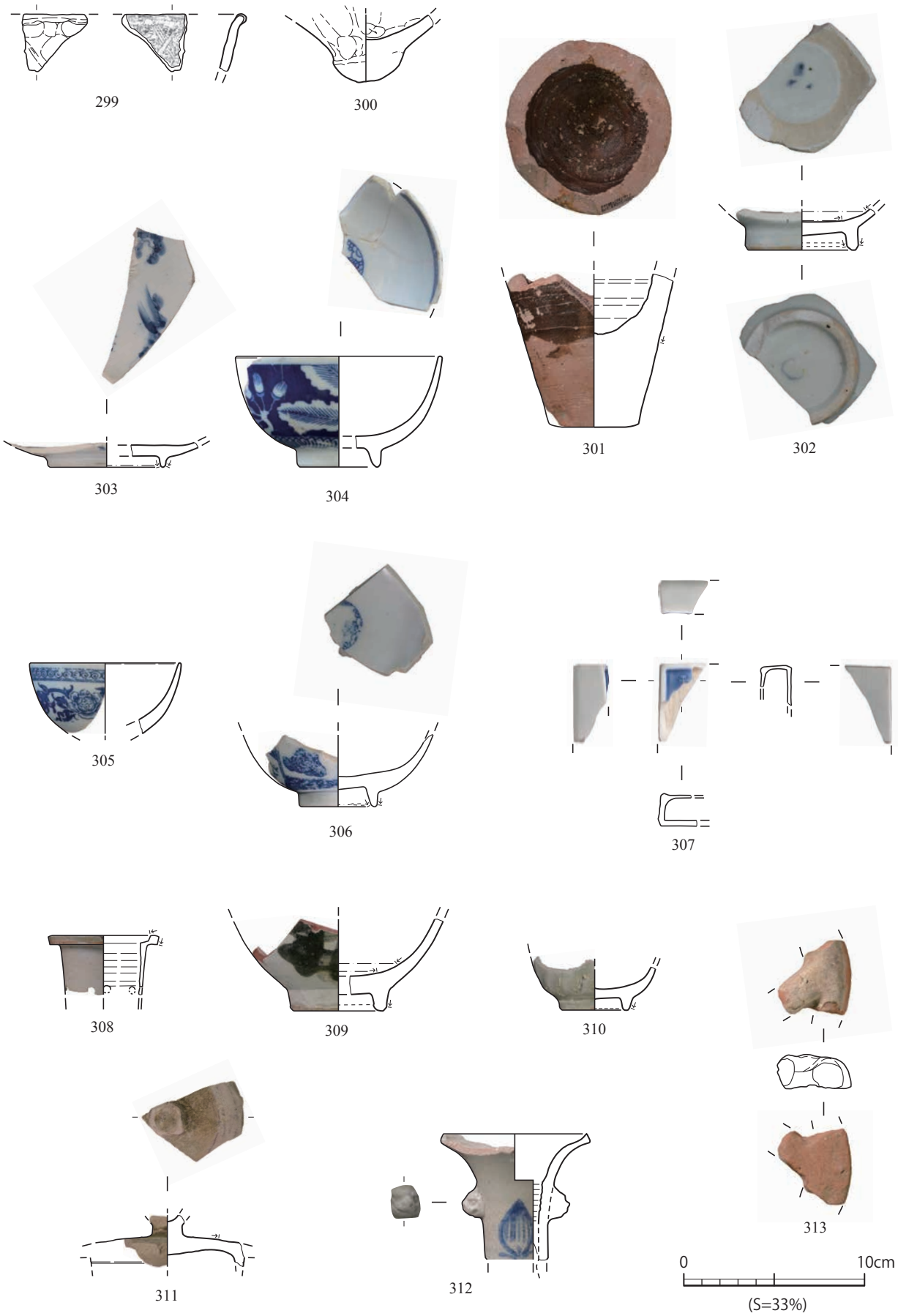
陶磁器以外では、僅かではあるが土器が出土しており、弥生～平安並行時代前半期（貝塚時代後 1 期）の浜屋原式土器（第 96 図 300）や、同後半期のフェンサ下層式土器（同図 299）が確認される。また敲石類（第 97 図 314）も出土しており、土器とともに先史時代の遺跡の存在を示す資料である。

瓦は多量に出土しており、近代の瓦（第 97 図 315）も含まれる。磁器製品にはランプの傘部（同図 316）とみられる製品が得られている。円盤状製品は中国産青花磁器を素材とするもの（同図 317）がみられる。金属製品には鍍金された男性用副簪（同図 318）が確認された。石製品には砥石に転用された硯（同図 319）が出土している。

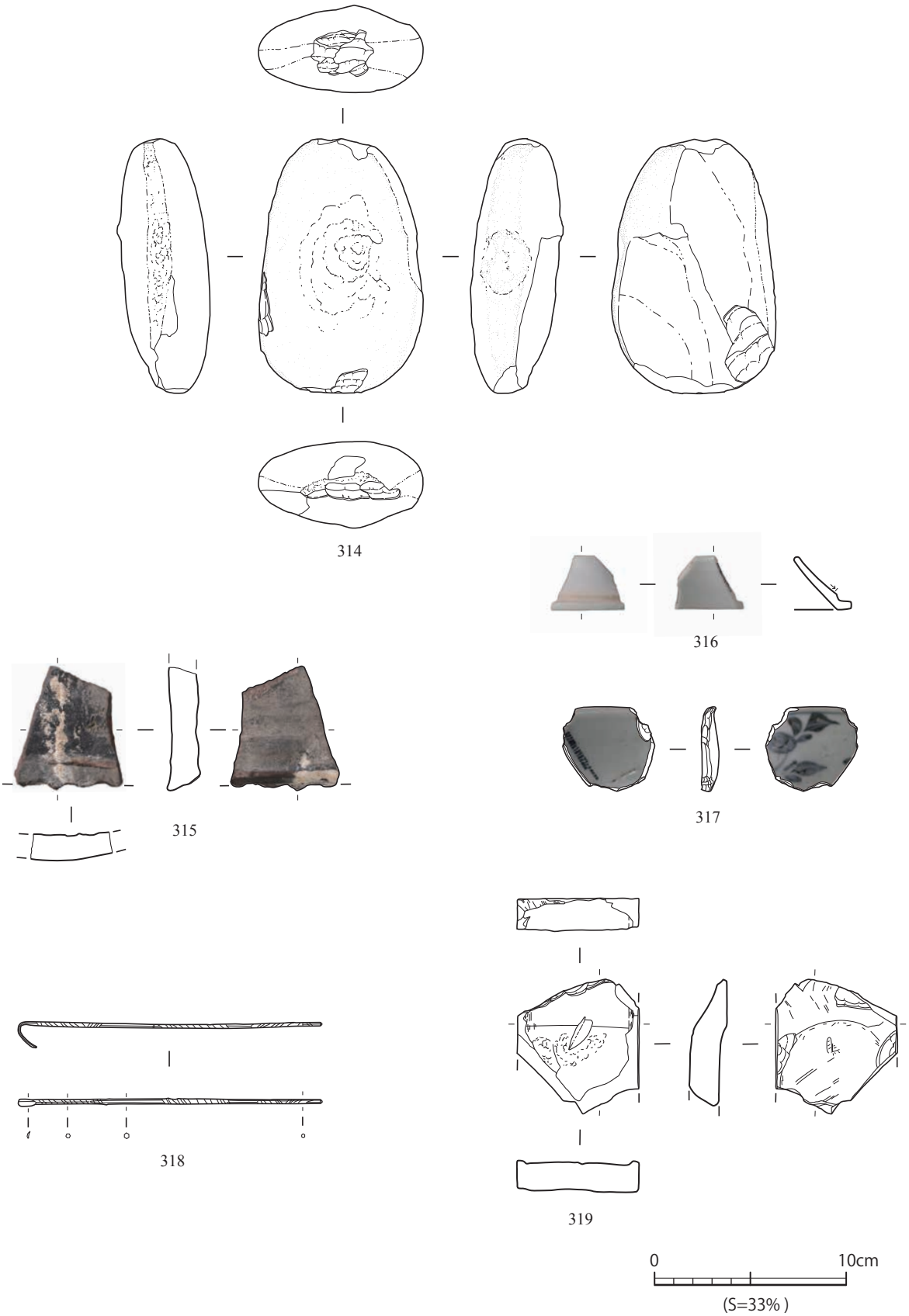
表 80　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石造物	石材	金属製品	木製品	木材
エプロン	Ⅰ	ね107				2	3	2				1	2			
		ね108	1	3	1	2	2									
		の107		1	7	10	7	1	1				3			
		の108														
		不明	4	5	15	28	48	18	12		1		7		1	1
	Ⅰ・Ⅱ	ね107			2	8	9	2	1			5	1			
		ね108			1		1									
		の107		2	10	68	45	27	1				5			
		の108	1		5		3									
	Ⅱ	ね107	5	6	78	119	173	24	4			7	30	1	2	3
		ね108	6	1	8	24	43	10	2	2		1	17	1		
		の107		4	11	37	34	8	1	1		1	11		1	1
		の108	2	9	7	49	64	26				2	2	2	1	4
	Ⅱ・Ⅳ	の108		1	7	12	22	9	1						1	
	Ⅱ・Ⅴ	の108			1	1	26					1				1
合計			19	32	153	360	480	127	23	3	1	18	78	4	6	10

地区	層位	グリッド	円盤状製品	ガラス製品	漆喰	瓦	煉瓦	羽口	セルロイド・プラスチック製品	貝類	動物遺存体	合計
エプロン	Ⅰ	ね107				2						12
		ね108				1						10
		の107	1	2		7		3		9	1	53
		の108				1						1
		不明	5	6		268	5			7	3	434
	Ⅰ・Ⅱ	ね107	2	1		12						43
		ね108				2						4
		の107	1			90	1				17	267
		の108	1	1		9					12	32
	Ⅱ	ね107	9	19	1	767	22		2	124	16	1412
		ね108	1	4		57	2		1	4	4	188
		の107	2	9		27				6	6	160
		の108	5	5		62	1	2		77	17	337
	Ⅱ・Ⅳ	の108	1			28			4		2	88
	Ⅱ・Ⅴ	の108	3			2				73	1	109
合計			31	47	1	1335	31	5	7	300	79	3150



第 96 図　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 1



第 97 図　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 2

表 81　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表１（土器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量（cm）	重量（g）	成形・調整	胎土	装飾			備考
										釉薬	文様	その他	
第96図 299	ね107 Ⅱ層	先史土器	甕	フェンサ下層式か	口縁部	口径:－ 器高:－ 底径:－	6.39	外面:指ナデ 内面:ヘラ状工具ナデ	泥質で白色粒を含む	－	なし	外反口縁で、口唇部平坦。	－
第96図 300	ね107 Ⅱ層	先史土器	深鉢	浜屋原式	底部	口径:－ 器高:－ 底径:3.9	103.12	内外面:指ナデ	砂質で白色粒(多量)・黒色鉱物を含む	－	なし	乳房状尖底。底厚(2.3cm)	－

表 82　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表２（陶磁器）

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第96図 301	ね107 Ⅱ層	タイ産陶器	壷	褐釉	底部	口径:－ 器高:－ 底径:－	376.60	底部は露胎	にぶい橙色白色粒含む	褐色、両面	なし	－	－	タイ不明	－
第96図 302	ね107 Ⅱ層	日本産陶磁器	碗	染付磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:6.1	53.72	畳付釉剥ぎ・砂付着、見込み蛇の目状釉剥ぎ	灰白色緻密ガラス質、黒色粒含む	外:薄青色 内:薄青色	外底:不明 内底:不明	－	－	波佐見Ⅴ期	－
第96図 303	不明 1層	日本産陶磁器	皿	染付磁器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:6.4	28.25	畳付釉剥ぎ	灰白色、黒色微粒子含む	外:透明 内:透明	外:草花文 内:山水文	型紙摺り	－	瀬・美近代	－
第96図 304	の107 Ⅱ層	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～底	口径:11.1 器高:6.0 底径:4.6	55.77	畳付釉剥ぎ	白色緻密、ガラス質	外:瑠璃・透明 内:透明	外:樹木文・剣先文 内:四方襷文、環状松竹梅文	ゴム版	－	瀬・美近代	－
第96図 305	ね107 Ⅰ・Ⅱ層	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～胴	口径:－ 器高:－ 底径:4.2	18.44	轆轤	灰白色やや粗	外:透明 内:透明	外:渦文、獅子、牡丹	銅版摺り	－	砥部近代	－
第96図 306	ね107 Ⅱ層	日本産陶磁器	碗	近代磁器	胴～底	口径:－ 器高:－ 底径:4.2	42.03	畳付釉剥ぎ、砂付着	灰白色やや粗	外:透明 内:透明	外:唐草地、窓文 内:環状松竹梅文	銅版摺り	－	砥部近代	－
第96図 307	ね108 Ⅱ層	日本産陶磁器	水滴	近代磁器	胴部	口径:－ 器高:－ 底径:－	9.62	型作り	白色粗粒、ガラス質	外:瑠璃・透明 内:無釉	外:文字文	なし	－	瀬・美19-20c	－
第96図 308	の107 Ⅱ層	日本産陶磁器	急須	施釉陶器	茶漉し部	口径:6.0 器高:－ 底径:－	8.61	轆轤	灰色砂混じり	口:緑色釉	なし	なし	－	不明	－
第96図 309	の108 Ⅱ層	沖縄産陶器	碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:5.2	60.53	見込蛇の目状釉剥ぎ	赤褐色/硬質	外:透明 内:透明	濃緑色の文様有	白化粧土	－	－	－
第96図 310	ね108 Ⅱ層	沖縄産陶器	小碗	沖縄産施釉陶器	底部	口径:－ 器高:－ 底径:3.8	32.63	面取・兜巾あり	灰白色/硬質	外:透明 内:透明	なし	－	－	－	－
第96図 311	ね107 Ⅱ層	沖縄産陶器	蓋	沖縄産施釉陶器	口～顎	口径:－ 器高:－ 底径:－	22.19	蛇の目状に釉剥ぎ	黄褐色軟質、砂混じり	外:褐釉 内:無釉	なし	－	－	－	－
第96図 312	不明 1層	沖縄産陶器	双耳瓶	沖縄産施釉陶器	撮～袴	口径:8.05 器高:－ 底径:－	101.78	なし	灰白色/軟質	内外:透明 内面一部は鉄釉	呉須で花文	双耳獅子頭	－	近代	一部緻密
第96図 313	ね107 Ⅱ層	陶質土器	七輪	陶質土器	端部	口径:－ 器高:－ 底径:－	25.96	泥漿塗付	明赤褐色/軟質	なし	なし	－	－	沖縄	－

表 83　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表３（陶磁器以外）

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他	
第97図 314	ね108 Ⅱ層	石器	敲石類	完形	最大長:130 最大厚:44.5 最大幅:84	730.0	輝緑岩	－	なし	敲打	－	－	－	－
第97図 315	ね107 Ⅱ層	瓦	明朝系 平瓦	破片	最大長:－ 最大幅:－ 最大厚:13.0	69.50	外:灰褐色 内:暗褐色 砂混	狭端部	背面布目痕	表面に漆喰付着	なし	なし	焼き締めか	－
第97図 316	ね107 Ⅱ層	日本産 陶磁器	磁器製品 ランプ	破片	最大長:－ 最大幅:－ 器高:2.7	8.8	磁器	－	なし	なし	なし	なし	全面透明釉	－
第97図 317	の108 Ⅱ層	円盤状 製品	略円形	完形	外径:4.5 最大厚:5.0	14.0	中国産 青花	－	打剥/外	－	－	－	－	－
第97図 318	の108 Ⅱ層	金属 製品	簪	完形(変形)	最大長:154.8 最大幅:3.7 最大厚:2.6	4.69	青銅	－	なし、鍛造	なし	なし	なし	鍍金 茎部断面 六角形	男性用副簪(押差)
第97図 319	不明 Ⅰ層	石製品	硯	破片(陸部)	最大長:69 最大厚:17 最大幅:62	98.4	赤色頁岩	－	研磨	砥面	－	－	砥石に転用	－

図版 69　エプロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（S=33%）

第６章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定・土壌分析

矢作健二・松元美由紀・上田圭一
（株式会社パリノ・サーヴェイ）

はじめに

大嶺村跡は、那覇空港敷地内の管制塔庁舎建設予定地箇所ほかに所在する、戦前まで存在していた大嶺村の痕跡である。大嶺村は、古文書などから王府時代～近世・近代まで存続していたことが確認されており、戦後米軍に接収された。戦前は海岸線に面し、半農半漁の部落であったとされる。発掘調査は、管制塔Ⅰ地区、管制塔Ⅱ地区、エプロン地区の３箇所で実施されており、轍跡や井戸、土坑、石組み遺構、集石遺構、かまど跡などが確認されている。

本報告では、遺構や遺物、堆積層の年代の情報を得る目的として放射性炭素年代測定、調査区ベルトの基本土層を対象に古植生、土壌特性の関する情報を得ることを目的として、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析、土壌理化学分析を実施する。

1. 試料

試料は、エプロン地区のトレンチ１はⅥ層バックリーフから３点、トレンチ２はSL、SPなどの遺構とサブトレンチから38点、管制塔Ⅰ地区東西ベルトより７点の合計48点の試料を採取している。また、沖縄産無釉陶器と明朝系丸瓦の圧痕内に充填された貝、くびれ平底土器付着炭化物も対象とした。

エプロン地区トレンチ２のSL1（集石遺構）の炭化物回収については、現地で回収したもの、土壌サンプルから回収したもの、遺構内から取り上げた礫を一旦持ち帰り、礫に付着した炭化物を回収したものがある。礫は現地で１から５までの番号を付し、炭を保護するため、礫ごとにアルミホイルで包んだ。また、礫取上げ後に、複数ピットの切り合い関係が想定されたので、便宜上ブロック１から３まで区画した。

また、管制塔Ⅰ地区東西ベルトは断面よりNo.1～No.5の５点が採取されており、No.1～No.5の５点を分析対象とした。いずれも粗粒～極粗粒砂を主体としており、No.1、No.2がやや暗色を示す。この層準には畝跡に似る痕跡も認められる。いずれ層準も貝片、サンゴ片などを含むが、No.3で貝片・サンゴ片が多く、No.4、No.5ではこれらが主体をなす。また、No.5採取層準には、ビーチロックも含まれていた。

沖縄産無釉陶器と明朝系丸瓦の圧痕内に充填された貝の回収は先端の尖ったピンセット等で掻き出し、前処理を省略している。

以上の試料から放射性年代測定を24点、管制塔Ⅰ地区東西ベルトの５点は花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析、土壌理化学分析を実施した。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。炭化材試料は、試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸―アルカリ―酸処理：AAA)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M～1Mまで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAAと記す。一方、試料が脆弱で1Mの水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。精製された試料を燃焼してCO_2発生させる。

貝殻は、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。試料の表面をHClを用いて約30%溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する(Edg処理)。試料中の炭酸カルシウム($CaCO_3$)を分解し、CO_2を発生させる。

CO_2を真空ラインで精製する。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度(^{14}C/^{12}C)を測定する。AMS測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。

表 84　試料表

地区	トレンチ名	試料No.	遺構名、層序、試料など		分析項目				
					年代	花粉 微粒炭	珪酸体	微細物	土理
エプロン地区	トレンチ1	No.1	Ⅵ層	バックリーフ内	○				
		No.2	Ⅵ層	バックリーフ内	○				
		No.3	Ⅵ層	バックリーフ最下層	○				
	トレンチ2	No.4	SL1	ブロック1　3層					
		No.5	SL1	ブロック1　2-1層					
		No.6	SL1	ブロック2　1-1層	○				
		No.7	SL1	ブロック2　2-1層	○				
		No.8	SL1	ブロック3　1-1層					
		No.9	SL1	ブロック3　2-1層					
		No.10	SL1	ブロック2					
		No.11	SL1	ブロック2					
		No.12	SL1	ブロック3					
		No.13	SL1	ブロック3					
		No.14	SP16	1層	○				
		No.15	SP57	1層					
		No.16	SP59	1層					
		No.17	SP119	1層	○				
		No.18	SP120	2層					
		No.19	SP120	3層					
		No.20	SP123	1層					
		No.21	SP124	1層					
		No.22	SP124	2層					
		No.23	SP125	1層					
		No.24	SP125	2層					
		No.25	SP125	3層					
			SP104						
			SL1	1	○				
			SL1	2					
			SL1	3					
			SL1	4	○				
			SL1	5	○				
			SL1	ブロック①					
			SL1	ブロック①下層	○				
			SL1	ブロック②					
			SL1	ブロック②					
			SL1	ブロック③					
			SL1	ブロック③下層	○				
	トレンチ2 サブトレンチ	No.26	Ⅴ層		○				
		No.27	Ⅴ層		○				
		No.28	Ⅵ層		○				
		No.29	Ⅵ層		○				
管制塔Ⅰ地区			ベルトⅢ-1層	No.1	○	○	○	○	○
			ベルトⅢ-2層	No.2		○	○	○	○
			ベルトⅢ-3層	No.3	○	○	○	○	○
			ベルトⅤ層	No.4		○	○	○	○
			ベルトⅤ層	No.5	○	○	○	○	○
			Ⅲ-1層上面硬化面						
			Ⅲ-1層上面硬化面						
エプロン地区トレンチ1			明朝系丸瓦 圧痕内充填貝片1		○				
管制塔Ⅰ地区			沖縄産無釉陶器 圧痕内充填貝片2		○				
エプロン地区トレンチ1			土器(299)付着炭化物		○				

$\delta^{13}C$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}C/^{12}C$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

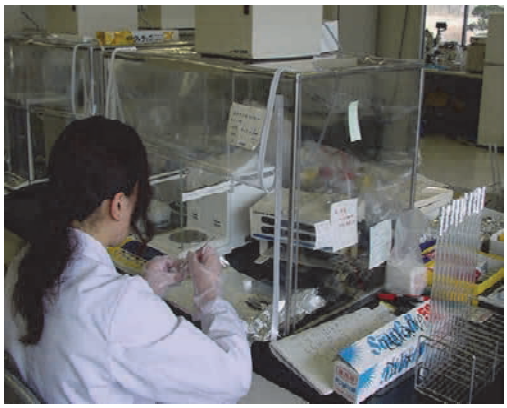
暦年較正に用いるソフトウエアは、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0、較正曲線は Intcal13(Reimer et al.,2013) である。なお、貝類は、$\delta^{13}C$ の値などから海棲貝類と想定されるものは、リザーバー効果を考慮した Marine13(Reimer et al.,2013) を使用した。一方、圧痕内貝類に関しては海棲貝類ではないと想定されるので、この限りではない。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13(Reimer et al.,2013) である。また、較正年代を求めるソフトウエアはいくつか公開されているが、今回は CALIB を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。また、中央値は、確率分布の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

(2) 花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容し

分析試料拾い出しの様子



年代測定　前処理

年代測定　グラファイト合成

年代測定装置

図版 70　年代測定作業風景

てから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に 200 個以上同定・計数する (化石の少ない試料ではこの限りではない)。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007)、三好ほか (2011) 等を参考にする。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭 (微細な炭化植物片) の含量が、自然植生に対する人類干渉の指標として有効であるとされていることから (安田,1987 など)、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井 (1996)、井上ほか (2002) 等を参考にする。計数は、山野井 (1996) などを参考にし、長径が約 20 μ m 以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、山野井 (1996) などを参考とし、分析土壌量 (cc)、分析残渣量 (ml)、プレパラート作成量 (μ l) を測定し、堆積物 1cc あたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

(4) 微細物分析

土壌試料から炭化物を可能な限り壊さずに回収するために、以下の方法を実施する。

1) 水洗前抽出

試料を常温乾燥後、肉眼観察で確認された炭化種実や炭化材、動物遺存体、土器片等の遺物を抽出する。

2) 水洗

水を満たした容器に乾燥後の試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す (20 回程度)。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩に回収された炭化物主体の試料と、0.5mm 篩水洗後の残土 (砂礫主体) を、それぞれ粒径 8mm、4mm、2mm、1mm の篩を通し、粒径別に常温乾燥させる。

3) 抽出分類

水洗乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実、炭化材 (主に 2mm 以上)、保存状態が良好な動物遺存体 (骨片、歯、巻貝類、二枚貝類、貝類 (主に 8mm 以上)、甲殻類、ウニ類)、サンゴ片 (主に 8mm 以上)、土器片、ガラス片等の遺物を抽出する。

抽出物は、個数または重量と一部の最大径を計測し、結果を一覧表で示す。分析残渣は、炭化材主体と砂礫主体、植物片主体に大まかに分け、粒径別の重量を計測し、結果を一覧表に併記する。分析後は、一部の炭化材を樹種同定対象とし、他の抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

(5) 土壌理化学分析

分析は、人為的利用の痕跡を明らかにするため、pH(H_2O)、電気伝導度、有機炭素、全窒素、MI(Melanic index)、全リン酸、全カルシウム、可給態リン酸、リン酸吸収係数を選択した。pH(H_2O) はガラス電極法、電気伝導率は白金電極法、有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解－水蒸気蒸留法、MI は腐植簡易分析法 (本名・山本 ,1992)、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法、可給態リン酸はトルオーグ法、リン酸吸収係数は 2.5% リン酸アンモニウム液法でそれぞれ行った (土壌標準分析・測定法委員会 ,1986; 土壌環境分析法編集委員会 ,1997)。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

pH(H_2O) は、風乾細土 10.0g をはかりとり、25ml の蒸留水を加えてガラス棒で撹拌する。30 分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pH メーター (ガラス電極法) で pH(H_2O) を測定する。

電気伝導率［EC］は、風乾細土試料 10.0g を秤りとり、50ml の純水を加えて 1 時間振とうする。振とう後、すみやかに電気伝導率計 (白金電極法) で電気伝導率 (dS/m) を測定する。

有機炭素は、粉砕土試料 1.000 ～ 3.000g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土 %) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

全窒素は、粉砕土試料 2.00g をケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約 3.0g と硫酸 10ml を加え加熱分解した。分解後、蒸留水約 30ml を加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量 (T-N%) を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率) を算出する。

MI(Melanic Index) による腐植簡易分析は、炭素 50mg に相当する微粉砕試料 (但し、5.0g を上限とする) を 50ml 容遠心管に入れ、分注器で 0.5%NaOH 溶液約 25ml を加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で 1 時間振とうした後、0.1% 高分子凝集剤溶液 1 ～ 2 滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15min の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約 1ml を試験管にとり、0.1%NaOH 溶液 20ml を分注器で加え (NaOH の濃度は約 0.1% となる)、分光光度計により 450、520nm の吸光度を測定する (450nm の吸光度が 1 を越えた試料は、さらに 0.1%NaOH 溶液で希釈して測定)。測定は抽出後、3 時間以内に行い、結果の表示を $MI(=K_{450}/K_{520})$ で示す。

全リン酸、全カルシウムは、粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO_3) 約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 ($HClO_4$) 約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P_2O_5) 濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5mg/g) とカルシウム含量 (CaOmg/g) を求める。

可給態リン酸は、風乾細土試料 1.00g を 300ml 三角フラスコに秤りとり、0.002 N 硫酸溶液 (pH3)200ml を加え、室温で 1 時間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態リン酸量 (P_2O_5mg/ 乾土 100 g) を求める。

リン酸吸収係数は、乾土として 10.00g になるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5% リン酸アンモニウム液 (pH7.0)20ml を加え、時々振り混ぜながら室温で 24 時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液 100 μ l を 50ml メスフラスコに正確にとり、水約 35ml とリン酸発色 a 液 10ml を加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後 30 分間放置し、420nm で比色定量する。定量された試料中のリン酸量を 2.5% リン酸アンモニウム液 (pH7.0) のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数 (mg/100g) を求める。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表 85 から 87 に示す。

試料の測定年代 (補正年代) はエプロン地区トレンチ 1 バックリーフの№.1 が 5,050 ± 30BP、№.2 が 5,660 ± 30BP、№.3 が 4,150 ± 30BP の値を示す。

エプロン地区トレンチ 2 の SL1 から回収した 7 点の補正年代は、礫番号 1、礫番号 4、礫番号 5 がそれぞれ 1,300 ± 20BP、230 ± 30BP、210 ± 20BP、ブロック 1 下層が 210 ± 20BP、ブロック 2 の 1-1 層と 2-1 層が 190 ± 30BP、250 ± 20BP、ブロック 3 の下層が 230 ± 20BP の値を示す。また、SP16 1 層は 340 ± 20BP、SP119 1 層は 1,210 ± 30BP の値を示す。

エプロン地区トレンチ 2 サブトレンチ浅黄色砂層（№.26）が 2,990 ± 20BP、サブトレンチ浅黄色粗砂層（№.27）が 2,400 ± 20BP、の値を示す。サブトレンチ灰黄色砂層（№.28）4,510 ± 30BP、4,250 ± 30BP、サブトレンチ灰黄色シルト層（№.29）が 6,270 ± 30BP、6,220 ± 30 であった。

管制塔 I 地区ベルト No.1 が 130 ± 20BP、ベルト No.3 が 185 ± 20BP、ベルト No.5 が 1,250 ± 20BP の値を示す。

明朝系丸瓦圧痕内充填貝片 1 が 310 ± 20BP、沖縄産無釉陶器圧痕内充填貝片 2 が 280 ± 20BP、土器（299）付着炭化物は 1,730 ± 20BP の値を示す。

測定誤差を 2 σとして計算させた結果、エプロン地区トレンチ 1 バックリーフ内の 3 点の暦年代は最も

表 85　放射性年代測定結果

地区	トレンチNo.	試料No.	検出面、遺構名、遺物番号など	試料種類	測定年代	δ13C (‰)	Code No.
エプロン地区	トレンチ1	No.1	Ⅵ層バックリーフ内	炭化物	5,050±30	−22.17±0.45	IAAA−172264
		No.2	Ⅵ層バックリーフ内	貝	5,660±30	4.74±0.44	IAAA−172265
		No.3	Ⅵ層バックリーフ最下層	炭化物	4,150±30	−24.08±0.40	IAAA−172266
	トレンチ2		SL1　礫番号1	炭化物	1,300±20	−27.64±0.50	IAAA−160460
			SL1　礫番号4	炭化物	230±30	−25.47±0.57	IAAA−160461
			SL1　礫番号5	炭化物	210±20	−20.39±0.55	IAAA−160462
		No.6	SL1　ブロック2　1−1層	炭化物	190±30	−29.05±0.56	IAAA−160454
		No.7	SL1　ブロック2　2−1層	炭化物	250±20	−28.78±0.54	IAAA−160455
			SL1　ブロック1　下層	炭化物	210±20	−25.04±0.46	IAAA−160463
			SL1　ブロック3　下層	炭化物	230±20	−26.52±0.35	IAAA−160464
		No.14	SP16　1層	炭化物	340±20	−29.16±0.52	IAAA−160456
		No.17	SP119　1層	炭化物	1,210±30	−28.28±0.55	IAAA−160457
		No.26	Ⅴ層　浅黄色砂層	貝	2,990±20	4.84±0.35	IAAA−172267
		No.27	Ⅴ層　浅黄色粗砂層	貝	2,400±20	2.75±0.43	IAAA−172268
		No.28	Ⅵ層　灰黄色砂層	炭化材（広葉樹） 炭化物	4,510±30 4,250±30	−27.36±0.65 −28.55±0.44	IAAA−160458 IAAA−172269
		No.29	Ⅵ層　灰黄色砂層	炭化材 炭化物	6,270±30 6,220±30	−30.87±0.48 −26.29±0.49	IAAA−160459 IAAA−172270
管制塔Ⅰ地区東西ベルト			ベルトⅢ−1層　No.1	炭化物	130±20	−31.77±0.42	YU−5535
			ベルトⅢ−3層　No.3	炭化物	185±20	−32.06±0.51	YU−5536
			ベルトⅤ層　No.5	貝	1,250±20	2.30±0.43	YU−5537
エプロン地区	トレンチ1		明朝系丸瓦 圧痕内充填貝片1	貝	310±20	−15.24±0.38	IAAA−172261
管制塔Ⅰ地区			沖縄産無釉陶器 圧痕内充填貝片2	貝	280±20	−17.93±0.33	IAAA−172262
エプロン地区	トレンチ1		土器(299)付着炭化物	炭化物	1,730±20	−25.58±0.45	IAAA−172263

古いNo.2が6,167-5,979 cal BP、次にNo.1が5,898-5,735 cal BP、最も新しいものはNo.3が4,822-4,578 cal BPであった。

エプロン地区トレンチ2のSL1の礫番号1、礫番号4、礫番号5がそれぞれcal AD664-768、cal AD1642-1950+、cal AD1649-1950+、ブロック1下層がcal AD1,650-1,950+、ブロック2の1-1層（No.6）と2-1層（No.7）がcal AD1,655-1,950+、cal AD1,528-1,950+、ブロック3下層はcal AD1,643-1,950+であった。SP16 1層（No.14）がcal AD1,475-1,636、SP119 1層（No.17）がcal AD717-888であった。

サブトレンチ浅黄色砂層（No.26）が2,827-2,713 cal BP、浅黄色粗砂層（No.27）が2,119-1,950 cal BP、灰黄色砂層（No.28）が5,300-5,048 cal BP、4,862-4,709 cal BP、灰黄色シルト層（No.29）が7,267-7,157

表 86　暦年較正結果 1

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代(cal)			相対比	Code No.
No.1	5,052±27	σ	cal BC 3,940 − cal BC 3,858	cal BP 5,889 − 5,807	0.812	IAAA-172264
エプロン地区トレンチ1			cal BC 3,815 − cal BC 3,797	cal BP 5,764 − 5,746	0.188	
Ⅵ層バックリーフ内		2σ	cal BC 3,949 − cal BC 3,786	cal BP 5,898 − 5,735	1.000	
No.2	5,662±25	σ	cal BC 4,163 − cal BC 4,054	cal BP 6,112 − 6,003	1.000	IAAA-172265
Ⅵ層 バックリーフ内		2σ	cal BC 4,218 − cal BC 4,030	cal BP 6,167 − 5,979	1.000	
No.3	4,145±26	σ	cal BC 2,865 − cal BC 2,835	cal BP 4,814 − 4,784	0.217	IAAA-172266
エプロン地区トレンチ1			cal BC 2,817 − cal BC 2,805	cal BP 4,766 − 4,754	0.077	
Ⅵ層バックリーフ最下層			cal BC 2,760 − cal BC 2,665	cal BP 4,709 − 4,614	0.689	
			cal BC 2,643 − cal BC 2,640	cal BP 4,592 − 4,589	0.016	
		2σ	cal BC 2,873 − cal BC 2,829	cal BP 4,822 − 4,778	0.193	
			cal BC 2,823 − cal BC 2,629	cal BP 4,772 − 4,578	0.807	
No.6	188±25	σ	cal AD 1,665 − cal AD 1,681	cal BP 285 − 269	0.229	IAAA-160454
エプロン地区トレンチ2			cal AD 1,738 − cal AD 1,753	cal BP 212 − 197	0.151	
SL1 ブロック2 1-1層			cal AD 1,762 − cal AD 1,785	cal BP 188 − 165	0.311	
			cal AD 1,793 − cal AD 1,803	cal BP 157 − 147	0.118	
			cal AD 1,937 − cal AD 1,950	cal BP 13 − 0	0.191	
		2σ	cal AD 1,655 − cal AD 1,687	cal BP 295 − 263	0.219	
			cal AD 1,730 − cal AD 1,809	cal BP 220 − 141	0.600	
			cal AD 1,926 − cal AD 1,950+	cal BP 24 − 0	0.181	
No.7	246±24	σ	cal AD 1,644 − cal AD 1,665	cal BP 306 − 285	0.843	IAAA-160455
エプロン地区トレンチ2			cal AD 1,786 − cal AD 1,792	cal BP 164 − 158	0.157	
SL1 ブロック2 2-1層		2σ	cal AD 1,528 − cal AD 1,550	cal BP 422 − 400	0.035	
			cal AD 1,634 − cal AD 1,670	cal BP 316 − 280	0.704	
			cal AD 1,779 − cal AD 1,799	cal BP 171 − 151	0.238	
			cal AD 1,943 − cal AD 1,950+	cal BP 7 − 0	0.023	
No.14	339±24	σ	cal AD 1,492 − cal AD 1,525	cal BP 458 − 425	0.326	IAAA-160456
エプロン地区トレンチ2			cal AD 1,557 − cal AD 1,602	cal BP 393 − 348	0.473	
SP16 1層			cal AD 1,613 − cal AD 1,632	cal BP 337 − 318	0.200	
		2σ	cal AD 1,475 − cal AD 1,636	cal BP 475 − 314	1.000	
No.17	1,210±30	σ	cal AD 771 − cal AD 779	cal BP 1,179 − 1,171	0.090	IAAA-160457
エプロン地区トレンチ2			cal AD 789 − cal AD 868	cal BP 1,161 − 1,082	0.910	
SP119 1層		2σ	cal AD 717 − cal AD 742	cal BP 1,233 − 1,208	0.086	
			cal AD 766 − cal AD 888	cal BP 1,184 − 1,062	0.914	
No.26	2,990±20	σ	cal BC 831 − cal BC 780	cal BP 2,780 − 2,729	1.000	IAAA-172267
エプロン地区トレンチ2 Ⅴ層		2σ	cal BC 878 − cal BC 764	cal BP 2,827 − 2,713	1.000	
No.27	2,400±20	σ	cal BC 132 − cal BC 42	cal BP 2,081 − 1,991	1.000	IAAA-172268
エプロン地区トレンチ2 Ⅴ層		2σ	cal BC 170 − cal AD 0	cal BP 2,119 − 1,950	1.000	
No.28	①4,510±30	①σ	cal BC 3,341 − cal BC 3,318	cal BP 5,290 − 5,267	0.154	IAAA-160458
エプロン地区トレンチ2			cal BC 3,292 − cal BC 3,289	cal BP 5,241 − 5,238	0.017	
Ⅵ層			cal BC 3,273 − cal BC 3,266	cal BP 5,222 − 5,215	0.041	
			cal BC 3,237 − cal BC 3,168	cal BP 5,186 − 5,117	0.442	
			cal BC 3,165 − cal BC 3,112	cal BP 5,114 − 5,061	0.346	
		①2σ	cal BC 3,351 − cal BC 3,262	cal BP 5,300 − 5,211	0.343	
			cal BC 3,250 − cal BC 3,099	cal BP 5,199 − 5,048	0.657	
	②4,248±28	②σ	cal BC 2,901 − cal BC 2,878	cal BP 4,850 − 4,827	1.000	IAAA-172269
		②2σ	cal BC 2,913 − cal BC 2,865	cal BP 4,862 − 4,814	0.863	
			cal BC 2,805 − cal BC 2,760	cal BP 4,754 − 4,709	0.137	
No.29	①6,266±30	①σ	cal BC 5,298 − cal BC 5,247	cal BP 7,247 − 7,196	0.804	IAAA-160459
エプロン地区トレンチ2			cal BC 5,234 − cal BC 5,221	cal BP 7,183 − 7,170	0.196	
Ⅵ層		①2σ	cal BC 5,318 − cal BC 5,208	cal BP 7,267 − 7,157	1.000	
	②6,217±30	②σ	cal BC 5,282 − cal BC 5,275	cal BP 7,231 − 7,224	0.037	IAAA-172270
			cal BC 5,226 − cal BC 5,204	cal BP 7,175 − 7,153	0.230	
			cal BC 5,168 − cal BC 5,075	cal BP 7,117 − 7,024	0.733	
		②2σ	cal BC 5,296 − cal BC 5,196	cal BP 7,245 − 7,145	0.409	
			cal BC 5,179 − cal BC 5,063	cal BP 7,128 − 7,012	0.591	
エプロン地区トレンチ2	1,296±24	σ	cal AD 672 − cal AD 695	cal BP 1,278 − 1,255	0.474	IAAA-160460
SL1 礫番号1			cal AD 700 − cal AD 710	cal BP 1,250 − 1,240	0.151	
			cal AD 745 − cal AD 764	cal BP 1,205 − 1,186	0.374	
		2σ	cal AD 664 − cal AD 726	cal BP 1,286 − 1,224	0.663	
			cal AD 738 − cal AD 768	cal BP 1,212 − 1,182	0.337	
エプロン地区トレンチ2	226±25	σ	cal AD 1,649 − cal AD 1,668	cal BP 301 − 282	0.551	IAAA-160461
SL1 礫番号4			cal AD 1,782 − cal AD 1,797	cal BP 168 − 153	0.449	
		2σ	cal AD 1,642 − cal AD 1,681	cal BP 308 − 269	0.492	
			cal AD 1,739 − cal AD 1,734	cal BP 211 − 216	0.007	
			cal AD 1,763 − cal AD 1,802	cal BP 187 − 148	0.418	
			cal AD 1,938 − cal AD 1,950+	cal BP 12 − 0	0.084	
エプロン地区トレンチ2	208±23	σ	cal AD 1,655 − cal AD 1,674	cal BP 295 − 276	0.333	IAAA-160462
SL1 礫番号5			cal AD 1,778 − cal AD 1,799	cal BP 172 − 151	0.502	
			cal AD 1,942 − cal AD 1,950+	cal BP 8 − 0	0.165	
		2σ	cal AD 1,649 − cal AD 1,682	cal BP 301 − 268	0.323	
			cal AD 1,737 − cal AD 1,757	cal BP 213 − 193	0.065	
			cal AD 1,761 − cal AD 1,804	cal BP 189 − 146	0.475	
			cal AD 1,936 − cal AD 1,950+	cal BP 14 − 0	0.138	
エプロン地区トレンチ2	206±23	σ	cal AD 1,657 − cal AD 1,675	cal BP 293 − 275	0.331	IAAA-160463
SL1 ブロック①下層			cal AD 1,769 − cal AD 1,770	cal BP 181 − 180	0.012	
			cal AD 1,777 − cal AD 1,799	cal BP 173 − 151	0.487	
			cal AD 1,941 − cal AD 1,950+	cal BP 9 − 0	0.170	
		2σ	cal AD 1,650 − cal AD 1,682	cal BP 300 − 268	0.307	
			cal AD 1,737 − cal AD 1,757	cal BP 213 − 193	0.077	
			cal AD 1,761 − cal AD 1,804	cal BP 189 − 146	0.474	
			cal AD 1,936 − cal AD 1,950	cal BP 14 − 0	0.143	
エプロン地区トレンチ2	225±23	σ	cal AD 1,651 − cal AD 1,667	cal BP 299 − 283	0.543	IAAA-160464
SL1 ブロック③下層			cal AD 1,782 − cal AD 1,797	cal BP 168 − 153	0.457	
ベルト		2σ	cal AD 1,643 − cal AD 1,679	cal BP 307 − 271	0.496	
			cal AD 1,764 − cal AD 1,800	cal BP 186 − 150	0.426	
			cal AD 1,939 − cal AD 1,950+	cal BP 11 − 0	0.079	

表 87　暦年較正結果 2

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代(cal)												相対比	Code No.
管制塔Ⅰ地区東西ベルト №1 Ⅲ-1層	130±20	σ	cal AD	1,683	−	cal AD	1,699	cal BP	267	−	251	0.156	YU-5535
			cal AD	1,721	−	cal AD	1,736	cal BP	229	−	214	0.130	
			cal AD	1,805	−	cal AD	1,818	cal BP	145	−	132	0.109	
			cal AD	1,833	−	cal AD	1,879	cal BP	117	−	71	0.430	
			cal AD	1,915	−	cal AD	1,935	cal BP	35	−	15	0.174	
		2σ	cal AD	1,680	−	cal AD	1,764	cal BP	270	−	186	0.350	
			cal AD	1,801	−	cal AD	1,891	cal BP	149	−	59	0.491	
			cal AD	1,908	−	cal AD	1,939	cal BP	42	−	11	0.159	
管制塔Ⅰ地区東西ベルト №3 Ⅲ-3層	184±20	σ	cal AD	1,666	−	cal AD	1,681	cal BP	284	−	269	0.240	YU-5536
			cal AD	1,739	−	cal AD	1,745	cal BP	211	−	205	0.078	
			cal AD	1,762	−	cal AD	1,783	cal BP	188	−	167	0.354	
			cal AD	1,796	−	cal AD	1,802	cal BP	154	−	148	0.107	
			cal AD	1,938	−	cal AD	1,950+	cal BP	12	−	0	0.221	
		2σ	cal AD	1,663	−	cal AD	1,684	cal BP	287	−	266	0.198	
			cal AD	1,733	−	cal AD	1,807	cal BP	217	−	143	0.612	
			cal AD	1,929	−	cal AD	1,950+	cal BP	21	−	0	0.190	
管制塔Ⅰ地区東西ベルト №5 Ⅴ層	1,250±20	σ	cal AD	1,123	−	cal AD	1,203	cal BP	827	−	747	1.000	YU-5537
		2σ	cal AD	1,072	−	cal AD	1,225	cal BP	878	−	725	1.000	
明朝系丸瓦 圧痕内充填貝片1	312±21	σ	cal AD	1,521	−	cal AD	1,575	cal BP	429	−	375	0.772	IAAA-172261
			cal AD	1,625	−	cal AD	1,641	cal BP	325	−	309	0.228	
		2σ	cal AD	1,494	−	cal AD	1,508	cal BP	456	−	442	0.036	
			cal AD	1,511	−	cal AD	1,601	cal BP	439	−	349	0.738	
			cal AD	1,616	−	cal AD	1,645	cal BP	334	−	305	0.225	
沖縄産無釉陶器 圧痕内充填貝片2	276±22	σ	cal AD	1,528	−	cal AD	1,550	cal BP	422	−	400	0.363	IAAA-172262
			cal AD	1,634	−	cal AD	1,654	cal BP	316	−	296	0.637	
		2σ	cal AD	1,521	−	cal AD	1,578	cal BP	429	−	372	0.448	
			cal AD	1,582	−	cal AD	1,591	cal BP	368	−	359	0.014	
			cal AD	1,622	−	cal AD	1,664	cal BP	328	−	286	0.537	
			cal AD	1,789	−	cal AD	1,791	cal BP	161	−	159	0.002	
土器(299)付着炭化物	1,728±23	σ	cal AD	255	−	cal AD	300	cal BP	1,695	−	1,650	0.589	IAAA-172263
			cal AD	317	−	cal AD	346	cal BP	1,633	−	1,604	0.373	
			cal AD	372	−	cal AD	376	cal BP	1,578	−	1,574	0.037	
		2σ	cal AD	250	−	cal AD	382	cal BP	1,700	−	1,568	1.000	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

cal BP、7,245-7,012 cal BP であった。また、灰黄色砂層（№28）の炭化材は広葉樹と同定された。

管制塔Ⅰ地区東西ベルト№1、№3、№5 の暦年代はそれぞれ、cal AD1,680-1,939、cal AD1,663-1,950+、cal AD1,072-1,225 であった。

明朝系丸瓦圧痕内充填貝片 1 が cal AD1,494-1,645、沖縄産無釉陶器圧痕内充填貝片 2 が cal AD1,521-1,791、土器（299）付着炭化物は cal AD250-382 であった。

(2) 花粉分析

結果を表 88 に示す。いずれの試料も花粉化石の産出状況が悪く、堆積物 1cc あたりの花粉・胞子数は No.1 で約 100 個、それ以外は 100 個未満で、No.4 に関しては無化石であった。わずかに検出された種類をみると、木本花粉ではモミ属、マツ属、サルスベリ属が、草本花粉はイネ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科などが確認された。

微粒炭数は No.1 で約 39,600 個 /cc、No.2 で約 40,600 個 /cc と多く、No.3 では約 1,500 個 /cc と少なくなり、No.4、No.5 では 200 ～ 100 個 /cc と極端に少なくなる。なお、検出された微粒炭は、ほとんどが母材の推定が難しい不明型であったが、わずかに壁孔などの木材組織を有するものも確認された。また、No.1 からは寄生虫の卵である鞭虫卵も確認されたが、その含量は少なく、堆積物 1cc あたり 100 個未満であった。

(3) 植物珪酸体分析

分析した 5 試料のいずれからも、植物珪酸体は 1 個体も検出されなかった。検鏡時には、分析プレパラート内に鉱物粒子が散在するに過ぎない。

(4) 微細物分析

結果を表 89 に示す。分析に供された 5 試料 4.66kg より、炭化材 2.8g、炭化材主体 0.5g、骨片 37 個 0.2g、骨片 ?3 個 0.1g、歯 ?30 個 0.1g、巻貝類 2,196 個 22.9g、二枚貝類 255 個 4.3g、貝類 62 個 14.5g、甲殻類の爪 67 個 0.3g、ウニ類の棘 694 個 6.4g、殻板 40 個 1.0g、サンゴ片 162 個 221.9g、土器片 ?1 個 0.0g、ガラス片 ?1 個 0.0g、砂礫主体 (サンゴ片・貝類・ウニ類・有孔虫等含む)3.45kg、植物片 0.1g が検出された。以下、試料別出土状況を述べる。

・No.1

試料480gより、炭化材2.4g(最大1.6cm)、炭化材主体0.3g、骨片16個0.1g、歯?2個0.0g、巻貝類446個3.9g、二枚貝類34個0.2g、貝類8個0.1g、ウニ類182個2.3g、サンゴ片5個8.2g、ガラス片?1個0.0g(3.0mm)、砂礫主体314.6g、植物片0.0gが検出された。炭化材が多産し、サンゴ片が減少する。

・No.2

試料520gより、炭化材0.4g(最大1.5cm)、炭化材主体0.2g、骨片19個0.1g、骨片?1個0.1g、歯?8個0.0g、巻貝類431個10.1g、二枚貝類44個2.4g、貝類8個1.2g、甲殻類21個0.1g、ウニ類261個2.9g、サンゴ片24個21.4g、土器片?1個0.0g(4.7mm)、砂礫主体357.8gが検出された。炭化材やウニ類、巻貝が多産する。

・No.3

試料440gより、炭化材0.0g(最大1.5mm)、骨片1個0.0g、骨片?2個0.0g、歯?5個0.0g、巻貝類368個2.4g、二枚貝類61個0.4g、貝類10個0.9g、甲殻類12個0.0g、ウニ類60個0.4g、サンゴ片31個21.6g、砂礫主体303.9gが検出され、巻貝類が多産する。

・No.4

試料780gより、炭化材0.0g(最大1.9mm)、骨片1個0.0g、歯?9個0.0g、巻貝類540個3.5g、二枚貝類81個0.8g、貝類16個4.6g、甲殻類20個0.1g、ウニ類127個0.9g、サンゴ片40個46.6g、砂礫主体514.3gが検出され、巻貝類が多産する。

・No.5

試料2.44kgより、炭化材0.0g(最大1.4mm)、歯?6個0.0g、巻貝類411個3.0g、二枚貝類35個0.4g、貝類20個7.8g、甲殻類14個0.1g、ウニ類104個0.8g、サンゴ片62個124.1g、砂礫主体1.96kg、植物片0.0gが検出され、巻貝類が多産する。

表88 花粉分析結果

種類	管制塔Ⅰ地区 東西ベルト Ⅲ-1層 No.1	Ⅲ-2層 No.2	Ⅲ-3層 No.3	Ⅴ層 No.4	Ⅴ層 No.5
木本花粉					
モミ属	1	−	−	−	−
マツ属	1	−	−	−	1
サルスベリ属	−	−	−	−	1
草本花粉					
ガマ属	−	−	−	−	1
イネ科	1	1	−	−	5
クワ科	−	1	−	−	−
アカザ科	3	1	−	−	−
アブラナ科	14	4	2	−	−
キク亜科	−	−	−	−	4
タンポポ亜科	−	−	1	−	−
不明花粉					
不明花粉	1	1	−	−	1
シダ類胞子					
シダ類胞子	9	7	−	−	1
合計					
木本花粉	2	0	0	0	2
草本花粉	18	7	3	0	10
不明花粉	1	1	0	0	1
シダ類胞子	9	7	0	0	1
合計(不明を除く)	29	14	3	0	13
その他					
鞭虫卵	1	−	−	−	−
微粒炭数(個/cc)	39600	40600	1500	100	200
花粉・胞子数(個/cc)	100	<100	<100	0	<100
寄生虫卵数(個/cc)	<100	0	0	0	0

1)微粒炭数、花粉・胞子数、寄生虫卵数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。
2)<100:100個未満。

(5) 土壌理化学分析

結果を表90に示す。試料はいずれもサンゴ片や貝殻片が視認できるものであり、野外土性(ペドロジー学会編,1997)は、いずれの試料もS(砂土)である。土色はNo.1、No.2で2.5Y4/3オリーブ褐、No.3～No.5では2.5Y6/4にぶい黄～2.5Y7/4浅黄と同様である。

pH(H_2O)は各試料共に8.0以上と強アルカリ性を呈する。電気伝導率は0.09-0.14dS/mと大きな差異はなく、pH(H_2O)の値から考えると水溶性塩類が少ない。腐植含量はNo.1で0.71%、No.2で0.38%、No.3～No.5では0.19-0.21%と下層から上層へ増加する。全窒素は0.02-0.03%と差異がない。C/N比はNo.1で14、No.2で11、他の試料では6と腐植含量による差異が示された。MIはいずれの試料においても検出されなかった。

全リン酸はNo.1で2.35mg/g、No.2で1.42mg/g、他の試料では0.54-0.81mg/gと腐植同様の傾向を示す。カルシウム含量は、458-492mg/gと多い。可給態リン酸はNo.1で22.5mg/100g、No.2で19.5mg/100g、他の試料では4.7-6.7mg/100gであり、リン酸吸収係数はNo.1、No.2、No.3で760-830mg/100gと同様、No.4で1050mg/100g、No.5で1440といずれも腐植含量同様の傾向を示す。

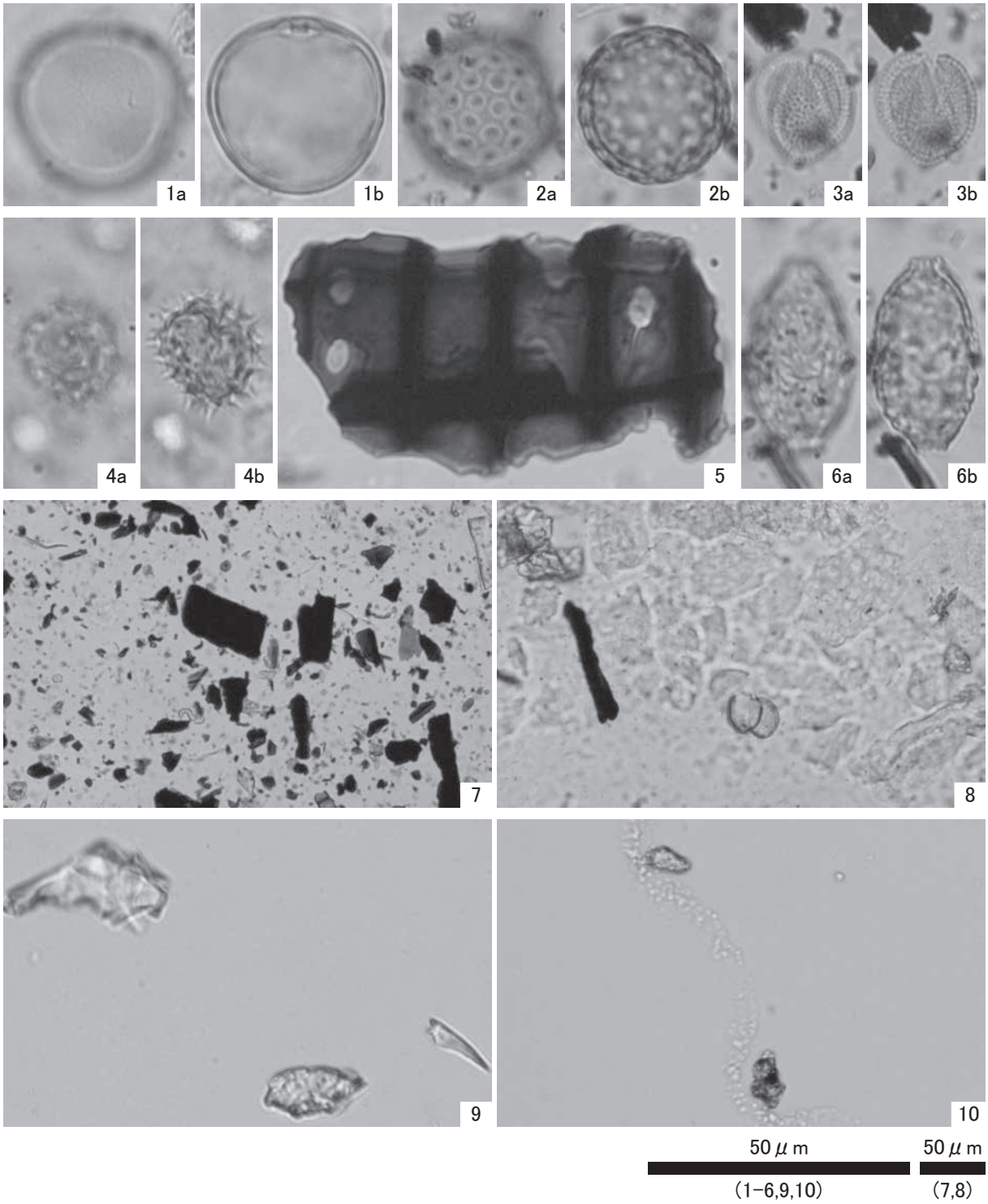
表 89　微細物分析結果

分類群・部位・状態		管制塔Ⅰ地区 東西ベルト Ⅲ−1層 No.1	Ⅲ−2層 No.2	Ⅲ−3層 No.3	Ⅴ層 No.4	Ⅴ層 No.5	合計	備考
炭化材		16.4	15.3	1.5	1.9	1.4	−	最大径(mm)
	>2mm	2.4	0.4	0.0	0.0	0.0	2.8 (g)	,一部樹種同定
炭化材主体	2−1mm	0.2	0.1	−	−	−	0.2 (g)	
	1−0.5mm	0.1	0.1	−	−	−	0.3 (g)	
動物遺存体(主に状態良好な2mm以上)								
骨片		16	19	1	1	−	37 (個)	
		0.1	0.1	0.0	0.0	−	0.2 (g)	
骨片?		−	1	2	−	−	3 (個)	
		−	0.1	0.0	−	−	0.1 (g)	
歯?		2	8	5	9	6	30 (個)	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1 (g)	
巻貝類	殻(破片含む)	446	431	368	540	411	2196 (個)	
		3.9	10.1	2.4	3.5	3.0	22.9 (g)	
二枚貝類	殻(破片含む)	34	44	61	81	35	255 (個)	
		0.2	2.4	0.4	0.8	0.4	4.3 (g)	
貝類	殻片	8	8	10	16	20	62 (個)	
		0.1	1.2	0.9	4.6	7.8	14.5 (g)	
甲殻類	爪(破片含む)	−	21	12	20	14	67 (個)	
		−	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3 (g)	
ウニ類	棘(破片含む)	167	236	60	127	104	694 (個)	
		2.1	2.2	0.4	0.9	0.8	6.4 (g)	
	殻板片	15	25	−	−	−	40 (個)	
		0.2	0.7	−	−	−	1.0 (g)	
サンゴ片		5	24	31	40	62	162 (個)	
		8.2	21.4	21.6	46.6	124.1	221.9 (g)	
土器片?		−	1	−	−	−	1 (個)	
		−	4.7	−	−	−	− (mm)	
		−	0.0	−	−	−	0.0 (g)	
ガラス片?		1	−	−	−	−	1 (個)	
		3.0	−	−	−	−	− (mm)	
		0.0	−	−	−	−	0.0 (g)	
砂礫主体(サンゴ片・貝類・ウニ類・有孔虫等接着)								
	>8mm	19.4	3.8	3.1	−	426.5	452.7 (g)	
	8−4mm	13.5	12.7	8.2	22.4	431.5	488.5 (g)	
	4−2mm	18.5	19.0	19.7	57.2	295.1	409.4 (g)	
	2−1mm	93.7	115.6	120.1	261.5	502.2	1093.0 (g)	
	1−0.5mm	169.5	206.7	152.8	173.2	303.4	1005.6 (g)	
植物片主体(混入の可能性)		0.0	−	−	−	0.0	0.1 (g)	
分析量		480	520	440	780	2440	4660 (g)	

表 90　土壌理化学分析結果

試料名		土性	土色	pH (H_2O)	電気伝導率 dS/m	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	腐植形態(簡易法 Melanic Index [MI]	腐植酸の型	全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	可給態リン酸 P_2O_5 (mg/100g)	リン酸吸収係数 (mg/100g)	備考
管制塔Ⅰ地区 東西ベルト	Ⅲ−1層 No.1	S	2.5Y4/3 オリーブ褐	8.9	0.13	0.41	0.71	0.03	14	−	−	2.35	458	22.5	790	極強石灰質
	Ⅲ−2層 No.2	S	2.5Y4/3 オリーブ褐	9.1	0.12	0.22	0.38	0.02	11	−	−	1.42	482	19.5	760	極強石灰質
	Ⅲ−3層 No.3	S	2.5Y6/4 にぶい黄	9.4	0.09	0.12	0.21	0.02	6	−	−	0.81	474	6.7	830	極強石灰質
	Ⅴ層 No.4	S	2.5Y7/4 浅黄	9.5	0.09	0.11	0.19	0.02	6	−	−	0.69	492	4.9	1050	極強石灰質
	Ⅴ層 No.5	S	2.5Y7/4 浅黄	9.2	0.14	0.11	0.19	0.02	6	−	−	0.54	483	4.7	1440	極強石灰質

1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。
2) 土性：土壌調査ハンドブック改訂版(日本ペドロジー学会編,1997)の野外土性による。
S･･･砂土(粘土0～5%、シルト0～15%、砂85～100%)
3) 腐植：有機炭素量×1.724。
4) C/N：有機炭素量÷全窒素量。



1．イネ科(試料No.5)
2．アカザ科(試料No.2)
3．アブラナ科(試料No.1)
4．キク亜科(試料No.5)
5．微粒炭(木本由来)(試料No.4)
6．鞭虫卵(試料No.1)
7．花粉分析プレパラート内の状況(試料No.1)
8．花粉分析プレパラート内の状況(試料No.5)
9．植物珪酸体分析プレパラート内の状況(試料No.4)
10．植物珪酸体分析プレパラート内の状況(試料No.4)

図版 71　花粉化石・微粒炭・寄生虫卵・植物珪酸体

4. 考察

(1) 年代測定結果から

1) 堆積層の年代と地形発達

エプロン地区トレンチ1の堆積層の年代についてみると、3点のうち暦年代の最も古い№2が6,167-5,979 cal BP、次に№1が5,898-5,735 cal BP、№3が最も新しく、4,822-5,578 cal BPであった。得られた年代は地層累重の法則には整合せず、年代値が逆転する結果となっている。№2の分析試料は貝であることを考慮すると、古い時代のものが混入した可能性もある。

エプロン地区トレンチ2の堆積層の試料は浅黄色砂層、浅黄色粗砂層はそれぞれ1点、灰黄色砂層、灰黄色シルト層はそれぞれ2点の計6点である。暦年代は浅黄色砂層が2,827-2,713 cal BP、浅黄色粗砂層が2,119-1,950 cal BP、灰黄色砂層が5,300-5,048 cal BP、4,862-4,709 cal BP、灰黄色シルト層が7,267-7,157 cal BP、7,245-7,012 cal BPであった。調査所見によると浅黄色砂層がⅣ層、浅黄色粗砂層がⅤ層、灰黄色砂層と灰黄色シルト層がⅥ層とされる。年代はⅣ層とⅤ層が逆転する結果であった。両者は砂層と粗砂層とされ、砂層形成時に古い貝殻が取り込まれた可能性が考えられる。上層のⅣ層からⅤ層は貝塚時代前5期から後1期に相当する。Ⅵ層の灰黄色砂層と灰黄色シルト層はそれぞれ2点の年代測定結果は、どちらも近い値が得られていることから、堆積年代を反映しているものと判断される。年代は貝塚時代前1期から前3期に相当する。

管制塔Ⅰ地区東西ベルトの3点の堆積層の暦年代は№1がcal AD1,680-1,939、№3がcal AD1,663-1,950+、№5がcal AD1,072-1,225であった。これらの年代値は、堆積層序の累重関係と矛盾しないことから、堆積年代を反映していると推測される。

ここで、上述した年代測定試料の出土層位で測定結果をまとめてみると、基本層序のⅥ層出土試料からは7,267-4,822cal BP(2σ以下同)、Ⅴ層からは2,119-1,950 cal BP、Ⅳ－2層からは1,233-1,062 cal BPという年代が得られている。さらにこれらの年代を河名(2011)による過去約8000年間の海面変動およびサンゴ礁の発達史に当てはめてみると、Ⅵ層は完新世の海面上昇期から高頂期を経て礁嶺の形成時期までを含み、Ⅴ層は海面低下期、Ⅳ－2層は現海面よりも若干高い時期にそれぞれ相当する。一方、黒住氏による調査地における貝類の分析から推定された各層の堆積環境は、Ⅵ層が潮間帯中部～上部の海草藻場、Ⅴ層が潮間帯上部、Ⅳ－2層が飛沫帯とされている。両者の所見をまとめると、Ⅵ層は海進期の沿岸域の堆積層であり、上部は礁嶺形成後の堆積物すなわち礁池の堆積層に相当する可能性がある。Ⅴ層は海面低下により、水深の浅くなったあるいは場所によってはほとんど離水した礁池上の堆積物の可能性がある。Ⅳ－2層は年代からみると若干の海進期であるが、細粒の固結した砂などの堆積層の状況からは潮上帯の堆積層であることが推定される。おそらく、調査地においては、約1000年前頃の海進の影響は低く、Ⅴ層形成時の海退から海面の低い状況が継続していたと考えられる。

2) 遺構の年代

エプロン地区トレンチ2の遺構の年代について検討する。集石遺構SL1の結果は、16世紀前半から20世紀以降のまとまった年代を示す。しかし礫番号1の1点は7世紀中頃から8世紀中頃で、他のものと開きがあることから、取り込まれた古い炭化物を測定した可能性があり、これを除外すると、SL1は近世以降の遺構と想定される。

ピットはSP16とSP119の2点の年代測定を実施した。SP16は15世紀後半から17世紀前半、SP119は8世紀の前半から9世紀後半で、前者は近世、後者は貝塚時代後2期に相当する。

3) 遺物の年代

明朝系丸瓦圧痕内充填貝片1の暦年代は15世紀末から17世紀中頃、沖縄産陶器圧痕内充填貝片2の暦年代は16世紀前半から18世紀末であった。明朝系瓦は那覇市の渡地村跡の発掘調査で、15世紀後半から16世紀前半の遺構から数多く得られた（那覇市教育委員会,2012）とされることから、調和する結果となった。

土器付着炭化物の暦年代は3世紀中頃から4世紀後半で貝塚時代後1期に相当する。土器は調査所見によると貝塚時代後2期のくびれ平底土器とされることから、やや古い値となった。

(2) 古植生

今回、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析などを実施し、古植生に関する情報を得ようと試みたが、いずれも植物化石の産出状況が悪かった。花粉やシダ類胞子は、一般的に堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967; 徳永・山内,1971; 三宅・中越,1998など)。植物珪酸体も、亜熱帯湿潤気候の下では、堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶脱作用

が起こるほか (松井 ,1988)、湿潤な土壌や土壌温度が高い堆積物の方が風化の度合いが高いとされている (近藤 ,1988)。これらのことを踏まえると、堆積後の経年変化により、植物化石が分解されたと考えられる。

わずかに認められる種類についてみると、マツ属などの針葉樹、サルスベリ属などの落葉広葉樹、イネ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科などの草本類が認められ、これらの生育の可能性が窺える。

(3) 土地利用状況

微粒炭についてみると、No.5、No.4 では堆積物 1cc あたり 200 ～ 100 個 /cc、No.3 では約 1,500 個 /cc 程度であるが、No.2 で約 40,600 個 /cc、No.1 で約 39,600 個 /cc と多く認められる。土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる (例えば安田 ,1987; 山野井 ,1996; 井上ほか ,2002)。層相をみると、いずれも粗粒～極粗粒砂を主体としており、No.5、No.4 では貝片・サンゴ片が主体をなし、No.3 でも貝片・サンゴ片が多く含まれる。これに対し、No.2、No.1 がやや暗色を示しており、この土色の差は微粒炭などの含量を反映している可能性がある。

また、No.1 からは寄生虫の卵である鞭虫卵も確認された。当社でこれまで全国各地で実施した花粉分析結果では、遺構内や堆積層から微量の (1cc あたり数個未満) の寄生虫卵が検出されることはそれほど珍しくなく、これらはある程度の人口密度のある集落の汚染の範囲内と考えられる (金原ほか ,1995 など)。No.1 における寄生虫卵の含量は、堆積物 1cc あたり 100 個未満であることから、当時の汚染の範囲内と考えられる。

さらに、各層の土壌特性をみると、分析試料中では試料 No.2、No.1 においてある程度特徴的な値を示した。また、下層から上層へ腐植含量やリン酸含量、可給態リン酸量が多くなる傾向にある。試料 No.2、No.1 では腐植含量が相対的に多く、C/N 比も 10 を超える。試料 No.1 ではリン酸含量も相対的に多いことから未分解有機物や植物遺体などの混入が示唆される。この点は、微粒炭の産状とも調和的である。

ただし、耕作の可能性があったかについては、可給態リン酸が多く、リン酸吸収係数が低いことから、リン酸を固定しづらく、作物が吸収利用しやすいと考えられる。砂土と養分保持には不向きであり、強アルカリ性と耕作地としては改善点が多いが、耕作痕跡があった可能性を否定できるものではない。ただし、耕作履歴があったと仮定すると、電気伝導率が低い。また、腐植化や土壌化の進行が乏しい。これらの点については、調査区内における堆積層の位置づけや分析の類例を集めて、改めて検討することが望まれる。

これに対し、試料 No.3 以下の層位では特徴的な値が示されず、土壌環境としては No.5 ～ No.3 のいずれも同様であったと考えられる。貝片・サンゴ片などが多い、あるいは主体となすことも踏まえると、人為的影響は少なかった可能性が高い。

引用文献

Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

土壌標準分析・測定法委員会編 ,1986, 土壌標準分析・測定法 . 博友社 ,354p.

土壌環境分析法編集委員会編 ,1997, 土壌環境分析法 . 博友社 ,427p.

藤木利之・小澤智生 ,2007, 琉球列島産植物花粉図鑑 . アクアコーラル企画 ,155p.

本名俊正・山本定博 ,1992, 腐植の簡易分析法 . 土壌構成成分解析法 . 博友社 ,7-35.

井上　淳・吉川周作・千々和一豊 ,2002, 琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について . 日本第四紀学会講演要旨集 ,32,74-75.

金原正明・金原正子・中村亮仁 ,1995, 大宮坊跡 (厠跡) における自然科学的分析 . 史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ , 石川県鹿島町教育委員会 ,51-70.

河名俊男 ,2011, 琉球列島におけるサンゴ礁形成史と地震・津波 . 考古学リーダー 19　先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～ , 六一書房 ,63-86.

近藤錬三 ,1988, 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代 . ペドロジスト ,32,189-203.

近藤錬三 ,2010, プラント・オパール図譜 . 北海道大学出版会 ,387p.

松井　健 ,1988, 土壌地理学序説 , 築地書館株式会社 ,316p.

三宅　尚・中越信和 ,1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 ,6,15-30.

三好教夫・藤木利之・木村裕子 ,2011, 日本産花粉図鑑 . 北海道大学出版会 ,824p.

那覇市教育委員会 ,2012, 渡地村跡 , 臨港道路那覇 1 号線整備事業に伴う発掘調査 , 那覇市教育委員会 ,91 集 ,339p.

中村　純 ,1967, 花粉分析 . 古今書院 ,232p.

中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.

農林省農林水産技術会議事務局監修 ,1967, 新版標準土色帖 .

ペドロジー学会編 ,1997, 土壌調査ハンドブック改訂版 , 博友社 .

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T.

J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.,2013,IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon,55,1869–1887.

島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.

Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

徳永重元・山内輝子 ,1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50-73.

山野井　徹 ,1996, 黒土の成因に関する地質学的検討 . 地質学雑誌 ,102,526-544.

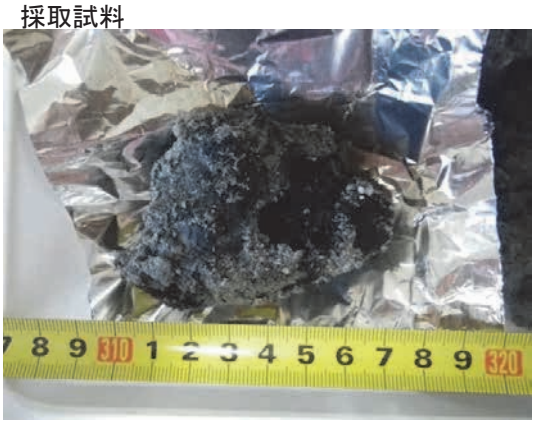
安田喜憲 ,1987, 文明は緑を食べる , 読売新聞社 ,227p.

試料番号1　SL1 ブロック2 1-1層
採取試料

試料番号2　SL1 ブロック2 2-1層

試料番号3　SP16　1層
採取試料

試料番号4　SP119　1層
採取試料



試料番号5　サブトレンチⅥ層　灰黄色砂層
採取前試料

試料番号5　サブトレンチⅥ層　灰黄色砂層
採取試料

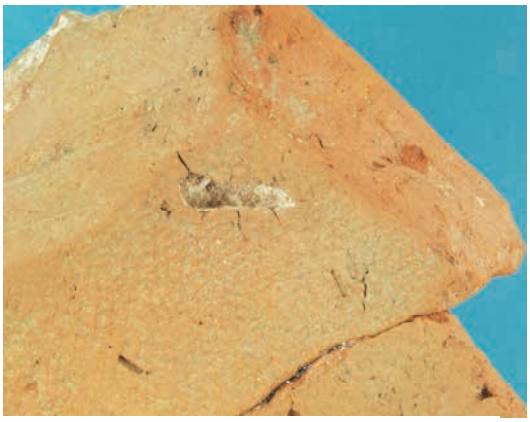
試料番号6　サブトレンチⅥ層　灰黄色シルト層　採取前試料

試料番号6　サブトレンチⅥ層　灰黄色シルト層　採取試料

図版 72　年代測定試料 1

土器圧痕内充填貝片1

土器圧痕内充填貝片1



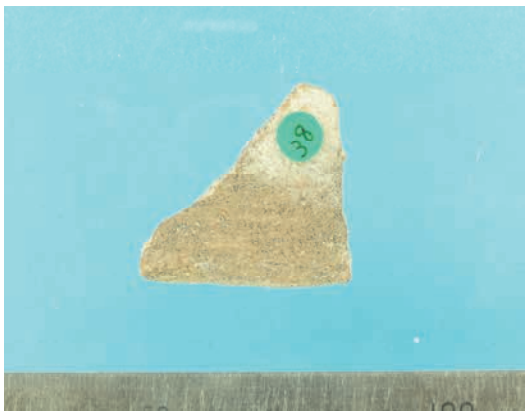
土器圧痕内充填貝片1　　試料採取後

土器圧痕内充填貝片1

土器圧痕内充填貝片1

土器圧痕内充填貝片1　　試料採取後

土器付着炭化物



土器付着炭化物　試料採取後

図版 73　年代測定試料 2

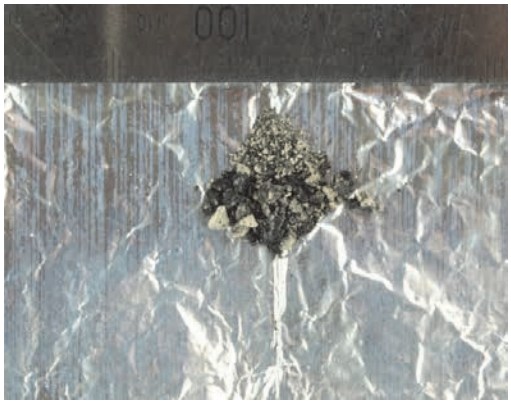
トレンチ1　No.1　試料の様子

トレンチ1　No.1　抽出された炭化物

トレンチ1　No.1　No.2　試料の様子

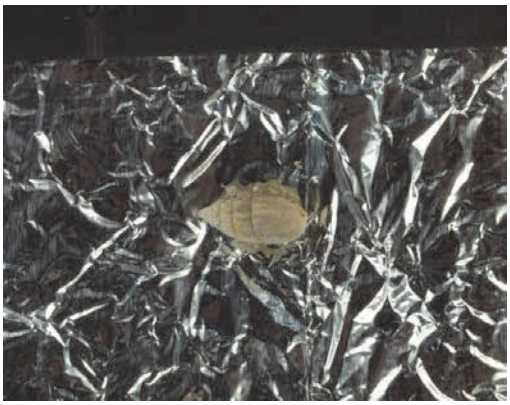
トレンチ1　No.2　抽出された貝殻

トレンチ1　No.3　試料の様子



トレンチ1　No.3　抽出された炭化物

トレンチ2　No.26　試料の様子



トレンチ2　No.26　抽出された貝殻

図版 74　年代測定試料３

トレンチ2　No.27　試料の様子

トレンチ2　No.27　抽出された貝殻

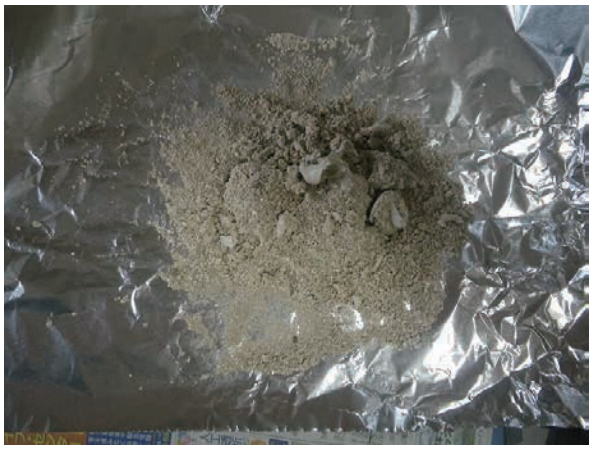
トレンチ2　No.28　試料の様子

トレンチ2　No.28　抽出された炭化物

トレンチ2　No.29　試料の様子

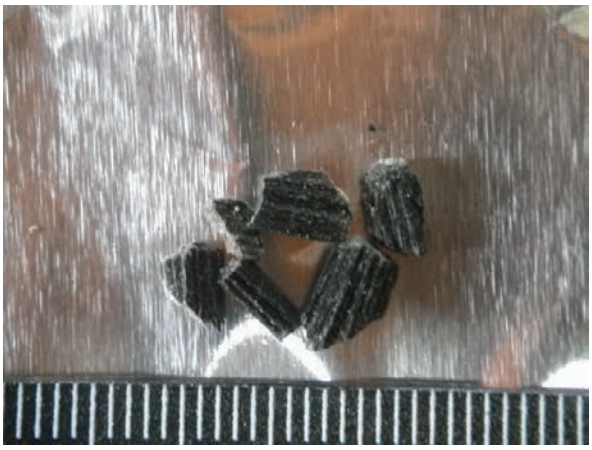
トレンチ2　No.29　抽出された炭化物

図版 75　年代測定試料 4

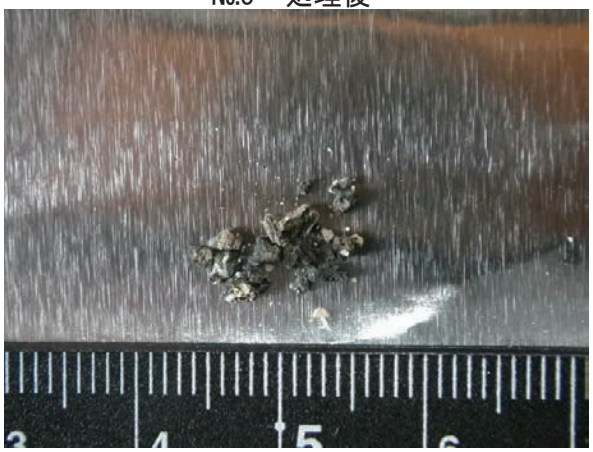


No.5　処理前

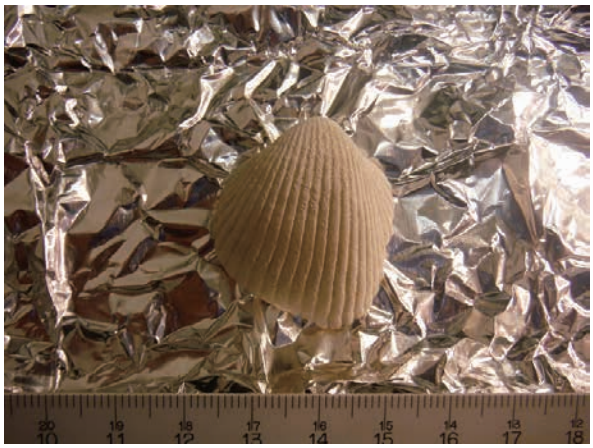
No.5　処理後



年代測定試料　No.1　炭化材



年代測定試料　No.3　炭化材



年代測定試料　No.5　貝殻

図版 76　年代測定試料 5

第２節　大嶺村跡の海浜部堆積物中の貝類群

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

沖縄島南西部、現那覇空港に存在した大嶺村跡の発掘調査時に海浜堆積物が採取され、本地域の海岸部の環境変遷を考察する材料として貝類の分析を行った。サンゴ礁域の沖縄においても、海浜部の変遷に関する研究は様々な面から報告されてきたが（例えばサンゴ礁地域研究グループ , 1990）、これまでに遺跡出土貝類を除いて（例えば中村 , 1989；黒住 , 1998, 2001, 2010）、完新世における詳細な貝類群（≒化石群／遺体群）の記載等はほとんど行われていないのが現状である。

今回は、小形種まで定量的に検討を行うことができ、本地域の海浜部の環境変遷に関して復元できたと考えており、その結果を報告する。

検討サンプル

今回検討したサンプルは、沖縄県立埋蔵文化財センターによって、大嶺村跡のエプロン地区の３層準から採取された堆積物である（第 98 図）。その詳細は、本報告書の第３章に詳述されているが、下部のⅥ層・中部のⅤ層・上部のⅣ－２層であり、その情報を表 91 に示した。

これらの堆積物を筆者のこれまでの遺跡堆積物の処理方法（黒住 , 1996）と同様の方法（乾燥させたのち、9.52・4.0・2.0・1.0mm の標準フルイによる水洗選別と浮遊部分（LF）の 0.5mm メッシュ未満のネットによる回収する）によって処理した。9.52mm と 4.0mm メッシュ残渣から、貝類を抽出し、種の同定・確認部位・生死や磨滅の状況等を記録した。なお、都合により、4.0mm では全量の 1/2 を抽出対象とした。

結果および考察

１　堆積物の状況

今回対象とした堆積物の各メッシュの残渣量が表 91 で、9.52mm メッシュ上のものを第 99 図に示した。今回の処理では、通常の粒度分析とは異なるが、粒度の傾向は示せるものと考えられる。以下に、各層の状況を記す。

Ⅵ層：表 91 のように、この層の年代は約 7,000 ～ 5,000 年 cal BP で、その堆積物は灰色に変色した磨滅した枝サンゴ片が多く、貝殻も二枚貝のみで、磨滅・破損が認められ、状態はそれほど良好ではない（第 99 図）。堆積物では 2.0 ～ 0.5mm のものがおよそ同じ割合で、比較的細かいことがわかる（表 91）。

Ⅴ層：この層の年代は紀元前後で、磨滅した枝サンゴ片が多く、その一部は粗粒な砂で固結していた。貝類では二枚貝が目立ち、一部には合弁個体も存在していたが、かなり磨滅･破損が認められた。堆積物では、2.0mm の割合が高く、粗いことがわかる。

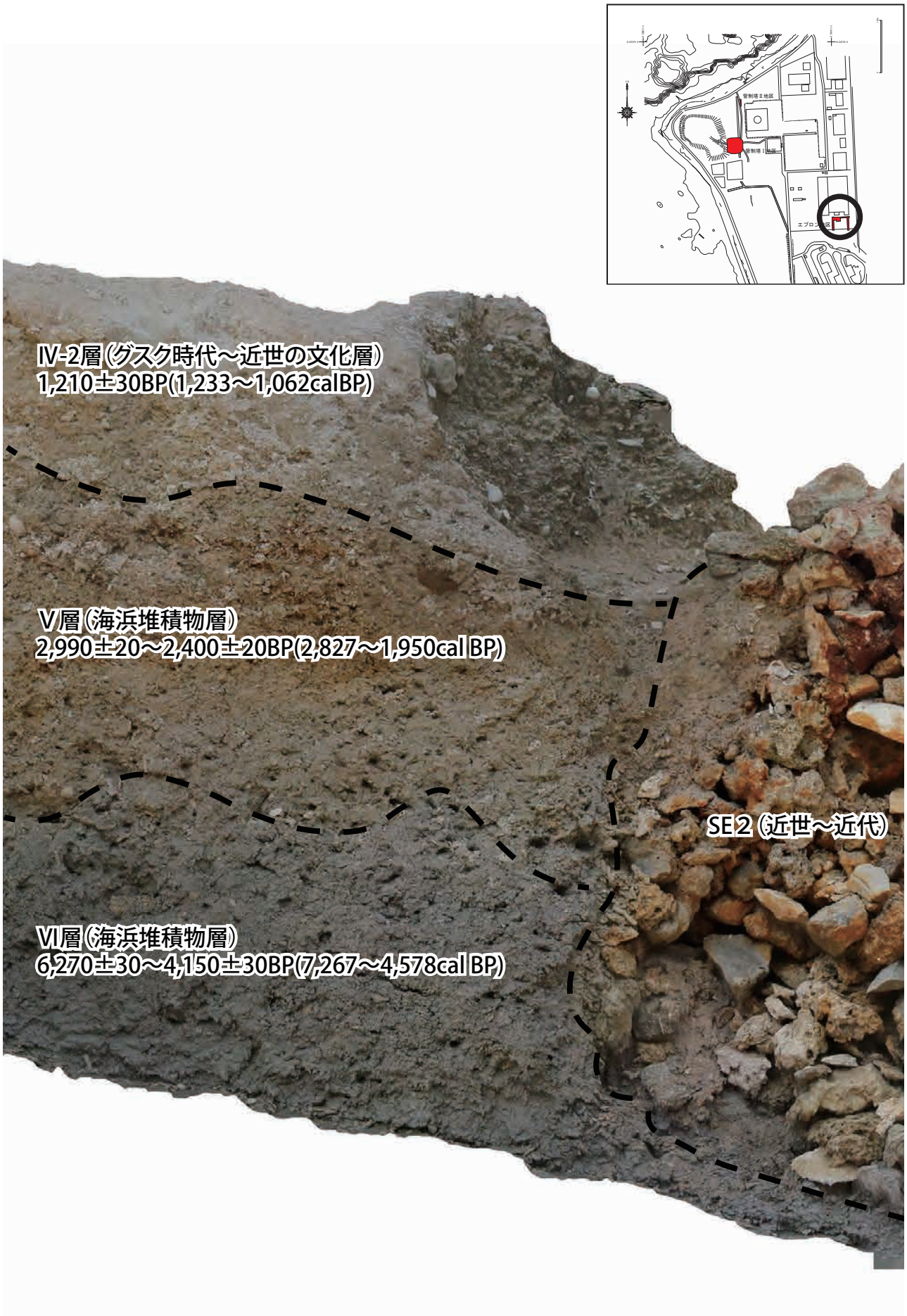
Ⅳ－２層：年代はグスク時代の年代が示され、本採取地点よりも陸側では旧集落表土２となり、近世期までの遺物が含まれている。9.5mm メッシュ上では細粒の砂が固結しており、貝類は確認できなかった。堆積物では、0.5mm のものが粗いものよりも多かった。

２　貝類組成

今回の処理で、少なくとも巻貝類（腹足綱）18 科 23 種、二枚貝類（綱）12 科 21 種、その他の海産無脊椎動物５分類群が確認できた（表 92）。

種数はⅥ層で最も多い 40 種、Ⅳ－２層が最も少なく、６種であった。下部から上部にかけて種数が減少しているものの、種組成としては、３つの層準で貝類は大きく異なっているとは考えられなかった。個体数（NISP：同定標本数）でも、３層準は類似しており、巻貝のヒメクワノミカニモリ・フトコロガイが、二枚貝ではオキナワヒシガイ・カブラツキガイが優占していた。浮遊部分（LF）には、陸上の貝塚で多く抽出される陸産および淡水産種は認められなかった。ただ、貝類以外のものでは、大形底生有孔虫のゼニイシと十脚甲殻類の破片はⅥ層に多く､特にゼニイシは還元層中にあったためと考えられる黒色に変化していた（表 92 の R）。

また、筆者が現生種から想定した生息場所類型（黒住 , 1987）では、二枚貝の大多数と巻貝の約半数が



第 98 図　大嶺村跡の海浜部の堆積物採取断面（採取箇所：右上地図の○）

表 91　大嶺村跡の海浜部で採取された分析サンプルの詳細

	Ⅵ層		Ⅴ層		Ⅳ-２層	
	海浜堆積層		海浜堆積層/白砂層		粗砂層	
考古年代	縄文時代早期～中期 （貝塚時代前１～３期）		弥生～平安平行時代 （貝塚時代後１期）		ｸﾞｽｸ時代～近世	
炭素年代	cal BP 7,267～4,578		cal BP 2,827～1,950		cal BP 1,233～1,062	
現地採取レベル/m	＋1.6m		＋2.7m		＋3.05m	
標高/m	約0～1.0m		約1.0～1.5m		約1.5～1.9m	
		%*1		%		%
全体	1600cc/1914g		700cc/832g		320cc/412g	
9.52mm	400cc/310g		350cc/265g		200cc/152g	
4.0mm	270cc/240g		260cc/233g		65cc/54g	
2.0mm	175cc/166g	12.17	78cc/68g	20.36	23cc/20g	9.71
1.0mm	170cc/184g	13.49	62cc/66g	19.76	18cc/18g	8.74
0.5mm	150cc/178g	13.05	26cc/30g	9.00	43cc/50g	24.27
>0.5mm	N/836g	61.29	N/170g	50.90	N/118g	57.28

＊１：2.0mm以下での％，Ｎ：未計測

内湾域、特に潮下帯の砂泥底に生息する種であった（表 92 のⅡ - ２- ｃ）。

今回の貝類組成と類似した現生貝類相の例として、沖縄市泡瀬干潟の例がある（ウルマ貝類調査グループ , 2007）。そして、その生息密度は砂泥底のオキナワヒシガイ・カブラツキガイの多いこと、海草藻場のヒメクワノミカニモリ、海草上のフトコロガイ・イワカワチグサ・ハシナガツノブエ等の種が優占することも一致する（黒住・大須賀 , 2007）。

循環論的ではあるが、今回の大嶺村跡の海浜堆積物と現在の内湾の貝類組成が極めて類似していることからも、この堆積物は内湾域のものであることがわかる。

３　磨滅・破損の状況

今回の３サンプルでは、巻貝・二枚貝とも、磨滅したもの（表 92 のｅ）や被捕食孔を有する死殻（表 92 の H）の個体が比較的高率で含まれていた。ただ、詳細に検討すると、Ⅴ層とⅣ－２層では磨滅しているものが多く、一方、Ⅵ層では磨滅は比較的少ない。特に、4.0mm メッシュ残滓では（第 100 図）、優占種の巻貝・フトコロガイ・ヒメクワノミカニモリや薄質な小形二枚貝で、この磨滅に大きな差異が認められた。一方、磨滅はしていないものの、巻貝では、捕食者（主にカニが想定される）によって、殻全体や殻口が破損している個体が、Ⅵ層・Ⅴ層ともに多い（第 101 図）。これは、捕食されたまま、Ⅵ層に堆積したものと理解される。

また、Ⅴ層でマスオガイの合弁個体（表 92 の cv）が得られているが、浮遊部分等で抽出された微小個体を除き、他には埋在性二枚貝の合弁個体はほとんど確認できなかった。

４　堆積環境の推定

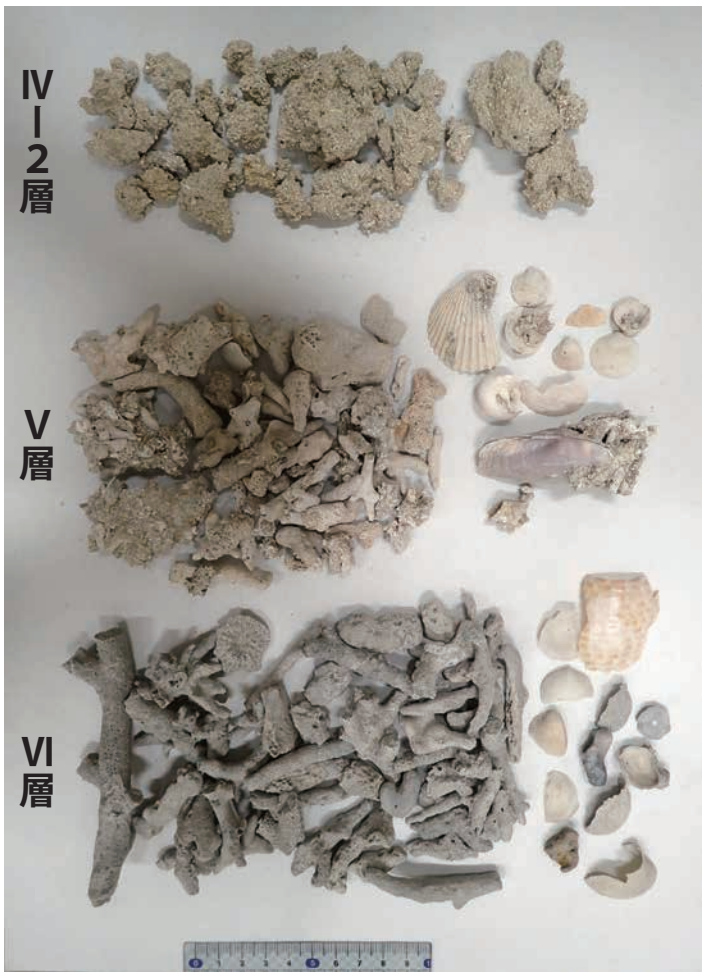
これまでに述べてきたことから、まず各層の堆積状況を考察してみる。

Ⅵ層：貝類では葉上性のフトコロガイ・イワカワチグサが多く、ヒメクワノミカニモリ、カブラツキガイ・オキナワヒシガイが多く、環境としては内湾の潮間帯中部～上部の海藻藻場が推定される。そして、堆積物はやや細かく、開発ら（2007）の示した泡瀬干潟の海草藻場のものに類似していると考えられる。藻場で

表 92　大嶺村跡の堆積物から抽出された貝類等

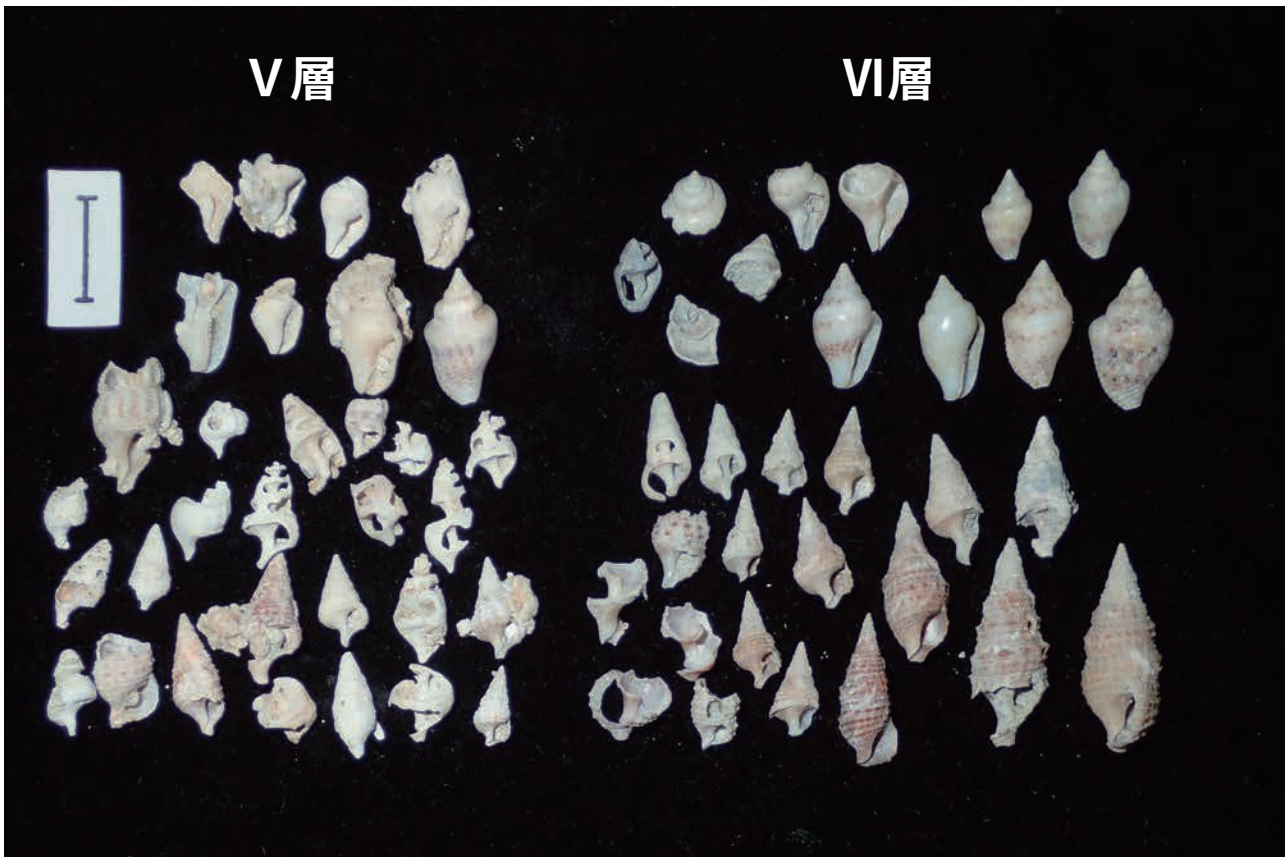
層準	Ⅵ層				Ⅴ層				Ⅳ－２層			
ﾒｯｼｭｻｲｽﾞ等	9.52mm	4.0mm	LF	NISP	9.52mm	4.0mm	LF	NISP	4.0mm	LF	NISP	
巻貝（腹足類）												
ヒメクワノミカニモリ		4(1H,1mL,1mLH)a,1ae,6abe,4(2mL)j,1je,2u	17			4ae,3abe,3(1H)j,1je,4e		15	1amLe,2be,1je		4	Ⅱ-2-c
ハシナガツノブエ						2abe		2				Ⅱ-2-c
カヤノミカニモリ		1mLR	1									Ⅱ-1-b
カニモリガイ類/同定不能		1we	1			3e,5be		8				
カニモリガイ類？										1sj	1	
リュウキュウウミニナ		1ab	1									Ⅱ-1-c
フトコロガイ		6a,1aeR,2jb,3u	12			1a,2ae,2abe,3jbe		8				Ⅱ-2-d
イワカワチグサ		4a,1ab	?2sju	7		2ae		2				Ⅱ-2-d
カイコガイ		1au,1b,1j		3		2a,1j,1au,1be		5	1fe		1	Ⅱ-2-c
ヒメオリイレムシロ？		1ab		1		1ae		1				Ⅱ-2-c
クサイロカノコ		1mL		1		1ae		1				Ⅱ-2-d
キマツボ類			3	3								Ⅱ-2-c
リュウキュウヒメカタベ		1ae		1		1j		1				Ⅰ-2-b
ニシキウズ		1ue		1								Ⅰ-2-a
サラサダマ		1j		1								Ⅰ-2-c
ウズラガイ		1f		1								Ⅰ-2-c
コウシレイシダマシ		1mL		1								Ⅰ-1-a
キイロダカラ		1f		1								Ⅰ-1-a
コシダカアマガイ？		1je		1								Ⅰ-1-a
ヒトスジツノクダマキ		1a		1								Ⅰ-1-b
ヒメイシダタミアマオブネ		1e		1								Ⅰ-0-a
カラマツガイの一種		1jd		1								Ⅰ-0-a
ヘソアキトミガイ					1e			1				Ⅰ-2-c
ヘビガイ類						2je		2				
マツムシ類？			?1sj	1		1ue		1				
ミジンツツガイ類							1mj	1				
二枚貝類												
カブラツキガイ	1H/0,1f	0/1u		3	1j/0,1fe	0/2(1d)u		4				Ⅱ-2-c
オキナワヒシガイ		2u/1d		3	1/0	3(1d)j/1j		5	1jcv,1j/0		2	Ⅱ-2-c
リュウキュウザル	1fe			1	1e/0	1fe		2				Ⅱ-2-c
ナシノハナガイ		0/1j		1		2(1d)/0		2				Ⅱ-2-c
ハスメザクラ		1j/0		1		0/1		1				Ⅱ-2-c
カワラガイ	1fe			1	1jH/0			1				Ⅱ-2-c
ミガキヒメザラ		3j/4j		7								Ⅱ-2-c
ウラキツキガイ	0/1			1								Ⅱ-2-c
ノコギリガキ	1/0			1								Ⅱ-2-a
ウスハマグリ類	0/1ud			1								Ⅱ-2-c
チトセノハナガイ		0/1u		1								Ⅱ-2-c
リュウキュウバカガイ		1f		1								Ⅱ-2-c
シロヒメガキ？		0/1e?		1								Ⅱ-2-b
アコヤガイ？		0/1ud		1								Ⅱ-2-b
オオヒシガイ	1ue/0			1								Ⅰ-2-c
マスオガイ					1cv			1				Ⅱ-1-c
オイノカガミ					1jd/0			1				Ⅱ-2-c
タママキ						1fe		1				Ⅱ-1-c
ヒメツキガイ					1/0			1				Ⅰ-2-c
ハネマツカゼ						1jd/0		1				Ⅰ-2-a
チリハギ型？			2sjcv	2			1sjcv	1		1sjcve	1	
二枚貝不明/同定不能						1fe	1		3fe		3	
他の無脊椎動物												
十脚甲殻類		8f										
ゴカイ類（棲管）	1feR			1	1f			1				
ナガウニ類/棘						1		1				
ゼニイシ/有孔虫	1R	26(21R),12(10R)u		38		1e		1				
有孔虫(ｾﾞﾆｲｼ等を含まない)			ca.100	100			20	20		10	10	
貝形虫			ca.300	300			30	30		20	20	
炭化物			27*1				2					
炭化種子/非穀類			1									
根			1									
木片							1f			3f		

*1：3mm以上；　NISP：同定標本数；　詳細　a：成貝，b：体層，cv：合弁，d：死殻，e：磨滅，f：破片，j：幼貝，mL：殻口欠，H：被捕食孔，R：還元層中の黒変化，u：殻頂，w：螺層，二枚貝は左／右；生息場所は黒住（1987）.



第 99 図　9.52mm メッシュ残渣

第 100 図　4.0mm メッシュ残渣



第 101 図　4.0mm メッシュ上のフトコロガイ（上）とカニモリガイ類（下）の磨滅・破損状況

あるために、磨滅した枝サンゴ片等は海草の根等にトラップされ、その場の還元層に埋在していたことによる黒い着色が認められ、巻貝では捕食された殻が残存しており、他のサンプルではほとんど認められなかったゼニイシや甲殻類片も得られた訳である。また、小形二枚貝のミガキヒメザラを除き、完形の二枚貝類も少なく、微小種以外の合弁個体は確認されていないことから、堆積物は干潟の干出する面やそこから数 cm 程度の深度であったことも想定される。つまり、干出面から 5 cm よりも深い場所の堆積物とは考えにくい。このことは、内湾干潟と推定しており、本来、この場所に生育していない枝サンゴ等は当然、他所から運ばれてきて藻場で堆積したものと考えられることからも理解されよう。

Ⅴ層：貝類はⅥ層とおよそ類似した種組成ながら、磨滅したものが多くなっている。堆積物の粒度が比較的粗く、固結しており、還元層による着色も認められなかった。これらのことから、いわゆる砂浜の潮間帯の上部の堆積物だと考えられる。

Ⅳ－２層：9.52mm メッシュでは貝殻が得られず、4.0mm でもごく稀である。粒度も細かく、砂は固結している。これらのことから、砂浜の飛沫帯で形成された堆積物と考えられる。4.0mm メッシュで僅かながら貝殻が存在していたので、“ 砂丘 ” ではないようである。

ここで復元した各層の状況を松田（2007）の北谷町・伊礼原遺跡での例と比較しても、Ⅵ層～Ⅳ層－２は、ビーチフェイスとなり、海浜部の高まり（バーム）を超えた砂丘とは考えられない。同じく、北谷町の伊礼原 E 遺跡の “ サンゴ砂利層 ” も、今回の堆積物と同様の可能性も高い。伊礼原 E 遺跡のⅧ層は「青灰色枝サンゴ粗砂層」で , この層の上面の標高はおよそ +0.8m ～ 1,8m で、この層から曽畑式土器が出土とされ、Ⅶ層下部では「明黄褐色を呈し大量の枝サンゴ砂利に拳大や大型の礫が含まれ」、Ⅶ層上部は「淡黄白色粗砂から細かい貝殻破片や白色サンゴ砂利」とされる（山城・島袋 , 2010）。およそⅧ層が今回のⅥ層に、Ⅶ層下部がⅤ層に、Ⅶ層上部がⅣ－２層に相当するのかもしれない。そして、伊礼原 E 遺跡の貝類遺体では、主に 5 区においてオキワヒシガイ・イソハマグリ・リュウキュウウミニナ・フトコロガイが優占し、内湾の打上げ「自然貝層」と考えられており（黒住 , 2010）、大嶺村跡の組成と類似し、リュウキュウウミニナが多いことから、伊礼原 E 遺跡では、より遮蔽された内湾の堆積物であることがわかる。サンゴ礁域の現世堆積物としては、山内（1990）の研究があるが、ここでは、外洋－サンゴ礁域、その中でも特に干瀬の有孔虫に注目して検討されており、今回のような内湾域の海草藻場とは異なっていることも当然理解される。

また、Ⅵ層からは種子を含め比較的多くの炭化物が浮遊部分から抽出されているものの、Ⅴ層・Ⅳ－２層からは炭化物は少ないか、認められなかった（表 92）。まず、炭化物は自然ではなく人間活動に由来するものと考えられ、Ⅵ層の時代にも周辺に遺跡等の存在を示唆しており、流れ着いたものが枝サンゴ片と同様に海草の根にトラップされたものであろう。一方、当時の遺構が確認されているⅤ層とⅣ－２層で炭化物がごく稀であったことは、上述のように砂浜であったために、流れ着くなどした炭化物が風により移動させられたためと想定される。このような海浜部の堆積物中の炭化物や微細遺物（微小陸産貝類も含めて）の風による堆積の場所からの消失に関しては、瀬戸内海島嶼の遺跡でも同様なことを想定しており（黒住 , 2018b）、遺跡における遺物の残存という現象を理解する上で重要だと考えられる。

なお、陸上の堆積物に多い浮遊部分から根（維管束植物）がほとんど抽出されなかったことも（表 92）、これまでに示してきた海域潮間帯および飛沫帯であったことを示している。当然のことであるが、１）維管束植物である海草の根は分解されて残らないこと、２）陸上の貝塚等の堆積物から抽出される根は、“ 遺跡形成時のものではなく、現代の混入によるもの ” であることも明瞭に示されている。

また、土田・黒住（1997）で示したように、現在の奄美・沖縄の海岸では、打ち上げられた貝類に陸産・淡水産の貝類が比較的多く含まれていることも稀ではない。これらは、河川を通じて海岸に流れ込むことが多いが、今回のサンプルには、カタツムリもカワニナ類等も含まれていなかった。そして、今回のサンプルには、伊礼原 E 遺跡で優占していたリュウキュウウミニナ等の僅かな淡水の影響のある環境を好む種（黒住 , 2010）が欠落しており、伏水流や小河川からの淡水の流れ込みの少ない環境であったと考えられる。

５　“ 縄文海進期 ” の環境

今回確認できた合計 25 種の貝類（巻貝と二枚貝）のうち、約 7,000 ～ 5,000 年前の “ 縄文海進期 ” に相当するⅥ層でも、１mm 未満の微小で分類学的検討の遅れているキマツボ類とした種を除き、確認された他の種はこれまで沖縄の現生種として報告されてきた種のみであり、ヤマト（本土≒本州～九州）で見られるような温暖種（松島 , 1984）はなく、筆者がこれまでに示してきた状況（黒住 2010,2014）と同じであった。熱帯海域の沖縄では、縄文海進期に海水温の上昇は存在したかもしれないが、貝類の組成という点では、大きな変化は認められなかったということを再確認できた。

ただ、琉球列島においてもサンゴ礁域のオオジャコ等のごく少数の消滅種（＝種としては絶滅していないが、ある地域からは絶滅したもので、人間の関与を含む；松島 , 1984 の「温暖種」は消滅種のうち、南から分布を拡大してきた種で、人間の関与を想定しないもの）が存在するものの、河口干潟 - マングローブ域では、いくつかの消滅種が知られている。特に小菅（2000）は西表島仲間川の河口をさかのぼった地点から、年代測定は行われていないが、完新世のものである可能性の極めて高い消滅種のクラマドガイを報告した。また、大城（1987, p. 61）は沖縄島石川市山城から、完新世の貝類群として、オストレア・ギガス（マガキ、17cm：シマガキやニセマガキ類の可能性もある）やゲロイナの一種（シレナシジミ類）さらにムシロガイ？（消滅種？）とアラムシロ類が優占し、カニモリ類・ヘナタリ類・ウミニナ類・ホウシュノタマも目立ち、少数のヒメキリガイダマシ・マドモチウミニナ・ホソジュセイラ？・ムラサキヨフバイ等からなる化石群を図示している。詳細な産出地は図示されていないが、地名から標高は 50m 以上のようである。この地域が隆起した可能性もあるが、もしかすると、大城（2001）が報告した石川市楚南の後期更新世の化石群、あるいは黒田・小澤（1996）が同じく石川市楚南および喜瀬武原の露頭から「マングローブ沼に生息したシレナシジミやウミニナ類の化石を豊富に含む内湾性の」化石群と同一なのかもしれない。

また黒田・小澤（1996）は伊是名島のボーリングコア中の最終氷期の海産種として、貝類のカンギクとヨワスジカニモリの２種の貝類やマージノポーラ［＝ゼニイシ］・エダミドリイシを挙げ、当時の海域環境は「熱帯～亜熱帯性の海生動物化石」からも、花粉で示された「気温の低下があったとしても、せいぜい、1.0 ～ 2.0℃の範囲と考えられる」としているものも、石川市山城の化石群に類似しているようにも思える。ただ、ここで和名ヨワスジカニモリとのみ表記されているが、ヨワスジカニモリは *Cerithium (Proclava) tenuifilosum* に与えられた和名で（波部・奥谷 , 1985）、図示された種は現在まで琉球列島を含む日本から報告されていない（例えば長谷川 , 2017）。誤同定の可能性が高いと考えられるが、もしヨワスジカニモリであったとすると、“ 当時は、より海水温の高い熱帯的であった ” ということになる。

一方、筆者は、沖縄島南部・サキタリ洞遺跡から出土した最終氷期最寒冷期頃の貝類遺体から、当時の海水温は現在よりも低く、「種子島から紀伊半島程度の海域であった」と推定し（黒住 , 2018a）、上記の黒田・小澤（1996）の見解とは異なることを示した。上記の石川市山城を含む沖縄島中部の貝化石群の正式な論

文発表が待たれ、それに基づいて、再度完新世の海水準を議論する必要があろう。

ただ、前述のように、西表島のクラマドガイの産出から縄文海進期の高海水準も想定されるものの、今回の大嶺村跡の堆積物からは、Ⅵ層とⅤ層のサンプル採取レベルは１m 程度異なる程度であり、潮位差の範囲内でもあり、明瞭なそれ以上の海水準の上昇は認められないと考えられる。

結論

今回の海浜部の堆積物の貝類を中心とした分析から、およそ 7,000 ～ 5,000 年前頃のⅥ層は潮間帯中部～下部の海藻藻場を有する内湾域、Ⅴ層は潮間帯上部の打上堆積物で、内湾の状況は変化せず。Ⅳ－２層は飛沫帯で風と波の営力で形成され、砂丘ではないと考えられた。このイメージを、第 102 図に示した。2004 年の沖縄市泡瀬干潟で、広く潮位差のない潮間帯中部～下部が存在し（Ⅵ層）、岸側の砂浜にⅤ層とⅣ－２層が存在するという訳である。

そして、これまでに、沖縄のサンゴ礁域、特にその内湾での海浜部の変化を貝類（化石）から具体的に示したものはなかったと思われ、今回の結果から、組成および磨滅・破損状況から、かなり詳細に環境復元ができると考えられた。また、“縄文海進期”の高海水準は明瞭には認められず、この時期から復帰以前まで海域環境に大きな変化はなかったと推測された。

謝辞：本報告の一部には、科学研究費（15H05966　代表：奈良教育大学・金原正明教授）を用いた。

引用文献

波部忠重・奥谷喬司 (訳). 1985. アッボト , R.T. & S.P. ダンス . 世界海産貝類大図鑑 . 442pp. 平凡社 , 東京 .

長谷川和範 . 2017. オニノツノガイ科 . In 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑［第二版］, pp. 100-105, 788-793. 東海大学出版部 , 平塚市 , 神奈川 .

開発法子・廣瀬光子・高川晋一 . 2007. 泡瀬干潟の海草群落モニタリング調査 . 埋立事業が泡瀬干潟に与える影響と保全の提言―泡瀬干潟自然環境調査報告書―, 日本自然保護協会報告書 , (95): 49-74.

黒住耐二 . 1987. 遺跡出土貝類の生息場所類系化の試み . 古我地原貝塚 , 沖縄県文化財調査報告書 , (84): 359-362.

黒住耐二 . 1996. 用見崎遺跡のコラムサンプルから得られた貝類遺存体（予報）. 用見崎遺跡 , 熊本大学文学部考古学研究室活動報告 , (31): 31-37.

黒住耐二 . 1999. 1998 年のナガラ原東貝塚調査で得られた貝類遺存体（予報）. ナガラ原東貝塚 , 考古学研究室活動報告 , (34): 40-48. 熊本大学文学部 .

黒住耐二 . 2001. 伊是名貝塚の貝類分析 . In 伊是名貝塚学術調査団 (編), 伊是名貝塚 , pp.328-345. 勉誠出版 .

黒住耐二 . 2010. 伊礼原 E 遺跡から得られた貝類遺体 . 伊礼原 D 遺跡 , 北谷町文化財調査報告書 , (31): 41-56. 北谷町教育委員会 , 沖縄 .

黒住耐二 . 2014. 貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化 . In 高宮広土・新里貴之 (編), 琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 , 研究論文集 , 第２集 , 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷 , pp. 55-70. 六一書房 .

黒住耐二 . 2018a. サキタリ洞遺跡出土の貝類遺体 . In 山崎真治 (編)，サキタリ洞遺跡発掘調査報告書Ⅰ , pp. 173-189. 沖縄県立博物館・美術館 .

黒住耐二 . 2018b. 貝類遺体からみた宮ノ浦遺跡―第６・７次発掘調査―. 愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ―第６・７次発掘調査報告―, 愛媛大学法文学部考古学研究室報告 , (14): 87-106.

黒住耐二・大須賀 健 . 2007. 泡瀬干潟とその周辺地域における貝類を中心とした動物の生息密度調査 . 埋立事業が泡瀬干潟に与える影響と保全の提言―

第 102 図　大嶺村跡の海浜部の復元イメージ . 沖縄市泡瀬干潟（2004 年）

泡瀬干潟自然環境調査報告書―, 日本自然保護協会報告書 , (95): 115-128.
黒田登美雄・小澤智生 . 1996. 花粉と海生動物化石からみた琉球列島の第四紀の環境変動 . 月刊地球 , (206): 516-523.
小菅丈治 . 2000. 西表島のクラマドガイ . ちりぼたん 31(2): 39-44.
松田順一郎 . 2007. 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震痕跡 . 伊礼原遺跡 , 北谷町文化財調査報告書 , (26): 44-60.
松島義章 . 1984. 日本列島における後氷期の浅海性貝類群集－特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷－ . 神奈川県立博物館研究報告（自然科学）(15): 37-109.
中村 愿 . 1989. 伊礼原 B 遺跡 , 北谷町文化財調査報告書 , (8): 1-54, 24 pls. 北谷町教育委員会 , 沖縄 . 中村 , 1989
大城逸朗 , 1987. 失われた生物―沖縄の化石―. シリーズ沖縄の自然④ . 126 pp. 新星図書 , 沖縄 .
大城逸朗 , 2001. 琉球列島産第四紀陸生脊椎動物遺骸の地質学的研究 . 野原朝秀教授退官記念論文集 , pp. 37-136. 琉球大学教育学部自然環境教育コース .
サンゴ礁地域研究グループ (編). 1990. 日本のサンゴ礁 .1. 熱い自然 , xii+372 pp. 古今書院 .
土田英治・黒住耐二 . 1997. 奄美諸島徳之島 , 山の海岸の貝類 : 特に外洋性砂浜群集について . ちりぼたん 27(3･4): 75-81.
ウルマ貝類調査グループ . 2007. 泡瀬干潟とその周辺域の貝類相 . 埋立事業が泡瀬干潟に与える影響と保全の提言―泡瀬干潟自然環境調査報告書―, 日本自然保護協会報告書 , (95): 99-114.
山内秀夫 . 1990. サンゴ礁海岸の砂 . In サンゴ礁地域研究グループ (編), 日本のサンゴ礁 .1. 熱い自然 , pp. 101-118. 古今書院 .
山城安生・島袋春美（編）. 2010. 伊礼原 E 遺跡 , 北谷町文化財調査報告書 , (31), 118+364 pp.

補記１：発掘された貝類遺体に関するコメント

大嶺村跡から出土した貝類遺体に関しては、表 93 ～ 98 に詳細な集計が示されている。種々の都合で、詳細な分析は行えなかったが、いくつかの興味深い点についてコメントしておきたい。なお、この組成は現場でのピックアップ法（見つけ採り）によるものと想定され、小形種の割合は過少評価されていることも考えられる。

グスク時代～近世（Ⅳ層）の貝類遺体

エプロン地区のね 108 グリッド中の様々な遺構（遺物廃棄土坑を含め）から多くの貝類遺体が確認されている。ウラキツキガイ・カワラガイ・リュウキュウシラトリ・オイノカガミ等の内湾干潟の二枚貝類が優占するものの、破片も多いがサラサバテイラ･ギンタカハマも目立つ。一方、マガキガイ･ハナマルユキ･シャコガイ類・ヤコウガイ・小形種を含むイモガイ類等は低い割合となっている。沖縄本島のグスク時代から増加するカンギクやウミニナ類は、小形でサンプリング時の取り上げ状況に起因する可能性もあるものの、極めて少ない。アマオブネ類も僅かであり、利用されることが少なかったことと、本遺跡では海浜部に立地していながらオカヤドカリ類の宿貝はあまり含まれていなかった可能性も示唆している。

内湾の二枚貝類のうち、ウラキツキガイが優占する傾向は、沖縄本島南西部の同時期の遺跡でも知られており（伊良波西遺跡：花城 1986、渡地村跡：島 2012）、リュウキュウシラトリ・カワラガイが多いことは本島中部西岸の北谷町の遺跡の傾向（例えば伊礼原 D 遺跡：黒住 2008）と類似する。基本的には、サンゴ礁の干瀬までは貝類採集空間とはなっておらず、農耕に従事し海域での採集活動が制限されていた結果と考えられる（例えば黒住 2002）。ただ、サラサバテイラ等の採集意図は不明である。

また、この時期のみ、シュリマイマイ等の陸産貝類と淡水産のマルタニシが 1 個体のみ、遺構群から集中して確認されている。林縁に生息するシュリマイマイは他の層準や地区からは得られておらず、村のなかにはガジュマルのような木立の存在していた環境が復元される。一方、水田に生息するマルタニシの少なさは、穀類農耕の場として水田は広い面積ではなかったことを示しているのかもしれない。

この時期の他の地点・地区からの貝類遺体の出土はかなり少なく、特に同時期とされる管制塔Ⅰ地区のⅤ層ではほとんど出土していない。Ⅰ地区は耕作地等と想定されており、貝類の廃棄場所ではなかったことも想定される。

戦争直後と想定されている堆積物中の貝類遺体

管制棟Ⅰ地区のⅢ層は戦争直後の堆積層と考えられており、少ないながら貝類が発掘されているものの、他地区ではほとんど確認されていないようである。このことは、大嶺村の時代から人々の活動の場＝貝類廃棄場所が変わった可能性もあろう。その組成でも、ウラキツキガイ・カワラガイ等の内湾の二枚貝類が激減し、マガキガイ・シャコガイ類・イモガイ類等のサンゴ礁の貝類が目立つようになっている。海域環境の変化とは考えにくく、むしろ漁業者（うみんちゅ）の確立というように捉えられるのかもしれない。

引用文献

黒住耐二 2002「貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活」『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』p67-86　熊本大学文学部

黒住耐二 2008「伊礼原Ｄ遺跡から出土した貝類遺体」『伊礼原Ｄ遺跡 , 北谷町文化財調査報告書』第 28 集　p168-183

島弘編 2012『渡地村跡 , 那覇市文化財調査報告書』第 91 集

花城潤子 1986「貝殻」『伊良波西遺跡 , 豊見城村文化財調査報告書』第 1 集　p11-18, 64-67

補記２：圧痕等の貝類に関するコメント

本遺跡出土の遺物に関して、注意深く検討され、貝殻の含まれているものやその圧痕が認められ、記載・考察されている。ここでは筆者の受け取った状態の良い資料（≒同定できる可能性のあるもの）の写真による結果について、第６章第４節表 109 に同定結果を示したので、簡単にコメントしておきたい。

同定できたものは、ヌノメカワニナとオオオカチョウジガイの２種の巻貝であった。

ヌノメカワニナ　*Melanoides tuberculatus*（トウガタカワニナ科）

水田を含む淡水の止水域に、高密度で生息する細長い巻貝で、殻はやや厚く、殻長 4 cm 程度に成長することもある。細長く、各層は弱く膨らみ、縫合も弱くくびれる。各層に 3-4 本の螺肋を有することが多いものの、螺肋数や螺肋および螺肋上の顆粒状彫刻にも強弱に大きな変異が認められる。琉球列島へは、先史時代以降に人によって水生タロイモとともに持ち込まれたと想定している（黒住 2007）。

オオオカチョウジガイ　*Allopeas gracile*（オカクチキレガイ科）

人家周辺や耕作地周辺の陸域に生息する細長い巻貝で、殻は薄く、殻高８mm 程度の微小な種である。細長くやはり各層は弱く膨らみ、縫合のくびれも弱い。殻表はほぼ平滑。細長い陸産のキセルガイ類にも類似するが、キセルガイ類が左巻きなのに対し、この科の種は右巻きである。この種は、熱帯地域からの移入種で、サトウキビの苗等に付随して持ち込まれたと考えられてきたが（黒田 1958）、首里城銭蔵東の 15 世紀後半～ 16 世紀前半の石積内から多数抽出されたことから（黒住 2016）、サトウキビではなく、他の物資に伴って中国南部から持ち込まれたもののようである。

圧痕の貝類の由来

今回の観察では、圧痕だけではなく、遺物中に多くの貝殻が認められている。ただ、いわゆる土器の混和剤との判断はなされていないようであり、単に溶けていなかっただけと理解される。

陸産のオオオカチョウジガイは人家周辺にも生息し、薄質で、風等で飛ばされることも想定され、また確認数も稀であることから、考察されているように非意図的な混入の可能性が高いと思われる。

一方、淡水産のヌノメカワニナは少数ではあるものの比較的多く認められており、また 1 cm 以上の中形の個体も多く、水田の床土のような胎土中に存在していた場合、除去されるように思われる。他の確認例もあり、むしろ意図的に用いられた可能性も想定されると考えられる。

引用文献

黒住耐二 2007「胎生淡水産貝類からみた先史時代の沖縄諸島における根栽農耕の可能性」『南島考古』26 号　p121-132

黒住耐二 2016「首里城跡銭蔵東地区から得られた貝類遺体」『首里城跡 , 銭蔵東 [地] 区発掘調査報告書 , 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 80 集　p220-238

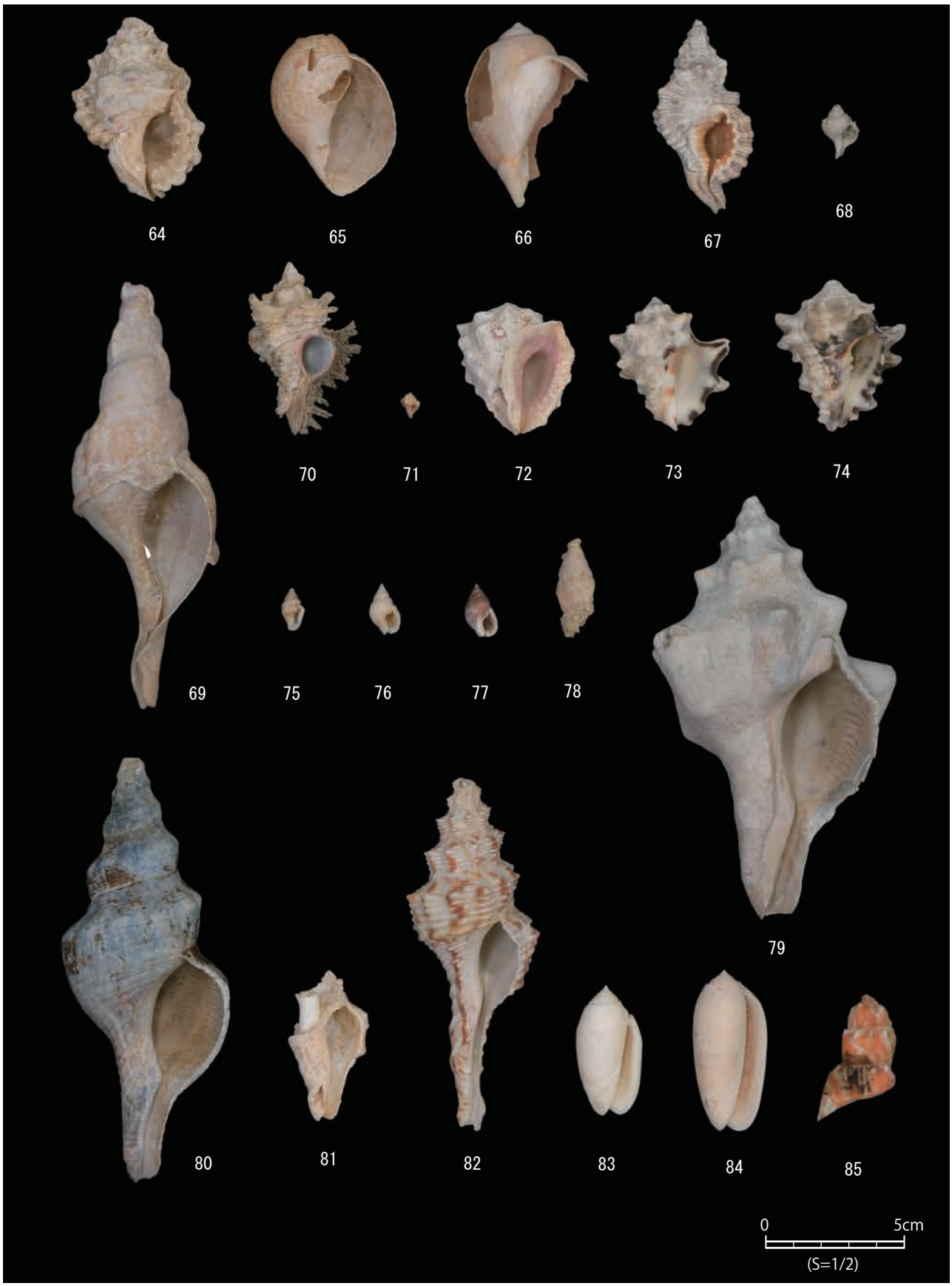
黒田徳米 1958「日本及び隣接地域産陸棲貝類相 (4)」『Venus』20 巻 1 号　p132-158

図版 77　貝類遺体（巻貝）1

1: ｵｵﾍﾞｯｺｳｶﾞｻ　2: ﾘｭｳｷｭｳｳﾉｱｼ　3: ﾘｭｳｷｭｳｱｵｶﾞｲ　4: ｲﾎﾞｱﾅｺﾞ　5: ﾆｼｷｳｽﾞ　6: ｷﾞﾝﾀｶﾊﾏ　7: ｻﾗｻﾊﾞﾃｨ　8: ｵｷﾅﾜｲｼﾀﾞﾀﾐ　9: ｻﾗｻﾀﾞﾏ　10: ﾘｭｳﾃﾝ
11: ﾔｺｳｶﾞｲ　12: ﾔｺｳｶﾞｲ蓋　13: ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ　14: ﾁｮｳｾﾝｻｻﾞｴ蓋　15: ｺｼﾀﾞｶｻｻﾞｴ　16: ｶﾝｷﾞｸ　17: ｶﾝｷﾞｸ蓋　18: ﾏﾙｱﾏｵﾌﾞﾈ　19: ｱﾏｵﾌﾞﾈｶﾞｲ
20: ﾆｼｷｱﾏｵﾌﾞﾈ　21: ｱﾗｽｼﾞｱﾏｶﾞｲ　22: ﾄｳｶﾞﾀｶﾆﾓﾘ　23: ｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ　24: ﾊｼﾅｶﾞﾂﾉﾌﾞｴ　25: ｺｹﾞﾂﾉﾌﾞｴ　26: ﾋﾒｸﾜﾉﾐｶﾆﾓﾘ 27: ﾐﾂｶﾄﾞｶﾆﾓﾘ
28: ｸﾜﾉﾐｶﾆﾓﾘ　29: ﾖｺﾜｶﾆﾓﾘ　30: ﾘｭｳｷｭｳｳﾐﾆﾅ　31: ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ　32: ﾇﾉﾒｶﾜﾆﾅ　33: ﾌﾄﾍﾅﾀﾘ　34: ｶﾜｱｲ　35: ｾﾝﾆﾝｶﾞｲ

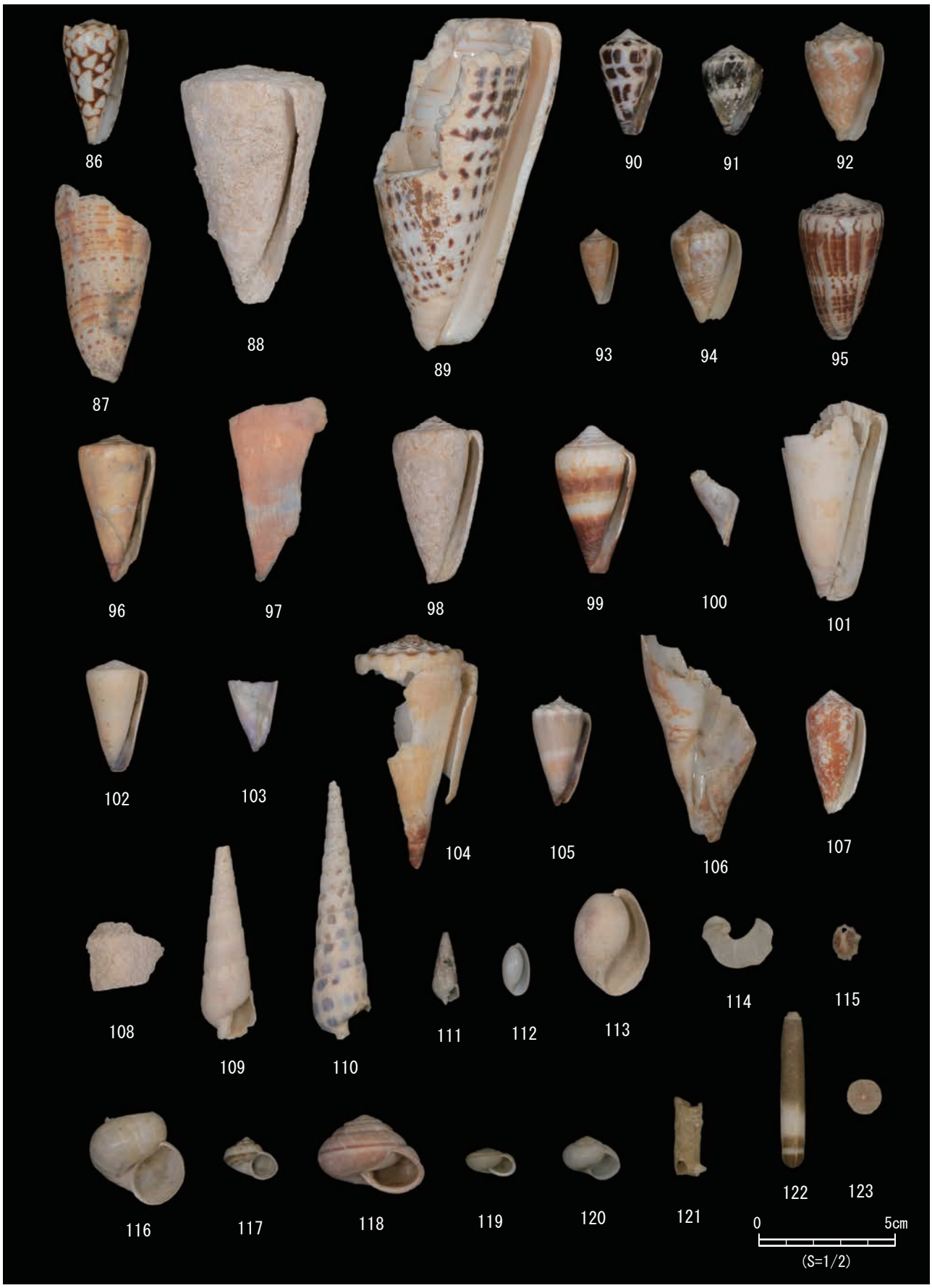
図版 78　貝類遺体（巻貝）2

36: ｵﾊｸﾞﾛｶﾞｲ　37: ﾑｶｼﾀﾓﾄ　38 ﾈｼﾞﾏｶﾞｷ　39: ﾏｶﾞｷｶﾞｲ　40: ｲﾎﾞｿﾞﾃﾞｶﾞｲ　41: ｸﾓｶﾞｲ　42: ﾗｸﾀﾞｶﾞｲ　43: ｽｲｼﾞｶﾞｲ　44: ﾔｸｼﾏﾀﾞｶﾗ
45: ﾎｿﾔｸｼﾏﾀｶﾗ　46: ﾎｼﾀﾞｶﾗ　47: ﾋﾒﾎｼﾀﾞｶﾗ　48: ｸﾁﾑﾗｻｷﾀﾞｶﾗ　49: ﾎｼｷﾇﾀ　50: ﾀﾙﾀﾞｶﾗ　51: ﾔﾅｷﾞｼﾎﾞﾘﾀﾞｶﾗ　52: ﾅﾂﾒﾓﾄﾞｷ　53: ｺﾓﾝﾀﾞｶﾗ
54: ﾊﾅﾋﾞﾗﾀﾞｶﾗ　55: ｷｲﾛﾀﾞｶﾗ　56: ﾊﾅﾏﾙﾕｷ　57: ｲﾎﾞﾀﾞｶﾗ　58: ﾁﾄﾞﾘﾀﾞｶﾗ　59: ｳｽﾑﾗｻｷﾀﾞｶﾗ　60: ｼﾛﾍｿｱｷﾄﾐｶﾞｲ　61: ﾘｽｶﾞｲ　62: ﾎｳｼｭﾉﾀﾏ　63: ﾄﾐｶﾞｲ類



図版 79　貝類遺体（巻貝）3

64: ｵｷﾆｼ　65: ｳｽﾞﾗｶﾞｲ　66: ｽｸﾐｳｽﾞﾗｶﾞｲ　67: ﾐﾂｶﾄﾞﾎﾞﾗ　68: ｼｵﾎﾞﾗ　69: ﾎﾗｶﾞｲ　70: ｶﾞﾝｾﾞｷﾎﾞﾗ　71: ｺｳｼﾚｲｼﾀﾞﾏｼ　72: ｱｶｲｶﾞﾚｲｼ
73: ﾂﾉﾚｲｼ　74: ｺｵﾆｺﾌﾞｼ　75: ﾌﾄｺﾛｶﾞｲ　76: ﾋﾒｵﾘｲﾚﾑｼﾛ　77: ﾖﾌﾊﾞｲﾓﾄﾞｷ　78: ｼﾏﾍﾞｯｺｳﾊﾞｲ　79: ｲﾄﾏｷﾎﾞﾗ　80: ﾅｶﾞｲﾄﾏｷﾎﾞﾗ
81: ﾘｭｳｷｭｳﾂﾉﾏﾀｶﾞｲ　82: ﾁﾄｾﾎﾞﾗ　83: ｻﾂﾏﾋﾞﾅ　84: ｼﾞｭﾄﾞｳﾏｸﾗ　85: ﾆｼｷﾉｷﾊﾞﾌﾃﾞ

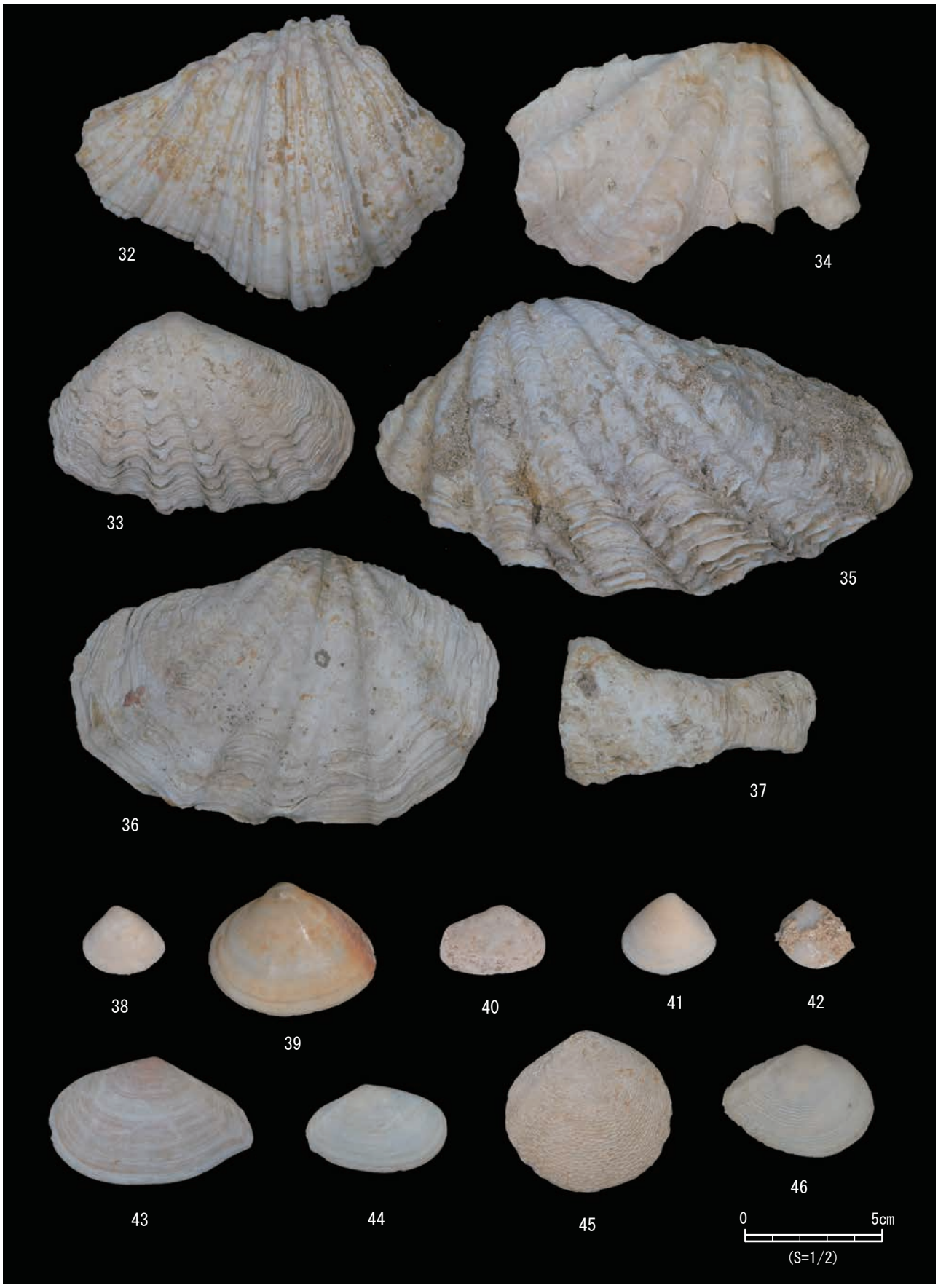


図版 80　貝類遺体（巻貝）4

86: ﾅﾝﾖｳｸﾛﾐﾅｼ　87: ﾐｶﾄﾞﾐﾅｼ　88: ｱﾝﾎﾞﾝｸﾛｻﾞﾒ　89: ｸﾛﾌﾓﾄﾞｷ　90: ﾏﾀﾞﾗｲﾓ　91: ｺﾏﾀﾞﾗｲﾓ　92: ｻﾔｶﾞﾀｲﾓ　93: ﾂﾔｲﾓ 94: ｱﾗﾚｲﾓ　95: ｻﾗｻﾐﾅｼﾓﾄﾞｷ
96: ﾅｶﾞｻﾗｻﾐﾅｼ　97: ｶﾊﾞﾐﾅｼ　98: ｲﾀﾁｲﾓ　99: ﾔﾅｷﾞｼﾎﾞﾘｲﾓ　100: ﾊｲｲﾛﾐﾅｼ　101: ｵﾄﾒｲﾓ　102: ﾔｾｲﾓ　103: ｷﾇｶﾂｷﾞｲﾓ　104: ｲﾎﾞｶﾊﾞｲﾓ　105: ｲﾎﾞｼﾏｲﾓ
106: ｱﾝﾎﾞｲﾅ　107: ｱｼﾞﾛｲﾓ　108: ﾀｶﾞﾔｻﾝﾐﾅｼ　109: ｷﾊﾞﾀｹ　110: ﾀｹﾉｺｶﾞｲ　111: ｵｵｸﾁｷﾚ　112: ｶｲｺｶﾞｲ　113: ﾅﾂﾒｶﾞｲ　114: ﾀﾂﾅﾐｶﾞｲ　115: ﾋﾗｶﾗﾏﾂ
116: ﾏﾙﾀﾆｼ　117: ｵｷﾅﾜﾔﾏﾀﾆｼ　118: ｼｭﾘﾏｲﾏｲ　119: ﾊﾟﾝﾀﾞﾅﾏｲﾏｲ　120: ｵｷﾅﾜｳｽｶﾜﾏｲﾏｲ　121: ｺﾞｶｲ類棲管　122: ﾊﾟｲﾌﾟｳﾆ　123: ｾﾞﾆｲｼ

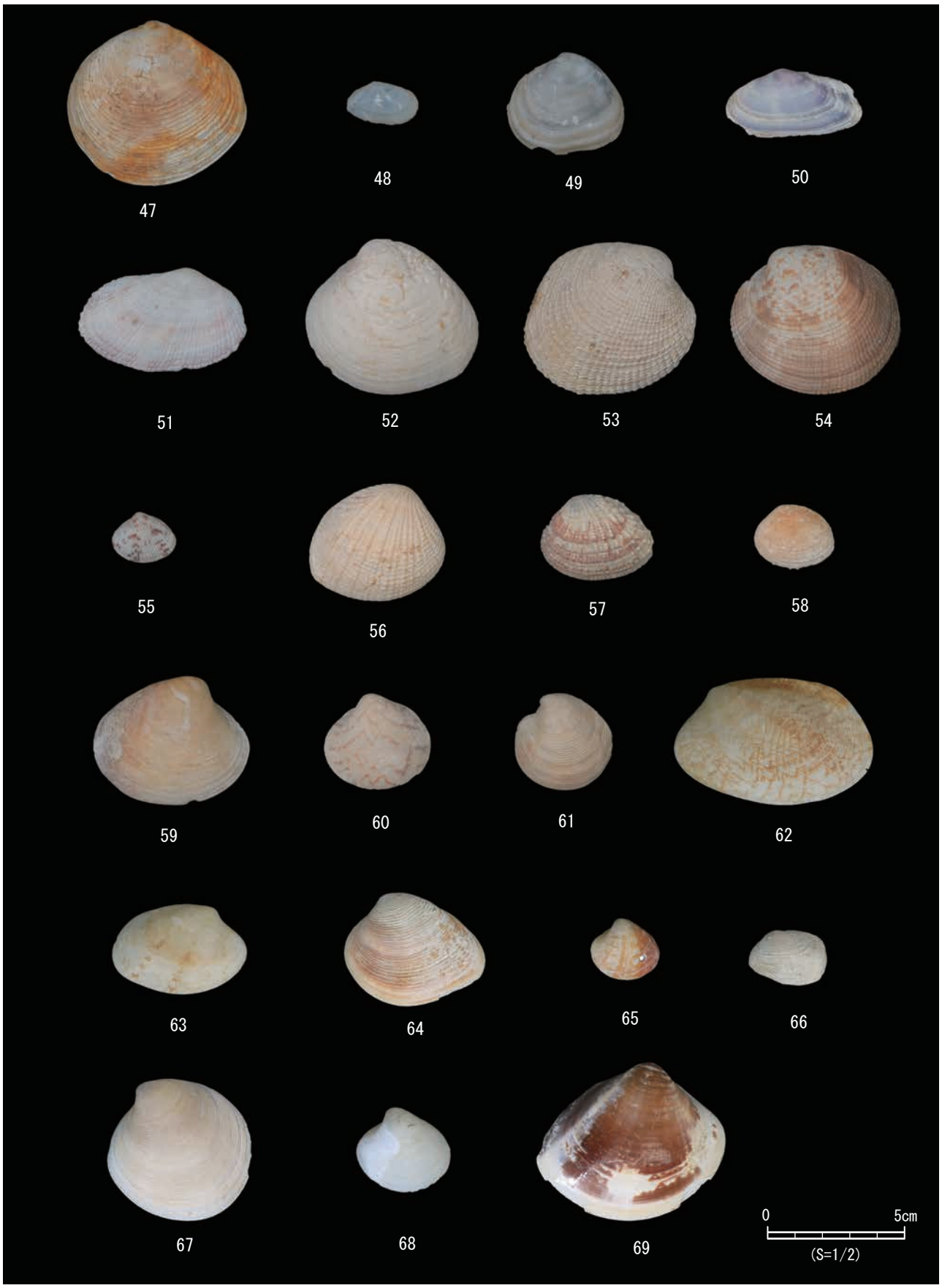
図版 81　貝類遺体（二枚貝）1

1: ｴｶﾞｲ　2: ｶﾘｶﾞﾈｴｶﾞｲ　3: ﾍﾞﾆｴｶﾞｲ　4: ｸﾛﾐﾉｴｶﾞｲ　5: ﾘｭｳｷｭｳｻﾙﾎﾞｵ　6: ﾊｲｶﾞｲ　7: ｿﾒﾜｹｸﾞﾘ　8: ｳﾁﾜｶﾞｲ　9: ﾘｭｳｷｭｳﾋﾊﾞﾘｶﾞｲ　10: ｱｺﾔｶﾞｲ　11: ｸﾛﾁｮｳｶﾞｲ
12: ｼｭﾓｸｱｵﾘ　13: ｼﾛｽｼﾞﾅﾃﾞｼｺ　14: ﾒﾝｶﾞｲ　15: ﾒﾝｶﾞｲ類　16: ﾉｺｷﾞﾘｶﾞｷ　17: ｵﾊｸﾞﾛｶﾞｷﾓﾄﾞｷ　18: ﾂｷｶﾞｲ　19: ｳﾗｷﾂｷｶﾞｲ　20: ﾋﾒﾂｷｶﾞｲ　21: ｶﾌﾞﾗﾂｷｶﾞｲ
22: ﾄﾏﾔｶﾞｲ　23: ﾋﾚｲﾝｺ　24: ｷｸｻﾞﾙ　25: ｶﾈﾂｹｻﾞﾙ　26: ｹｲﾄｳｶﾞｲ　27: ｷｸｻﾞﾙ類　28: ﾘｭｳｷｭｳｻﾞﾙ　29: ｶﾜﾗｶﾞｲ　30: ｵｷﾅﾜﾋｼｶﾞｲ　31: ｺﾅｶﾞｻﾞﾙｶﾞｲ



図版 82　貝類遺体（二枚貝）2

32: ｼｬｺﾞｳ　33: ﾋﾒｼｬｺ　34: ﾋﾚｼｬｺ　35: ﾅｶﾞｼﾞｬｺ　36: ｵｵｼﾗﾅﾐ　37: ｼﾗﾅﾐ類　38: ﾀﾏﾏｷｶﾞｲ　39: ﾘｭｳｷｭｳﾊﾞｶｶﾞｲ　40: ﾕｷｶﾞｲ　41: ｲｿﾊﾏｸﾞﾘ
42: ﾅﾐﾉｺﾏｽｵ　43: ﾆｯｺｳｶﾞｲ　44: ﾋﾒﾆｯｺｳｶﾞｲ　45: ｻﾒｻﾞﾗ　46: ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ



図版 83　貝類遺体（二枚貝）3

47: ﾓﾁﾂﾞｷｻﾗ　48: ﾊｽﾒｻﾞｸﾗｶﾞｲ　49: ｱﾏｻｷﾞｶﾞｲ　50: ﾏｽｵｶﾞｲ　51: ﾘｭｳｷｭｳﾏｽｵ　52: ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ　53: ｱﾗﾇﾉﾒｶﾞｲ　54: ﾇﾉﾒｶﾞｲ　55: ｶﾉｺｱｻﾘ
56: ｱﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ　57: ﾎｿｽｼﾞｲﾅﾐｶﾞｲ　58: ｲﾅﾐｶﾞｲ　59: ﾕｳｶｹﾞﾊﾏｸﾞﾘ　60: ﾏﾙｵﾐﾅｴｼ　61: ｵｲﾉｶｶﾞﾐ　62: ﾘｭｳｷｭｳｱｻﾘ　63: ﾋﾒﾘｭｳｷｭｳｱｻﾘ
64: ｽﾀﾞﾚﾊﾏｸﾞﾘ　65: ﾁｬｲﾛｻﾗｻ　66: ﾏﾂｶｾﾞｶﾞｲ　67: ﾀﾞﾃｵｷｼｼﾞﾐ　68: ｳｽﾊﾏｸﾞﾘ類　69: ﾊﾏｸﾞﾘ類

表 93　管制塔Ⅰ・Ⅱ地区出土貝類集計表（巻貝）

| 地区 | | | | | 管制塔Ⅰ | | | | |

表 94　管制塔Ⅰ・Ⅱ地区出土貝類集計表（二枚貝）

| 地区 | | | | | 管制塔Ⅰ | | | | |

表 95　エプロン地区出土貝類集計表（巻貝）1

| 地区 | | | | | エプロン | | | | |

表 96　エプロン地区出土貝類集計表（巻貝）2

| 地区 | | | | | エプロン | | | | |

表 97　エプロン地区出土貝類集計表（二枚貝）1

| 地区 | エプロン | | |

表 98　エプロン地区出土貝類集計表（二枚貝）2

| 地区 | | | | エプロン | | | |

第３節　大嶺村跡から出土した動物遺存体　―埋葬馬を中心に―

丸山真史（東海大学海洋学部）

１）動物遺存体の概要

近世の『琉球国由来記』によって、その存在が初めて確認される大嶺村は、昭和８年には日本軍小禄飛行場が建設された。出土した動物遺存体は、日本軍小禄飛行場があった頃のものと推定され、現代の動物利用について知ることができる。

動物遺存体は、甲殻類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出土している（表 99 ～ 102）。甲殻類はカニ類で、魚類は、サメ類、クロダイ属、タイ科、ナガブダイ、フエフキダイ科、マグロ属、ハリセンボン属の７種類が出土しており、サメ類が多い。爬虫類は、ウミガメ科が大量に出土している。哺乳類は、イヌ、ウマ、ウシ、ブタ、ヤギ、ネズミ科、ジュゴンが出土しており、ブタの出土が多い。また、以下で詳述する埋葬馬１頭分の骨格部位が出土している。

２）埋葬馬について

ａ）形質的特徴

埋葬馬の遺存体の保存状態は良く、骨の生々しさが残っている。日本軍が当地を使用していた頃のものと推定され、頭部、胴部、四肢が交連状態で出土していることから、埋葬されたものと考えられる。埋葬坑は浅い擂り鉢状を呈し、体躯を横倒しにした状態で検出された。体躯の右側は地面と接し、左側が上になっており、現地表面に近い。足先や左の上腕骨、橈骨など大きな骨が出土していないことは、地表に近い部分が撹乱を受けた可能性がある（表 103）。以下に、頭部、胴部、前肢、後肢に分けて、各部分の特徴を記載する。

頭部　頭蓋骨は破片となり、欠損部分があるため、全体の接合は困難である。上顎臼歯および犬歯は左右すべて揃っているが、切歯が一部ない。下顎骨は左右が出土しており、切歯の歯槽は破損する。切歯、犬歯、臼歯がすべて揃っている。出土した歯牙について、臼歯の計測値は表 104、表 105 に示し、観察事項は後述する。

胴部　椎骨は頸椎７点､胸椎 18 点､腰椎５点､仙骨１点、 肋骨は 34 点(左 17 右 17)とすべて揃っている。計数は行っていないが、肋軟骨も複数出土している。

前肢　肩甲骨と尺骨は左右が揃い、上腕骨、橈骨は右のみ、中手骨は左のみが出土しており、手根骨、指骨はない。上腕骨と尺骨は、左右ともに近位端が癒合していない。計測した部位は、表 106 に示した。

後肢　大腿骨、膝蓋骨、脛骨は左右が揃い、踵骨と距骨は右のみ出土しており、足根骨、指骨はない。大腿骨は、左右ともに近位端が癒合しておらず、遠位端は骨端線がのこる。計測した部位は、表 106 に示した。

ｂ）歯牙および歯槽の観察

以下では、切歯をＩ（Inciser)、犬歯をＣ（Canine)、前臼歯をＰ（Premolar)、後臼歯をＭ（Molar）と番号で表記し、乳歯には d(deciduous) を各歯種に付す。この埋葬馬の歯式は、上顎が dI1・dI2・dI3・C・dP2・dP3・dP4・M1・M2、下顎が I1・I2・dI3・C・dP2・dP3・dP4・M1・M2 である。以下に、出土した歯牙について記載する。

ⅰ）上顎歯　I2・I3・C・P2・P3・P4・M1、M2、M3、および dI1,dI2,dI3,dP3、dP4 が出土しており、これらのうち左は dI3 がないが、他は左右揃っている。dP2 が脱落し、P2 の咬耗は若干の進行をみるが、咬合面はまだ丸みを帯びている。M1、M2 は咬耗が一定進行し、咬合面が平坦化している。dP3 の歯根は消滅しており、脱落する頃と推定される。C・P3・P4・M3 は咬耗が進行しておらず、未萌出の状態である。左右の dP3、dP4 の象牙質に孔があり、齲蝕の可能性がある。また、歯槽周辺は多孔質になっている。

ⅱ）下顎歯　左右ともに I1・I2・I3・C・P2・P3・P4・M1・M2・M3、および dI3・dP2・dP3・dP4 が出土している。M1､M2 は､咬耗が一定進行し､咬合面が平坦化している。dP2､dP3 の歯根は消滅しており、両歯が脱落する頃と推定される。I1・I2・I3・C・P3・P4・M3 は咬耗が進行しておらず、未萌出の状態である。左の dP4、右の dP2、dP3、dP4 の象牙質に孔があり、齲蝕の可能性がある。また、歯槽周辺は多孔質になっている。

ｃ）埋葬馬の特徴

表 99　動物遺存体出土集計表（管制塔Ⅰ・Ⅱ地区）

地区		管制塔Ⅰ													管制塔Ⅱ		合計
グリッド		せ100			せ101		そ100			そ101					—	—	
層位		Ⅱ	Ⅲ	不明	Ⅲ	SK1	Ⅱ	Ⅲ	不明	Ⅱ	Ⅲ	SK2	SK3	不明	Ⅱ	不明	
獣骨	イヌ										1						1
	ニワトリ							2			3				2		7
	トリ							1									1
	ウシ							2			1						3
	ウシ or ウマ		1					1			3				1		6
	ジュゴン										1						1
	タイマイ	1															1
	ブタ		10	1	1		2	55	6	1	54	1	2	1	3		137
	ブタ or ヤギ								1						1		2
	ヤギ							1	1		4				1		7
	不明		16				1	68	3	4	42				1	1	136
	ウマ					1											1
	ネズミ							1									1
魚骨	サメ							1			2						3
	クロダイ	1															1
	ナガブダイ											1					1
	タイ科不明											1					1
	ハタ科不明							1					1				2
	不明							1			3		4				8
甲殻類												1					1
骨不明											1						1
合計（詳細）		2	27	1	1	1	3	134	11	5	115	4	7	1	9	1	322
合計（グリッド）		30			2		148			132					10		
合計（地区）		312															

※分類・同定は喜屋武朋子による

ⅰ）年齢・性別・体高の推定

出土したウマは、Conwall(1956) の歯の萌出段階および四肢骨の骨端癒合時期に倣えば、前臼歯が乳歯から永久歯に置換し、M1、M2 の咬耗が一定進行する状態であることから、生後２～３年の幼齢馬と推定される。上下顎ともに犬歯を有することから、牡馬であったと推定される。また、林田重幸･山内忠平（1952）による四肢骨の計測値による体高推定に倣えば（註）、肩甲骨（右）では 135 ～ 140cm、上腕骨（右）では 140 ～ 145cm、橈骨（左）では 140 ～ 145cm、中手骨（左）では 145 ～ 150cm、大腿骨（右）では 145 ～ 150c m、脛骨（右）では 150 ～ 155cm と推定される。肩甲骨でやや低い体高を示すが、体高 140cm 以上であることは確実であり、おおよそ 145 ～ 150cm と推定しておく。

ⅱ）馬政計画との関連について

近代国家を目指した明治からアジア・太平洋戦争まで、軍馬の育成は国家事業となり、日本在来種とされ

表 100　出土ブタ遺存体部位別集計表（管制塔Ⅰ・Ⅱ地区）

部位		残存部	地区 / グリッド / 層位	管制塔Ⅰ せ100 Ⅲ	せ100 不明	せ101 Ⅲ	そ100 Ⅱ	そ100 Ⅲ	そ100 不明	そ101 Ⅱ	そ101 Ⅲ	そ101 SK2	そ101 SK3	そ101 不明	管制塔Ⅱ — Ⅱ	合計
全身		完形	—									1				1
頭蓋骨	頭頂骨	破片	R					1								1
	側頭骨	鼓室部	L					1								1
			R	1												1
	項稜	破片	−								1					1
	頭蓋骨	破片	不明					2								2
上顎骨		M1	R					1								1
		M2	R					1								1
下顎骨		破片	L	1				2								3
歯		不明	不明					1								1
肋骨		近位端	不明					1			1					2
		近位端～骨体	不明							1						1
		骨体	不明	2				5	3		2		1		1	14
		破片	不明					1			10					11
椎骨	環椎	背結節	−					1								1
		破片	−					1								1
	胸椎	棘突起	−					1								1
	椎骨	椎体	−								1					1
		棘突起	−					1								1
肩甲骨		骨体	L					1	1		1					3
上腕骨		近位骨端	L					1								1
		近位端	L								1					1
			R								1					1
		近位部	L					1								1
			R					1								1
		近位部～骨体	L					1								1
		骨体～遠位部	R					1								1
		遠位部	L					1								1
			R					1								1
		骨体	R	1							1				1	3
		破片	L					1								1
			R					1								1
橈骨		両骨端はずれ	L			1										1
		近位端～骨体	L								1					1
		近位部	R					1								1
尺骨		近位端	L					1								1
		骨体	L								2					2
			R				1									1
		破片	R								1					1
中手骨		完形	R					1								1
		近位端	R					1								1
		近位端～骨体	L					1								1
			R					1								1
		近位端～遠位部	R								1					1
寛骨		坐骨	R	1							2					3
		臼部	R					1			1					2
		腸骨部	L					1								1
大腿骨		近位部	R					1								1
		遠位端	L								1					1
			R										1			1
		遠位骨体	R	1												1
		骨体	R								1					1
		破片	L	1			1	1			1					4
			R					1			1					2
脛骨		近位骨端はずれ～骨体	L								1					1
		骨体～遠位部	R						1							1
		遠位端	不明								1					1
		遠位部～遠位端	R								1					1
		遠位部	L					1								1
		遠位部骨端はずれ	R					1								1
		骨体	L					2			1					3
		破片	不明		1						1					2
中手・中足骨		完形	不明								1					1
		近位部～遠位骨端はずれ	不明								1					1
踵骨		骨体～遠位端	R								1					1
		遠位端	R						1							1
距骨		完形	R								1					1
		破片	L								2					2
中足骨		近位端～骨体	R											1		1
		完形	L					1								1
基節骨		完形	R					1								1
未節骨		完形	R					1								1
不明		近位端～骨体	不明					1								1
		破片	不明	2				6			12				1	21
合計（詳細）				10	1	1	2	55	6	1	54	1	2	1	3	
合計（グリッド）				11		1	63			59					3	137
合計（地区）				134												

※分類・同定は喜屋武朋子による

表 101　動物遺存体出土集計表（エプロン地区）

地区		エプロン																									合計
グリッド		ね107									ね108							の107				の108				不明	
層位		Ⅱ	Ⅳ-1	Ⅵ	SK1	SK5	SP18	SP58	SP126	SP128	Ⅱ	Ⅵ	SE1	SE2	SE3	SK1	SK2	Ⅰ・Ⅱ	Ⅱ	Ⅳ-1	不明	Ⅰ・Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ・Ⅳ	SG1	不明	
獣骨	イヌ															1							1				2
	ニワトリ				1					1					1							3	2				8
	ウシ															2		2	1								5
	ウシ or ウマ		2												3			2									7
	ウミガメ	11			2		2					55		3	3	8	1		1		1						87
	海獣										1								2	1							4
	ジュゴン											2		1					1			1					5
	ブタ	3			24			1		1	1		7	16	22	42		6				1	1	2	1		128
	ブタ or ヤギ														1												1
	ヤギ	1	1						1					1	1	1						7	5				18
	ヤギ or ブタ																					1					1
	不明	1		3	1	9	2		2	1	1	2	1	9	14	22	2	7	1				7			1	86
魚骨	サメ										1			1												1	3
	ハマフエフキ																									1	1
	ハリセンボン																					1					1
	マグロ													1													1
	タイ科不明															1											1
	不明			1																							1
甲殻類																1											1
合計（詳細）		16	3	4	28	9	4	1	3	3	4	59	8	32	45	78	3	17	6	1	1	14	16	2	1	3	361
合計（グリッド）		71									229							25				33				3	

※分類・同定は喜屋武朋子による

た体高 130cm 程度の馬は、洋種血統を導入することで大型化させ、純血の在来種の数は激減する。第 1 次馬政計画第 1 期には体高 136cm 以上のウマが急増し、同第 2 期には体高 152cm 以上のウマが増加したという（大瀧 2013）。当遺跡の埋葬馬は、四肢骨の計測値から体高 145 ～ 150cm 程度と推定され、乳歯が残る幼齢馬であるとしても、四肢骨の骨端癒合は開始しており、この体高を大きく上回ることはないであろう。アラブ種に相当する大きさであり、日本在来馬より大きな体躯を有する馬と推定される。馬政計画に則って、外来の血統との交配により大型化した在来種である可能性、外来種そのものである可能性などが考えられるが、形質的な特徴では判別できない。当遺跡の性格を考慮すれば、軍馬として飼育された改良種の可能性がある。

齲蝕と思われる孔が乳歯にみられ、顎骨の歯槽は多孔質になっている。口腔環境が良くなく、健康管理が徹底されていなかったのであろうか。直接的な死因は明らかではないが、飼育管理上の問題があったかもしれない。

3）まとめ

当調査では、現代の動物遺存体が出土し、その保存状態は良好であった。甲殻類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出土しており、特筆されるのは埋葬馬である。この埋葬馬は、遺跡の年代や馬の体格を考慮すれば、軍馬として飼育されていた可能性が指摘できる。しかしながら、乳歯には齲蝕が見られ、口腔衛生環境が良くないことに鑑みると、幼齢馬の死因は飼育管理が徹底されていないことに求められるかもしれない。これ以上の死因の追究は困難であるが、昭和初期の軍馬の可能性がある馬について、動物遺存体として得られた具体的な情報は大変貴重であり、馬政計画との関連についても今後の継続的な研究が期待される。

註

体高推定の早見表を参照した（久保・松井 1999, p.173）。

参考文献

大瀧真俊 2013『軍馬と農民』京都大学学術出版会

久保和士・松井章 1999「家畜その２－ウマ・ウシ－」『考古学と動物学』西本豊弘・松井章編　同成社 pp.169-208

表 102　出土ブタ遺存体部位別集計表（エプロン地区）

部位		残存部	地区 / グリッド / 層位	エプロン													合計
			グリッド	ね107				ね108					の107	の108			
			層位	Ⅱ	SK1	SP58	SP128	Ⅱ	SE1	SE2	SE3	SK1	Ⅰ・Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ・Ⅳ	SG1	
頭蓋骨	前頭骨	破片	L		1							1					2
	頭頂骨～前頭骨	破片	L								1						1
	頭頂骨	破片	L							1	3	2	1				7
		破片	R		1					2	1	3					7
	側頭骨	破片	L		1							2					3
		破片	R		1							1	1				3
	後頭骨	破片	－		3												3
	頬骨	破片	L								1						1
	鼻骨	骨体	R									1					1
	頭蓋骨	破片	不明		11					1	2	24	1				39
上顎骨		M3	L													1	1
		dm3～4・M1	R		1												1
		P4・M1・M2	R								1						1
下顎骨		dm3～4・M1	L		1												1
		破片	L								2						2
		dm3・M1・M2	R							1							1
		破片	R		1						1						2
		P3	R											1			1
		下顎間軟結合部	－							1		1					2
歯	切歯	破片	不明		1												1
	犬歯	破片	不明						2	1							3
		オス	R							1							1
肋骨		近位部	不明							1							1
		骨体	不明						1	1	1						3
		破片	不明						2								2
椎骨	軸椎	破片	－								1						1
	腰椎	破片	－										1				1
肩甲骨		骨体～遠位端	L							1							1
		近位端～骨体	R								1						1
		遠位端	R										1				1
		近位部	R								1						1
上腕骨		完形	L								1						1
		近位部	L								1	1					2
		遠位骨端	L							1							1
		遠位部	L							1							1
橈骨		近位骨端はずれ～骨体	R										1				1
		遠位端	R			1											1
尺骨		近位骨端はずれ～近位部	L												1		1
		骨体	R									1					1
		破片	不明	2													2
橈側手根骨		完形	R									1					1
寛骨		恥骨	L							1							1
		臼部	L							1							1
大腿骨		近位部	L								1						1
		遠位部骨端はずれ	L									1					1
脛骨		遠位端	L									1					1
		遠位部	L				1										1
		破片	R								1						1
踵骨		近位骨端はずれ～骨体	L									1					1
距骨		完形	R								1						1
中足骨		完形	L					1									1
中節骨		完形	R												1		1
不明		遠位部	不明									1					1
		破片	不明	1	2				2	1	1		1				8
合計（詳細）				3	24	1	1	1	7	16	22	42	7	1	2	1	128
合計（グリッド）				29				88					7	4			

※分類・同定は喜屋武朋子による

図版 84　右上顎歯列

図版 85　左右下顎歯列

図版 86　右上下顎骨

表 103　埋葬馬の出土部位

部位	部分	左右	備考
頭蓋骨(上顎骨)	破損	－	歯列は表６参照
下顎骨		左右	歯列は表７参照
椎骨	完形	－	頸椎７, 胸椎18, 腰椎５
仙骨	完形	－	
肋骨	完形	左	左17点
肋骨	完形	右	17点
肩甲骨	完形	左	
肩甲骨	完形	右	
上腕骨	完形	左	未癒合(近位端)
上腕骨	完形	右	未癒合(近位端)
橈骨・尺骨	完形	右	未癒合(近位端)
尺骨	関節部	左	未癒合(近位端)
中手骨	完形	左	
寛骨	腸骨一部欠損	左	
寛骨	完形	右	
大腿骨	大転子欠損	左	未癒合(近位端)、癒合中（遠位端）
大腿骨	完形	右	未癒合(近位端)、癒合中（遠位端）
膝蓋骨	完形	左	
膝蓋骨	完形	右	
脛骨	完形	右	
距骨	完形	右	
踵骨	完形	右	

表 104　上顎歯の計測値（mm)

上顎	左						右					
永久歯	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	未萌出	29.7	29.3	未萌出	萌出中	－	－	萌出中	未萌出	29.3	29.8	未萌出
歯冠幅		25.1	25.8							25.6	23.2	
臼歯列長												
全臼歯列長												
乳歯				dP4	dP3	dP2	dP2	dP3	dP4			
歯冠長				26.9	－			27.9	27.2			
歯冠幅				24.0	23.9			24.2	24.2			

表 105　下顎歯の計測値（mm)

下顎	左						右					
永久歯	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	未萌出	31.4	29.3	未萌出	萌出中	萌出中	萌出中	萌出中	未萌出	30.7	31.6	未
歯冠幅	－	12.4	13.9							13.9	12	
臼歯列長												
全臼歯列長												
乳歯				dP4	dP3	dP2	dP2	dP3	dP4			
歯冠長				27.9	－	31.8	32	28.2	26.8			
歯冠幅				14.5	－	14.3	13.9	13.8	17.7			

表 106　大嶺村跡出土ウマ計測値（mm）

部位	項目	左	右
肩甲骨	GLP	101.2	100.3
	SLC	63.9	63.6
	HS	335.0	340.7
	DHA	344.9	344.1
	Ld	-	176.9
上腕骨	Bp	98.9	100.5
	SD	39.8	39.1
	Bd	88.6	87.1
	GLC	295.3	249.2
	GLl	304.6	306.9
橈骨	Bp	93.1	-
	BFp	82.7	
	SD	42.1	
	Bd	80.3	
	GL	362.4	
	PL	339.2	
	Ll	338.5	
尺骨	DPA	65.4	63.8
	SDO	50.0	49.9
	LO	不可	不可
橈骨・尺骨	GL	不可（未癒合）	不可（未癒合）
	GLl		
中手骨	Bp	58.3	-
	Dp	38.9	
	SD	36.4	
	Bd	52.9	
	GL	240.7	
	GLl	237.4	
	Ll	230.2	

部位	項目	左	右
寛骨	GL	412.9	-
	SH	49.4	47.3
	Lfo	68.3	68.9
	LS	184.2	186.6+
	LA	73.1	72.5
	SB	29.5	30.1
	GBA	247.000	
	GBI	114.1	
	GBTi	190.6	
仙骨	BFcr	51.6	
	HFcr	22.000	
大腿骨	Bp	-	131.7
	SD	46.48	45.7
	Bd	102.5	4
	GL	-	426.5
	GLC	388.01	390.3
膝蓋骨	GL	77.97	78.3
	GB	76.28	78.0
脛骨	Bp	-	103.2
	SD		46.2
	Bd		84.0
	Dd		50.7
	GL		386.8
	Ll		350.0
距骨	GH	-	68.2
	GB		73.4
	LmT		65.9
	BFd		58.1
踵骨	GL	-	124.8

第４節　大嶺村跡出土資料の土器等圧痕について

小畑弘己※・大堀皓平
※（熊本大学大学院人文社会科学研究部）

はじめに

沖縄県那覇市大嶺に所在する大嶺村跡から出土した近世・近代の瓦質土器と沖縄産無釉陶器、陶質土器、瓦質土器、瓦、及び左記加工の円盤状製品の胎土に混入した混和物について、圧痕法を用いて、検出を行った。本論はその成果の報告である。

１．対象資料と調査方法

（1）調査対象資料

今回調査した資料は、平成 28 年の発掘調査によって、大嶺村跡から出土した土器をはじめ、沖縄産陶器・瓦質土器・陶質土器・瓦・円盤状製品 12,655 点を対象とした。その結果、1 点の大型不明種実（図 103：3）を除き、イネ籾と巻貝が判明したので、それぞれ 1 点ずつのレプリカを作成して、観察を行った。このイネ籾および巻貝は、肉眼観察により、表面に露出しているもののみ、その点数を個体ごとに計数を行った。

（2）調査方法

圧痕調査および調査後の作業手順は，以下のとおりである。なお，この手法は基本的に，印象材以外は，福岡市埋蔵文化財センター方式（比佐・片多 2005）と同じものである。

①資料土器のうち、種実圧痕と思われる資料 1 点と、混和材として混入しているイネ籾および巻貝を肉眼と実体顕微鏡で 1 点ずつ選択する。

②圧痕部を水で洗浄し，土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。

③離型剤（パラロイド B-72 5％アセトン溶液）を圧痕部に塗布し，シリコーンゴム：アグサジャパン株式会社製ブルーミックスソフトを圧痕部に充填する。

④やや硬化したシリコーンゴムをマウント（走査型電子顕微鏡用ピンタイプ試料台）に盛り，圧痕部と接合して硬化させる。

⑤硬化後，レプリカを取り外し，圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。

⑥作製したレプリカを走査型電子顕微鏡（日本電子製 JCM-5700 型）で観察・撮影・同定する。

⑦デジタルマイクロスコープ（KEYENCE VHX-2000）の 2 点間計測機能を用いて種実の長さ・幅・厚さを計測する。

２．調査成果

検出した資料は、表 107 から 109 のとおり、イネ籾 9 点、巻貝 25 点、不明種実 1 点である。

イネ *Oryza sativa* 籾

長さ 7mm、幅 3mm ほどの紡錘形の種実であり、中央長軸に幅 1.5mm ほどのゆるい隆起部がみられる。その表面には乳頭状突起が列状に配置されている。イネであるが、厚さ 1.18mm と、偏平であり、果実は入っていない可能性があり、籾殻と判断した。側辺部に劣化が観られ、護頴も除去されていることから、脱籾後のものと判断される。

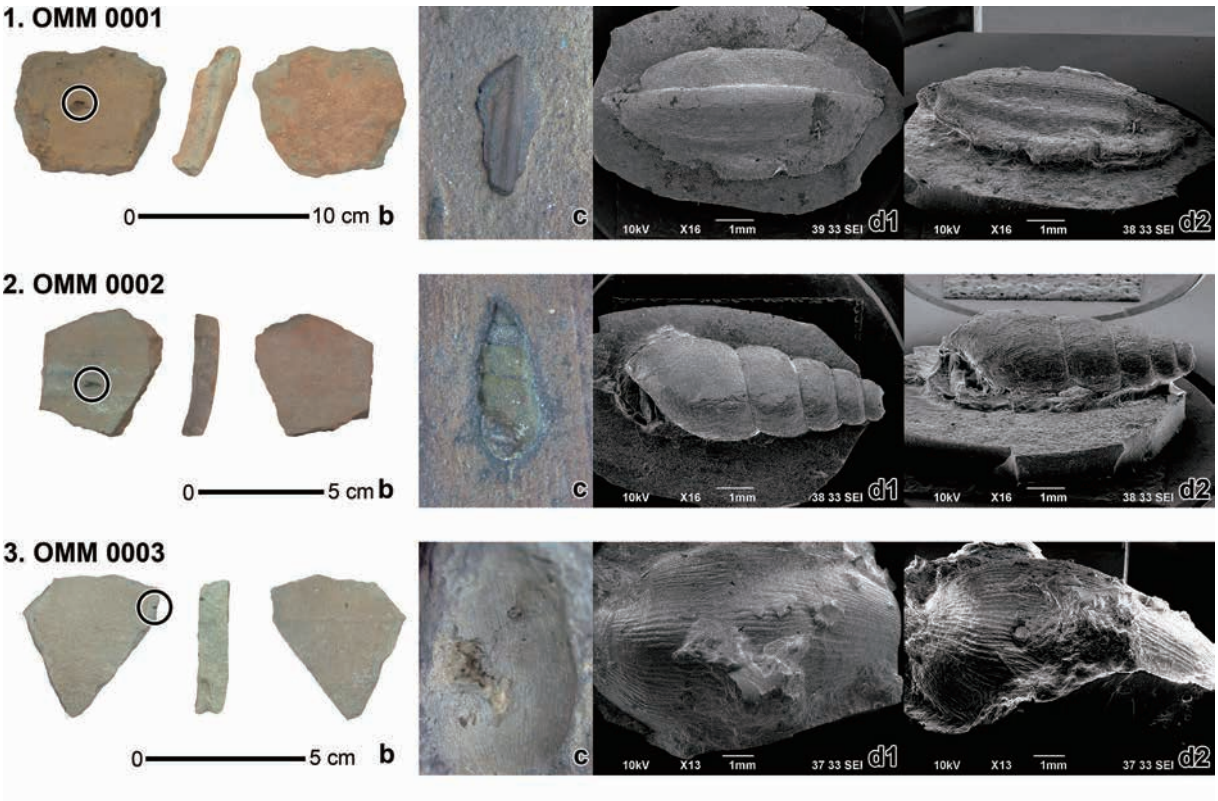
オオオカチョウジガイ　*Allopeas gracile*

オカクチキレガイ科の腹足類で、琉球列島の陸域に広く分布する種である。

不明大型種実

長さ 1cm を超える長楕円形の種実である。厚さ・幅は不明である。表面に細かな縦方向の溝が多数走る。着点らしきものが観察できるが、種は特定できなかった。

（小畑）



第 103 図　大嶺村跡土器圧痕・レプリカ SEM 画像

表 107　大嶺村跡出土土器等圧痕属性表

遺物番号	資料番号	注記	精粗	器形	検出面	圧痕の種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備　考
1	OMM 0001	エプロン地区表採	精	火炉	内面	イネ籾	7.20	3.41	1.18	
2	OMM 0002	カンセイエ地区２・３層	精	壷(陶器)	内面	オオオカチョウジガイ	6.97	2.64	2.48	
3	OMM 0003	エプロン地区 Tr.２層	精	瓦(平瓦)	内面	不明大型種実	12.08	6.15※	4.53※	

※破損部

３．考　察

イネ籾が確認された資料は、瓦質土器 137 点中の９点だが、混入している資料では、表層圧痕だけでも１点中に多いものでは 64 箇所ものイネ籾が確認されている。またイネ籾が確認されているのは沖縄産の瓦質土器のみで、後述の巻貝と両方が確認される資料は確認されなかった。このような諸要素から、製作者が気づかずに混入したとは考えにくく、意図的な混入の可能性が挙げられる。意図的に混入する目的として、イネ籾に含まれるシリカ分によって胎土の強化を図ることが挙げられる。

これに対し、巻貝圧痕は 10,000 点以上の資料中から 23 点と確認された資料が少ないことに加え、少なくとも表層では資料１点中に多くても２・３箇所程度で、ほとんどが１箇所のみである。また第６章第１節の混入貝の放射性炭素年代測定の結果からは、貝化石が胎土の原料中に含まれる可能性も低い。黒住氏はヌノメカワニナについて意図的な混入の可能性を指摘しているが（第６章第２節）、現状ではいずれの陸棲及び淡水棲巻貝も陶器製作中に混ざったものであると考える。同様に不明大型種実も１点のみであることから、偶然混入したものと推測される。

４．まとめ

大嶺村跡から出土した沖縄産の陶器類から、イネ籾、陸棲及び淡水棲巻貝、不明種実圧痕が確認された。確認された圧痕の量的特徴などから、イネ籾は意図的、陸棲巻貝及び不明種実は非意図的な混入と考察した。

イネ籾では湧田古窯跡、淡水棲巻貝では新里による報告がみられるが（沖縄県教育委員会編 1993、新里 2015）、現状では類例が少ないことからあくまで推測に域を出るものではなく、今後の類例増加と研究の進展を期待したい。

（大堀）

参考文献

沖縄県教育委員会編 1993『湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査 . 報告書第 111 集

新里貴之 2015「トカラ列島・横当島の壺屋焼」本田道輝先生退職記念事業会編『Archaeology from the South, 3』p317-330

表 108　大嶺村跡出土イネ籾圧痕確認資料一覧

地区名	グリッド	遺構名	ナンバリング名	分類	器種	部位	確認点数	備考
エプロン	ね108	SE3	ｵｵﾐﾈNo236ｴﾌﾟTr2 ね108SE3下層 160512	瓦質土器	不明	不明	64	第77図235
エプロン	の108	SG1	ｵｵﾐﾈNo265ｴﾌﾟTr3 の108SG1内Ⅱ層 160601	瓦質土器	火炉・火取	口～底部	19	第94図290
エプロン	の108	SG1	ｵｵﾐﾈNo286ｴﾌﾟTr3 の108Ⅳ2層SG1内 160620	瓦質土器	火炉・火取	口縁部	49	第94図291
エプロン	ね108	SE2	ｵｵﾐﾈNo324ｴﾌﾟTr2 ね108SE2ｳﾗｺﾞﾒ 160712	瓦質土器	不明	口縁部	25	掲載外
エプロン	ね108	SK1	ｵｵﾐﾈNo214ｴﾌﾟTr2 ね108SK1 160427	瓦質土器	火炉・火取	口縁部	15	掲載外
エプロン	不明	不明	ｵｵﾐﾈNo214ｴﾌﾟﾋｮｳ ｻｲ 160712	瓦質土器	火炉・火取	胴部	31	掲載外
エプロン	不明	不明	ｵｵﾐﾈNo214ｴﾌﾟﾋｮｳ ｻｲ 160712	瓦質土器	火炉・火取	胴部	14	掲載外
エプロン	不明	不明	ｵｵﾐﾈNo214ｴﾌﾟﾋｮｳ ｻｲ 160712	瓦質土器	火炉・火取	胴部	6	掲載外
エプロン	不明	不明	ｵｵﾐﾈNo214ｴﾌﾟﾋｮｳ ｻｲ 160712	瓦質土器	火炉・火取	胴部	2	掲載外
						イネ籾圧痕確認資料総点数：	9	/137（6.6%）

表 109　大嶺村跡出土巻貝圧痕確認資料一覧

地区名	グリッド	遺構名	ナンバリング名	分類	器種	部位	確認点数	備考
管制塔Ⅰ	せ100	SD1	ｵｵﾐﾈNo267ｶﾝⅠせ100SD1 160602	陶質土器	火炉・火取	底部	1	第16図3
管制塔Ⅰ	そ100	Ⅲ	ｵｵﾐﾈNo262ｶﾝⅠそ100Ⅲ2・3層上面160531	陶質土器	蓋	底部	1	ヌノメカワニナ
管制塔Ⅰ	そ100	Ⅲ	ｵｵﾐﾈNo156ｶﾝⅠそ100Ⅲ2・3層160408	沖縄産無釉陶器	壺	底部	2	
管制塔Ⅰ	そ101	Ⅲ	ｵｵﾐﾈNo276ｶﾝⅠそ101Ⅲ2・3層160608	沖縄産無釉陶器	蔵骨器(身)	胴部	1	第42図86
管制塔Ⅰ	そ101	Ⅲ	ｵｵﾐﾈNo276ｶﾝⅠそ101Ⅲ2・3層160608	円盤状製品	―	胴部	1	
管制塔Ⅰ	せ101	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo124ｶﾝⅠせ101Ⅱ2層160405	沖縄産無釉陶器	擂鉢	底部	3	年代測定 ヌノメカワニナ
管制塔Ⅰ	せ101	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo124ｶﾝⅠせ101Ⅱ2層160405	瓦質土器	不明	不明	1	第47図151
管制塔Ⅰ	そ100	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo158ｶﾝⅠそ100Ⅱ2層160408	陶質土器	火炉・火取	胴部	1	
管制塔Ⅱ	―	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo107ｶﾝⅡⅡ層160402	瓦	平瓦	狭端部	3	
管制塔Ⅱ	―	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo234ｶﾝⅡⅡ層ﾋｶﾞｼ側ｺｳ160512	円盤状製品	―	完形	1	
エプロン	ね108	SE1	ｵｵﾐﾈNo183ｴﾌﾟTr1ね108SE1井ﾂﾞﾂ	沖縄産無釉陶器	甕	胴部	1	第69図179
エプロン	ね108	SE1	ｵｵﾐﾈNo108ｴﾌﾟTr1ね108SE1 160402	沖縄産無釉陶器	壺もしくは甕	底部	1	第69図180
エプロン	ね108	SE1	ｵｵﾐﾈNo321ｴﾌﾟTr1ね108SE1井ﾂﾞﾂ	沖縄産無釉陶器	植木鉢	口～底	2	第69図181
エプロン	ね108	SE1	ｵｵﾐﾈNo183ｴﾌﾟTr1ね108SE1井ﾂﾞﾂ	瓦質土器	火炉・火取	口～底	1	第70図182
エプロン	ね108	SE1	ｵｵﾐﾈNo183ｴﾌﾟTr1ね108SE1井ﾂﾞﾂ	沖縄産無釉陶器	不明	底部	3	ヌノメカワニナ
エプロン	ね108	SE1	ｵｵﾐﾈNo132ｴﾌﾟTr1ね108SE1井ﾂﾞﾂ	瓦	丸瓦	筒部	3	年代測定 ヌノメカワニナ
エプロン	ね108	SE2	ｵｵﾐﾈNo324ｴﾌﾟTr2ね108SE2ｳﾗｺﾞﾒ	瓦質土器	不明	口縁部	2	第72図205
エプロン	ね108	SE2	ｵｵﾐﾈNo198ｴﾌﾟTr2ね108SE2ｳﾗｺﾞﾒ	瓦	平瓦	広端部	1	第73図206
エプロン	ね108	SE2	ｵｵﾐﾈNo209ｴﾌﾟTr2ね108SE2 160426	瓦	平瓦	広端部	2	第73図207 ヌノメカワニナ
エプロン	ね108	SE3	ｵｵﾐﾈNo179ｴﾌﾟTr2ね108SE3 160420	沖縄産無釉陶器	擂鉢	口縁部	2	第77図231 ヌノメカワニナ
エプロン	ね108	SK1	ｵｵﾐﾈNo176ｴﾌﾟTr2ね108SK1 160420	陶質土器	火炉・火取	底部	1	第84図265
エプロン	の108	SG1	ｵｵﾐﾈNo286ｴﾌﾟTr3の108Ⅳ2層SG1内160620	沖縄産無釉陶器	壺	底部	1	第93図284
エプロン	ね107	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo70ｴﾌﾟTr2ね107Ⅱ 160329	瓦	平瓦	胴部	1	
エプロン	ね107	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo70ｴﾌﾟTr2ね107Ⅱ 160329	瓦	平瓦	胴部	1	
エプロン	ね107	Ⅱ	ｵｵﾐﾈNo70ｴﾌﾟTr2ね107Ⅱ 160329	瓦	平瓦	胴部	2	
						貝圧痕確認資料総点数:	25	/12,617(0.18%)

※備考欄の貝種は黒住耐二氏同定

第７章　総括

第１節　地層の年代観と古環境

今回の発掘調査では、Ⅰ層からⅥ層までの地層を確認することができた。これら各地層について、調査所見に加えて、年代測定値（第６章第１節）と黒住氏の研究成果（同第２節）を加味すると、それぞれ下記のような地層と理解される。

Ⅰ層：客土。現代の構造物片やガラス・プラスチックなどが多量に包蔵している。

Ⅱ層：客土。近世・近代を主体にそれ以前の遺物や現代の構造物やガラス・プラスチックなどが多量に包含している。管制塔Ⅰ地区では米軍那覇飛行場のアスファルト道路も検出された。

Ⅲ層：砂層。管制塔Ⅰ地区で堆積が確認されるほか、管制塔Ⅰ地区Ⅴ層とエプロン地区Ⅳ層で検出された遺構の埋土もこの砂層である。３つに細分されるが、出土遺物は近世・近代の陶磁器類などで大きな違いはみられない。放射性炭素年代では約 300 ～ 70 年前頃という結果が得られている。これら出土遺物や理化学年代に加え、土中に多量の炭・焼土が含まれることを加味すると、戦災によって消失した大嶺村の家屋や家財道具等を、昭和 20（1945）～ 21（1946）年に行われた米軍那覇飛行場建設に伴う造成によって撹乱することによって形成したと解釈できる。

Ⅳ層：砂層。エプロン地区にみられる地層で、遺構検出面である。大嶺村期の様々な遺構に加え、遺物も近世・近代頃の陶磁器類などが多量に得られている。２つに細分でき、下層のⅣ－２層に検出された遺構からは約 1,200 ～ 1,000 年前ごろの理化学年代値が得られていることから、この地層に弥生～平安並行時代後半からグスク時代頃の遺構も残されていた可能性が挙げられる。

Ⅴ層：砂層。管制塔Ⅰ地区・エプロン地区にみられる地層で、黒住氏の研究では潮間帯上部の砂層と理解されている。Ⅳ層とは平面的にモザイク状に検出されたため、調査において厳密に掘り分けながら調査することはできなかったが、遺物には弥生～平安並行時代の土器が出土している。放射性炭素年代では、管制塔Ⅰ地区で約 900 ～ 750 年前、エプロン地区では約 2,900 ～ 1,950 年前頃の年代値が得られており、出土土器の年代観と概ね一致している。

Ⅵ層：貝殻とサンゴ化石で構成された粗砂層。エプロン地区で確認された地層で、無遺物層である。黒住氏の研究によると、潮間帯中部から下部で海草藻場を有する内湾域だったと推定している。放射性炭素年代では、約 7,200 ～ 4,800 年前頃の年代値が得られている。

以上の結果から、理解されるのは以下のとおりである。

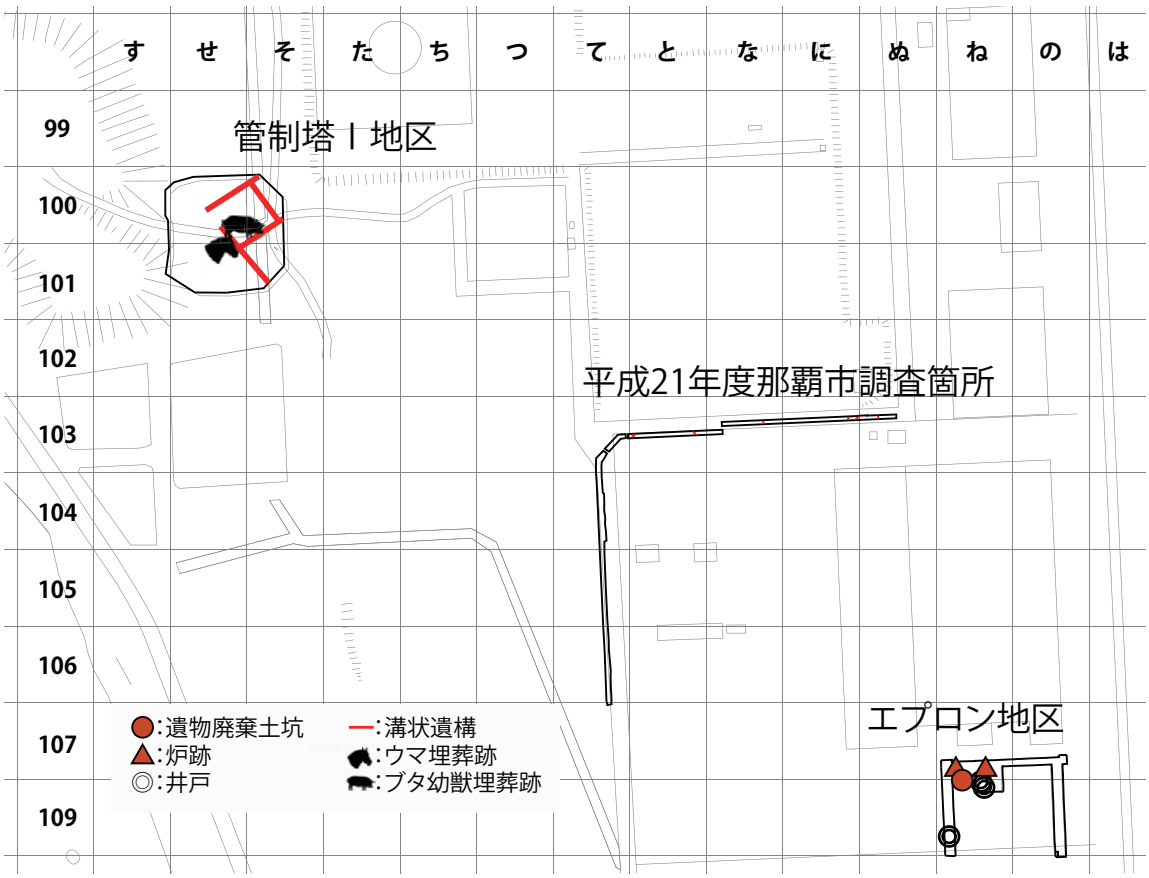
① 人為的な営為によって形成された層はⅠ～Ⅲ層で、そのうちⅢ層のみが砂層である。これはⅣ層以下の地層を基地造成によって削平したことによって形成された。それに対してⅣ～Ⅵ層は自然堆積の砂層と理解される。

② Ⅵ層は形成当時水面下で遺構・遺物ともに確認されないため、旧表土下の地山層である。

第２節　大嶺村跡で検出された遺構

ＳＤ　管制塔Ⅰ地区で４基が検出されている。これらは方形の区画を形成し、大嶺村民俗地図と照合すると概ね土地区画の方向と一致することが確認されるため（第 105 図）、区画溝と考えられる。また、平成 21 年度那覇市調査箇所でも溝が検出されているが、これらは概ね北西―南東軸であり、やはり大嶺村の街区の主軸方向と概ね整合している。

ＳＫ　管制塔Ⅰ地区とエプロン地区で多数が検出されている。これらのうちで性格が分かるのが管制塔Ⅰ地区 SK １・２とエプロン地区 SK １である。管制塔Ⅰ地区 SK １・２は、それぞれウマとブタ幼獣の埋葬土坑である。特に SK １に埋葬されたウマは、丸山氏によると日本及び沖縄の在来種より大型であることから外来種と理解されるとのことである。さらに乳歯には齲歯も確認され、飼育管理に問題があった可能性がある。以上の所見からは、1936(昭和 11) 年より農林省馬政局で進められていた「第２次馬政計画」に関連する可能性が指摘されている（第６章第３節）。検出地点は小禄飛行場前は屋敷等の区画内であるため（第 105 図）、小禄飛行場敷設後に埋葬されたと想定される。またエプロン地区 SK １は廃棄土坑で、様々な生



第 104 図　大嶺村跡主要遺構分布図１（S=1/3000）

第 105 図　大嶺村跡主要遺構分布図２（S=1/3000）
（背景：大嶺村民俗地図（大嶺向上会編 2008、1945 年 1 月米軍航空写真）

活用品や食糧残滓が出土した。屋敷区画内に位置しており、個人単位の廃棄場所であったとみられる。

ＳＰ　エプロン地区で 100 基以上が検出されている。隅丸方形で断面平坦形の礎石抜け穴と想定されるものと、略円形で断面擂鉢状の柱穴もしくは植栽痕と目されるものとが認められる。ただし明確なプランを確認することはできなかった。またⅣ－２層検出遺構と、Ⅳ－１層でも遺構埋土が黒色の SP42・59 は、大嶺村以前の可能性がある。

ＳＥ　エプロン地区で３基が検出されている。SE １・２はほぼ構造や出土遺物から想定される構築年代とも差異はみられないが、SE １は地山の泥岩（クチャ）層に達してもなお下まで掘り込まれており、掘削深度に違いがみられた。一方で SE ３は最下部以外は井筒が残されておらず詳細は不明であるが、埋土が SK １に切られることから SE １・２より古い可能性が指摘される。

ＳＬ　エプロン地区から２基が検出されている。平面形は大きく異なるが、ともに焼土の混じる炭層が確認されている。

ＳＦ　エプロン地区から１基が検出されている。ほぼ東西方向に轍２条が平行に残る。SK を切ることに加え、大嶺村の道とも方向が一致しないため、戦前・戦中・戦後直後のものである。

ＳＧ　エプロン地区から１基が検出されている。ほとんどはⅡ層によって埋められているが、下層部には水性堆積の痕跡が確認された。出土資料の残存状況も極めて良好である。この池は大嶺村の民俗地図上でも確認することができる（第 105 図）。

第３節　大嶺村跡出土の遺物

１　陶磁器

中国産陶磁器　青磁・白磁・青花磁器・褐釉陶器などが出土している。主体は 18 ～ 19 世紀の徳化窯系の白磁と青花磁器で、年代的に大嶺村期のものである。これらの資料は県内の同時代の遺跡から出土するものと同様である。一方で、僅かではあるが 14 世紀末から 15 世紀前半頃の青磁（20 ～ 22、図版 33、164、189）やこれを素材とする円盤状製品（109、114）と 15 世紀の白磁（24）、16 世紀の青花（191）も出土しており、瀬戸哲也氏らの編年でⅣ～Ⅴ期とされる一群である（瀬戸ほか 2007）。出土層位は同時代のものではなかったが、調査区周辺にこの時期の遺跡が存在する可能性を示す。

日本産陶磁器　白磁・染付・施釉陶器・無釉陶器などで、沖縄産陶器と並んで出土遺物の主体をなす。ほとんどの資料は近代の瀬戸・美濃系で、ほかに肥前系と砥部産のいわゆるスンカンマカイである。また僅かではあるが、日本硬質陶器社（現ニッコー (株)）製の洋食器（59）や、統制番号のある国民食器（図版 26）も確認されている。

沖縄産陶磁器　施釉陶器・無釉陶器が出土しており、出土遺物の主体を占める。施釉陶器はコバルトが利用されるものも多いことから近代が主体である。無釉陶器は詳細な年代は判然としないが、県内の近世・近代遺跡と相違はみられない。なお、僅かだが厨子甕片も確認されており、調査区周辺に古墓が存在している（もしくはしていた）ことを示している。

瓦質土器・陶質土器　瓦質土器には日本産と沖縄産とが確認され、主に植木鉢や火炉などがみられる。陶質土器は沖縄産に限られる。小畑氏の研究により、沖縄産瓦質土器の中にはイネ籾圧痕の残る資料が数点確認された（第６章第４節）。このような胎土の資料は、湧田古窯跡出土資料に類例がみられる。

２　土器

先史時代土器が僅かに出土する。縄文時代後～晩期は胴部片が得られている。弥生～平安並行時代では、前半期に位置づけられる浜屋原式もしくは大当原式（297・300）、後半期のフェンサ下層式（299）が出土している。また、グスク時代の土器も確認され、出土層位から原位置ではないものの、大嶺村跡に先史時代から人々が居住したことを確認することのできる資料である。

３　その他の遺物

石器　剥片石器（93）や敲石磨石類（315）、台石（10・152、274）などが出土している。剥片石器の出土は縄文時代前期から晩期、弥生～平安並行時代後半期に限られることから（大堀 2014）、出土土器とを加味してこれらの時期の資料と目される。

瓦　明朝系瓦と近代瓦とが確認される。明朝系には灰色と赤色とが認められる。また「儀」銘のある瓦（97）が１点確認されている。

煙管・磁器製品・遊具等　煙管は施釉陶器製の雁首１点（107）のみである。磁器製品には戦中の金属製品代用品である磁器製おろし器がみられる（104・105）。遊具等には、西洋人形（106）・泥面子（132 ～ 135）・ミニチュアおろし器（138）などが確認された。

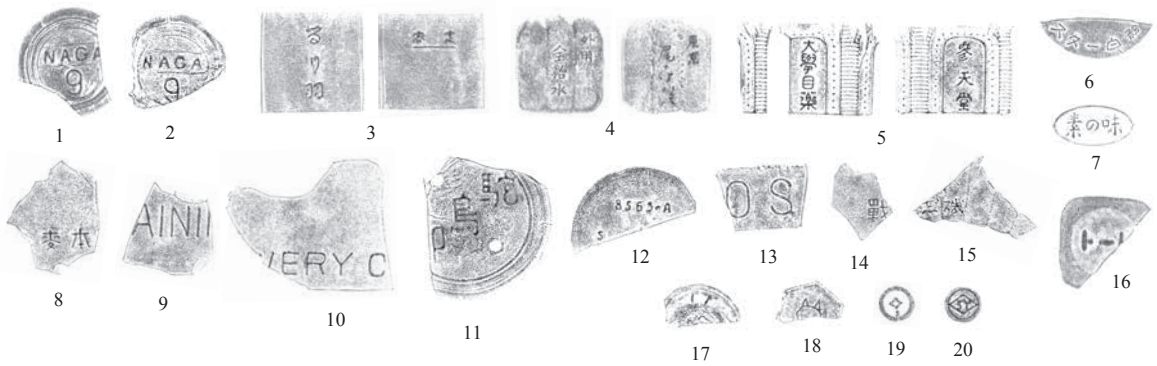
円盤状製品　中国産陶磁器や瓦、ガラス製など多種多様な素材が利用される。加工方法には、周縁を打剥するもの（7,108 ～ 114,208,210,269,293 ～ 295,317）と、側面を研磨するもの（115 など）とが認められた。また形状にも略円形（７,108 ～ 115,208,210,269,293,295,317）のものと略方形（209,294）のものとがある。

金属製品　器種の分かるものには、把手金具（116）、瓶の蓋（117 ～ 119）、鍵（121）、鋏（123）、指輪（185）、簪（236,296,318）などが出土している。特に瓶の蓋は多くの資料が出土した。銭貨は寛永通宝に限られる。（125,187,237,270）

木製品　SE １・２から桶状の製品（187）や木製具・建材と目される資料（212 ～ 214）などが得られている。

ガラス製品　多くの資料が出土しており、瓶や窓ガラスなどが確認される。特に瓶には商標の残る資料も多く確認することができた（第 106 図）。１・２ははわかもと製薬「わかもと整腸薬」で昭和４（1929）年以降。３は山発商店の白髪染め「るり羽」で明治 44（1911）年以降。４は尾澤商店の皮膚薬「外用全治水」で明治～大正年間。５は参天堂「大学目薬」で明治 30（1897）～大正年間。７は鈴木商店「味の素」で 1909（明治 42）年以降。８～ 10 は大日本麦酒株式会社のビール瓶で、９・10 は「DAINIPPON BREWERY CO LTD」銘で明治 39（1906）年～昭和 24（1949）年。12 以降は詳細不明。

歯ブラシ　今回の調査で出土した骨製品とプラスチック製品はほぼ歯ブラシに限られ、その中には有銘資料もみられる（第 107 図）。１は詳細不明。２は「クロバー歯刷子Ｂ公一四號品」。３・４は「すずらん」。

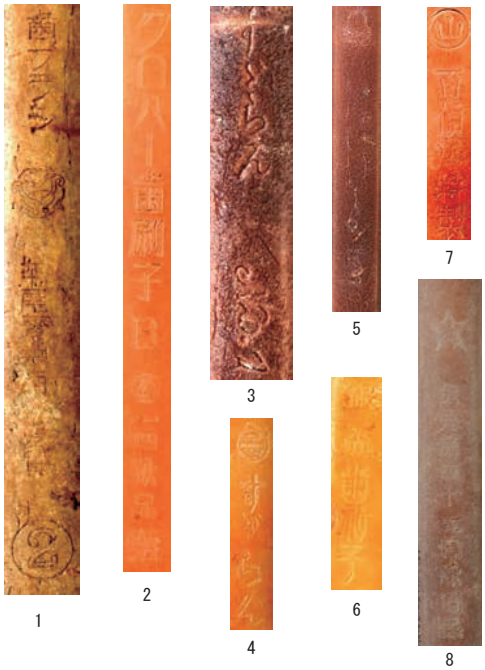


第 106 図　大嶺村跡出土有銘ガラス瓶（S=1/3）

５は不明。６は「銀盃歯刷子」。７は「⑪百貨店特製」で那覇の円山号百貨店製とみられる。８は「陸軍第四十五聯隊酒保」で、同連隊が熊本・鹿児島県で徴用された部隊であることから、配属者が大嶺村もしくは小禄飛行場に赴任したことを示す資料である。

石製品・石造物・石材　石製品には砥石（127 ～ 129,271）を主体に、石盤（130）や硯（319）が得られている。石造物は礎石や建材などがあり、いずれも大嶺村の時期のものと目される。利用石材は県内近隣の細粒砂岩（ニービ）製などが多いが、石器・石製品には遠隔地石材の輝緑岩や県外産とみられる粘板岩なども散見される（表 110）。一方で石造物には遺跡前面の海砂性凝固物や石灰質砂岩などが確認される。前者は大嶺海岸の石切場跡でも確認された石材であるため（那覇市市民文化部文化財課編 2018）、ここから大嶺村に石材が供給された可能性が挙げられる。

出土石材は多岐に渡る。大半は遺跡近隣で得られる細粒砂岩や琉球石灰岩だが、一部遠隔地石材の火成岩類や変成岩類もみられる。



第 107 図　大嶺村跡出土有銘歯ブラシ（縮尺不同）

表 110　石材別石器・石製品・石造物・石材集計表

		石器				石製品								石造物						石材	総計
		砕片	敲石	凹石	台石	硯	石球	石盤	砥石	砥石？	有孔石製品	香炉	不明	井筒	石柱？	礎石	礎石？	建材	不明		
火成岩	安山岩？													1				7		1	9
	角閃石石英安山岩																			1	1
	輝緑岩		1		1															1	3
変成岩	粘板岩					1		5												1	7
	千枚岩																			9	9
	千枚岩？																			1	1
	片岩																			5	5
	結晶片岩																			2	2
	緑色千枚岩																			3	3
	緑色片岩																			2	2
	緑色岩																			1	1
堆積岩	スコリア																			28	28
	スコリア？																			3	3
	軽石								1				1							6	8
	チャート	1																			1
	頁岩					1			1				2							2	6
	輝緑凝灰岩								1												1
	凝灰岩																			1	1
	細粒砂岩		2	1	2				1	1	1		5	2	1	8	10	7	25	245	311
	細粒砂岩？																			1	1
	中粒砂岩		4		1		1												1	25	32
	中粒砂岩？								1												1
	片状砂岩																			8	8
	礫質砂岩																			1	1
	石灰質砂岩																			3	3
	琉球石灰岩								1			1		1					2	10	15
	サンゴ石													3				12	2	17	34
	海砂性凝固物													2				1			3
	古生代石灰岩																			16	16
	不明																			1	1
鉱物等	石英																			2	2
総計		1	7	1	4	2	1	5	6	1	1	1	8	9	1	8	10	27	30	396	519

※石材同定は大堀による

以上の結果により、出土遺物は以下の５つの時代の資料が確認された。

戦前・戦中・戦後直後　国民食器、磁器製おろし器など

近世・近代　中国産・日本産・沖縄産陶磁器、その他製品

グスク時代　中国産青磁・白磁・グスク土器

弥生～平安並行時代　同前半期土器（浜屋原式・大当原式）、同後半期土器（フェンサ下層式）

縄文時代　同後期土器（大山式）、同晩期土器（仲原式）

第４節　まとめ　ー発掘調査成果による大嶺村跡の環境と土地利用の変遷ー

第Ⅰ期：約 7500 ～ 4500 年前（Ⅵ層、縄文時代早期末～中期）

完新世以降の海進の影響か、管制塔・エプロン地区（ともに標高 1m 以下でⅥ層検出）ともに潮間帯中部～下部で、海草藻場が形成された内湾域だったと推定される。また管浩伸氏の研究によれば、この時代はまだサンゴ礁は海面に達しておらず（管 2014）、現在より波を被るような環境だったことも想定される。なお、周辺ではこの時期の貝塚が鏡水箕隅原 C 遺跡の標高約 5 m 地点で検出しているため（那覇市教育委員会文化財課編 2008）、少なくとも標高 1 ～ 5 m程度まで海進が及んだと考えられる。

第Ⅱ期：約 4500 ～ 2000 年前（地層未確認、縄文時代後期～晩期）

徐々に離水が進み、新砂丘（Ⅴ層）が形成されていく。出土土器の年代から、この時期に大嶺村跡に人が居住を始めたことが窺える。なお、周辺では縄文時代後期の遺跡に鏡水箕隅原 A 遺跡、鏡水名座原 A 遺跡などがある。

第Ⅲ期：約 2000 年前（Ⅴ層、弥生～平安並行時代前半期）

離水が進み、エプロン地区は潮間帯上部の環境となる。これによりⅤ層の砂層が形成される。先史時代の土器はこの時期のものが最も多いことから、大嶺村跡の別地点でⅤ層が検出される箇所で

は、この時代の遺跡が存在している可能性がある。周辺ではこの時代の遺跡に鏡水箕隅原Ｃ遺跡がある。

第Ⅳ期：約 800 年前～グスク時代（Ⅳ－２層、大嶺村の起源的な集落か）

砂丘形成がほぼ完了し、エプロン地区ではビーチフェイスが形成されたことの伴い、フェンサ下層式土器の時代頃から大嶺村跡以前の集落が形成した可能性がある。さらに 14 世紀後半～ 15 世紀の中国産陶磁器が出土しているが、エプロン地区の南にある丘陵は「ウフグシク」「ヤマグシク」と呼ばれること、『おもろそうし』に大嶺領主の記載があることから、大嶺にもグスクと集落が存在していた可能性を指摘することができる。なお、周辺には弥生～平安並行時代後半期からグスク時代の那崎原遺跡や、同時期の中国産陶磁器が出土する瀬長グスクなどが挙げられる。

第Ⅴ期：近世～近代（Ⅳ－１層、大嶺村期～字大嶺期）

ビーチフェイスを地山として、部分的に造成等も行い旧表土を形成したとみられる。徐葆光が景観を賞賛した大嶺村が形成され、海岸とほぼ平行の北西－南東方向を主軸とした街区を形成し、様々な遺構を構築した。またエプロン地区の調査成果から、近代には近隣の石切場から供給される石材も利用して井戸等を相当数増築していたことが分かる。周辺にも多くの近世・近代集落遺跡が存在するほか、「間切図」によると大嶺村東に馬場が記載されており、交通・物流上の要地であった可能性が窺える。

第Ⅵ期：戦前・戦中（Ⅳ－１層、小禄飛行場）

昭和６（1931）年より小禄飛行場の構築が開始され、徐々に増築が進んでいくとともに周辺に陣地壕や掩体壕などの付帯施設が構築された（沖縄県立埋蔵文化財センター編 2015）。これに関連する遺構・遺物に、軍用の可能性のある外国種の馬埋葬跡や陸軍第四十五聯隊所属者の異動を示す歯ブラシなどが確認されている。また、今次調査では検出されなかったが、那覇市が実施した試掘調査において飛行場とみられる遺構が検出されている（那覇市教育委員会編 2012）。

第Ⅶ期：戦中～戦後直後（Ⅲ層、米軍那覇飛行場）

６月上旬に米軍が小禄地域を攻略し、その後米軍那覇飛行場が構築される。この際に焼失した大嶺村の建物等をまとめて土地造成が行われたことでⅢ層が形成。これにより溝や井戸・池跡などの地下に構築する遺構の一部は破壊をまぬがれ、Ⅲ層下に埋没した。

第Ⅷ期：戦後～現代（Ⅰ・Ⅱ層、米軍那覇飛行場～那覇空港）

米軍が那覇飛行場として利用、さらに昭和 47（1972）年の本土復帰後は那覇空港並びに航空自衛隊那覇基地及び海上自衛隊那覇基地として利用され、今日に至っている。そして平成 26（2014）年からは当発掘調査の経緯でもある那覇空港滑走路増設事業が開始され、大嶺崎及び周辺の景観は再び大きく変わりつつある。

参考文献（第２・６章を除く）

字大嶺向上会編 2008『大嶺の今昔』

新垣力 2003「沖縄出土の清朝陶磁」『沖縄埋文紀要』１　沖縄県立埋蔵文化財センター

大堀皓平 2014「琉球列島の石器・石器石材」新里貴之・高宮広土編『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究　研究論文集【第１集】 六一書房

管浩伸 2014「琉球列島のサンゴ礁形成過程」高宮広土・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究　研究論文集【第２集】 六一書房九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州陶磁学会 10 周年記念 九州陶磁学会

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007「沖縄における貿易陶磁研究－ 14 ～ 16 世紀を中心に－」『沖縄埋文研究』５ 沖縄県立埋蔵文化財センター

那覇市教育委員会文化財課編 2008『鏡水箕隅原Ｃ遺跡』（埋蔵文化財発掘調査ニュース No.15）那覇市教育委員会

那覇市教育委員会文化財課編 2012『大嶺村跡－那覇空港消防車庫新築工事に伴う緊急発掘調査報告－』（那覇市文化財調査報告書第 89 集）

那覇市教育委員会文化財課編 2012『那覇空港内大嶺地区埋蔵文化財分布調査報告』（那覇市文化財調査報告書第 92 集）

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおみねむらあと
書名	大嶺村跡
副書名	那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第101集
編著者名	大堀皓平(編)、具志堅清大、玉城　綾、長嶺　均、小畑弘己、黒住耐二、丸山真史、南　勇輔、矢作健二、松元美由紀、上田圭一
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　　TEL　098-835-8752
発行年月日	平成31(2019)年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
おおみねむらあと 大嶺村跡	おきなわけん 沖縄県 なはし 那覇市 あざおおみね 字大嶺 (なはくうこうない 那覇空港内)	47201	―	26° 11′ 53″	127° 38′ 19″	2016.03.01 ～ 2016.07.26	2,150㎡	那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う緊急発掘調査
				26° 11′ 57″	127° 38′ 20″		59㎡	
				26° 11′ 46″	127° 38′ 30″		578㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大嶺村跡	集落跡	近世・近代	ウマ埋葬跡、井戸、溝状遺構、遺物廃棄土坑、池跡など	中国産・日本産陶磁器、沖縄産陶器、金属製品、木製品、歯ブラシ、遊具、動物骨、貝類など	大嶺村及び小禄飛行場跡に伴う遺構・遺物
		グスク時代 ～ 縄文時代	ピット	縄文時代後晩期土器、弥生～平安並行期土器、石器、中国産青磁など	大嶺村以前の遺構・遺物

要　約	本調査は、那覇空港拡張事業に係る那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に先立つ緊急発掘調査である。発掘調査の結果、大嶺村当時とみられる井戸や廃棄土坑などの近世・近代の様々な遺構や、戦時中とみられる外来馬の埋葬跡などの遺構が検出された。また遺物にも沖縄産や日本産の陶器磁器をはじめ、近世・近代の約２万点強の遺物が出土した。中でも日本軍の銘の残る歯ブラシは、九州の連隊と小禄飛行場との関係性を示す重要な資料である。 また、内陸部側の調査区においては、近世・近代以前の可能性のある遺構が検出されたほか、遺物中にもグスク時代及び先史時代の遺物が確認された。これらの成果から、那覇空港内において、先史時代及びグスク時代の遺跡が残されている可能性が挙げられる。その背景として、管制塔地区は少なくとも縄文時代中期頃までは潮間帯中下部であったことが明らかとなり、大嶺崎周辺の陸域の変化が遺跡形成に大きく影響している可能性が挙げられる。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第101集

大　嶺　村　跡

那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成31年３月15日
編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
TEL：098-835-8751・8752
印　　刷　（有）金城印刷
〒901-0305　沖縄県糸満市西崎町５丁目９番16号